

第九篇 本土決戦

第一章 南北両国防圏域の分断と日満華の孤立化

1 昭和二十年初頭の戦争指導

日本は昭和十九年八月十九日御前會議決定の「今後採るべき戦争指導の大綱」に基き、真に国家の運命を賭けてレイテ決戦に対決した。日本はこの決戦に勝利を得んか、作戦的には従来の優勢を盛り返すことが出来、外交的にも行詰り状態に手を打つ余裕が出て来る、そうしてなお有利な場合には終戦導入への端緒をも掴み得るかもしれない、との希望を持っていた。

しかし、運命は日本にとつて幸しなかつた。昭和十九年十二月八日、大本営はレイテ決戦の終結を意図し、爾後フィリッピン方面の作戦は持久戦的指導に転移させることとなつた。昭和二十年初頭においては、既に戦線はルソン島に拡大し、なお執拗な作戦が続けられてゐるが戦局の大勢は既に決し、敵の企図を挫折させ得るような望みは絶えたのである。

〔レイテ決戦終結の影響〕

レイテ決戦において所期の目的を達することが出来なかつたため、日本としては当然の帰結として、我が陸海航空戦力の主力に大打撃を受け、海軍水上艦艇は実質的に機能を喪失してしまつた。航空戦力は、或る程度再建の可能性があるが、海軍水上艦艇は戦争間再びこれを胸算し得ない状況となつた。勿論作戦の終始を通じ、敵側の陸、海、空戦力に対しては大打撃を与え、レイテにおける戦勢主動権は時にわが方の手中にあるかの如く見え、双方死力を尽して勝利を争つたことは事実である。しかし結果として、敵に与えた損害よりもわが方の犠牲が遙かに大であつた。

かくして、時間の経過と共にフィリッピンにおける我が残存戦力

は逐次無力化の傾向を辿り、フィリッピンを中心とする制海、制空権は完全に敵手に歸し、太平洋方面において作戦の主動性を奪回しようとする日本の企図は全く潰え去つてしまつた。敵は、レイテ決戦を一転機として追撃的戦果拡張期に入ろうとしているに反し、日本は、近代的戦争続行の支柱たる南北両国防圏域の紐帯を分断せられようとしている。敵は、フィリッピン周辺に海空の基地を推進することにより、爾後その欲する方向に戦力を指向し得る弾撥性あるに反し、日本は、準備不十分のまま日満華の国防核心圏に對し直接の脅威を加重せられようとしている。

〔事態の推移に関する大本営の觀察〕 昭和二十年初頭における大本営は、レイテ決戦失敗後の事態の推移が、その後の戦争指導に及ぼす影響として概要次のように觀察した。

一、敵の衝力は、今後急速に日、満、華の核心要域に直接加重せられ、南方各地域及び太平洋残存拠点は全く孤立化するであらう。

二、日本が組織ある戦争遂行を確算し得る期間は、凡有努力を傾注しても概ね昭和二十年中期頃を限度とすべく、爾後急速にゲリラ戦的作戦及び戦争指導に移行せざるを得なくなるであらう。国内の情勢も亦現狀を以て推移する限り、逐次戦争指導上各種の障害を露呈するに至るであらう。

三、日本として独逸の健在を胸算し得る期間は、最も有利なる状況に於ても概ね昭和二十年中期頃を限度とするであらう。

但し縱え独逸が崩壊しても、敵側の東亞に指向する戦力は早急には大なる変化を見ないであらう。

四、ソ連が日ソ中立条約を廃棄するであらうことは確定的と見ら

れるが、対独戦の終結——二十年中期頃——以前に対日参戦若くは対米基地供与をすることは万々ないであらう。

五、日本としては、戦争遂行上、米、英、ソ、重慶の協力現状に破綻を胸算することは当分不可能であらう。

六、大東亜諸国家、諸民族の日本に対する戦争協力を確保する為には、遂には武力的掌握を必要とするに至るであらう。

以上の觀察を綜合し、日本としては最早外交手段によつて世界情勢の転回を企図することは非常に困難であるとの結論であつた。

〔基本国策根本的検討の転機——論議なし〕 右のような事態の推移は、本質的には前年八月十九日御前會議決定の基本国策に根本的検討を加へべき転機であつた。即ち日本としては、機会を捉えて和を講ずべきか、或は飽くまで戦い続けるべきか、戦争指導上二者択一の重大危局に直面しているとも云い得るものであつた。しかし、

当時大本營及び政府ともに苟も責任の衝にある者の間においては、戦争指導としての和平の転移について論議せられたことはなかつた。この段階における和平は、結局無条件降伏に通じ、延いては国体の変革をもたらすとの考え方が支配的であつたからである。

一方政府首脳部においては、レイテ決戦打切りに関する大本營の措置を承知した後においても、事態推移の深刻性を認識するには相当の時日を必要とした。当時フィリピン全域における作戦はなお捷号作戦を放棄していなかつたので、政府と大本營との間に感覺の差異が生じたことは無理からぬことである。このゆゑに政府は、現事態は前年御前會議の基本国策の枠内において処理し得るものとの見解であつた。

〔大本營の戦争指導腹案〕 大本營陸海軍部においては、新事態に対処する戦争指導の根本方針について検討を進めていたが、次の二案が論議の対称となつた。

第一案 依然決戦的努力を続行して来攻する敵戦力の撃滅に努め

つつ、この間、日、満、華の要域を要塞化して戦争を長期化せしめ、以て敵の戦意放棄を俟たんとする案

第二案 現下に於ける決戦的努力を放棄して、直ちに日、満、華の要域に籠城し、以て一意戦争の長期持久を企図する案

右両案は、究極において日、満、華の要域における長期持久戦態勢を確立せんとすることは一致しているが、それに転移する道程に差異があつた。即ち、第二案においては、日、満、華核心圏の前方要域に対しては既往の準備程度に留めんとするものであり、その狙いとするところは、国力の現状上いずれか一方に徹底すべしとの見解である。これに反し第一案においては、フィリピン以後わが前方要域に予期せられる敵戦力に対しては決戦的努力を継続しなれば持久目的を達成することは出来ぬ、仮りに国力を温存して日、満、華に投じようとしても、その努力が結実するに先だち敵の脅威を受けるに至るべく、更に統帥の連続性から考えてもかかる画然たる転換は実行不可能であるというにあつた。

右のような論議を経たが、結局第一案——二十年中期頃までは国力戦力を結集して決戦的努力を続行して戦局破綻を最少限に喰ひ止める、と同時に二十年中期以降の最悪事態への対処態勢を可能の範囲において推進する——の線に進むこととなり、次のような「昭和二十年中期を目途とする戦争指導腹案」を樹立するに至つた。

第一、方針

一、帝国は依然決戦的努力を続行して戦局の好転を図りつつ速かに日、満、支を基盤とする積極的防衛態勢を確立し飽く迄長期持久戦争の完遂を期す

二、帝国は速かに国内に於ける物心両面に亘る一切を国家に帰一して国家総動員の実効を期すると共に特に日、満、支自治自戦態勢を強化促進し長期戦遂行の爲の確乎不拔の態勢を確立す
三、凡有施策を講じ情勢の変転に拘らず帝国の地位を極力有利な

らしむるに努む

第二、要領

一、依然決戦的努力を傾倒し敵の企図を撃破す之が為概ね左記に拠り作戦を遂行す

1 太平洋方面より敵の攻勢に対しては極力其の来攻戦力を破

摧す

2 支那に於ては既定方針を強化する外東面の作戦を準備す

3 南方各地域に於ては夫々其の独立作戦に遺憾なからしむ

4 為し得る限り南北交通の保持に努む

5 敵後方補給線を急襲破摧し其の戦意を消磨せしむ

二、靱強なる長期作戦の遂行に遺憾なからしむる為左に依り陸海

空一体の兵備を充実し昭和二十年中期を目途とし特に日、満、

支要域の積極的防衛態勢を概成す

1 万難を排し日、満、支資源による航空戦力を充実す

2 新に地上兵力の大動員を敢行し絶対不動の防備を強化す

3 海上交通の確保並に敵後方遮断に必要な艦艇の整備を行

ふ

4 急速に全科学を動員し敵後方補給線破摧の為の攻勢的急襲

兵器を優先整備す

三、長期戦遂行の根基たらしむる為速かに左の施策を断行す

1 大本営令を改正して帝国作戦及び戦争指導の中樞たらしむ

ると共に内閣官制を改正し内閣総理大臣を中核とする強力政

治の実行を容易ならしむる如く措置す

2 国体護持の真姿を顕現し举国一致の実を發揮する為

イ 政治力の端末滲透を徹底すると共に国土防衛を全からし

むる如く国民組織を再編成し其の総武装を断行す

ロ 重要生産及交通運輸の国家管理を断行し以て軍隊約組織に改編す

ハ 政治、経済、文化、軍事各般に亘り不急不要部門を一切

廃止し物心両面に亘る国力戦力の造出に徹底す

ニ 軍の行ふ防衛作戦に地方行政を緊密に吻合せしむる為所

要の措置を講ず

3 国力戦力の維持増進を期する為左の既定方策の完遂を期す

イ 日、満、支燃料自給の徹底並に為し得る限り南方燃料の

還送促進

ロ 国土防空の徹底就中重要生産並に資源の地下転移

ハ 日、満、支海陸交通量の確保

ニ 国内各地域毎の食糧の増産自給

四、独との提携を堅持しつつ支亜問題に関し日、ソ、支の結合を

強化促進するを主眼とし情勢の変転に拘らず帝国の地位を極力

有利ならしむる為左の対策を講ず

1 独、ソに対しては既定方針の強力なる促進を図るも小策を弄

することなく毅然たる態度を堅持す

2 重慶に対しては凡有手段を講じ既定方針を推進す

3 大東亜諸国家諸民族に対しては強力に之が掌握に努む

之が為特に仏印に対しては作戦準備の進展に伴ひ武力行使を

予期し之が処理に方りては将来安南を独立せしむる如く措置

す

大東亜各地域に於ける帝国出先軍、政機関の一元化を図る

四、輿論指導並に対敵宣伝謀略は情勢最悪に推移するも愈々既定

方針の徹底を期す

註 出先における軍、政機関一元化の先駆として、第十方面軍

司令官安藤利吉大將は昭和十九年十二月三十一日原職のまま

台湾総督に親任せられた。

〔本土決戦思想の萌芽〕 右戦争指導腹案は、大筋においては大本

營陸海軍部において意見が一致していたので、この線に沿つて後述

する諸施策が進められて行つた。

しかしてかかる諸施策は、究極において昭和二十年中期以降に予想せられる最悪事態——敵の本土進攻——に対処せんとするものであり、即ち本土決戦思想の芽生えをここに見ることが出来る。

〔**南北海上輸送の杜絶**〕 南北の海上輸送は、昭和二十年一月ルソン島に敵の来攻以降急激に困難となつた。即ち一月十二日には、九隻の北向油槽船団がその護衛戦隊と共に、仏印東岸キノン沖で米第三艦隊の空襲により全滅した。又一月十五日には他の南向油槽船団が香港附近で同艦隊に攻撃された。

爾後従来の大船団集中護衛方式を変えて小船団分散護衛方式による突破輸送作戦が実施されたが、ルソンにおける敵空海基地の整備に伴い状態は刻々悪化した。三月に入ると南向船団の内地発航は停止の已むなきに至り、北向船団も殆ど七〇乃至八〇パーセントは沈没した。そうして、三月下旬には輸送は全く不可能となり、南方物資の還送は終焉を告げた。

2 日満華態勢の強化

本土の防衛は日、満、華を基盤とする綜合態勢を強化、維持することによつてのみ、辛うじて成立の可能性を見出し得るものであつた。即ち満、華の資源と日本本土の生産力を結合することによつて、著しく縮少すべき戦面に對し不満足ではあるが近代的戦争遂行に必要な活力を与え得るものであつた。若し大陸と本土との交通が遮断せられるような事態が起れば、日本としては最早近代戦の遂行は望み得べくもなく、戦争の継続は不可能に陥るべき運命にあつた。

〔**日、満、華態勢の現状と強化措置**〕 日、満、華を基盤とする自戦態勢においては、幾多の欠陥があつたが、就中最大の弱点は液体燃料の問題であつた。このゆえに大本營及び政府は、前述したよう

に、日、満、華地域における液体燃料の昭和二十年度約二〇〇万軒に及ぶ大増産計画を樹立し強力にこれが施策を進めつつあつて、この計画の実現は、極めて困難ではあるが敢えて不可能ではなく、何はさておいてもやり遂げなければならなかつた。

もともと日、満を主たる基盤とする高度国防態勢の整備こそは、滿洲事变以来の日本の国是であり、念願であつた。しかるにその理想実現の過程において、不幸にして支那事变に遭遇し、更に大東亜戦争へと突入したので、勢い満、華は日本に對し主として原料供給の役割のみを引受け、日、満、華の綜合態勢は極めて不本意、不充分的な状態のまま推移して来た。

今や事態は急迫しているので、日、満、華を通ずる国力、戦力の造成について抜本的の措置を講ずることは到底望み得ないが、三国の力を緊密に結合して即効的戦争遂行力の造成に努めなければならぬ。そのためには、大陸内及び大陸と本土間の輸送確保が前提条件であり、次いで遅ればせながら可能の範囲において日、満、華の産業配置を一部修正することも必要であつた。

翻つて、滿洲国においては建国以来の業績逐次結実し戦争遂行上重大な役割を果しつつ現段階においても依然確乎たる態勢を保持している。これに反し、国民政府治下の中国においては、戦争圧力の加重による疲弊は漸く限界に達せんとし、その戦争協力態勢を維持して行くためには所要の措置が必要であつた。

かかる要請に対処するため、昭和二十年初頭において次に述べるような一連の施策が進められた。

〔**中国経済の確立と物資調達の一統**〕 当時国民政府治下の中国においては、苛烈なる戦局に應ずるための戦争協力要請と戦勢悪化に伴う民衆の動揺によつて経済の様相は悪化の一途を辿つていた。このような事態に應ずるため、最高戦争指導会議は、一月十一日、「支那戦時経済確立対策」及び「支那に於ける物資調達統一要領」

とを審議し、採用することになった。

「支那戦時経済確立対策」の狙いとするところは、軍の自給自給及び対日満寄与を第一主義とし、中国経済の破綻を防止し、戦争寄与を確保するため、努めて現地経済の力の維持培養を図り現制通貨を擁護することにあつた。

本対策の遂行に当つては、日華軍官民真に一体となり、特に軍の強力なる推進の下現地の創意を重視しつつ速かに諸施策の総合的結束を期する為、次のような措置が講ぜられた。

一、施策の強力なる綜合推進

現地陸、海、大東亜一体となり強力なる綜合指導機關を設置し之を中核とし日華の総力を結集して各般の施策を果敢に遂行し之が徹底を期す

二、軍自給、対日満寄与の調整

軍自給に関しては計画の一元化及調達の綜合効率化を図る

対日満寄与に関しては海陸輸送力及現地供給能力との吻合を図り且之が要請指令を統一す

三、現地経済力の維持培養

軍自給と対日満寄与との長期確保並に支那経済破綻防止の為支那側の創意を活用し努めて民生の維持を図る

特に食糧、生必物資及石炭の増産、輕工業の振興、凡有輸送力の動員活用並に物資交流の円滑化を重視す

四、現制通貨の擁護

現制通貨を飽く迄擁護し之が破綻を防止する為通貨放出の調整、回収の画期的強化、發券銀行の強化刷新、帝国信義の堅持等各般の施策を強行す

尚回収の画期的強化に関連し軍資金の調達に付特段の措置を講ず

五、邦人経済活動の刷新

邦人経済及国策会社の現状を打開し益々戦争寄与に動員すると共に善隣的經濟運営の徹底を期す

「支那に於ける物資調達統一要領」は、右施策推進の重要な要素をなすものであつて、その主眼は、中国における軍の自給、対日還送物資の調達等を統一一体化して調達効率を向上すると共に、競合による価格昂騰を抑制して速かにその実効を期するにあつた。

これがため次のように措置せられた。

一、中央よりの指令を統一す

之が為陸、海、大東亜緊密なる連繫の下対支調達要請を確定し中央よりの指令を統一すると共に軍の行ふ対日還送物資調達の為の予算の一元的運用を実施す

二、現地に於ける調達を統一す

之が為陸、海、大東亜一体の物資調達統制機關を設置し一元的調達計画に依り調達の担任区分、地域及品種の配当、予算及資金の効率の運用、見返物資の合理的取得活用、有能商社の指定利用等を統一実施し積弊を一掃す

〔大陸重要輸送の確保施策——「貫輸送」〕

日、満、華自給自戦態勢確立のためには、大陸、内地間における重要輸送の確保を図ることが前提条件であることについては既に述べた通りであるが、十一月十一日の最高戦争指導會議は本問題を採りあげたが、結局当面の問題としては、総動員物資の輸送を軍事輸送によつて処理することを中心課題とし、これに関連する措置を含み次のような内容が決定された。

一、大陸輸送の効率の運用を期する為取敢へずの処置として対日

総動員物資（対大陸総動員物資）の輸送を大陸港灣出発迄（到着後）準軍需品として取扱ひ一元的に軍事輸送に依り之を処理す

二、前項に即応し現大陸鉄道輸送協議会事務局を強化せしめ軍鉄

(註) 道機関と密接なる連絡を保持しつつ活発に大陸輸送の調整及其の効率の向上に努めしむる如く措置す

三、成るべく速かに博金貨車航送を開設すると共に日本海航路を増強し且大陸幹線鉄道の輸送力を強化す

四、大陸幹線鉄道を海上航路特に朝鮮海峡及主要港灣の防衛を強化す

五、将来大陸に於ける諸鉄道を一元的に運営せしむるを目的とし先づ朝鮮鉄道を満鉄に委託経営せしむることに付考究す

註 満鉄及び鮮鉄に対する軍事使用の勅令は三月八日発動されたる。

註 昭和十九年十二月十一日、大本営は大陸鉄道隊の編成を下令し、鮮、満、華一貫軍事輸送を管掌することになった。

右会議の席上、鮮鉄の満鉄委託経営問題については、大連内相及び梅津參謀総長の反対論と石渡蔵相の賛成論との間に議論の応酬があつたが、結局右決定に示す如く委託経営実施を目的として研究を進めるといふことに落着いたものである。

右最高戦争指導會議に基き、一月三十日の閣議において「北支蒙疆に於ける鉄道輸送力確保に関する緊急対策」を決定し、資材を特配して京山、津浦両幹線の増強、車輛其他鉄道附帯施設を補備強化する施策が進められた。

又三月十日の最高戦争指導會議において、華北及び華中兩鉄道の運営は、支那派遣軍總司令官がこれを管理することを決定し、四月一日から軍管理を發動することになった。かくして、大陸における重要物資の軍事輸送による一貫輸送態勢は整備された。

〔日、満、華産業配置の修正〕 海陸輸送力を節約し大陸資源活用による現地成品化を促進するため、取りあえず製鉄関係内地施設の一部を満洲に移設(三五〇噸高炉二基)することが決定(一月十一日閣議)されたが、更に一步を進めて日、満、華における産業配置

に所要の修正を加えることとなつた。

一月十九日の閣議において決定をみた「戦局の推移に伴ふ産業配置の修正に関する件」は、満洲国の武部六蔵総務長官の提案を基礎として検討されたものであつて、その内容は次のようなものである。

一、戦局の推移に即応し帝國戦力の確保増強を図る為原料、動力、燃料、輸送、防衛等の諸条件を勘案し日滿支を通じ戦力基礎産業の現配置に対し速かに所要の修正を加ふるものとす

二、右実施に當りては努めて現生産の低下を防止すると共に内地自給態勢の確保と調和を保つ如く考慮するものとす

尚生産施設の新設又は移設に際しては当初より特に防空対策の万全を期するものとす

三、本件の実施に関しては先づ差当り鉄鋼、輕金屬、無水酒精工業等の満洲移駐に付関係に於て協議決定す

尚之が具体的計画は大陸に於ける工事期の季節的制約を考慮し遅くも二月末迄に決定するものとす

3 本土防衛のための国内施策

前述したように、大本営陸海軍部は、新事態に應ずる戦争指導腹案の線によつて、政府側の強力な施策を望んでいたが、遂に「緊急施策措置要綱」及び「決勝非常措置要綱」の採択により、本土決戦を予期する本格的防衛措置は大本営及び政府の一致せる見解の下に進められることになった。

〔緊急施策措置要綱〕 一月十一日の最高戦争指導會議において「緊急施策措置要綱」が決定された。本要綱の主眼とするところは、本土の防衛と一般行政との吻合並びに施策運営の迅速果敢と滲透実践とを図り、国内の総力を挙げて生産と防衛の一体的強化を期せんとすることであつて、従来の防空主体の施策より更に一步を進

めたものである。本要綱においては、緊急施策として次の諸項を実施することになった。

一、地方行政協議会の区域と軍管区及鎮守府管区との間に必要な調整を加ふ

二、地方行政協議会長と軍司令官及鎮守府司令長官との間に密に連繫の方途を講じ防衛の完璧並に戦力増強の必要な軍事と行政一般との吻合推進を図る

三、陸海軍及各省権限の地方委譲を更に拡大す

四、地方行政協議会長の区域内地方長官及各特殊地方行政機関の長に対する権限並に軍司令官及鎮守府司令長官等の管内軍機関に対する権限を強化拡大す

五、地方行政協議会長の輔佐機関を整備す

六、民間機構に対しても右に照応する体制を採らしむ

七、右の体制に依り中央の方針に基き差当り実行すべき重点施策

左の如し

(一) 防空態勢の強化

敵の空襲愈々激化するの情勢に対応し各地域の防空態勢を飛躍的に強化せしめ特に軍官民防空の一体化を図る

(二) 軍需工場等の企業の再整備と分散疎開

防衛の強化並に労務、資材等の徹底的戦力化を図る為軍需工場等の企業再整備と分散疎開（地下移転を含む）とを徹底的に実施すると共に此等工業の地域的綜合自立性の向上に努む

(三) 食糧の飛躍的増産と自給態勢の強化

食糧に関しては国内自給の飛躍的増産に努む

(四) 勤労態勢の強化と国民皆労働員

労務の動員及管理に關し一貫調整を強化すると共に当該区域内所要労務に付ては先づ当該区域内人の総動員に依り之が充足を図ることとし特に地方長官は労務の機動的運用並に官民

の組織的挺身出勞を強力に指導するものとす
尚軍に於ても積極的に部隊の出動を考慮す

(四) 所在物資等の徹底的戦力化

当該区域内所在物資等の現況を適確に把握し之が保護、利用等の処置を万全ならしむると共に特に緊急なる需要に対しては軍官民を通じ臨機彼此融通の措置を講ず

八、本件は二月一日より発足する如く準備を促進す

註 一月三十一日、北陸地方行政協議会を廃止し、該協議会の区域中、新潟県及び長野県を関東、石川県及び富山県を東海、福井県を近畿の各地方行政協議会の区域へ統合した。

註 本土内各軍管区の食糧自給率は、北部九〇%、東北一三〇%、東部八〇%、東海八五%、中部七五%、西部九〇%、朝鮮一六〇%であつた。（平年作）

なお政府は右緊急施策措置の一環として、一月十九日の閣議において「空襲対策緊急強化要綱」を決定し、都市疎開（人員、衣糧、建物）の強化促進、戦時緊要人員の残留確保、堅牢建築物の利用統制、消防力の強化（消防機関の要員確保、消防器材の整備）、防空土木施設の整備（消防道路及び貯水槽の増設、横穴式及び掩蓋式防空壕の増設）、罹災者対策の強化等の措置を強力に進めることになつた。

〔決勝非常措置要綱〕 一月二十五日の最高戦争指導會議は、「決勝非常措置要綱」を採択した。本要綱は、前に述べた大本營の戦争指導腹案の趣旨を具体化したものであつて、レイテ決戦終結の事態に對処するための国内における綜合施策である。

本要綱の採択により、大本營及び政府は、日、満、華を基盤とする戦争遂行力の維持培養に向つてあらゆる努力を結集し、本土決戦即応の態勢を確立しようとするものであつた。その内容は次の通りである。

第一、方針

第一条 帝国今後の国内施策は速かに物心一切を結集して国家総動員の実効を挙げ以て必勝の爲飽く迄戦ひ抜くの確乎不拔の基礎態勢を確立するに在り

之が爲具体的施策を更に強化徹底して近代戦争完遂に必要な国力並に戦力の維持増強に遺憾なきを期す而して今後採るべき各般の非常施策は即刻之を開始し昭和十九年度末を目的として之が完成を図るものとす

第二、国力並戦力造成要綱

第二条 当面の情勢に鑑み国力並に戦力造成上の基本方針左の如し

一、作戦上の中核戦力として依然航空機並限定せる特攻屈敵戦力を優先整備す

二、国力の造出は日、満、支資源を基盤とし自給不能なる南方資源を充足し其の総合的運営の下に近代戦争遂行能力の確立を主眼とし併せて各地域毎の政戦略態勢の強化を図る

之が爲液体燃料の急速増産、海陸輸送力の維持増強、生産防空態勢の徹底的強化、食糧の増産特に国内に於ける自給の飛躍的増強を最重点的に実現す

而して現状に鑑み航揮及自給不能なる南方資源の急速還送に關しては特段の措置を講ず

第三条 昭和二十年度戦力並に国力の造出目標並に之が完遂の爲準拠すべき事項左の如し

一、陸海軍の軍需整備

1 戦力の増強は航空戦力の維持増強と特攻屈敵戦力の急速なる大量造成とを図るを第一義とし次で対潜、対空兵器等の可及的多量整備を期するものとす

2 航空機の生産は益々重点機種種の整備並に機種種の整理統合を

重視しつつ上半期努力目標二万機完遂目標を一万六千機とし下半期に於ては差当り其の努力目標を二万四千機として各般の施策を推進し其の完遂目標に關しては本年三月頃當時の情勢を勘案し決定す

重要物資供給力の低下に対処し本目標の必達を期する爲歩留りの向上、鋼製並に木製機の量産促進アルミ供給力の増強施策を強行すると共に改修の緊密化、審査規格の戦時化、補用品の徹底的合理化等凡有施策を強力に推進するものとす又特に陸海軍は其の協力支援に格段の努力を傾注するものとす

二、物的国力（液体燃料を除く）確保の規模

1 近代戦争遂行能力の保続運営に遺憾なきを期する爲昭和二十年普通鋼鋼材二七〇万噸、之に即応する関連重要物資の供給力を絶対最低限確保目標とし万策を尽して基本国力普通鋼鋼材三〇〇万噸の達成に努む

輸送力窮迫の現状に鑑み特に鉄鋼生産に在りては国内鉄源供出の徹底化、内地鉄礦石の最大活用、海送強粘結炭配合比の合理的節減、余剰電力の活用による電撃製鍊の促進、満支に於ける製鉄の増強、農山村に於ける木炭銑の生産奨励等各般の非常措置を断行するものとす

2 国内石炭の昭和二十年度の生産努力目標を五千五百万噸、確保目標を五千二百万噸とし之が達成の爲資材及労務の確保等に関し特段の措置を講ずるものとす

3 アルミニウムの昭和二十年度生産確保目標を一五万噸とし之が生産設備拡充を強力急速に促進すると共に生産用原料料確保に関し特段の措置を講ず

国内原料への転換期に於ける過渡的対策として昭和十九年度

第四 四半期並昭和二十年度初頭にボーキサイトの可及的繰上還送を行ふ

4 生ゴム、錫等真に南方依存脱却不可能なる南方特産物資は陸海軍に於て之が還送確保の方途を講ずるものとす

三、液体燃料

1 液体燃料は昭和二十年度二〇〇万斤（製品）を絶対最低限確保目標とし万策を尽して努力目標二五〇万斤の達成に努む而して各般の施策は昭和二十年度第一、四半期に於ける危機を克服するを主眼とし飽く迄昭和十九年十月二十八日最高戦争指導會議決定に基く日滿支液体燃料生産努力目標の必成に邁進すると共に南方燃料の還送は上半期五〇万斤の確保を目標とし下半期に就ては日滿支自給対策の補強的性格に於て行ふものとし其の還送量は當時の情勢に依り決定す

2 日滿支の増産は昭和二十年度初頭以降台湾砂糖の還送には期待し得ざるを本則として之が対策を講ずるものとす

之が為所要資材の可及的確保に努むると共に日滿支油田の徹底的開発、甘藷、馬鈴薯等の大增産を強行し且石炭乾溜設備余剰能力の活用、支那油脂の取得を図るものとす

但し上半期に於ける危機克服の為右施策と併行し極力台湾砂糖の還送に努む

3 現行施策に膚接して益々軍官民共に高度の消費規正と代燃化の促進とを図り特に陸海軍は酒精の航揮代換促進に関し画期的の措置を講ずるものとす

四、船舶建造

1 甲造船

(イ) 昭和二十年度建造目標を約一五九万総噸とし貨物船と油槽船との建造比率は前記物的国力の最低限確保に必要な貨物船建造を優先充足して配分すると共に上半期に於ける

繰上建造に努力すべきこと等を主眼とし、貨物船約一七〇万総噸、油槽船約三十八万総噸、雑船約一四万総噸を建造するものとす

尚造船量の減少は一応油槽船にて調整するを本則とす

(ロ) 既往の多量生産主義を脱去して質的への転換特に其の優速化と竣工船の質的確保とを図ると共に対潜、対空強化並に荷役能力向上の見地より可及的に小型且短切揚搭適格船の多量生産に移行し且燃料需給の逼迫に対処する為重油焚貨物船を極力石炭焚に切替ふるものとす

(ハ) 新造船槽船は全部航空揮発油槽船とし且狀況の推移に対応し得る如く一部油槽船は貨物船に改造し得る如く設計す

2 乙造船

昭和二十年度建造目標を四五万総噸以上（前年繰延を含む）とし之が急速なる整理完成を図ると共に特に曳船被曳船を重視す尚現行船及既発註分を可及的に代燃機関に切換ふると共に速かに現存船の多量代燃化を図る

又昭和二十年度国力の基底は乙造船に依存する所大なるに鑑み其の計画完遂特に資材の現物化に関し格段の努力を傾注するものとす

3 情勢の推移に依りては前記甲、乙造船量を総合的に調整することを予期す

五、車輛建造

1 鐵道車輛

昭和二十年度建造目標を機關車二〇七輛、貨車七千五百輛とし特に之が早期落成を図る

2 小運送車輛

昭和二十年度建造目標を貨物自動車五千五百輛、輕車輛一四

万九千輛とし特に荷車の増備を行ふ
 現有貨物自動車の修理に特段の処置を講じ代燃機の急速増産を図る

六、生産防空態勢の強化

1 敵の本格的な大規模空襲に対し生産の保護運営に遺憾なからしむるを主眼として直接重要企業に於ける防空、企業形態、勤労体制等に関し有機的且抜本的措置を講じ且国力造出の基盤として日、満、支陸海交通路の安全運営に関し特段の措置を講ず

2 生産防空態勢の急速活発なる促進を期する為先づ分散疎開を急速概成すると共に特に重要なものは地下施設へ移行するものとす

之が為差当り航空兵器、甲造船関係其の他特定緊要工場の分散疎開を第一義とし之等は遅くも本年度末迄に概成するものとす

尚之に関連し極力地域別生産態勢の確立を図るものとす

3 空襲等非常事態特に交通機関杜絶等の場合に於て必要なる通信（放送を含む）連絡の確保を図る為通信非常体制を強化す

七、食糧

内地に於ける食糧自給の画期的増強を期すると共に食糧の現行配給基準を堅持する為左の方途を講ず

1 内地に於ける食糧の増産及管理の徹底的強化を図る 之が為

(イ) 米麦の外此の際補填食糧並にアルコール原料として諸類の画期的増産を図る

(ロ) 麦類及諸類の集荷確保並に処理加工に付特段の措置を講ず

(ハ) 食糧の供出割当量の強化及其の絶対確保を期すると共に現行配給方法に付改正を加ふ

(ニ) 国内補填食糧給源の徹底的開発培養を図り特に蛋白補給源として水産食糧の確保に努む

(ホ) 食糧増産確保に必要な肥料及農機具等の最低必要量を充足の為所要資材の確保を図る

2 昭和二十年穀年度食糧需給上外地及満洲雜穀類に依存せざるを得ざる所要量に付ては之が輪移入に依り補填す

3 強靱確固たる食糧自給体制確立の見地より都市遊閑人口の疎開を強化す

八、勞務

1 人的国力の綜合發揮の為軍動員と勤勞動員との適正なる綜合調整計画の樹立と之が運営強化を図る

2 勤勞総動員を強化すると共に将来に於ける軍動員実施に弾力を保有する為勞務の配置転換、機動配置の徹底、要員指定制の実施等国民動員の適正刷新を図ると共に学徒勤勞動員の強化並に女子の徴用を断行し之が積極的代替活用を促進す

第四条 輸送力は戦力並に国力造出の根基たるに鑑み昭和二十年度海上輸送力約三千二百萬噸、陸上輸送力約八億五千萬噸を確保目標として之を増強（海上輸送力に在りては努力目標を三千五百萬噸とす）を図ると共に海陸輸送の綜合運営を強化する為各般の施策特に左の措置を講ず

1 海上輸送力の増強

(イ) 船舶損耗防止特に海上護衛の強化、之が為特に陸、海、民一体の飛躍的な措置を講ず

(ロ) 海運行政の抜本的刷新と港灣行政の一元化

(ハ) 船舶修理の画期的促進

(ニ) 稼行率の向上

(㊦) 南方航路に於ける各種船舶の綜合輸送力の向上

(㊧) 船員の整備強化

(㊨) 木船建造並に運航体制の刷新強化と内地帆船の計画的利用

2 陸上輸送力の増強

(㊩) 旅客列車の極限の圧縮等に依る貨物輸送の増強並に戦場

附近転居に依る通勤輸送の極限

(㊪) 貨物運用効率の向上

(㊫) 隘路線区に於ける輸送施設の増強

(㊬) 要員の確保並に之が勤勞力の強化

(㊭) 陸上小運送の画期的強化

3 海陸輸送綜合運営の強化

(㊮) 大陸輸送の一元的運営

(㊯) 中継輸送力の強化

第五条 今後の国家諸計画の策定は本要綱の強力なる実行に遺憾なからしむるものとす

第三、国内態勢強化刷新要綱

第六条 精神動員の強化を重視しつつ国内態勢を強化刷新し以て举国総力戦態勢の確立を期す

第七条 国政運営並国内一般態勢に対し成るべく速かに左の施策を断行す

一、国政と作戦との緊密一体化を具現せしむる如く必要なる措置を実行す

二、日、満、支の生産及輸送の計画並に之が運営を綜合的に行ひ得る如く所要の措置を講ず

三、鞏固なる国内防衛態勢を確立す

四、生産、交通、食糧、勞務等に関し中央の計画に基き国内各地域の戦力を組織化すると共に防衛と緊密一体化せしむる為

地方行政機関を強化刷新し陸海軍関係機関との緊密なる吻合關係を樹立す

五、軍需生産行政の一元化及勞務並に資金に関する行政の一元化を図る

六、戦局の苛烈化に対処し重要軍需企業、交通運輸機関並に金融機関の整備を断行し其の保統運営に遺憾なきを期す

七、各部門の統制機構及現行各般の統制法規に就き生産性の昂揚に徹する如く所要の改廃整備を断行す

八、闇の肅正、配給制度の合理化等に依り国民生活の明朗化を図る

九、行政特に生産輸送部面の監察及生産技術の指導を励行す

4 昭和二十年二月における世界情勢判断

〔情勢の悪化——日独最後の関頭に立つ〕 昭和十九年十二月頃より昭和二十年二月頃に亘る間においては、日独両国ともに戦争の運命を決する最後の関頭に立つていた。

日本がレイテ決戦に国運を賭している間に、独逸もまた昭和十九年十二月十六日より西方戦場アーヘンよりルクセンブルグに亘る約一〇〇軒の正面において大攻勢を開始した。この攻勢には独軍は最後の戦略予備を使用し、当初連合軍戦線を約三〇軒突破したが、その後力尽きて攻勢は頓挫するに至り、独逸の戦勢挽回に関する努力は水泡に帰してしまつた。

右攻勢を最後として独逸は、東西両戦線ともに後退を続け、昭和二十年二月三日東方戦場においてはソ連のシュコーフ軍はベルリン東方六〇軒のオーデル河の線に肉迫し、一方西方戦場の連合軍は二月二十三日ジークフリード線に対しケルン正面より攻勢を開始するに至つた。

かかる独逸の戦勢の悪化に伴い、ルーマニヤ、ブルガリヤ、ハン

ガリイ等の与国も相次いで脱落し、ここに独逸の運命は決したかに見えたのみならず、日本においても、既に述べた如く、昭和十九年十二月十八日大本営がレイテ決戦の終結を決意してから、フィリピン方面の作戦は逐次持久戦の性格に転移しており、同方面において作戦的に戦勢を打開しようとした日本の希望もまた水泡に帰しようとしていた。

〔ヤルタ会談——ソ連対日参戦確定〕 このような日独の悲境のどん底において、二月四日より連合側ル、チ、ス三巨頭はソ領クリミヤのヤルタにおいて会談した。当時この会談に関する日本の観測は、主として独逸屈服後の欧州戦終結に関する問題が議せられ、ソ連の対日態度変更を示唆するような内容は含まれていないものとの淡い希望をもつていた。しかるに事實は、この会談においてソ連の対日参戦が決定し、しかも日本及び満洲の処理まで協定されたのである。

連合国がかほどまでの条件を提供してなお且つソ連の対日参戦を希求しなければならなかつたか？ ここでは単に問題を提示するに止める。

註 ヤルタ協定（昭和二十一年二月十一日米国务務省より発表）

三大国即ちソヴィエト連邦、アメリカ合衆国及英国の指導者はドイツ国が降伏し且ヨーロッパにおける戦争が終結したる後二月又は三月を経てソヴィエト連邦が左の条件により連合国に与して日本国に対する戦争に参加すべきことを協定せり

一、外蒙古（蒙古人民共和国）の現状は維持せらるべし

二、千九百四年日本国の背信的攻撃に依り侵害せられたるロシア国の旧権利は左の如く回復せらるべし

(イ) 樺太の南部及之に隣接する一切の島嶼はソヴィエト連邦に返還せらるべし

(ウ) 大連商港に於けるソヴィエト連邦の優先的利益は之を擁

護し該港は国際化せらるべく又ソヴィエト社会主義共和国連邦の海軍基地としての旅順口の租借権は回復せらるべし

(イ) 東清鉄道及大連に出口を供与する南滿洲鉄道は中ソ合弁会社の設立に依り共同に運営せらるべし 但しソヴィエト連邦の優先的利益は保障せられ又中華民国は滿洲に於ける完全なる主権を保有するものとす

三、千島列島はソヴィエト連邦に引渡さるべし 前記の外蒙古並に港灣及鉄道に関する協定は蔣介石総統の同意を要するものとす 大統領はスターリン元帥よりの通知に依り右同意を得る為措置を執るものとす

三大国の首班はソヴィエト連邦の右要求が日本国の敗北したる後に於て確実に満足せしめらるべきことを協定せり

ソヴィエト連邦は中華民国を日本の羈絆より解放する目的を以て自己の軍隊に依り之に援助を与ふる為ソヴィエト社会主義共和国連邦中華民国間友好同盟条約を中華民国国民政府と締結する用意あることを表明す

千九百四十五年二月十一日

署名

〔世界情勢判断〕 これより先既に述べたように大本営陸海軍部はレイテ決戦意志の変更に伴う全般情勢の推移に検討を加えていたが、その後の事態の推移は前年八月御前會議決定の世界情勢判断に更改を加える必要が認められるに至つた。

即ち大本営及び政府は、大本営陸海軍部案を基礎として検討を進め、二月十五日の最高戦争指導會議の討議を経て、二月二十二日、概ね昭和二十年中期を用途とする世界情勢判断を次のように決定した。

第一節 東亜の情勢

米国は其の兵力重点を東亜に指向し優越せる物量威力を以て戦争早期終結を用途とし重慶を利用しつつ英国と共に東亜に対し強引

果敢なる攻勢を続行すると共に極力ソ連を対日参戦に導入するに努むべし

尚帝國並に大東亞諸國に對し執拗なる政謀略を併用し其の戰意の喪失を図るべし

而して東亞戰線に對する補給線の延長は米にとり今後の弱点たると共に我出血作戰による人的資源の損耗は米の最も苦痛とするところなり

一、太平洋方面

米は歐洲戰況の推移に概ね関はりなく更に對日攻勢を熾烈化し放胆なる作戰を指導すべし

即ち米軍は比島作戰の早期完了に努力を傾注すべく其の進展に伴ひマリアナ及び比島を對日攻勢の策源たらしめ支那大陸沿岸及本土近海諸島に基地を推進し概ね八、九月頃迄に帝國本土に對する包圍進攻態勢の確立を図り益々空襲を激化して極力本土を軟化すると共に大陸と本土との分斷を図り且國民の戰意の破摧を図りたる上帝國本土要域に對する上陸を企圖すべし 但し帝國国力及戰力の推移に依りては本年六、七月頃に於て本土要域に對する上陸を企圖することあるべし

又敵は三、四月の候より其の機動艦隊を本土近海に作戰せしめ空襲及攪亂を企圖するの算なり

尚敵は比較的早期に仏領印度支那方面に對し上陸作戰を実施することあるべし

二、緬甸及印度洋方面

緬甸方面に對しては引続き圧力を加重すべし

又太平洋方面の攻勢と関連し印度洋正面よりアンダマン、ニコバル、北部スマトラ等に基地の推進を図り次で本年春夏の交敵は馬來半島に上陸するの算あり

又引続きスマトラ油田地帯等に対する大規模空襲を実施すべし

三、支那方面

重慶は印支地上ルートの啓開保持に努め戦力の恢復増強特に其の軍隊の米式化に伴ひ米の作戰に策心し對日反攻を実施すべし 米支空軍の増勢は依然繼續すべく、太平洋方面と呼応して陸海交通の遮斷、日滿支要域に對する爆撃を益々増大すべし

我占拠地域に對する敵特に延安側の蠢動は益々激化せらるべし

四、大東亞諸邦の動向

大東亞諸邦は滿洲國を除き大東亞戰局の推移と敵側政謀略の激化と相俟つて對日非協力的態度を漸次表面に露呈し遂には敵性化するものあるに至るべし

又偽政權の樹立を見ることあるべし

第二節 ソの對日動向

ソは本春中立條約の破棄を通告する公算相当大なるも依然對日中立關係を維持すべし但し帝國国力就中對ソ彈力著しく弱体化せりと判斷せる場合に於ては歐洲情勢の如何に拘らず東亞の將來に對する發言權を確保せんが為對日武力戰を發動するに至るの算あり

第三節 歐洲の情勢

東部戰線に於けるソの攻勢は極めて激烈にして彼此の戦力比就中獨の決勝戦力増勢の困難性よりして大勢は獨に不利に推移すべし 本年中期頃迄に獨にとりて最惡の事態となることあるを予期し置くの要あるべし

此の間歐洲政戦局の転換に關し注意の要あり

而して歐洲戦場に於ける人的資源の損耗相当大なること並に歐洲戦局將に終結せんとするに方り米英ソの間に一致し難きものあることは米英の悩みとする所なり

第四節 綜合判斷

今や戦局は日獨にとりて急迫しありと雖も敵國も亦夫々深刻なる苦惱を包蔵しありて正に彼我の根比べの段階に到着しあり

従つて今後愈々加重すべき如何なる苦難にも堪へ毅然として必勝の闘魂を堅持し飽く迄戦ひ抜く者に最後の勝利が帰するものと言

ふべし

第二章 大本營の新作戦方針及びこれに基づく作戦準備

1 情勢判断

〔敵情判断——米軍の戦略〕 大本營は昭和十九年末以来、この重大なる戦局の推移について連日情勢の検討を重ね、米軍の対日企図に対する判断を進めた。その判断を要約すると次の通りである。

米軍の作戦企図は早期対日終戦を一般方針とし、太平洋の全域に亘つて徹底した空海作戦を推進し、日本本土を無力化しつつ、機を見て日本本土に上陸するであろう。これがため当面の基本戦略として

一、大陸及び南方地域から日本本土を完全に分断する（既に其の目的の大半を達しつつある）

二、日本本土の生産源を枯渇せしめ、国民の志気を破潰する（本土空襲に依りその戦略は開始せられた）

三、日本の空、海、陸の骨幹兵力を破潰する（レイテ作戦に依り既に空海骨幹兵力の破潰に成功した）

四、日本本土の中枢部を米軍基地戦闘機の威力圏に収める

特に第四項の目的を達するため、航空基地の推進を図るであらう。その基地として狙われる最も有力なるものは、小笠原群島、台湾、南西諸島で揚子江下流地域がこれに次ぐであろう。又千島方面においても一部の作戦を遂行し基地の獲得、牽制等を企図することがあり得る。いづれにしても作戦の主線はフィリピンを基地として東支那海方面に指向せらるべく、二月頃には小笠原群島特に硫黄島、三、四月頃には台湾の北部要域に、五、六月頃には南西諸島特

に沖縄に進攻して来ることを予期しなければならぬ。しかし台湾を素通りして、三、四月頃直路南西諸島に進攻する算も相当多い。（この判断は海軍及び航空側に強かつた。）このほか、マリアナ方面から直路南西諸島に進攻し来る場合も予想された。

なお二、三月頃華南沿岸及び海南島に先ず基地推進作戦を行うこともあり得る。かくの如く基地の推進を強行する傍ら、急速にフィリピン及びマリアナ等の基地を固め、大規模の本土攻撃準備を進め、概ね八、九月頃までに日本本土の包囲進攻態勢を確立して本土に健在する日本陸軍骨幹武力を破潰して本土の攻略を断行する、又我が国力の低下を大きく判断した場合には小笠原群島の攻略に次いで、一挙に六、七月頃日本本土に進攻することも絶無ではなからう。

〔ソ連及び重慶の動向〕 太平洋方面における米軍のこの強大なる圧力に策応し、大陸方面において、ソ連及び重慶がどう出て来るかは、大本營の重大関心事であつた。ソ連は米軍の日本本土進攻準備完成の時期即ち本年秋以降、対日参戦の挙に出る算が多いと憂慮せられた。その場合ソ連極東軍は優勢なる航空、機甲武力を主体とするものを以て、急襲的に迅速に満洲、朝鮮、華北、樺太の要域を侵略するものと判断された。

一方重慶は、米軍の中国沿岸に対する作戦（大陸接岸作戦と称していた）に策応し、湖南、広西省方面において本年七、八月頃攻勢を開始するであらう。その兵力は米式装備に改編されつつある精銳約九箇軍を骨幹とする二四—二五箇師に達するであらう。

2 本土防衛態勢の概観

四周に迫り来るこの敵の重圧に対比し、昭和二十年初頭の我が国土（本土と朝鮮、南西諸島、台湾、小笠原群島等を包括する区域を謂う）特に本州、四国、九州及び朝鮮方面の我が防衛態勢は真に寒心すべき状態に置かれていた。前に述べた如くサイパン陥落以後本土の防衛強化が真剣に採り上げられたが、フィリッピン方面の決戦に国軍の全力が傾注せられたことや、本土の持つ複雑な事情に阻まれて（例えば国民の権利義務との関係、生産食糧問題に関連する大軍の動員集結難、或は一般行政組織と軍の組織の併立に伴う複雑な法規、手続等）渋滞勝ちであつた。

当時国土の防衛は陸、海軍それぞれ次の通り分担していた。

〔陸軍の防衛態勢〕 陸上（鎮守府、警備府所在地を除く）の防衛を担当する陸軍においては大本営直轄の下に、防衛総司令官東久迩宮稔彦王大將が本州、四国、九州、伊豆諸島の、又第五方面軍司令官樋口季一郎中將が北海道、千島、樺太の、小笠原兵団長栗林忠道中將が小笠原群島の、又第三十二軍（第十方面軍の隷下）司令官牛島滿中將が沖縄諸島の、第十方面軍司令官安藤利吉大將、朝鮮軍司令官板垣征四郎大將がそれぞれ台湾、朝鮮の防衛を担当していた。

防衛総司令官は東京に位置し、東部軍（関東以北の本州、伊豆諸島）中部軍（本州中部、四国）西部軍（西部本州、九州）と第三十六軍（三箇師団よりなり、大本営総予備として関東方面に配備）の地上軍四箇と第一（本州全域）第六（主として関東地方）両航空軍並びに第十（東部本州）第十一（中部本州）第十二（西部本州）飛行師団（いずれも防空師団）三箇とを統率していた。しかし地上師団数は僅かに八箇（九州一、近畿二、関東五）高射砲師団四箇（関東、東海、近畿、九州に各一）と留守師団一四箇に過ぎなかつた。別に伊豆諸島には独立混成旅団三箇が配備されていた。又第六航空

軍の可動戦力は五〇機内外に止まり、第一航空軍は教育部隊であつたから作戦に胸算し得なかつた。

沿岸防備の地域的重点は、南部九州と関東、豊橋、八戸平地に置かれていた。しかし沿岸陣地の構築は遅々として進まず、重点地域でさえも骨幹陣地の一部が概成していたに過ぎなかつた。その他の地域は單なる計画の域を出でなかつた。

朝鮮軍の兵力は、昭和十八年以来、南方に四箇師団を抽出転用せられたため、留守師団三箇のみで、南鮮、濟州島方面沿岸防備は皆無に近い状況であつた。昭和十九年来濟州島、木浦、群山附近を重点とする沿岸防禦築城と沿岸舟艇基地の設定に着手されたが未だ計画の域に止まつていた。

第五方面軍の主なる兵力は地上師団四箇、各種旅団六箇と飛行師団一箇から成り、地上兵力の主力は千島に配備され北海道には二箇師団が充當されていた。但し航空実戦力は当時第五方面軍司令官の指揮下に入つていた第十二航空艦隊（司令長官宇岡謹平中將）を加えても実動機は僅々三六機に過ぎぬ状態であつた。

又第十方面軍は地上師団八箇と独立混成旅団七箇と飛行師団一箇から成り、そのうち地上師団三箇と独立混成旅団五箇が南西諸島に配備されていた。

小笠原兵団は一箇師団半から成り、その主力は硫黄島に配備されていた。

〔海軍の防衛態勢〕 一方海軍においては、聯合艦隊司令長官豊田副武大將が第二艦隊（司令長官伊藤整一中將、第六艦隊（司令長官三輪茂義中將）第三航空艦隊（司令長官寺岡謙平中將）第一航空艦隊（司令長官大西瀧次郎中將）及び第十一航空戦隊を統率し、なお昭和二十年一月一日以降、本土防衛作戦に関し、鎮守府、警備府各長官を指揮する権限を与えられていた。これを以て本土方面の海上、航空両作戦は聯合艦隊司令長官の統一指揮の下に遂行し得る態

勢が整えられた。しかし過ぐる比島決戦において、海空戦力の精銳を失つた結果、第二艦隊（戦艦三隻、空母四隻（改装空母）巡洋艦一隻、駆逐艦一〇隻）及び第六艦隊（潜水艦五二隻）は瀬戸内海に逼息して、修理、整備、訓練に従事していたが、艦隊は著しく均衡を欠き、燃料の窮迫と相俟つて半身不随の残存部隊に過ぎなかつた。

かくの如き状態に鑑み、上陸軍を破獲する上に航空戦力に期待すべきもの極めて重大であつた。しかるに進攻作戦に堪え得る陸海軍の航空戦力は可動機数僅かに六二六機に過ぎなかつた。即ち台湾方面第一航空艦隊の五〇機と第八飛行師団の一二六機、西部日本及び琉球方面第三航空艦隊の二〇〇機、南部九州第十一航空隊の二〇〇機（内五四機は陸軍機）それに前記陸軍第六航空軍の五〇機が期待し得る戦力の凡てであつた。

〔防空態勢〕更に緊急を要する防空態勢も同様寒心すべき状況にあつた。北海道を除く本土方面防空戦力は防空戦闘機約八七〇機と高射砲約一、二〇〇門を数えた。しかし兵器の性能不良、兵員の素質及び訓練の低下、弾薬の不足等によりその戦力發揮が意の如く行われぬ実情にあつた。当時本土（除北海道以北）防空作戦は防衛総司令官が担任し、東部、中部、西部各軍司令官がそれぞれその防衛地区の防空に任じていた。防空飛行師団及び海軍防空戦闘隊は防空作戦に関してはそれぞれその地区の軍司令官の指揮下に入つていた。高射砲師団は隷下に入れられていた。但し鎮守府、警備府地区の局地防空はその地上、海上防衛と共に当該海軍司令官の任務であつた。

以上の如く地上防備は外郭地域においては比較的強化されていたが、本土及び朝鮮は極めて薄弱な状況であつた。更に上陸防禦作戦に不可欠なる海上、並びに航空戦力と防空戦力に至つては、真に寒心すべき実情であつた。これに対し太平洋方面米軍の戦力は、空母

一五乃至二〇隻、補助空母四〇隻、戦艦一九乃至二三隻、駆逐艦三〇〇隻、飛行機約五、四五〇機と推定された。

3 新作戦方針

〔新作戦方針策定の経緯—最初の共通計画〕逼迫する戦局と薄弱なる本土防衛態勢に対処するため、大本營陸海軍両当局者は、年頭以来連日新作戦方針の協議を重ねた。昭和二十年初秋の頃にまで本土において二四〇万名に上る膨大なる陸海軍各種部隊を動員し、更に大陸方面からも多数の兵力、軍需品を本土に転用して、未曾有の大決戦準備を整えねばならない。しかも空襲は逐日激化せんとし、既に海空勢力を失ひ、国力もまた急速に衰退しつつある当時の情勢下にこれを完整することは真に至難のことである。

これがため、先ず米軍の本土に対する進攻を遅滞せしめ、この作戦準備完遂に必要な時間の余裕を得ることが日本軍の戦略上第一の要請であつた。又本土外郭における既成の戦略態勢を利用して、進攻米軍に対し、洋上において痛撃を加え基地の推進を阻止し、戦力を消耗せしめて本土に対する攻撃力を弱体化せしむることが第二の要請であつた。しかしながら日本空海戦力の現状から、かくの如き作戦の成否と得失について陸海軍間に機微な意見の相違があつた。即ち陸軍側は米軍の東支那海周辺要域に米攻する機会において米攻米軍船団に対して大規模の航空作戦を遂行せんことを提唱した。これに対して、海軍側は難色を示した。海軍側もこの戦略上の要請は認めるが、比島決戦において精銳航空戦力の大半を失ひ、その再建に数カ月を要するため、五月頃まで大規模の航空作戦は実行出来ない。再建途上の航空戦力を逐次使用することは極力避けたいから、陸軍独自で遂行されたいとの主張を行つた。何度か折衝を経て、海軍側も陸軍の意見を容れ「帝國陸海軍作戦計画大綱」が策案せられ、一月十九日梅津、及川両総長はこれを列立上奏し、翌二十日新

作戰計画が決定された。日本の陸海軍が共通の作戰計画を策定したのは実にこれが最初であつた。戦局の厳しさが初めてこれを然らしめたというべきである。

かくて日本軍の戦略は本土決戦（決号）への道程として比島決戦（捷号）から東支那海周辺の航空作戰（天号）に転移することとなつた。

〔帝國陸海軍作戰計画大綱〕 新作戦計画の基本構想は、本土の外郭地帯の縦深作戰により、進攻米軍に対して出血、持久作戰を遂行しつつこの間本土の作戰準備を固め、本土において最終決戦を遂行せんとするにあつた。而して東支那海周辺の作戰は沖繩諸島に重点を置かんとするものであつた。換言すれば米軍が本土攻撃に先だち沖繩諸島にその進攻基地を推進せんとして來攻する戦機を捉え、陸海航空の総力を結集して、その輸送船団を洋上に攻撃し、これらの基地地上軍の敢闘と相俟つて、米軍の戦力就中人的戦力に大損害を与え、米軍の基地推進、利用を阻止しつつ本土の決戦準備を速急に完成せんとするのが日本軍新作戦計画の構想であつた。

作戰計画大綱の要旨は次の通りである。

一、方針

帝國陸海軍は重点を主敵米軍の進攻破摧に指向し、敵戦力を撃破して戦争遂行上緊喫の要域を確保して以て敵の戦意を挫き戦争目的の達成を図る

二、大綱

1 既成の戦略態勢を活用し、敵の進攻を破摧して速かに自主的態勢を確立す

右自主的態勢は今後の作戰推移を洞察し、速かに先づ国土及之が防衛に緊切なる大陸要域に於て不拔の遡撃態勢を確立す

2 比島方面に於ては來攻中の米軍主力に對し靱強なる作戰を遂行して米軍戦力の牽制に努む

3 東支那海周辺の作戰を重視し、二、三月頃迄に作戰準備を完成す 又硫黄島を含む小笠原群島の防備を強化す 尚米軍が直接本土に來攻する場合をも顧慮し準備す

4 來攻米軍に對し、陸海特に其の航空戦力を綜合發揮し、敵戦力を撃破して、其の進攻企図を破摧す

進攻米軍に對する作戰要領は航空戦力を以て先づ洋上撃滅に努む 而して上陸し來る米軍に對しては補給遮断と相俟て陸上部隊を以て撃滅す

5 支那大陸の作戰は米軍を主敵とする作戰に轉換す 上海南支要域を準備の重点とす

6 防空は帝都の防空と本土の重要生産、交通港湾施設の防備を重点とす

7 南方燃料の突破輸送を実施す 大陸と本土との海上交通の確保を期す

8 奇襲特攻を戦法の主眼とす

三、国土要域の作戰指導の準拠

1 国土に於ける作戰目的は米軍の進攻を破摧して国土特に本土を確保するを主眼とす

2 本土防衛の爲め縦深作戰遂行上の前縁を南千島、小笠原群島、沖繩本島以南の南西諸島、台灣及上海附近とし之を確保す

此の前縁地帯に米軍の上陸を見る場合に於ても極力米軍の消耗を図り基地の設定を妨害す

3 本土、南鮮及上海附近に對する米軍の上陸に當りては陸海航空戦力を發揮して之を撃滅す 又千島、小笠原、南西諸島及台灣に於ては予め所要の兵力を増加して作戰準備を整へ且機を失せず所要航空戦力を集中増加して敵を撃滅する態勢を採る

4 本土及朝鮮の作戦準備は万難を排し速急且本格的に強化し概ね本年秋迄に概成す 米軍の熾烈なる空襲を予期し之に即応する戦場態勢を整ふ

米軍に対する上陸防禦作戦準備は先づ速かに関東地方九州地方及南鮮方面を概成す

4 全般指導

大本營陸軍部はこの新作戦方針に基き、「進攻する敵特に主敵米軍を撃破して皇土を中核とする国防要域を確保し以て敵の戦意を破摧せん」とする意志を全軍に明示した。即ち主敵を米軍に徹底すると共に、対米主戦面を太平洋及び東支那海方面と概定し、本土を中核とする要域の戦備を速急強化する方策を決定し、全軍を指導した。これがため対ソ、対重慶軍作戦を伝統的使命として来た朝鮮軍及び支那派遣軍の主敵を米軍に転換せしめた。又南方軍は国土及び中国大陆方面に向う敵、主として米軍の進攻を控制し、全軍の作戦を容易ならしむべき持久的使命に切り換えられた。

〔大本營命令〕 この大本營の企図と各軍の新任務に関する大陸命は一月二十二日より二月六日に亘り相次いで支那派遣軍、南方軍、第十方面軍、内地防衛軍、第十七方面軍等の各軍司令官に伝宣せられた。この際後述する如く内地防衛軍及び第十七方面軍の戦闘序列が令せられた。各軍の新任務の要旨は次の通りである。

一、支那派遣軍

中国大陆に進攻する主敵米軍を撃破して其の企図を破摧し大陸に於ける要域を確保すると共に重慶勢力の衰亡を図る 之が為東西両正面に戦線を構成し、特に戦備強化の重点を中南部中国特に揚子江下流要域に置く

二、南方軍

南方要域を確保し、本土又は中国大陆方面に向ふ敵の進攻を制

扼し、全軍作戦を容易ならしむ 之が為比島方面に於てはルソン島の要衝を確保し、来攻する敵の撃破に努め、その他の方面に於ては、印度支那、泰、馬來、スマトラを南方中核地域として確保する

三、第十方面軍

台湾、南西諸島方面に進攻する敵に対して同島を確保し、本土を中核とする要域に於ける全般作戦を容易にする 之が為両島に対する敵の空海基地の推進を破摧するを作戰指導の主眼とする 特に台湾及沖繩本島は東支那海周辺に於ける我が航空作戦の拠点たらしめる

四、第十七方面軍

作戰準備の重点を南鮮方面（済州島を含む）に転換し、来攻する敵を撃滅して朝鮮を確保する 尚ソ連に対する作戰準備に関しては関東軍總司令官の区処を受ける

五、内地防衛軍

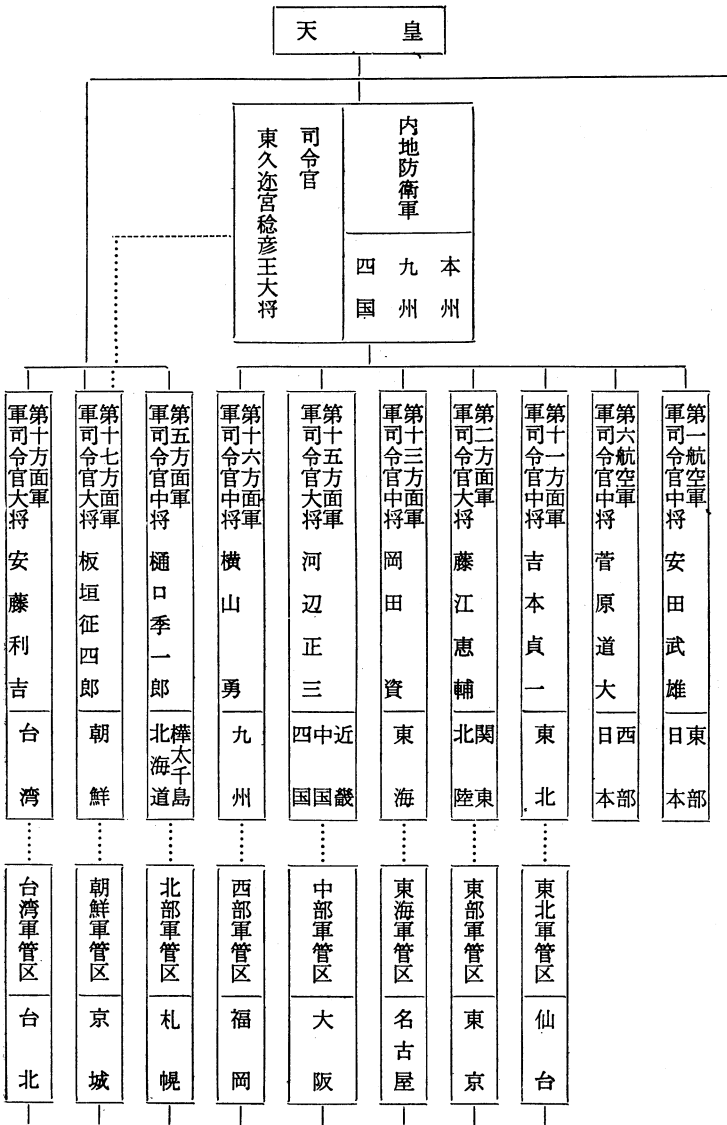
進攻する敵を撃滅して、本土を確保する 之が為作戰準備の重点を関東、九州及東海の三地方とし、これ等の地域と阪神地方の防空を重視する 敵の来攻に當つてはこれを洋上に撃滅するに努める

一方大本營海軍部もまた一月三十日、各艦隊、鎮守府、警備府の參謀長を招集し、新作戦計画大綱を示し、作戰に関する打合せを行った。

〔未曾有の作戰準備〕 新作戦方針に基く本土、台湾、南西諸島、大陸要域の作戰準備は、その規模と煩雑性と困難性について正に我が史上未曾有のものであるといつても過言ではない。例えばこれらの地域において、僅々数カ月間に新設を計画せられた兵力は五六箇師団、三八箇旅団に達し、その他軍直部隊、兵站部隊等は列挙に堪えないほどである。又これらの地域相互及び各地域内において大

第一表

註
—— 隷属
…… 防衛指導



規模の兵力、軍需品の転用が計画せられ、しかも制海制空権を完全に喪失せる状況下において、至短期間に作戦計画を確立し、これに基いて兵力の展開、軍需品の集積、陣地の構築、部隊の訓練等を完遂せんとするもので、有史未曾有の難局が人為を絶したこの計画を敢えて策定せしめた。以下各地域の作戦準備を概説する。

5 本土方面の作戦準備

〔緊急兵備——内地防衛軍〕 大本營陸軍部は前述の新作戦方針の研究に併行して本土及び朝鮮方面防衛に必要な新兵備について膨大な計画の策定を急ぐと共に、二月上、中旬の間に先ず応急兵備を実施した。

即ち二月六日、内地防衛軍及び第十七方面軍の戦闘序列が下令せられ、作戦軍たるの性格と組織を明確にせられた。本州、四国、九州においては東部、中部、西部軍司令官を廃し、新たに作戦に専任すべき五箇の方面軍司令部と別に五箇の軍管区司令部とが併設せらるることとなつた。朝鮮軍司令部もまた廃せられて第十七方面軍司令部と朝鮮軍管区司令部とが併設され、又北海道方面においても第五方面軍司令部と併立して軍管区司令部が設置された。これを以て国土全般の陸軍指導組織は第一表の如く変つた。

なお軍管区は各方面軍の作戦区域と一致して設定され、軍管区司令官は軍事行政に関しては陸軍大臣の区処を、又作戦に関しては方面軍司令官の指揮を受けることとなつた。但し方面軍司令官は軍管区司令官を兼任し、実質上二位一体となつてゐた。

なお各軍管区司令部の下に師管区司令部があり、師管区司令官は補充隊、警備隊等を以て軍官民一致して管内の警備に任ずる如く組織された。

この指揮組織の改編に併行して独立混成旅団四箇と東京警備旅団三箇を応急に動員し、前者を八戸平地、房総及び知多半島、有明湾

岸に配備し、後者を東京都の警備に充当した。又朝鮮においては第七十九、第九十六師団が動員せられ、それぞれ北鮮及び南鮮に配備せられた。

一方海軍においては、主として後述する天号作戦に備えんがため二月十一日九州方面に第五航空艦隊を、三月一日主として本州の全域に第十航空艦隊をそれぞれ新設し、第三航空艦隊の配置を関東方面に変更した。この新設、配置変更後の国土方面海軍指揮組織は第二表の通りとなつた。

〔新兵備計画〕 新たに一五〇万人の召集を要する陸軍の新地上兵備計画は参謀本部と陸軍省間に困難なる接衝が反復せられたる後、二月下旬意見の一致に到達した。

その概要次表の通りである。

区 分	新動員兵団数	満洲よりの 転用兵団数	摘 要
本 土 方 面 (除朝鮮)	師団 四〇 (内北海道三) 独立混成旅団 一六 (内北海道二) 戦車旅団 六	精銳師団 三 戦車師団 一	新動員師団の内訳 沿岸配備師団 二五 決戦師団 一五
朝 鮮	師団 独立混成旅団 一四	低装備師団 三	

備考

(一) 二月上、中旬動員せられた応急兵備の兵団を含まない。

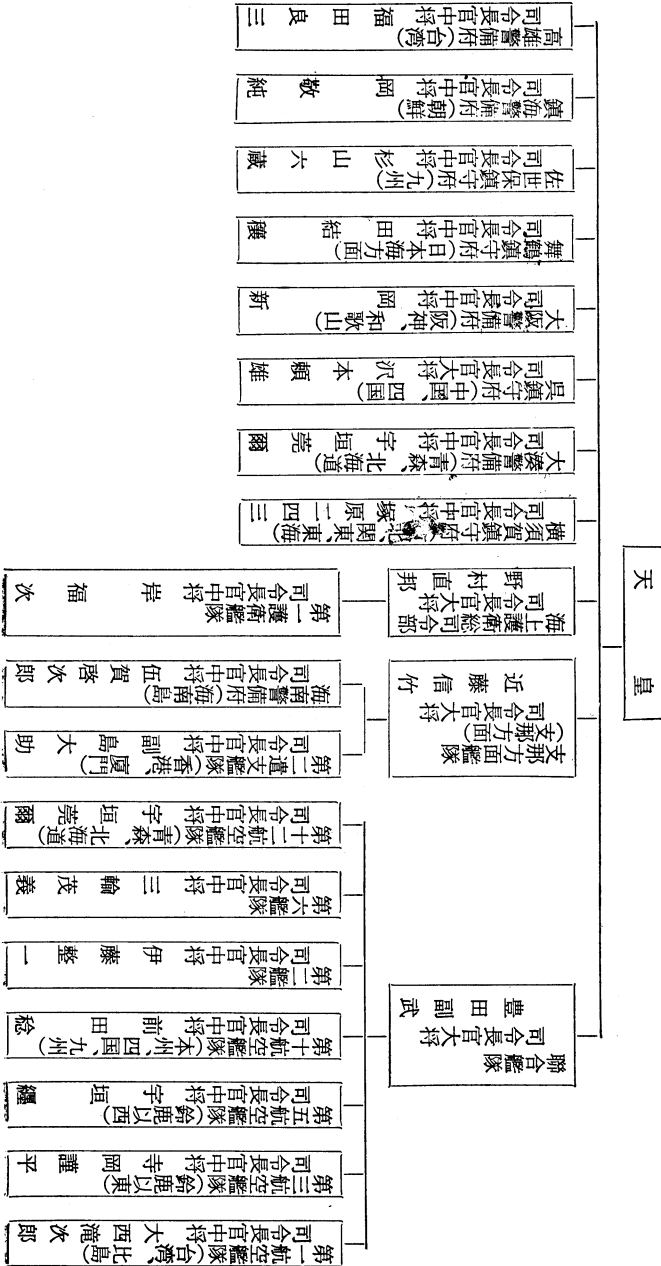
(二) 沿岸配備師団は主として海岸に固定配備せられ敵上陸部隊の拘束に任ずる。機動力を欠き一般に低装備である。

決戦師団は決戦攻勢に任ずる。機動力に富み、比較的優良装備で機動兵団とも呼んだ。

(三) 本表の外多数の軍直部隊の動員が計画された。

この膨大な作戦部隊の兵備は、三次に区分して遂行する如く計

第 二 表



画された。その区分は次の通りであつた。

第一次動員（二月下旬）

沿岸配備師団 一八箇（内朝鮮二箇）

第二次動員（四月上旬）

決戦師団 八箇

独立戦車旅団 六箇

右のほか軍司令部九箇（内一箇は朝鮮）を動員し統帥組織を整備す

第三次動員

(1) 沿岸配備師団 一箇（内朝鮮二箇）

(2) 決戦師団 七箇

(3) 独立混成旅団 一六箇

滿洲からの兵力転用は概ね第二次動員に併行して実施する如く予定された

なお作戰部隊に即応する兵站部隊の兵備もまた困難なる問題であつた。兵站部隊の兵備は主として大陸からの転用と国民戦闘組織に俟つこととし、新たに動員するものは純作戰兵站部隊に限定された。それでも動員を要する兵站要員は四〇万人に上り、自動車一万二千輛、馬匹四七万頭、輜重車輛七万輛を要した。これを充足するため自動車は民間の保有実動自動車二万四千輛に依存し、馬匹は国内適齡馬の七分の一を徵発することとなつた。又輜重用車輛は五万輛を民間から現地調升する如く計画せられた。

陸軍関係作戰、兵站部隊の動員人員は実に約二百万人にも達し、このほか海軍関係の動員も数十万人が予想せられた。未曾有のこの大動員は最も急迫を告げつつある軍需品、食糧の生産と交通の確保に重大なる障害をもたらすこと必至となり、政府、軍部間、或は陸、海軍間に深刻な論議を伴つた。

新兵備部隊に対する兵器器材の充足は更に重大なる懸念事であつ

た。これを兵器について例示すると、当時の保有数量は所要に対し小銃は所要の五〇%、輕機関銃は二三%、歩兵用火砲は二八%、対戦車砲は七四%、野山砲は七五%に過ぎなかつた。なお不足量の相当部分は滿洲方面からの転用及び海軍からの譲渡と特に今後九月までに予定されている国内生産に期待せられた。九月までの国内生産に対する期待は小銃五二三、二〇〇、輕機関銃九、三六〇、機関銃一、二六〇、歩兵砲二、一六〇、高射砲六〇六等がその例であつた。しかも資源の枯渇、空襲に伴う工場被害と疎開、工員の徴兵等今後累積する数々の悪条件を予想する時、果して幾何の生産が実現し得るか予測し難いものがあつた。況んや最も優先を要する特攻舟艇約九千隻、飛行機一万六千機に上る生産計画を擁するにおいては尚更期待困難というべきであつた。

又滿洲からの兵力転用と共に関東軍保有軍需品の約三分の一（航空彈発油二万軒、普通彈発油三万軒、彈藥一三箇師団會戰分）等を本土に転用する如く計画された。しかしながら船舶の被害累増し、又国内の食糧危機に対処するため、大陸の雜穀還送は更に焦眉の急を告げつつある折柄両者に対する船腹の配分は統帥部と陸軍省間論議の重要問題となつた。双方譲歩を余儀なくされ、食糧の還送は二一五万噸に、又軍需品の還送は極力軍隊輸送の上積に拠ることとなつた。

かくの如き数々の困難と制扼を克服して、本土の兵備を戦局に即応せしむるためには時期的順位と地域的重点を徹底することが重要な一解決方法と認められた。

第一次兵備と兵力転用

大本營は二月二十八日、予定の如く第一次動員として沿岸配備師団一八箇（留守師団を基幹とす）のほか、独立混成旅団一箇の動員と朝鮮海峡及び五島列島の兵備を発令した。しかしその動員完結は二カ月以上を要する見透しであつた。新動員兵団には百代番号を附

与せられた。この中三箇師団と一箇旅団が北海道及び樺太において、二箇師団が朝鮮において動員せられた。

次いで三月十日には独立混成旅団二箇が動員せられ、それぞれ九州及び朝鮮に配備された。一方この動員に併行して重要な兵力転用が開始された。即ち三月十五日及び三十一日、満洲から関東地方の第三十六軍に第五十七師団（途中で九州に変更された）と戦車第一師団の、又四国及び九州に第十一及び第二十五師団の転用を発令され、これらの師団は四月から五月に亘つてそれぞれ目的地に集結を了えた。又これより先、近畿地区にあつた第四十四及び第八十四師団を関東地方に転用された。

地上兵団の転用に先んじ、一月から二月に亘つて、南方から本土方面に若干の飛行部隊を転用した。又二月二十四日には先にフィリッピンより帰還した第三十戦闘飛行集団を再編合（戦闘二箇戦隊、重爆一箇戦隊）の上、第六航空軍の隷下に入れ、主として本土周辺に來攻する敵機動艦隊に対する攻撃に備えた。

三月に入ると敵機の本土空襲は急速に激化し、しかも焼夷弾攻撃を開始しその被害は甚だしくなつて來た。殊に三月九日夜、B 29一〇機を以て襲撃せる東京下町地区の被害は家屋焼失約二五万戸、死者約八万三千名、罹災者約百万名以上に及び、惨害眼を掩うものがあつた。又三月中、下旬敵が沖繩進攻企図と関連し、敵機動艦隊及びB 29を以て九州、四国若しくは近畿地区の港湾、飛行場に來襲し、その攻撃は執拗を極め、早くも南西諸島方面に戦機熟するを思わしめた。

註 戦後の米軍資料によると三月九日夜の投下焼夷弾量は一、六七噸に上つた。投下弾量から判断して米襲撃機数は更に多かつたものと考えられる。

6 台湾及び南西諸島方面

〔全般指導要領〕 大本営はフィリッピン方面の戦況に鑑み、すでに述べた如き情勢判断と新作戦方針の検討に併行して、昭和十九年末以來、この方面戦備の補強に努力を傾けていた。特に比島決戦に対処するため、台湾から十月二十三日第六十八旅団を、十一月四日には第二十三師団を、更に十一月二十日には第十師団を相次いでルソン方面に転用したため、台湾の防備補填は焦眉の急に迫られた。これがため十二月には中国より一箇師団を、一月には台湾に軍司令部一箇と独立混成旅団五箇とを新設すると共に中国南西諸島及び満洲よりそれぞれ一箇師団を台湾に増派し、又南西諸島方面においては沖繩本島第二十四師団の編制改正、第六十二師団の欠員補充等戦力の實質的強化に努力が払われた。

一方地上防備強化に併行して同方面航空作戦準備の促進にも努力を急いだ。即ち海軍は在比島第一、第二航空艦隊残存兵力を一月七日、第一航空艦隊に統合し、前節に既述の如く台湾に転進せしめ、再建に従事せしめた。陸軍もまた南西方面から航空戦力の一部を台湾に転用した。又陸海軍ともに航空特攻戦力の造成と航空基地の増強を急いだ。

大本営は既に述べた如く一月三十日には大海令を以て聯合艦隊司令長官を始め全司令官に「帝國陸海軍新作戦計画大綱」を令した。次いで二月三日には大陸命を以て第十方面軍司令官に対し、前述の任務が与えられた。なお当方面の作戦に関し、陸海軍間の中央協定が決定され、同日指示された。即ちこの方面における陸上防衛は陸軍、海上防衛は海軍が担任するを本則とし、なお第十方面軍司令官は陸上作戦に関し台湾及び南西諸島方面所在海軍部隊中所要の兵力を指揮することが協定された。

続いて二月六日には「昭和二十年前半期に於ける陸海軍航空作戦中央協定案」が纏り、東支那海方面における航空作戦に関する計画が策案せられた。（その詳細は別に後述する）

〔台湾の地上作戦準備—台湾人召集〕 即ち台湾の地上兵力の増加は先ず十二月二十二日、滿洲より第十二師団の転用を發令せられたのを契機とし、一月以降、次の如く相次いで兵力の転用又は新設が実行せられた。

一月四日 独立混成第七十五、第七十六旅団を新設し、それぞれ澎湖島及び基隆要塞の防備を強化すると共に独立混成第三十聯隊を高雄要塞に増強した。

一月十日 在沖繩本島第九師団を北部台湾新竹地区に転用し、第四十軍司令官の指揮下に入らしめた。

一月十六日 第四十軍司令部(軍司令官中沢三夫中将)を嘉義に新設し、南部台湾の防衛を担任せしめた。

一月二十三日 滿洲より第七十一師団を南部台湾嘉義地区に転用し、第四十軍司令官の指揮下に入らしめた。

二月十七日 独立混成第百旅団を新設し、高雄の防備を強化すると共に、独立混成第百二、第百三旅団を新設し、前者を花蓮港、台東地区に後者を第四十軍司令官の指揮下に入らしめた。

これら新設部隊の要員、兵器資材等は南方へ転進中台湾に滞留せる部隊、兵員、軍需品及び本島在住内地人を以て充たせられたが、更に台湾人をも召集せられた。新設部隊の台湾人は二〇—四〇%に達した。

かくて台湾の地上総兵力は三月五箇師団と独立混成旅団六箇となつた。その中第四十軍(四箇師団と二箇独立混成旅団)は新竹以南の西部台湾の防衛を担当し、又台北、基隆地区には一箇師団と一箇旅団が東海岸の宜蘭及び台東地区には一箇旅団がそれぞれ配備された。その態勢は附図(第十)の如くである。

〔沖縄の地上作戦準備〕 日本列島と台湾を連鎖し、大陸の防波堤を形成する南西諸島の中核たる沖縄本島(那覇起点)は、鹿児島、台北、上海からそれぞれ四四〇、四三〇、五三〇哩に当っている。

本島北半部は森林を以て覆われた山岳地帯であるが、南半部は開闊した丘陵地帯で、中部は飛行場の設定に最も適した平坦な地勢である。しかも那覇を始め艦船の基地に恵まれている。その上本島に連なる宮古島、石垣島、徳之島、伊江島等の沖縄列島も、良好な航空基地とその適地に恵まれている。これらの航空基地は九州、台湾、華中沿岸航空基地と相俟つて、太平洋方面から東支那海及び西日本方面に來攻する敵に対し、航空作戦を展開して、洋上に捕捉撃滅する上に屈強の布陣を形成している。点にも等しいこの島に敵が出來る場合にはこれらの基地から集束の攻撃を加えることが出来る。しかし一度敵手に歸することがあれば、本土、朝鮮、中国沿岸一帯は米、海空軍の威力に覆われ、これらの地域に対する大進攻基地となる。小笠原列島と共に本土を繞る攻防戦における最も重要な戦略的要機を備えている。フィリッピンの戦勢決して以後沖縄のこの戦略的地位は愈々重大を加えた。

既述した如く、南西諸島の地上防備は、昭和十九年七月、サイパン陥落後急速に増強せられ、同年秋には第三十二軍(軍司令官牛島滿中将)の総兵力四箇師団と五箇旅団に達していた。沖縄本島にその主力(三箇師団と一箇旅団)を又宮古島には一箇師団弱と二箇旅団を、石垣島、大東島、奄美大島にはそれぞれ約一箇旅団を配備していた。

沖縄本島の防備上最も問題となつたのは、本島中部に設定せられている二箇の飛行場(北及び中飛行場と呼ばれた)の確保であつた。蓋し沖縄に來攻する敵を本島の周辺海上に釘付けして、これに航空集中攻撃を加え、敵を輸送船諸共に洋上に撃滅せんとするのが当方面における大本營作戦構想の主眼であつたからである。

第三十二軍司令官は昭和十九年末まではこの大本營の意図に基いて、本島の中部(北、中飛行場を含む)及び南部を確保し、上陸し来る米軍を海岸地帯において速かに攻撃撃滅する方針を樹てて飛行

場地区に一箇師団を、南部地区に二箇師団を配備し、海岸決戦を遂行すべく鋭意作戦準備を進めていた。

〔第九師団の抽出転用問題——禍根残る〕 ところが昭和十九年の末になつてこの作戦計画と準備の基礎を動揺せしむるような問題が起きた。それは既述せる精銳第九師団の抽出転用であつた。昭和十九年十一月初め大本營がこの意内を内示した時、牛島軍司令官は「若し第九師団を抽出せらるるに於ては本島防衛の責務が果せない。若し抽出せられるならば寧ろ軍の全力を決戦方面に転用され度い」と申言し、大本營の驕意を促した。

大本營は急を要する台湾防備強化のため、これを容れることが出来なかつた。その代りに姫路に待機中の第八十四師団の沖繩増援を準備した。第九師団は十二月下旬、半歳に亘る沖繩の作戦準備を一擲して台湾に転進した。

既に敵海空軍の跳梁を見つつある時、第八十四師団の海上輸送に懸念はあつたが、大本營はその輸送に万般の準備を整え、一月二十二日上奏を終え、第三十二軍に増派する旨打電した。この電報は第三十二軍のため、一夜の糠炊びに終つた。即ち翌二十三日、大本營は突如これを中止した。それは本土の防衛強化の重要な折柄、海上輸送不安なる離島への兵力投入は避くべきであるという新作戦部長宮崎中将の所信が俄かに採択されたからであつた。この措置は第九師団の転用と相俟つて第三十二軍首脳の不満を深刻にした。又既述帝國陸海軍新作戦計画大綱の策定に當つて、東支那海方面における航空作戦を主唱した大本營陸軍部のこの措置は海軍側に多大の不満を買つた。かくて沖繩本島の地上兵力は次の如く二箇師団半基幹に減少し、又第三十二軍上級司令部の間に感情と意志疎隔の禍因を作ることとなつた。

第二十四師団（師団長雨宮巽中将）

第六十二師団（師団長本郷義夫中将、三月藤岡武雄中将がこれに

代つた）

独立混成第四十四旅団（旅団長鈴木繁二少将）

野戦重砲兵第一（一大隊欠）、第二十三聯隊

独立重砲兵第百大隊

重砲兵第七聯隊

独立臼砲第一聯隊

輕迫第三、第十中隊

戰車第二十七聯隊（一中欠）

その他各種軍直部隊

これより先、牛島軍司令官は、第九師団抽出の新事態に即応するため十一月末作戦計画に根本的更改を行つた。即ち従来の海岸地帯における決戦方針から戦略持久作戦に転向し、問題の北、中阿飛行場地区を抛棄して、南部地区において持久戦法を採るに決した。その理由は兵力不足にあつた。大本營、第十方面軍、陸海軍航空部隊首脳は第三十二軍のこの新作戦方針を不満とし、第十方面軍は再三北、中飛行場確保を嚴重に要求するところがあつたが、第三十二軍はこれに應じ得なかつた。この論争により沖繩作戦は早くもその生起前に暗影を醸していた。

第三十二軍の新配備は附圖第十の如く変更せられ、各部隊は半歳に亘り営々孜々として構築し、死所と決したそれぞれの陣地を捨てて、再び新陣地の構築に忙殺されることとなつた。膨大なる軍需品の集積変更、新陣地構築のための資材の入手と運搬は最も難事であつた。敵来攻の機漸く熟しつつある秋、沖繩の地上防備は、形而上下に亘る混雜に当面することとなつたのは真に不幸であつた。

〔天号航空作戦計画——海軍の熱意向上〕 既述一月二十日の作戦計画大綱に基き、本年前半期における陸海軍の航空作戦に関する具体的作戦計画が陸海軍間に協議せられ、二月初めに陸海軍中央協定案が作製せられた。しかしながら海軍の使用予定機数は陸軍側の期

待に比し少く、又機動艦隊の攻撃を重視する海軍の伝統は、輸送船団の攻撃を重視する陸軍の特攻思想と容易に同調し得なかつたため、海軍側の調印を得ることが出来なかつた。

陸軍は当方面航空作戦準備を急ぐの余り、海軍側の調印を待つことなく二月六日、大陸指を以て協定案（昭和二十年前半期航空作戦に関する陸海軍中央協定）及びこれに基づく陸軍航空部隊の「東支那海周辺地域に於ける航空作戦指導要領」を關係軍司令官に指示してしまつた。

註 大本營陸軍部は右作戦指導要領において本航空作戦を天号作戦と呼称するに決定した。海軍は後述する三月二十日の大海指第五〇一三号を以て此の呼称を採用した。

本中央協定案においては海軍は依然東支那海周辺地域に対する作戦に消極的で、敵機動艦隊の攻撃を重視する思想を固執したものであつた。即ち方針において「陸海軍航空戦力の統合發揮に依り、先づ敵機動部隊、次で東支那海周辺地域に來攻する敵を撃擯すると共に本土直接防衛を強化す」と謳われた。又作戦指導の大綱において

一、敵機動部隊撃滅作戦

二月初頭以降主として海軍航空兵力を以て敵機動部隊を撃擯し、敵の躍進作戦を封殺す

二、東支那海周辺地域（台灣、南西諸島、東南支那、九州、朝鮮方面）

陸軍航空部隊は三月末を目途とし、東支那海周辺地域に於ける作戦準備を完成し、敵來攻部隊を撃擯す攻撃目標は主として輸送船団とす

海軍航空部隊は一部を以てこれに協力す

なお海軍の使用予定機数は陸軍の一、三九〇機に対し五二五乃至七五五機に過ぎなかつた。

しかるところ、その後使用機数増加の見透しが立つに従つて東支

那海周辺地域特に南西諸島方面に対する海軍の航空作戦遂行熱意は急速に向上し、三月一日陸海軍中央協定が正式に成立した。この間海軍は既述の如く第五航空艦隊を新設し又練習航空部隊を作戦部隊（註、第十航空艦隊）に改編し、大量の特攻兵力の造成を強行することとなつた。即ち陸軍の使用予定機数は協定案と同様であつたが、海軍は四月末までに整備予定の第十航空艦隊の特攻機二、〇〇〇機を合し、三、一七五機を予定することとなつた。

協定の要旨は次の通りである。

一、方針

陸海軍航空戦力の統合發揮に依り、東支那海周辺地域に來攻を予想する敵を撃滅すると共に本土直接防衛態勢を強化す

二、各方面航空作戦指導要領

1 東支那海周辺地域に於ける航空作戦は、陸海軍航空兵力を速に同地域に展開し、敵來攻兵力の撃滅を図る 陸海軍航空部隊の主攻撃目標を海軍は敵機動部隊、陸軍は敵輸送船団とす

2 以下筆者省略

三、使用兵力の概要は次の通りである

陸軍

1 基礎兵力 一、一七五機

本土——第六航空軍 七三五機……南西方面に推進展開す

台灣——第八飛行師団 四四〇機

2 増援兵力 二二五機

中国——第五航空軍 一七五機

海南島——第三航空軍 四〇機……台灣に増援展開す

海軍

1 基礎兵力 三、一七五機

第三航空艦隊 五七〇機
 本土——第五航空艦隊 五二〇機
 第十航空艦隊二、〇〇〇機
 台湾——第一航空艦隊 八五機
 増援兵力 八〇機
 南西諸島方面に推進展
 開す

2 増援兵力 八〇機 八〇機
 南西方面——第十三航空艦隊 八〇機
 かくして天号航空作戦に関する陸海軍の呼吸は漸く合つて来た。
 【計画の無理と海軍苦肉の丹作戦】 しかしながらこの計画は元々
 必成の基礎に基いて計画されたのではなく、絶対の必要に迫られて
 已むなく計画されたものであつた。陸軍は三月半までに一、四〇〇
 機（内特攻機八五〇機）を整備せんがため、二月六日の大陸指「と
 号（筆者註、特攻）要員學術科教育課程表」に示す如く、約一カ月
 （操縦十日、射撃四日、爆撃十日、航法二日）を以て特攻要員を練
 成することを前提とした。

海軍もまた大同小異であつた。従つて計画の如く三月末までに展
 開を完了することは多大の疑念があつた。果せるかな米軍沖繩来攻
 の半カ月前、即ち三月中旬においても陸軍航空部隊はなお九州に向
 う推進途中にあり、海軍もまた三月一日現在の可動機数二、一〇〇
 機の大半は練成途中のものであつた。

このような計画の無理を緩和するため海軍は苦肉の作戦を計画せ
 ざるを得なかつた。丹作戦が即ちそれである。丹作戦とは米機動艦
 隊のウルシー掃投の好機を捉えてハワイ奇襲を再現し、米軍の沖繩
 進攻を遅延せしめんとする作戦であつた。この作戦は三月十一日二
 四機を以て決行せられた。しかし計画の手違いと悪気象に禍せられ
 て、攻撃部隊は日没後ウルシー上空に進出したため空撃に終つてし
 まつた。翌日その完全なる失敗が確認せられ、頼みにした唯一の方
 策も潰えた。

かくて地上、航空共に我が作戦準備半途の三月中旬、沖縄攻略の

前駆たる敵機動部隊は早くも三月十四日ウルシーを出航して九州沖
 を目指して北上を開始していた。

7 中国方面の新作戦準備

【岡村総司令官の申言——四川進攻作戦】 昭和十九年末、レイテ
 の敗戦に伴う中国大陸方面爾後の作戦指導に關し、大本営は前述の
 如き敵情判断に基き、東南中国（東部広東省及び南部福建省）及び
 揚子江下流地区に対する連合軍就中米軍の接岸作戦を重視し、支那
 派遣軍をして対米作戦準備を重点とする作戦指導に転換せしむべき
 であると考えた。特に四、五月頃先ず東南中国沿岸に對し、連合軍
 の反攻を見る算大なりと判断し、昭和十九年十二月上旬、同方面戦
 備の強化に關し、幕僚をして連絡せしむるところがあつた。偶十一
 月新たに第六方面軍司令官より支那派遣軍総司令官に親補された岡
 村寧次大將は戦争の前途と支那派遣軍の地位に鑑み、重責達成の方
 途に關し深く考慮するところがあつた。その結果一号（湘桂）作戦
 の成果とこれに關連する重慶政權の窮状より判断し、万難を排し明
 春四川省に長驅進攻して、重慶直系軍に決定的打撃を与え、本年
 中期以降予想せられる東西よりの敵の反撃に先だちこれを各個に撃破
 し、敵空軍の跳梁を封殺すると共に、更に重慶政權の単独和平乃至
 は戦争脱落の好機を作為するを要するとの判断に達し、異常なる決
 意を以て、松井総參謀長を大本営に派遣して、一月五日四川進攻作
 戦を大本営に申言するところがあつた。

その作戦構想は三月下旬頃から衡陽及び柳州各西方正面から攻勢
 を開始し、芷江及び貴陽附近を攻略した後、長驅重慶、成都方面に
 戦略挺進せしめ、四川省の要域を占領せんとするもので真に放胆苦
 肉の作戦構想であつた。しかしながら大本営は欧州戦局は既に終末
 の様相を呈しつつある上に、東亜における連合軍の優勢を加えつつ
 ある現段階においては、重慶政權の継戦意志はなお鞏固なるものあ

りと判断した。又当時使用し得べき兵力、資材による四川進攻作戦実行の可能性についても懸念がある上に、この作戦により日本本土を中核とする要城の防衛強化を遅滞せしむる虞れ大なりとして、岡村総司令官の意見を採用するに至らなかつた。ただ大本營はこの根本方針に大なる影響を及ぼさない範圍における小部隊の奥地挺進作戦のみを許容することとした。

すでに述べた支那派遣軍の新使命はかくの如き経緯を経て、一月二十二日命令されたのであつた。特に大本營のこの意図を明確ならしむるため、この命令において、大部隊を以てする地上進攻作戦の地域的限界を明示すると共に、本命令に基づく大陸指において「重慶勢力の衰亡を促進し、且在支敵航空勢力の活動を封殺する為、中国奥地に対し、多数の小部隊を以て組織的長期に亘る挺進奇襲作戦を実施することを得る旨」指示した。

〔陸海軍中央協定〕 なお中国大陸方面におけるこの新作戦方針に基き、次の如き陸海軍中央協定を定め、関係陸海軍部隊に指示した。

一、東南支那沿岸方面の戦備を速急に強化し、敵米軍の進攻に方りては適時所要の兵力を集中して之を撃破し、極力其の企圖を破滅す

戦力指向の重点は広東周辺地区とす

二、本年初夏の候を目途として揚子江下流要域特に上海周辺地区の戦備を強化し、敵米軍の進攻に方りては為し得る限りの戦力を指向して決戦を指導し、敵を撃滅す

三、海南島方面に於ては進攻する敵に対し、概ね所在陸海軍部隊を以て極力同島主要港湾飛行場を確保し、成る可く永く敵の利用を封殺す

支那派遣軍総司令官は以上の大本營命令、指示に基いて、一月二十九日支那派遣軍命令を下達し、新作戦準備に移つた。即ち第二十

三軍を以て三月末までに東南中国沿岸、第十三軍を以て初夏の候までに揚子江下流地区、北支那方面軍を以て初夏の候までに青島方面における対米戦備を担任概成せしむると共に、その占拠地域の確保に当らせた。第五航空軍もまた主力を以て沿岸方面における対米作戦準備を促進すると共に、一部を以て内陸方面の作戦に任せしめた。又第六方面軍は現占領地域を確保し、対重慶軍作戦の主役たらしめた。これに関連し、第二十三軍を総軍の直轄とする如く予告した。

〔兵力運用と兵備〕 支那派遣軍はこの作戦計画を遂行するため次の如く兵力の運用を計画した。即ち第二十三軍に二箇師団を増強すると共に同軍から海南島に独立混成一箇旅団を派遣して海軍の警備府司令長官の指揮下に入らしめた。第十三軍のため、華北方面から七箇師団と戦車一箇師団を、武漢地区から軍直部隊と一箇師団をそれぞれ上海方面に転用する如く計画した。又南京より上海に一箇師団を進出せしめ、別に大本營命令により第六方面軍からは第三十七師団に続いて、第二十二師団をも仏印に派遣することとなつた。

以上の兵力転用のほか在中国補充隊等の改編及び補充滞留人馬等により四箇師団、一二箇混成旅団、一三箇独立警備隊の編成を令せられ、その大部は一月下旬から三月に亘り、一部は四月下旬までに逐次その編成を完結した。三箇の新設師団は沿岸戦備強化に充当せられ、その他は主として内陸の警備に使用せられることとなつた。

尚これに先立ち一月二十六日揚子江下流方面統帥組織を強化するためハイラルから第六軍司令部(軍司令官十川次郎中将)が転用せられ、第十三軍司令官の指揮下に入り杭州湾方面第七十師団等の指揮に當つた。

因みに、大本營が中国大陸方面の作戦指導に當つて、当初華南沿岸方面の作戦準備を重視し、相当有力なる兵力を此の方面に充当したため、爾後の戦況推移に當つて、困難なる兵力転用を伴つた。

地上兵備の増強と共に、航空戦力の改編も行われた。即ち第十三飛行師団を新設し、第五航空軍に隷属せしめ又満洲から転用せられ支那派遣軍総司令官の指揮下に入つていた飛行団司令部一箇と飛行戦隊三箇を同航空軍の戦闘序列に編入した。

支那派遣軍は以上の如き、対米作戦準備とこれに伴う兵備を強行すると共に、一月下旬から二月上旬に亘り粵漢打通作戦を遂行し、三月九日には南方軍の仏印処理に呼应して在華仏国勢力を一斉に処理した。

8 富号作戦——風船爆弾攻撃

〔米本土攻撃の意欲——富嶽機から富号へ〕昭和十七年四月、既にドクリットルの我が本土に対する空襲行われ、且つ爾後は益々その度を加えんとする状況において、進んでわが方からも米本土に対して航空その他の手段で攻撃を行い、少くとも精神的擾乱の目的を達したいということは不断に大本営首脳の念頭を離れなかつた問題であつた。これがため一部民間当事者の熱心な努力と相俟つて片道飛行による太平洋横断爆撃機（富嶽機）を製作し、特に米国北部の重工業地帯の要部等を攻撃する企画もなされたことがあつた。しかしながら当時第一線飛行機就中戦闘機の急需は真に焦眉の問題であつた。一方この富嶽機の僅か数機の生産のためにも技術陣、資材、労力その他に亘り莫大なる現用機生産の犠牲を忍ばなければならぬ。これがため種々論議を重ねたが遂に涙を吞んでこの企画を中止しなければならなかつた。かくの如き情勢において兎もかく少くも精神面において相当の成果をあげたものは以下記述する風船爆弾による米本土攻撃作戦（所謂「富号」作戦）であつた。

〔風船爆弾の着想研究とその完成〕これよりさき、陸軍においては夙に満洲国境方面において万一有事の際、多数の小型風船に爆弾を装置し、風力を利用して敵陣地の後方に對し攻撃を行う構想の下

に極秘裡に技術的研究を進めつつあつたが、更に昭和十八年頃、奇襲挺進攻撃に任すべき部隊の各武装兵を個人用気球により一挙に敵陣地の後方に降下せしめる着想研究等をもなされるに至つた。

偶々昭和十八年中期頃に至り、米本土に對し右風船爆弾を利用し攻撃を実施することに着意し、陸軍技術研究所の草葉大佐以下主任者はこれが研究に異常な努力を傾注するに至つた。

しかしながら既に満洲において研究された風船は到達距離精々一〇〇軒前後であり、太平洋を超えて米本土に到達せしむるためには一万軒の飛翔能力を必要とし、これがためにはこの風船は遙かに大きな容積と所要の抗堪力とを必要とした。又果して一万軒に亘り亜成層圏における西風が確實に存在するものか否かの氣象的調査を行う必要があつた。陸軍中央氣象部の協力の下、風船は高さ一〇米、直径五米で雁皮紙をコンニャクを原料とした糊で接合したものをを用い、氣象的には十一月より三月に至る冬季の恒風を利用すればその目的を達成し得るという判決に達し、昭和十九年より翌二十年に至る冬季を利用して攻撃を実施する目的を立て得るに至つた。

〔攻撃準備——コンニャク、大劇場動員〕風船には高度調節装置と爆弾又は焼夷弾を装し、更に若干個毎にラジオソンドを付した風船を交え、これから発信する電波を受信して風船の航跡を測定し、その到達を確認するに努めることとした。

当時最も顧慮されたことはこの風船が氣象の關係上我が国土に被害を与えることがないか、又全般の戦局上最も機微な關係にあつたソ連領土に落下することがないかということであつて、これがためには万全の注意が要望された。

原料はその数量が老大なため大東亜全域に亘り収集に努め、又風船の製作には都内の国技館、日本劇場、東宝劇場、国際劇場等の大きな建物を利用し、多数の経師屋、女学生から花街の婦人まで動員された。

昭和十九年九月二十五日、大本営は特に新たに放球のため臨時に編成した気球聯隊を参謀総長の直轄として、米国内部擾乱等の目的を以て主力を大津、勿米附近、一部を一宮、岩沼、茂原、古間木附近の太平洋沿岸に展開し、十月末までに米国本土に対する攻撃準備を完了すべく命令すると共に、陸軍中央氣象部をして密かにこれに協力せしめた。

〔参謀総長の攻撃実施命令〕 十月二十五日に至り、参謀総長は気球聯隊長に対し左記要旨の命令を下して攻撃を実施せしめた。

一、実施期間は十一月初頭より明春三月頃迄と予定するも状況に依り之が終了時期を更に延長することあり 攻撃開始は概ね十一月一日とす

但し十一月以前に於ても氣象観測の目的を以て試射を実施することを得 試射に方りては実弾を装着することを得

二、投下物料は爆弾及焼夷弾とし其概数左の如し

十五疋爆弾 約 七、五〇〇個

五疋焼夷弾 約三〇、〇〇〇個

十二疋焼夷弾 約 七、五〇〇個

三、放球数は約一五、〇〇〇個とし月別放球標準概ね左の如し

十一月 約五〇〇個とし五日頃迄の放球数を勉めて大ならしむ

十二月 約三、五〇〇個

一月 約四、五〇〇個

第三章 中国及び南方方面の作戦状況

1 湘桂作戦の終結

〔第六方面軍の新設〕 さきに湘桂作戦發起に先だち、支那派遣軍

二月 約四、五〇〇個
三月 約二、〇〇〇個

放球数は更に約一、〇〇〇個増加することあり

四、放球実施に方りては氣象判断を適正ならしめ以て帝國領土並にソ領への落下を防止すると共に米国本土到着率を大ならしむるに勉む

五、機密保持に關しては特に左記事項に留意すべし

1 機密保持の主眼は特殊攻撃に關する企圖を軍の内外に對し秘匿するに在り

2 陣地の諸施設は上空並に海上に對し極力遮蔽す

3 放球は氣象状況之を許す限り黎明、薄暮及夜間等に実施するに勉む

六、今次特殊攻撃を「富号試験」と称す

〔風船爆弾米本土に飛ぶ〕 戦果の確認は最も重要且つ困難な仕事であつて、大本営陸軍部は、無線諜報その他によりこれを探知すべくあらゆる手段をつくした。結局十二月上旬一、二の情報により、一部は確かに米本土に到達していることは判断されたが、爾後查として反響なくその成果は知る由もなかつた。

しかるに戦後米側の文書によれば、当時米本土に達した気球は相当数に及び森林人畜等に損害を与えたが、米軍当局はこれが内外に与える影響、就中日本側の爾後の戦果利用を虞れて一切の情報の発表及び伝播を厳禁する処置をとつたということである。

總司令官は自ら漢口に進進し直接第十一軍に対する作戦指導に任じていた。しかるに今や太平洋方面の戦火支那大陸に波及せんとし、しかも我が防備に未だ見るべきものなく広く派遣軍全般の作戦を律

するの要が特に大となつた。よつて大本営は八月下旬新たに支那派遣軍の隷下に第六方面軍司令部の新設を発令し、その司令官には現に北支那方面軍司令官として京漢作戰の統帥に当り、又嘗て昭和十三年武漢攻略戦當時の第十一軍司令官であつた岡村寧次大将、參謀長に宮崎周一少将が補せられた。

第六方面軍司令官はその司令部を衡陽北側南岳に置き九月十日新統帥を発動した。(附図第七參照)

當時における第六方面軍戦闘序列の概要は次の如くであつた。

第十一軍(第三、第十三、第三十四、第四十、第五十八、第六百十
六師団基幹)

第二十三軍(第二十二、第四百師団基幹)

第三十四軍(武漢周辺防衛軍)

方面軍直轄(第二十七、第六十四、第六十八師団等)

〔第二十軍等の転用増加〕更に九月下旬大本営は長沙附近より衡陽附近に亘る間における兵団を統率し、第十一軍を推進すると共に粵漢打通作戰の統帥に任ぜしめるため、在滿の第二十軍司令部(軍司令官阪西一良中將)を華中方面に転用し、第六方面軍司令部の隷下に入らしめた。同司令部は十月中旬現地に到着して統帥を発動、第二十七、第六十四、第六十八、第六百十六師団を基幹とする諸隊の統率に當つた。

次いで十月、大本営は當時内地弘前附近にあつた第四十七師団を、又十一月には香港占領地總督部をそれぞれ第六方面軍戦闘序列に編入した。しかしながら、第四十七師団は輸送距離の長遠と、輸送機関梗塞とのため、翌二十年四月芷江作戰開始にあたり辛うじてその先頭梯団が戦團に加入し得たに過ぎなかつた。

〔浙東作戰(所謂節号作戰)〕昭和十八年夏頃以来、東支那海福建省沿岸に敵潜水艦基地があるが如き情報散見せられ未だ信をおき得ない状況ではあつたが、更に同年十一月台湾新竹に対し支那大陸から

の初空襲があり、これらに伴つて福州攻略作戰に関する考案が從來屢々問題になつていた。しかるに昭和十九年六月サイパンの失陥に伴い米軍一部の奇襲上陸をも顧慮せられるに至つたので、大本営は、我が本土と南方圏との連絡遮断の敵企圖に対しあらゆる対策を強化するの必要を痛感した。更に南方との連絡のため、特に中国沿岸を小船艇を以てする所謂「蟻輸送」等の策案まで論議せられるに至つた。これらを勘案の結果七月十八日大本営は浙東沿岸基地を確保して米軍の同方面上陸企圖を未然に封殺すると共に沿岸海上交通の安全を図り、且つ船艇の中継地にらしめる目的を以て支那派遣軍に対し浙東沿岸要地の攻略を命じた。

派遣軍は海軍と協同してこの作戰を実施し、第十三軍の一部たる梨岡支隊は九月九日温州を、十月四日独立混成第六十二旅団を基幹とする部隊を以て福州を占領し、又歩兵約一大隊を基幹とするものを廈門に派遣し、海軍の指揮下に金門島の守備に任ぜしめた。

〔桂林、柳州の攻略準備〕支那派遣軍は一号作戰計画の当初より、衡陽攻略後は第十一軍をして概ね祁陽、来陽附近を對敵第一線として停止せしめ、桂林方向に対する作戰を準備せしむる如き腹案を有していた。

しかるに従来の作戰経過に鑑みるに彼我航空勢力の懸隔予想外に大であり、敵空軍の戦場特に我が後方補給路に対する跳梁甚しく、水路補給は困難を極め鉄道の修理もまた著しく遅延し、自動車道の改修も意の如くならず遂に衡陽攻略も遅延を來したような事例もあつた。

従つて第十一軍をして衡陽附近に態勢を整え、速かに後方を推進し各兵団の戦力を恢復した後、早くも九月下旬第二期作戰を開始せしめ、途中全県附近では努めて短期間の停止をなすのみで、なるべく一挙に桂林附近を攻略せしむる企圖を有していた。なお新たに北支那方面軍から転用逐次戦場に到着する第三十七師団を第十一軍

に配属した。

しかるに衡陽攻略後、第十一軍は衡陽西南方において守勢に転移した約七、八箇師の敵を洪橋周辺に捕捉撃滅し、爾後宝慶、零陵攻略を企図し、これがため八月二十日永豐附近より来陽西方地区に亘り、北方より第三十七、第一百十六、第四十、第五十八、第十三、第三師団の順に展開し三十一日攻撃を開始した。敵は九月一日頃より随意退却を開始したため、軍は零陵南北の線に向い追撃し八日頃これを占領、引続きこの態勢に乗じ全東東方隘路南北の線に向い追撃を続行した。かくして第一線は遂に追撃の余勢を駆つて九月十四日全県を攻略するに至つた。ここにおいて支那派遣軍及び第六方面軍は共に第十一軍をして概して全県附近において、爾後の桂林方面への攻勢を準備するを認むると共に、この間宝慶を攻略せしめ、又特に後方を整理推進せしむるに決した。

第二十三軍は六月以降第十一軍の作戦に策応し、広東北方地区において小規模の牽制的作戦を実施した後、その主力たる第二十二、第二百四師団及び独立混成第二十二旅団を以て逐次広東西方三水南北の線に集中中であつたが、九月十日前後主力を以て三水附近から、一部たる独立混成第二十三旅団を以て雷州半島からそれぞれ梧州、丹竹に向い攻勢を開始し、微弱なる敵を駆逐しつつ順調に前進を継続して、九月下旬平南附近に到着した。

〔当面の敵地上勢力概観〕 八月上旬以来衡陽周辺に猬集した敵軍は、我が第十一軍の攻勢により逐次後退し、その主力は桂林、柳州地区の防衛に任じあるが如きも未だその態勢整備したとは認め難く、又その第一線兵力は桂林周辺において約一〇箇軍二五―二六箇師、柳州周辺において四箇軍約二―三箇師を算するが、その主力は数度の打撃により戦力低下し、新鋭兵団としては主として柳州附近の約四、五箇師に過ぎない。一方大陸奥地には、在四川の予備軍及び華北から転用した湯恩伯指揮下の軍が、逐次貴州方面に南下

しつつあるほか、ビルマ遠征軍中米式化したものの転用をも顧慮しなければならなかつた。従つて攻勢開始は成るべく早きを要するものと判断されていた。敵は桂、柳両地区の死守を呼号してはいたが、米空軍及び住民の桂林の撤退により同地放棄が既に決定しているのではないかと判断された。なお第二十三軍正面の敵は極めて微弱であつた。

〔準備の困難——航空劣勢に陥る〕 かかる地上の敵に比し、在華米空軍の九月頃における勢力は増強の一途を辿り、柳州、芷江、遂川、贛州、南寧等をその第一線基地として、重慶、成都間にはB29等大型機の基地増強せられつつあるものの如く、敵空軍の戦場における活動は極めて活発であつた。これに比し我は航空兵力の不足、就中補充の不如意と基地推進の困難とに加うるに彼我の勢力は数において大約七五〇対一五〇と判断せられた。第五航空軍は前展開配置を維持し（漢口には第八飛行団新設、第一飛行団のため衡陽、第二飛行団のため梧州及び丹竹をそれぞれ機動飛行場とし又直協隊の主力を衡陽、零陵に推進し本作戦に協力することとした。しかるに本作戦間衡陽以南の制空は特に稀薄とならざる得なかつた。即ちこの間楊子江及び長沙以北の船舶輸送の掩護に重点をおいたこと、B29邀撃作戦の介在があり又衡陽飛行場の設備不十分で屢々奇襲を蒙り、戦闘隊の使用に拘束をうけたため等であつた。従つて直協隊の多くは悪天候及び払暁、薄暮の前後等にその行動を制限された。この間において地上、航空の諸隊共に資材の補給に特に困難を極めたことは勿論である。更に看過し得ないのは昭和十九年八月以降、補充人馬が将来の輸送の困難を見越し一挙に補充せされたことである。これがため大部未教育の補充兵十万余、馬匹四万が年末頃に亘り、続々武漢地区に到着し兵站線に沿つて前進したが、糧秣の追送なく通過部隊は自ら糧秣を収集自活して行軍するを要し、炎熱長期の夜行軍と相俟つてその損耗就中馬匹の減耗は著しいものがあ

つた。

以上の如く將兵が苦難をなめつつあるとき、九月に入り突如彼我の上空に見馴れぬ我が新鋭戦闘機が出現して敵を圧倒するに至り、將兵悉く仰いで歡呼の声をあげた。

これはさきに日本陸軍が昭和十六年開戦直後から鋭意出現に努力しつつあつた四式戦闘機であつた。即ち飛行第二十二戦隊が内地より増派されたのである。昭和十九年上半期において従来渴望していたこの新式機の一部が漸く出現を見るに至つたのである。当時最も重視された帝都の防衛に任じていたこの部隊を一号作戰方面の戦況見るにしのびずして幾多の経緯の後、一カ月の期限をきつて配属されたものである。

僅かに一戦隊といえ、その効果は誠に大で、敵に至大の脅威を与えたものの如く我が基地近くの制空権内における敵機の活動俄かに減少し、これがため長沙、湘潭附近の後方地域は強力な擁護によつて湘江水路輸送は始めて活発化し、第十一軍推進に多大の貢献をなし前途に光明を認めるに至つた。しかし爾他の關係上これを永続せしめることは不可能であつた。

〔攻撃進発命令——敵主力捕捉の企圖〕 かくの如くにして第六方面軍が鋭意爾後の攻勢準備に没頭しつつあつたとき、支那派遣軍總司令官は九月下旬鉄道修復の容易ならざる現況に鑑み、岳州、長沙間の重列車開通は十月末より相当遅延するものと判断した。しかし万策を尽せば、概ね十月末までには桂柳作戰必需軍需品の集積可能であるのみならず、十一月初旬に作戰を開始しても爾後の補給中絶することはないだらうとの判決下に九月二十九日第六方面軍に對し、十一月初頭攻勢を發起し桂柳攻略作戰を実施する如く命令を下達した。

しかるに九月下旬以来の降雨は十月に入るもおお連続し、道路は泥濘化し、衡陽以北の陸上交通は殆ど杜絶した。しかしその反面湘

江水路は、この降雨のため敵機の妨害皆無となり、又増水のため輸送活発化し、就中中型汽船の湘江溯江に成功し、作戰準備は順調に進捗しつつあつた。

十月末頃に至るや当面の敵は、その後増加の微なく寧ろ予想に比し減少し、桂林、柳州の兩飛行場も撤去せられ、湯恩伯軍も未だ戰場に遠く、又ビルマからの兵力転用もその徴候少なく、爾後の会戦における敵の撃破には大なる憂慮を要しないものと思われるに至つた。

第二十三軍正面では、十月二十四日以来柳州方向より五一六箇師の敵反撃に出で、且つ米機約一五〇機これに協力連日攻撃し來つたが、我が軍の反撃により遂に月末頃攻勢を断念柳州方向に後退した。同方面への敵の積極的攻撃は、寧ろ我が第十一軍爾後の作戰と相俟ち敵撃滅の好機をもたらしべきものと考えられていた。

これを要するに第六方面軍としては、桂林、柳州両都市の攻略よりは寧ろ当面の敵主力の捕捉及び柳州附近攻略以後における敵の反撃に問題ありとし、十月下旬左の要旨の攻勢進発に関する命令を下達した。

一、第十一軍は十一月三日概ね全県、道県の線を出発、桂林を攻略次第で第二十三軍と策応して柳州を攻略す柳州攻略に當りては其の城鎮の攻略に介意することなく軍主力を柳州北方地区より深く柳州西方地区背後に突進せしめ、第二十三軍の攻撃と相俟ちて敵主力を捕捉撃滅す

二、第二十三軍は十一月三日以降概ね三江墟、桂平の線を出発、一部を以て柳州を攻略せしめ其の主力を以て柳州西北方地区に突進して第十一軍と策応し同方面の敵主力を捕捉撃滅す

此の間一部を以て南寧攻略を準備す

しかし第六方面軍においては、柳州奪取後敵主力を逸したる場合の追撃は、当時諸般の状況上、貴陽附近までの突進は不可能であつて、概ね貴州省境の線を目標とする如く予定せられていた。

なお当時後方補給は、困難の中にも辛うじて攻勢発起に支障なきに至つたが、ただ太平洋方面の戦局就中比島レイテに敵上陸のため、南方から支那派遣軍に補給予定の約四万坪の液体燃料はその要現殆ど見込みなく、しかも今後の補給は殆ど自動車輸送によるを要し大なる前途の苦難を予期せられるに至り、代用燃料の現地生産等を更に督励した。

〔桂林、柳州の攻略——計画変更敵を逃す〕 かくて第十一軍は、十月二十八日より一斉に攻勢に前進した。

さきに第一軍は桂林、柳州攻略の作戰計画において、両地を各個に攻略する計画の下に準備を進めてきたが、当面の敵特に柳州の守備薄弱なると我が軍兵力の実状等に鑑み、十一月三日柳州を桂林と同時に攻略すべく計画を変更した。即ち第三十四師団をして全県附近を確保せしめ、第五十八師団を桂林北方から、第四十師団を同東方から、第三十七師団を同南方から、歩兵第二百十八聯隊を同西南方から桂林の攻略に任せしむると共に、第十三師団をして湘桂鉄道北側から、第三師団をして同線南方から柳州を攻略すべく部署し、十一月四日これを方面軍に報告した。

これは第十一軍の独断で行はれたが、第十一軍はこのため十一月三日夜作戦会議を行い慎重熟議の後軍司令官の決心に基き行はれたものであつた。第十一軍は、この際第二十三軍との連絡とれず、同方面の状況就中敵の攻勢に対し、第二十三軍の不利なることを強く判断したものであつた。

右計画変更は、当面の敵捕捉を第一義とする第六方面軍の意図に合せざるため、方面軍は第十一軍をして柳州攻略に介意することなく、同軍の兵力はあげて深く柳州西方敵軍の背後に突進すべきことを再三指導した。しかし既に当時の状況は各司令部の連絡至難であつて機微なる意志の疎通意の如くならず、且つ第二十三軍も前進を開始し、殊に同軍司令部も丹竹を発し原始林的地帯を前進中であつて、爾後約十日間連絡の方法なく、遂に第十一軍は九日桂林の攻撃

を開始し、又第三、第十三師団は依然柳州に前進するに至つた。

ここにおいて方面軍は、已むを得ず九日第十一軍に対し、勉めて多くの兵力を宜山方向に突進せしめ、且つ柳州を直接攻撃する第三、第十三師団の各一部を一時第二十三軍司令官の指揮に入らしめた。かくして第十一軍は十日桂林を、又困難なる地形を柳州及びその西北方地区に向つて前進しつゝあつた第二十三軍の一部は九日柳州飛行場をそれぞれ占領し、次いで第十三師団の一部も十日柳州に突入し、ここに初めて両軍部隊の柳州における地上連絡成り、次いで柳州も完全に攻略せられた。しかしながら当面の敵は既に西北方に逸出してしまつたため第三、第十三、第一〇四師団等を以て桂林、柳州西方地区に向ひ敵を急追した。

〔追撃及び爾後の兵団部署——貴州に達す〕 第六方面軍は、十一月十日第十一軍に対し、有力なる兵団を以て独山方向貴州省境に追撃せしめ、爾余を以て柳州西方地区において敗敵を掃蕩せしむると共に第四十師団を第二十軍司令官の指揮に入れ、又かねての大本營の命令に基き、第三十七師団を仏印方面に転進のため集結せしめた。

当面の敵は大混乱を生じ、殊に我が柳州奪取による重慶の動揺は甚しく、貴州省に向う第十一軍の果敢なる追撃により敵側の重慶遷都説さえ伝えられ、戦場附近にも敗敵残存彷徨し、広西省内の敵軍組織は一時全く潰乱の状態であつた。しかるに我が軍の兵力及び後方補給の点からして黔桂鉄道の端末たる独山を以て追撃の終末点とせざるを得なかつた。

方面軍は次いで十一月二十四日、第二十三軍の一部をして南寧を攻略して南方軍の部隊と呼応し仏印との公路を打通し、今後予定した支那派遣軍よりする二箇師団の仏印転用の途を開かした。

爾後方面軍は、第二十三軍の主力をして広東に帰還して対米戦備に邁進せしめ、第十一軍の主力を以て反転広西省の要点を確保せしめ、別に第二十二師団をして南寧を確保せしめた。

当時敵奥地の増加兵団は、第一、第八戦区より南下した湯恩伯兵

団であつて逐次貴陽に進出東進中であつたが、柳州攻略までには戦場に到着せず、ビルマ方面からの増援も、柳州攻略後十二月初めて新編第六軍の転用を開始したものの如くである。

米空軍は十月末天候回復と共に再び活発化し、さきに一時増加せられた我が四式戦闘機の部隊は十月初旬内地に帰還し、戦場附近の制空権は再び完全に敵手に渡つた。十一月頃に至るや、後方交通幹線に対する米空軍の攻撃激化し、特に九江以西の楊子江及び建設途上の南部京漢線の如きはこれが好目標となり、かくて武漢地区への輸送量の如きも急激に低下して、数カ月前に比し五分の一以下となるに至つた。しかしながら我が地上部隊の急進と、飛行第六戦隊池田中隊が行動半径の限度を越えて敵列車を爆撃し、鉄道を遮断したること等と相俟つて、桂林、柳州以西の地区における弾薬、被服、航空燃料、鉄道資材、機械類等軍需品の莫大なる鹵獲に成功し、爾後における第十一軍方面の自活自戦に益したこと大であつた。そして日本軍制式火器の弾薬は著しく不足し、当面の部隊は殆ど鹵獲機関銃等を以てその主装備とするが如き奇現象を呈するに至つた。

十二月二日第三師団は遠く貴州省内八塞に、第十三師団は独山に進出、湯恩伯軍の一部を撃破し多数の軍需品を押収したが、爾後軍命令に基き反転を開始し、十二月末までに第十一軍、第二十三軍とも概ね所命の態勢をとり終つた。

以上の間六月十六日北九州爆撃を発端とするB29の本土及び満洲に対する爆撃は成都附近を基地として十一月二十一日まで継続せられた。この間第五航空軍は重慶、津浦沿線における不十分なる監視網と司偵による成都附近の偵察とにより情報を得てその都度これを迎撃し、又九月八日夜軽重爆一八機より成る第一回成都進攻を始め成都一帯の敵空軍基地に対し訓練と工夫とにより飛行機性能の限界を越えて連続襲撃を敢行した。

【粵漢打通作戰——衡工物の無疵占領】大本営はフィリッピン方面の戦況に鑑み、十一月中旬支那派遣軍に對し対米戦備のため湖南

広西方面から所要兵力を広東地区に増加すべきを内連絡していたが、第六方面軍はこの意図に基き、新たに作戰計画を修正し、概ね後述する如き粵漢線打通及び遂川、南雄、贛州等敵飛行場の覆滅作戰の方針を確定した。

当時湘桂作戰において撃破された敵第九戦区軍の主力約四〇箇師は、主力を以て米陽東南方地区において戦力の回復を図り、米陽方面よりする我が軍の攻勢を警戒している。その陣地は輕微なものであるが山地險峻であつて行動に便ならず、又吉安方面には数箇師の敵あり、但し広東省内の第七戦区軍は、戦意見るべきものなしと判断していた。

当面の敵の撃破については大なる顧慮を要しないが、一度破壊せられたときは回復至難である多数の橋梁堅道を有する粵漢鉄道の多数重要衡工物を無疵で占領することが本作戦の重要着眼点であつた。即ち方面軍は、昭和二十年一月中旬頃第二十軍及び第二十三軍を以て南部粵漢鉄道を奇襲占領し、これを確保すると共に有力なる一兵团を以て遂贛地区の米空軍基地を覆滅するに決した。本作戦においては特に前述の如く重要衡工物の無疵占領を主眼とし、敵野戦軍の撃滅は第二義とした。各軍は右方針に基いて鋭意準備を進め、一月上旬略々これを完了するに至つた。

かくて一月上旬末、零陵及び道県附近を隱密裡に出発潛行した第二十軍の四組の挺進隊は、途中一部の敵と衝突したが幸い敵の意表に出で全般の作戰企図を暴露することなく、一月十九日乃至二十二日の間に郴県南方より韶州北方に亘る最も衡工物の多い区間の鉄道線に到着して無疵占領に成功し、敵中にこれを確保した。一月十九日第二十軍、第二十三軍の作戰部隊主力は一挙に前進を開始し、第四十師団主力は道県、零陵附近より一月二十四日前記鉄道沿線に達し、これが占領を確実ならしめ、次いで韶州から南雄方向に前進し、又別に茶陵方面から遂川に向つて前進した第二十七師団と呼応して遂川、贛州、南雄等敵飛行場の覆滅に任じ、他方第二十三軍か

ら北上した部隊と協力して一月二十四日粵漢線の打通成り、同二十九日には遂川を、二月三日南雄を、六日贛州をそれぞれ占領して、粵漢線東側の米空軍基地を全く覆滅した。

しかしながら米空軍は、爾後芷江、恩施、老河口、西安等の飛行場を強化して益々活動を続けるに至った。

〔第二十三軍の対米東面戦備〕 これより先、支那派遣軍総司令官は大本營の意図に基き、比島決戦後における米軍の進攻に備えるため、第六方面軍の第二十七及び第四十師団を第二十三軍に増加せしめ、又三月一日以後第二十三軍を支那派遣軍の直轄としていたが、三月十三日自ら広東に赴き、第二十三軍を含む関係軍に対し米軍の華南沿岸來攻時における作戦に關し命ずるところがあつた。かくして支那派遣軍は第十一軍及び第二十三軍をして東面して対米戦備に専念させると共に爾他の諸軍を以て西面する作戦に任せしめることとなつた。

〔老河口及び芷江作戦——敵面目一新〕 さきに一号作戦の完遂により粵漢、湘桂沿線の敵飛行場を覆滅したが、老河口及び芷江の敵前進飛行場による敵戦闘機の跳梁は、昭和十九年秋頃より活発を極め、京漢、津浦、粵漢、湘桂各鉄道及び楊子江航行に對する妨害は日を逐うて激化するに至つた。これがため支那派遣軍は、北支那方面軍及び第六方面軍をして右両飛行場覆滅の目的を以て老河口及び芷江攻略戦を実施するに決し、一月二十九日これに關し命令した。

北支那方面軍は、第十二軍を以て老河口作戦を実施せしめ、第十二軍はその第百十師団、第百十五師団、戰車第三師団、騎兵第四旅団等を以て三月中旬末行動を開始し、主力を以て概ね魯山、舞陽、沙河鎮附近の敵陣地を急襲突破し、神速に西陝口——老河口の線に進出すべき作戦構想の下に準備を進めた。

三月二十二日軍は一齊に攻撃を開始し、前面の敵陣地を突破し、各兵団は所命の如く前進を続行し、特に騎兵第四旅団は果敢な急襲

によつて三月二十七日老河口飛行場を占領した。次いで老河口市街の陣地を攻撃したが成功せず、その他の兵団はそれぞれ当面の敵に對し攻撃を続行し、四月二日老河口を除く概ね西陝口、李官橋の線に進出したが、老河口は防備強固なるため軍は更に重砲を招致して四月七日より攻撃を開始、翌八日これを占領した。別に軍の一部は長水鎮を占領した。

この間老河口攻略作戦に協力すべき任務を有する第六方面軍は、第三十四軍（軍司令官佐野忠義中將）をして襄陽方面に作戦せしめた。第三十四軍の第三十九師団及び集成の歩兵七大隊を基幹とする諸隊は、三月二十一日荊門附近から漢水に沿う地区を北進し、当面の敵を撃破しつつ襄陽、次いでその一部は穀城を占領したが、四月初旬作戦目的を達して原駐地に反転した。

芷江攻略作戦は、従來支那派遣軍において四川省方面に對する挺進作戦との関連において研究せられていたが、取敢えず前述の如く先ず芷江敵前進飛行場覆滅の目的を以て、一月二十九日第六方面軍に對しこれが実施を命令した。第六方面軍は、第二十軍をしてこの作戦を遂行せしむることとして準備を開始した。第二十軍は隸下の第百十六師団及び新たに隸下に入り内地より逐次到着した第四十七師団の歩兵一聯隊、第六十八師団の一部、並びに第十一軍隸下の第三十四師団の歩兵一聯隊計一師団と歩兵約三聯隊とを以て四月中旬から作戦を開始し一部を以て新化及び新寧方面から、主力を以て宝慶——洞口——安江道以北の地区から進攻したが、優勢なる米空軍の協力下に敵は続々地上兵団を空輸により戦場に増援し、その抵抗頑強であつて我損害多発し、遂に五月九日、総司令官は攻撃の中止を命令するに至つた。

2 フイリツピン方面の持久作戦

わが軍は、レイテ周辺の戦いに心血を傾けたが、遂に敗れ、既に

述べたように、空海の主戦力を失い、これからは、主として陸上武力だけを頼りに戦わなければならなかった。

大本営は、レイテ敗戦後の我が戦略態勢の悪化と国軍構成戦力の大転換との難局に対処して「戦局今や必ずしも予期の如く進展せず、その推移するところ、南北の交通確保も愈々困難を加ふるが敵の人的及び物的損耗も亦大きく中部比島に於けるその地歩も尚強固とは認め難い。敵が比島を完全に攻略するためには更に幾多の難関に逢着するであらうし其の間、我が乗すべき戦機は多分に存在する」と判断し、今までレイテに重点を向けていた捷一号作戦を、広くフィリッピン全域に及ぼし、飽くまで強靱な決戦意志を以て出血作戦を指導し、敵の進攻企図を抑圧すると同時に、作戦全局のため、時間の余裕をも得ようとした。これがレイテ戦後の全戦面の中で比島作戦に与えられた作戦的座標であつた。

当時敵の次期攻勢が、ルソン島に指向されるであらうことは、もう争えぬ事実であつた。即ちルソン攻略のため、レイテ作戦に続く敵の第二の布石は、昭和十九年十二月十五日のミンドロ島上陸であつた。

〔敵のミンドロ島上陸——サンホセ突入〕 十二月十三日、約八〇隻の敵の輸送船団は、スリガオ海峡を通過しミンダナオ海を西進した。十四日正午やや前、この船団は、パナイ島西方海面を北上し、十五日ミンドロ島西南端海岸に上陸を開始した。

我が陸海軍航空部隊は、十四日早朝から敵船団に対し攻撃を企図し、陸軍航空は約五〇機を以てこれを捕捉し有効な攻撃を加えた。特に第五飛行団（重爆飛行団長小川小二郎大佐）に属するレイテ決戦の生存部隊は、この出撃を最後と思ひ定め、全員特攻を志して菊水隊と呼び全機もれなく敵船団に突入した。海軍航空部隊はこの日、天候不良のため、敵を発見することが出来なかつた。

ミンドロ島守備の歩兵二箇中隊は、広地域に分散していたため上

陸点においては殆ど抵抗もなし得ず山地に圧迫された。

南方軍は、敵の上陸直後、ミンドロ島に逆上陸を行い敵を撃滅すべく企図し、又海軍及び第四航空軍も、敵のルソン攻略準備を遅らせるという見地から強くこれを希望したが、第十四方面軍は「ルソンの作戦準備を急速に強化することが焦眉の急でありいまミンドロに大兵力を指向するのは得策ではない」との理由で、約一〇〇名の斬込み隊をミンドロ島に派遣し、敵の航空基地整備を妨害させるにとどめた。

この斬込み隊は、十二月下旬進発したが、飛行場に到達する前に、敵軍及びゲリラ部隊の攻撃を受け、その目的を達成することが出来なかつた。

第四航空軍は「屋上の鳩よりも掌中の雀を撃て」という軍司令官の意図により、敵機動部隊の攻撃を断念し、敵のルソン上陸を少くも一カ月は遅らせるという目的の下にミンドロ島の輸送船団を攻撃した。攻撃部隊の戦力は、いずれも僅少であつたが第三十戦闘飛行集団は、当時戦力をやや恢復し、一時は四〇機以上の兵力を集結してミンドロ島上空に進攻することが出来たが、練達の戦士は既にレイテに散つたので、新しく戦場に到着した若武者は戦技の不足を精神で補ひながらよく戦つた。しかし戦果と損害とは相半する状況であつた。

陸海軍航空部隊は、十二月二十二日までに、巡洋艦以下一二隻を撃沈し、戦艦以下一二隻を撃破炎上したと報ぜられた。

一方、我が海軍は、ミンドロ島の敵泊地に対する突入を企図し、第二水雷戦隊（足柄、大淀及び駆逐艦六、司令官木村昌福少将）に突入を指令した。同隊は十二月二十四日カムラン湾（仏印）を出撃し、折柄の荒天を衝いて南支那海を東進し、途中敵機の攻撃を受けたが前進を継続して二十六日午後十一時、サンホセ泊地に突入した。部隊は約一時間に亘り所在艦船に砲雷撃を加えたのち、二十八

日カムラン湾に帰投した。この戦果は確認出来なかつたが、我が海軍としては最後の敵泊地に対する突入作戦であつた。

こうした我が妨害、擾乱も敵に決定的な打撃を与ふるに至らず、十二月末には敵はサンホセに二個の飛行場を完成して、随時ルソン島攻略作戦を開始し得る態勢を整えたようであつた。

〔決戦から持久へ——三首脳幕僚会議〕 既に述べたように、大本営は、レイテの敗戦後第十四方面軍をして、二つの作戦目的——敵の進攻企図を抑圧すること並びに全局面の作戦のため時間の余裕を得ること——を達成させようとして企図していた。換言すれば大本営は第十四方面軍が決戦により、その作戦目的を達成することを期待していたのであつた。南方軍もまた概ね大本営と同じような見解に立っていた。

従来第十四方面軍が、フィリピンにおいてはルソン島に地上軍の決戦を指導しようとして考案していたことは既述した通りであつて、レイテ決戦遂行中の十一月十四日に策定されたルソン作戦計画においても、重点を中部ルソンに保持し来攻する敵を撃破し其の戦争継続意志を破砕す」と定め、海岸地域から内陸に亘り決戦を行うこととしていた。しかしながら、決戦から持久への転換は既に十一月九日、方面軍がレイテ決戦中止の意見を南方軍に開陳した頃から、秘かに研究に着手され、寺内南方軍総司令官がマニラを出発した十一月十八日以降は持久作戦構想に基く三大拠点の实地調査が行われた。

レイテ決戦にルソン島から兵力と軍需品とは抽出転用し、決戦のために戦力が不足すると判断した方面軍は、航空兵力及び海軍の無力化をも考慮に入れ、こうして持久方針を確立し、従来の決戦思想を根本から変更したのであつたが、大本営作戦部長宮崎周一中将及び南方軍総参謀長飯村義中中将は、十二月中旬マニラにおいて、方面軍参謀長武藤章中将から、この持久方針について説明を受け、これを諒とするところがあつた。

第四航空軍は航空作戦の見地からこれに反対であつたが、方面軍の決心を変更させることは出来得なかつた。

〔敵情判断——米軍ルソン上陸企図〕 さはあれ、昭和十九年十二月中旬、敵のミンドロ島上陸によつて、ルソン作戦の準備を急速に促進しなければならなかつた第十四方面軍は、当面の敵情に關し、敵はミンドロ島に航空基地を造成した後、ルソン島に対する本格的な攻略作戦を開始するであろう。その時期は一月中旬、上陸点はバダリオン方面の公算最も多く、リンガエン湾方面これに次ぐであろう。又敵主力と同時に若しくは多少これに遅れて、その一部は恐らく、アバリに上陸するであろう。敵の使用兵力については約一〇箇師団、又作戦の進捗に伴い、空挺部隊を中部ルソン就中マニラ周辺に降下させる公算が大であると判断していた。

〔三大拠点蟻踞の持久戦計画〕 以上のような経緯と敵情判断とに基き、第十四方面軍司令官山下大将は、持久戦構想により、その作戦目的を達成することとし、十二月十九日、大要次のような作戦計画を策定した。

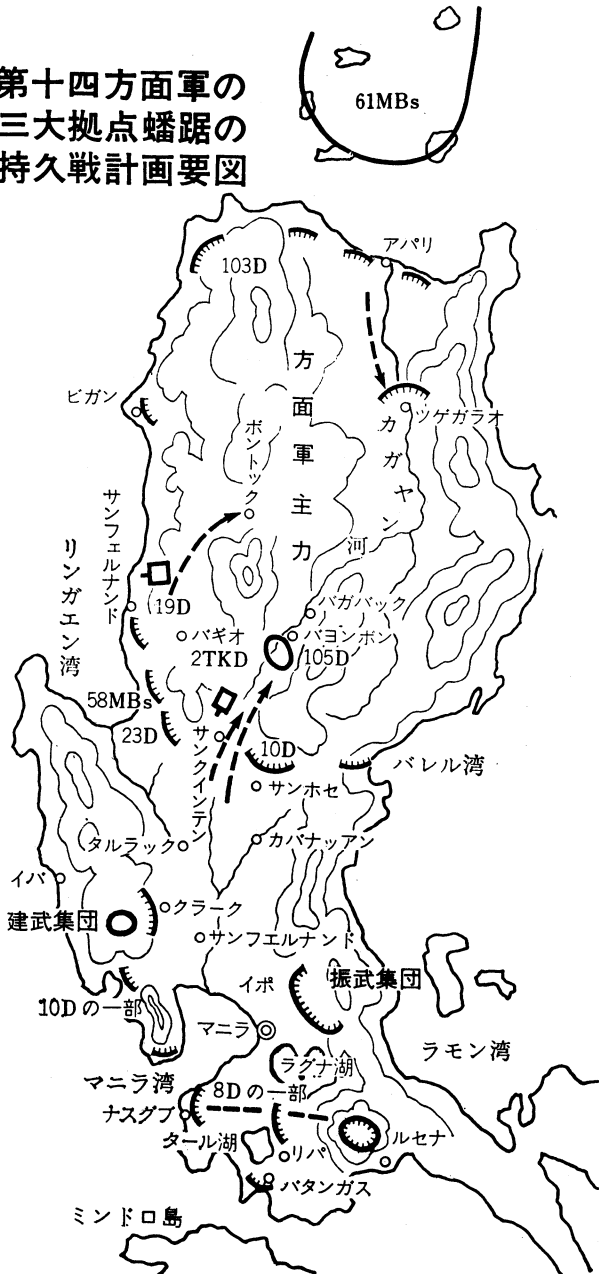
一、方面軍は主力を以て北部ルソンの要域を各々一部を以てマニラ東方山地及びクラーク西方山地を確保し夫々自活自戦永久抗戦の態勢を整へつゝ互に相策応して敵軍主力をルソン島に牽制拘束し敵の撃破及びその戦力の減耗を図る

二、第四航空軍及海軍航空部隊に対しルソン進攻時に於ける敵船舶の撃滅並に敵上陸企図の偵知を要望すると共にカガヤン河谷に航空基地を整備する

三、振武集団（第八、第百五師団、河島兵団基幹）はマニラ東方山地帯を堅固に守備し長期持久の作戦根拠を造成する

敵の進攻に方つては先づ沿岸部隊を以て敵の上陸企図の破壊に努め次で内陸の既設陣地に拠つて敵の前進を妨害し且その戦力を減殺する

第十四方面軍の 三大拠点蟠踞の 持久戦計画要図



マニラ市附近の軍需品病院兵站施設等なるべく多量を各拠点特に北部ルソンに搬入した後マニラ市を解放しこれを戦場外に置く

四、建武集団（第一挺進集団長の指揮する航空地上勤務部隊基幹）は主力を以てクラーク西方山地を堅固に占領しリンガエン湾方面より突進する敵を撃砕し且クラーク飛行場の使用を妨害する

バターン地区の第十師団の一部は状況に応じてこの集団に編入する

五、方面軍主力はリンガエン湾東岸からバレル湾北岸を連ねる線以北の要域を広く確保し特にバギオ地区に大拠点而造成して長期持久作戦の根基を確立する

第二十三師団（独立混成第五十八旅団を属す）は主力を以てリンガエン湾東岸を占領し敵上陸の破摧に努める

第十師団はサンホセ北方地区を占領し主として第二十三師団正面への攻勢を準備する

第六十三師団は主力を以てアバリ正面を占領し敵の上陸を撃破する 止むを得ざる場合に於てもツゲガラオ附近を固守しカガヤン河谷を確保する

六、戦車第二師団は中部ルソン平地に降下を予想する敵空挺部隊の撃滅に任ずる

又リンガエン或はマニラ方面に対する攻勢を準備する

七、第十九師団は先づナギリヤン附近に集結する

〔各兵団の作戦準備——マニラ解放〕 方面軍司令官は、以上の作戦計画を迅速に実施に移すため、十二月中旬から逐次に所要の事項を各兵団に示達した。

方面軍が、その作戦方針を決戦から持久へ転換したことは、今までも、海岸地帯に決戦用として設備していた堅固な陣地の影を薄く

し、又全然準備のなかつた内陸に、堅固な陣地と軍需品とを要求した。作戦準備の最たるものは、この転換であつた。方面軍司令官は、新事態に應ずる作戦準備の計画を急ぎ、各兵団は、この計画に基き、急速新配備につき陣地構築、軍需品の集積等に専念した。

山下大将は十二月二十八日マニラを出発し、翌昭和二十年一月三日バギオにその司令部を移転した。南西方面艦隊司令長官大川内中将も同じ頃バギオに移転し、又フィリピン政府は、ラウレル大統領以下同地に移つたが、その後戦況の推移に伴い、大統領以下数名は台湾に転じた。

作戦準備の中で、マニラの解放、軍需品の拠点への搬入、マニラ在住邦人の移転等は、方面軍が、敵の上陸を目前に控え、その乏しい輸送力で短期間に完了しなければならぬ重要問題であつた。

兵器、弾薬等の軍需品は到底各部隊の需要を満たすに足りなかつたが、方面軍が最も悩んだ問題は、輸送力と食糧とであつた。当時方面軍の保有する自動車は約四千五百輦に過ぎず、食糧は特に副食の不足が甚だしく、主食は十一月中旬各人への支給を三〇〇瓦に減少するを要する程度であつた。ルソン島は本来食糧の自給自足が出来ない地域であつたので、食糧の収買を過度に強行することは、住民をゲリラ化することをも意味し、又外地からの輸送は殆ど見込みなく前途は暗かつた。

足りないものは足りないままに作戦準備を急いだが、方面軍は陣地の構築も十分でないうちに敵を遡るに至つた。

〔空からの敵の攻撃〕 敵のルソン島攻略作戦は先づ空から開始された。敵の基地航空兵力は、レイテに約五〇〇機、モロタイに約三〇〇機と判断されていたが、これら敵機のルソン各地に対する攻撃は、昭和十九年十二月下旬以降、一層激烈となり、特にクラーク基地及びマニラ周辺の飛行場群に対しては、徹底的な攻撃を加えた。

敵機動部隊は、翌昭和二十年一月三日から台湾方面を攻撃し、その常套戦法として我が後方を遮断しようと企図した。

我が陸海軍航空部隊は、当時、陸軍約一二〇機、海軍約一三〇機の兵力であつたが、最後の一撃を敵船団に指向するため、敵の航空攻撃は先ずこれを忍ばなければならなかつた。

一月二日、敵の輸送船団は、特設空母少なくとも一二隻を伴い、スリガオ海峡を通過してミンダナオ海に進入し、やがて北進を開始した。

陸海軍航空部隊は、一月四日以降全力を挙げて、敵の先頭船団を攻撃し、各種船舶約一〇〇隻に損害を与えたと報じ、我が潜水艦もまた懸命な攻撃を反復した。我が第一線将兵の勇戦にも拘らず、これらの攻撃は、敵の大輸送船団を洋上に撃滅するには、あまりにも劣勢であつた。

〔リンガエン湾岸の戦闘——最初の爆雷特攻〕 第十四方面軍司令官は、リンガエン湾岸に戦機の迫るを見るや、該方面に米攻する敵主力軍を、既設陣地に迎えて撃砕しようと企図し、一月六日大要次のような命令を下達した。

一、第十九師団は、上陸し来る敵を海岸近くの要域に於て撃砕すべし

その主力をナギリアン——バギオ道方面に配備するを要す

二、第二十三師団（独立混成第五十八旅団を属す）は、リンガエン湾正面の敵に対し、海岸近くの陣地を堅固に守備し、同陣地に拠り敵を撃砕すべし

あたかもこの日、敵は艦砲射撃を開始し、リンガエン湾岸の我が陣地、軍需品集積所等を一月八日に至るまで連続猛撃した。

この間、クラークの我が航空基地及びマニラ周辺の飛行場は、敵の連続的制圧を受け、且つ中部ルソン地区の主要交通施設は破壊された。

一月九日午前七時二十分、敵はリンガエン湾岸に上陸を開始し、主力を以てサンフアビアン附近に、一部を以てリンガエン附近に橋頭堡を占領した。

我が陸軍の海上挺進第十二戦隊（連絡艇約七〇隻）は、同日夜、敵輸送船団に対し、国軍最初の爆雷肉迫攻撃を敢行し、その二〇乃至三〇隻を撃沈したと報ぜられ、又航空部隊は、一月四日以来の攻撃に引続き泊地の敵船団に肉弾攻撃を加えた。そして、その攻撃は、第三十戦闘飛行集団では、一月九日一機を残さず、第四飛行師団では、方面軍の要求により、その連絡機として僅かに四機を残したほどの激しさであつたが、何としても奔流を阻止することは出来ず、敵はその日の中に、歩兵二箇師団、戦車一箇師団の上陸を完了したようであつた。

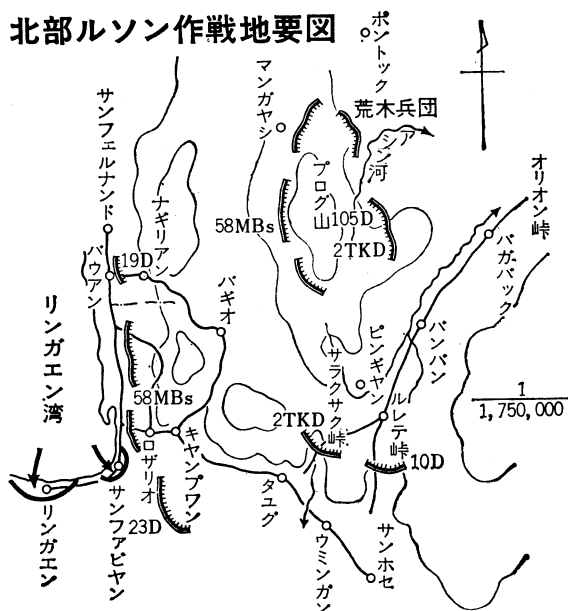
註 戦後の調査によれば、リンガエン上陸における実際の敵の損害は、一月四日空母一沈没、一月五日空母一、巡洋艦二、駆逐艦一大破、一月六日艦艇一〇大破、六小破であつた。

敵は依然上陸を続行してその橋頭堡を次第に拡張し、一月十一日頃には、第二十三師団（師団長西山福太郎中将）の陣地正面に進出して攻撃を開始した。その右翼は、バギオ——マニラ道に接近していた。

方面軍司令官は内陸に向う敵の攻撃を遲滞させため第二十師団及び独立混成第五十八旅団の精鋭各々一箇大隊と、戦車第二師団の重見部隊とに、一月十六日夜敵線深く突進し、その上陸拠点に対し挺進攻撃を実施させた。この挺進攻撃は、突進部隊の勇戦により、相當の戦果を取めたが、戦局を支配するには至らなかつた。

一月下旬、敵の攻撃は益々猛烈を加え、第二十三師団の第一線陣地は各所に分断包囲されて、個々の死闘を続けた。よつて山下大将は、我が第一線部隊を、東方山脚の第二線陣地に後退させるよう師団長に命令した。

北部ルソン作戦地要図



リンガエン湾岸の防禦戦闘は、こうして逐次に内陸に及び、方面軍の作戦指導は、愈々これから敵の進撃を阻止しつつ、一方迅速に北部ルソンに永久抗戦の根拠を構成するという段階に入つた。

〔北部ルソン抗戦根拠地の構成〕 カガヤン河谷は食糧を他方面に移出する豊穡な米産地である。方面軍は、このカガヤン河谷を内懐とし、第百三師団（師団長村岡豊中将）の守備するアバリ附近の北方陣地に連繫して西方を峻峻な一連の山系に托し、ここに第十九師団（師団長尾崎義春中将）及び歩兵第八十旅団（第百三師団）を配備し、南方を防備の重点方面としてバギオの西方から、サンホセ北方に亘る一連の山地帯を占領して、ここに永久抗戦の根拠を構成しようとした。

北方及び西北方の配備が概ね完了した一月中旬頃、リンガエン湾岸から内陸に向い、敵が突進しつつあつた当時の戦況において、前記の根拠を構成するためには、南方の防壁を急速に固めるのを先決とした。その作戦指導の焦点は、バギオ西南方地区を軸心として敵のサンホセ方面に向う突進を阻止しながら、その間第十師団（師団長岡本保之中将）に、サンホセ北方のバレット峠を堅固に守備させ、ここに南壁東方の拠点を構成し、更に出来るだけの兵力と、マニラ附近から輸送中の軍需品とをなるべく多く第十師団の陣地線を超えてカガヤン河谷に入れることであつた。

第二十三師団及び独立混成第五十八旅団は、バギオ西方一帯の軸心兵団として敵の拒止に任じていたが、優勢な敵は我が左側より溢出して、その一兵団は、ウミンガン——サンホセ道を東進し、バレル湾に進出してわが軍を南北に遮断するかに見えた。

一方サンホセ北方地区の防禦に任ずべき第十師団は、一月上旬、同地附近に到着し陣地占領を開始したばかりであり、軍需品はなお北方に向けて輸送最中であつた。方面軍が南壁東方の拠点を構成するには、先ずこの敵を拒止して時間の余裕を得なければならなかつ

た。

方面軍司令官は、そのため戦車第二師団に反撃を命じた。

戦車第二師団（師団長岩仲義治中将）は、一月下旬、この敵をタング附近に迎撃してよく戦い、時間の余裕を得て、第十師団の陣地占領と、輸送中の軍需品大部のカガヤン河谷搬入とを可能にした。しかし、戦車師団自体は、絶対優勢な敵と独り舞台の敵飛行機の攻撃を受けて損害続出し、大部分の戦車を失い、遂に逆に第十師団に収容されなければならなかった。

第百五師団（師団長津田美武中将）は、先に振武集団長の指揮下に入ることを命ぜられたが、一月上旬、カガヤン河谷に転進することとなり、五箇大隊を以て北進の途中、戦車師団の戦闘に会し、一部をこの戦闘に参加させると同時に第十師団長の指揮下にも入れ、主力三箇大隊を以てカガヤン河谷に到達した。

バレル湾に配備されていた津田支隊（第二十六師団の独立歩兵第十一聯隊基幹）は、一月下旬、バレット峠東方地区に転進し、第十師団長の指揮下に入った。

この間、バギオ西南方、軸心方面においては、当面の敵は益々増強されてその攻撃は熾烈となり、加うるにバギオに対する敵飛行機の爆撃は、軍需品を焼却するほか第一線への補給を困難にした。方面軍は、東方拠点構成の進度とも勘案し、二月上旬、第二十三師団及び独立混成第五十八旅団の戦線を整備して後方の山嶺を占領させ、第十九師団をポントック地区に転用した。

北方根拠地は、こうして、ようやく構成された。

【マニラ周辺の戦闘——岩淵海軍少将自決】 リンガエン湾に上陸した敵は、前述のように主力を以て我が北方拠点に強圧を加える一方、約二箇師団と判断される有力な兵団をマニラ方向に南下させた。その先遣隊は、一月三十日それぞれカルンビット及びガバン地区に達し、二月三日マニラに進入した。

これより先、一部の敵はルソン西海岸のサンアントニオに上陸し、又約一師団の敵は、一月三十一日、マニラ湾口南側のナスグブに上陸し、我が守備隊を突破して内陸に向い進撃を開始した。更に約一聯隊の敵空挺部隊は、二月三日タガイタイ（ナスグブ東方三三軒）に降下した。

これらの部隊は、リンガエン湾方面からの南下部隊と呼応してマニラに向った。

当時、マニラ市及びその附近では、第十四方面軍司令官の作戦指揮下に、第三十一海軍特別根拠地隊司令官岩淵三三少将の指揮する部隊が、軍需品の搬出及び軍事施設の破壊等を実施中であった。この部隊は、当初約二箇大隊の陸戦隊を基幹としたが、状況の急迫に伴い、沈没艦船の乗組員や、後送不能の兵員を併せ、且つ二月二十日頃には、マニラ所在の陸軍部隊（約四、〇〇〇人）をもその指揮下に入れ、総兵力約二万と称した。

この我がマニラ部隊は、二月三日夕、敵の急襲を受け、交戦の已むなきに至った。

方面軍、南西方面艦隊、振武集団間に統帥上種々の経緯はあつたが、マニラを戦場外に置くという山下大将の意図は、ここに水泡に帰し戦闘はマニラ市街に波及した。

敵は、多数のゲリラ部隊と砲撃を主として、市街地区のわが軍を孤立させ、全面的な包囲攻撃を実施した。

マニラ東方拠点の振武集団は、この敵の背後を攻撃するため、二月十四日歩兵約六大隊を以て行動を開始し、マニラ東北側の台地線に進出して敵の背後に挺進攻撃を実施した。この攻撃は約一週間に亘り実施され、相当の戦果を収め、且つマニラ部隊の一部を敵の包囲から救出した。

マニラ部隊の主力は、幾度か敵の包囲網を突破しようと企図したが、目的を達せず、各所に分断包囲されて戦闘を継続した。そうし

て逐次戦力を消耗し、岩淵少将は二月二十六日自決し、マニラ市街の戦闘は二月末終了した。

〔コレギドール陥落〕 コレギドール要塞は、昭和十七年五月、わが軍の占領以来放置されていたが、昭和十九年九月頃から海軍部隊が逐次配置され、同年末板垣昂海軍大佐を指揮官としてマニラ湾口部隊を編成した。その兵力は、兵員約五、四〇〇、震洋隊約四〇隻であつた。

敵は、迅速にコレギドール要塞を無力化し、マニラ港の完全支配を企図したものの如く、昭和二十年一月下旬以来、同島に対し、猛烈な爆撃を加えつつあつたが、二月十日、戦艦を含む有力な艦隊を以て艦砲射撃を開始した。二月十五日、敵はバターン半島の南端、マリバレスに上陸し、続いて十六日、空挺部隊をコレギドール島に降下させると同時に有力な部隊を上陸させた。

我が湾口部隊は、震洋を以て敵艦艇に海上特攻を敢行し地上の斬込み戦闘と併せて奮戦を続けたが、二月二十七、八日頃全員殆ど戦死し、敵は三月上旬以降、マニラ港の使用を開始した。

昭和十七年一月二日、本間雅晴中将の指揮する我が第十四軍の占領以来、マニラは、西方のシンガポールと併立して、南方地域特に濠北方面に対する策源地であつたが、戦勢の趨くところ、かくして遂に敵手に落ちた。

〔第四航空軍司令官の台湾転進〕 昭和二十年一月一日、第二、第七飛行師団を第三航空軍の指揮（隷下）に入れた第四航空軍は、従来の寺内元帥の直轄から離れて山下大将の指揮に入り、やがて全般の戦局上カガヤン河谷のエチアゲに転進を命ぜられた。エチアゲは基地としての施設が全くなく、これに転進するのは、航空軍を全身不随にすることであつた。転進のため、軍司令官富永中将は、クラークの防衛を第一挺進集団長塚田理喜智中将に命じ、又第四飛行師団（師団長三上喜三中将）及び第三十戦闘飛行集団（集団長青木武

三少将）には、クラークにおいて戦い抜いたのち、エチアゲに集結するように措置してマニラを出発し、一月十日エチアゲに到着した。

第四飛行師団は、方面軍の指揮連絡用として飛行機僅かに四機を持ち、第三十戦闘飛行集団は、一機をも持たずに空中勤務員だけで、一月十五日エチアゲに到着した。

当時台湾には、内地からの補給飛行機が到着していたので、軍司令官は台湾において部隊の戦力を整備充実しつつ台湾を基地として、ルソン島の作戦に参加するのが戦況上至当であると信じ、その意見を第十四方面軍司令官及び南方軍総司令官に具申した。

一月十五日、軍司令官は方面軍から南方軍及び中央に宛てたものと判断される第四航空軍の運用に関する電報を受領したので、先の意見具申は採用されたものと即断し、翌十六日第十四方面軍の命令を俟つことなくエチアゲを出発し、台湾に転進した。

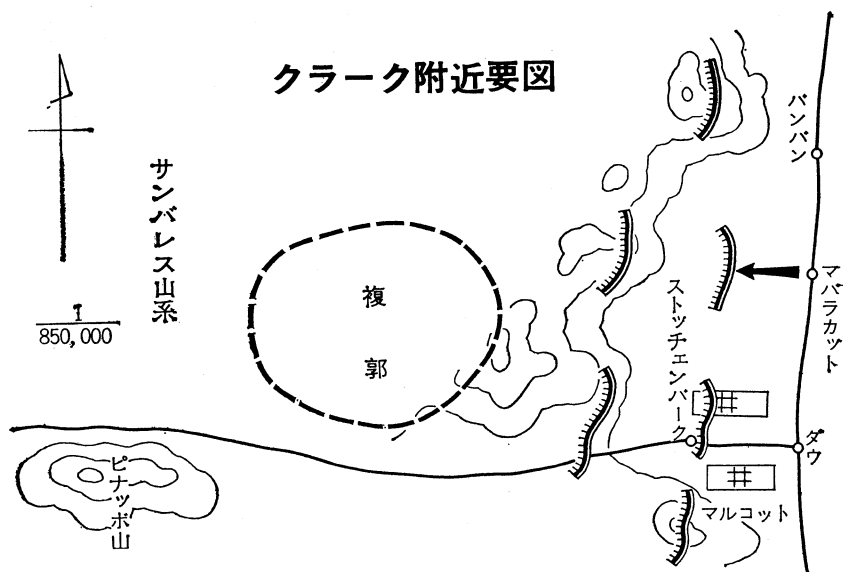
陸軍中央部は、この行動を以て軍紀をみだり高級指揮官としての徳義に悖るものとして憤激した。同中将は直ちに予備役に編入せられた。

ルソンに残つた翼なき航空部隊は、マニラ附近に位置したものは既に振武集団長の指揮下に入り、クラーク附近の主力は、地上戦闘に挺身することとなつた。

〔クラーク西方拠点建武集団の戦闘〕 昭和二十年一月八日、クラーク飛行場に着任した第一挺進集団長塚田理喜智中将は、所在の陸海軍部隊を指揮し、なるべく永く飛行場群を保持し、敵の飛行場使用を拘束妨害するよう命ぜられていた。

集団長は、六〇単位以上に達する陸軍部隊の総兵員約一万五千人の中から精鋭を選んで三箇支隊を編成し、これを第一線としてストゥチェンバーク南側高地よりクラーク飛行場を経て、パンバン西側高地に亘り陣地を占領せしめ、又その西側高地線に第二線陣地を構

クラーク附近要図



成し、更に一万五千名を複郭陣地占領部隊としてその西方に配置した。これらの部隊は建武集団と呼ばれた。

リングエン湾方面から前進した敵は、一月二十五日、先ずマバカット西方高地の我が陣地に対し攻撃を開始し、ついで二十八日、約一箇師団の敵は、全正面の攻撃に移った。

敵の主攻撃は、我が左翼方面に指向され、わが軍は防戦大いに努めたが、敵の飛行機、砲兵、戦車の協同攻撃は巧妙に実施され、先ずこの方面の陣地保持困難となり、右翼方面においても斬込み戦法等により善戦したが歩々後退の已むなきに至り、一月三十一日遂に第一線の全陣地を喪失した。

これより先、敵の一部は既述のように、一月三十日西岸サンアントニオに上陸し、建武集団は前後に敵を受けて全く包囲され、他方面との通信連絡は断絶した。

我が第一線陣地を攻略した敵は、依然重点を右に保持し、好んで焼夷弾攻撃を実施して、森林、叢原等を焼野と化し、又ブルドーザで山腹に自動車道を急速に開設し、前線に砲戦車を推進する等、攻撃を強化した。我が部隊は、多大の損害を意とせず、頑強に陣地を死守したが二月九日集団長は、爾後の戦闘を顧慮し後退を命じた。集団は更に複郭陣地によつて抗戦したが、各方面逐次に蚕食され、三月下旬、クラーク西方約二五軒のピナツボ山東麓に圧迫されて愈々最後の関頭に立った。

この頃、軍需品特に食糧は全く尽き、将兵の体力は急激に低下した。

バターン半島頸部に位置した永吉支隊（第十師団の歩兵第三十九聯隊基幹）は、建武集団に編入されたが、一月下旬以来連絡杜絶し、独力を以て、スピック湾に上陸した敵と交戦を続けつつあった。

〔南部ルソンの持久戦〕 昭和十九年十二月二十七日、第十四方面

軍司令官から、既述のように、マニラ東方山地帯を堅固に守備して長期持久を策するよう命ぜられた振武集団（集団長横山静雄中將の指揮する約七万五千名）は、「正奇、攻防の手段を竭して敵の戦力を撃砕し、已むを得ざれば、永久抗戦に必要な要域を確保して方面軍主力に策応する」という方針を樹立し、大要次のような作戦要領を策定した。

一、集団主力たる左の三兵团を以て、マニラ東方地区、イボ（アンガット水源地西側）、ワラ（イボ南方一五軒）、アンチボロ（マニラ東方二〇軒）に亘るタヤパス山系西麓の線に、数線に陣地を占領し、敵を牽制拘束してその戦力を減殺する。

河島兵团（河島修少將の指揮する歩兵第三十一聯隊基幹）

小林兵团（小林少將の指揮するマニラ防衛隊基幹）

野口兵团（野口少將の指揮する集成部隊）

二、ラグナ湖南方バタンガス州方面に対しては、藤重支隊（藤重正従大佐の指揮する歩兵第十七聯隊基幹）、木暮支隊（木暮中佐の指揮する主として船舶部隊）を配備し、敵の上陸及び前進を妨害せしめ、状況已むを得ざるに至れば、ラグナ湖南岸要域を占領して集団主力の左側背を掩護させる。

三、マニラ市は、当初一部を以て警備し、軍需品の搬出を掩護させる。

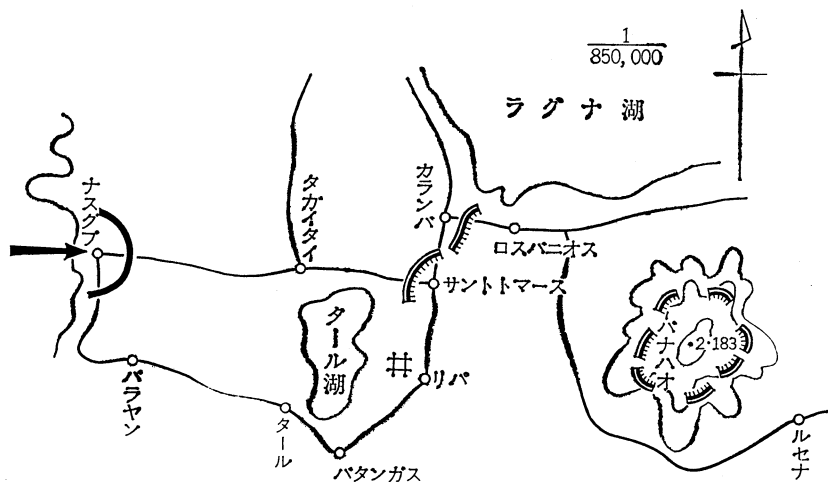
四、ピコール方面（ルソン東南部地区）の部隊は逐次集団主力方面に転用する。

五、軍需品を愛護節用し、特に自活を策する。

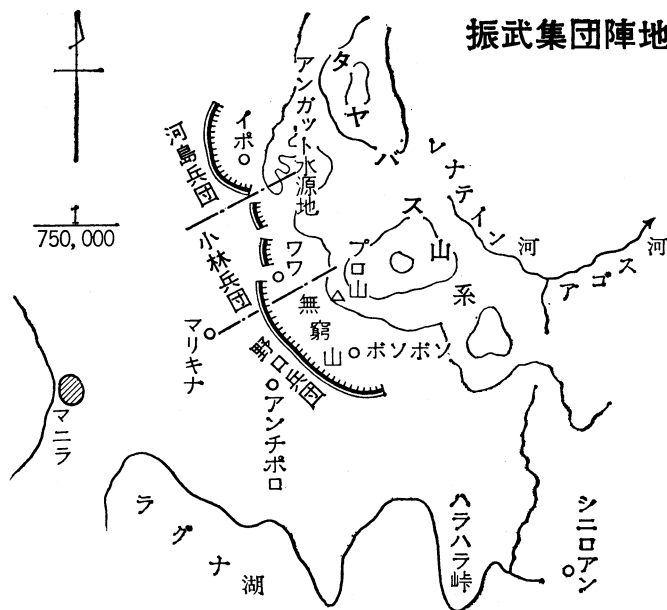
昭和二十年一月三十一日、約一師団の敵は、既に述べたように、ナスグブ附近に上陸を開始し、正面四軒、縦深五軒の橋頭堡を占領したのち、タガイタイ及びバタンガス方面に向い前進を開始した。

藤重支隊の前進部隊は、頑強にこれに抵抗し、所在に敵の前進を阻止したが、敵は逐次兵力を増加し、三月上旬、ナスグブ——サン

藤重支隊戦闘地域要図



振武集団陣地



トートマス道は敵手に帰し、同月下旬リバ飛行場もまた敵の占領するところとなつた。

支隊主力は爾後、カランバ、サントトーマスの線に陣地を占領し、敵の猛攻を支えていたが、四月中旬、サントトーマスの主陣地を敵に突破されるに及び、バナハオ山に後退して、遊撃戦に移行した。

〔振武集団主力正奇の攻防〕 既述のように振武集団主力方面においては、昭和二十年二月中旬、有力なる部隊を以てマニラに進入した敵の背後を攻撃したのであつたが、敵はこの攻撃部隊の撤退に追尾して、イボ、アンチポロの我が主陣地線に近接し、二月下旬から本格的攻撃を開始した。

特にマニラ市を完全に占領してからは、騎兵第一師団、第六、第三十七師団の主力を指向し、飛行機、戦車、砲兵と緊密に連繫して、マリキナ東方台地（無窮山と呼んだ）に迫り、三月五日遂にこれを突破した。

これより先三月一日、振武集団を以て第四十一軍を編成せられた横山中将は、軍司令官と第八師団長とを兼任した。我が陣地を突破して、無窮山に進入した敵は、東南及び東北方に突破口を拡大して、我が主陣地を分断しようとする企図し優勢な砲爆撃に支援されて攻撃を続行した。

軍司令官は、主陣地瓦解の危急を積極的に解決するため、この敵に痛撃を加え、これを主陣地外に撃攘するの策案を定め三月十五日約一箇大隊を以て南方から、又四箇大隊を以て北方から、更に二箇大隊を以てマリキナ方向から左側背に向い、この敵を攻撃させた。

攻撃部隊は勇躍して攻撃を起し、特にマリキナ方面に向つた河島兵団の二箇大隊は、同地北側に進出して大きな戦果を収めた。しかし敵の火力が圧倒的に優勢なのを比し、我が支援火力は極めて劣勢であつたため爾後の戦況進展せず、所期の目的を達成することが出

来なかつた。

軍主力は、ここに主陣地線を収縮して態勢を整理する必要に迫られ、ワワ以南の陣地を、プロ山及びその東南の山地の線に後退し、三月末、部隊の配置を完了した。

3 イムパール作戦後のビルマ

〔ビルマ方面作戦計画の変更〕 昭和十九年九月、ビルマ戦局の推移を注視しつつあつた在マニラ寺内南方軍総司令官は、折柄、フィリピン方面に切迫を予想せられつつある米軍の反攻動向にも鑑み、ビルマ方面の作戦指導を根本的に更改する決心を固めた。即ち従来ビルマ方面軍の最も重要な使命として数えられていた印支ルート遮断の任務を軽減し、中、北ビルマの放棄を認めた。又ビルマ政府の育成、対印施策の基盤等の政治上の要求を第二義的とし、ビルマ方面軍はマレー、タイ等南方圏防衛上、南部ビルマ要域を確保し、南方圏北翼の支撐を構成するという戦略的使命を第一義とする如く改めた。なお南部ビルマにおける防衛の重点は、海正面に置かれ、北正面の作戦は、持久戦的性格が要求せられた。

この決定は次の如き検討経緯を経て行われた。南方軍としては、太平洋方面の戦局に鑑みビルマ方面に兵力を増強することは不可能なるのみならず、寧ろ状況の推移によつては、仏印、タイ、マレー方面防衛のためビルマから兵力を抽出する必要さえ生起することが予想された。又ビルマ方面軍の現況からすれば、ビルマを放棄して一挙泰、緬國境に戦線を収縮するの得策なることも一応考えられた。しかしこの考案は当時タイ、マレー方面の防備未完なる状況において、南方全域の防衛を危殆に陥れる虞れがあり、又ビルマ、アムダマン、ニコバル、スマトラを連ねる一連の防衛連鎖を過早に崩壊せしむる懸念があるため断念せられ、南部ビルマの要域を確保することとなつた。

本決心に基く南方軍の命令は九月末下達せられ、その計画は「緬甸方面作戦指導要綱」を以て示された。その要旨は次の通りである。

註 本節については、附図第三を参照されたい。

第一、方針

来攻する敵を撃破し、主として南部緬甸要域を安定確保し以て南方圏北翼の支撐を形成し、且此の間成し得る限り印支連絡を封殺し、全局の作戦を容易ならしむ

第二、指導要領

一、概ね本年雨季明け頃を目途とし当面の作戦を終了すると共に、空地戦力を恢復充実に雨季明け以降に於ける作戦を準備す
二、雨季明け以降に於ける作戦は、南部緬甸要域の確保を以て重点となし、特に重視する所左の如し

1 南部緬甸沿岸要域は常に之を確保す 之が為、敵の海正面大規模反攻に対しては随時主作戦を指導して之を撃破す

2 北緬甸方面に在りては現在の作戦に引続き、東北正面に於ては敵の印支横断連絡を遮断妨害し西北方正面に於ては敵の突進を制するに努む 止むを得ざるもラシオ附近及マンダレイ周辺の各要域を極力確保して敵の進攻を制す

3 航空軍は随時海正面作戦に策応するを主眼として、其他の作戦を律し、特に敵空軍の漸減を策す

〔ビルマ方面軍司令官の新作戦構想〕 右南方軍命令に接したビルマ方面軍司令官は、ラシオ、マンダレー、エナンジマンを連ねる線以南の要域を南部ビルマにおける確保すべき要域と定めた。方面軍がこの地域を選んだ理由は前述南方軍総司令官と同様の考察のほか軍の生存に不可欠なる補給上の要求から出ていた。即ち当時海上輸送逼迫し且つ泰緬鐵道の輸送も意の如くならず、タイ又はマレー方面からビルマに対して補給を確保することは海陸ともに困難な実情

にあつた。特に主食たる米と液体燃料を確保する絶対の必要に基き、これらの自活を許すイラワヂ河以南の地域が選ばれた。しかしながら当時第三十三軍及び第十五軍は勿論、第五飛行師団の戦力も極度に低下した状況下に広大なる陸正面に亘つて追躡しつつある大敵と、海正面から反攻しつつある敵に対して果して南部ビルマを確保し得るや否や多大の疑念があつた。この難局に立つた方面軍司令部は、積極的な反撃作戦の敢行により、その任務を達成せんことを期した。即ちマングレー、エナンジョン間のイラワヂ河正面及び海正面において主作戦を指導し、シャン高原方面において支作戦を指導する内線作戦構想を樹てた。前者は第十五、第二十八軍に、後者は第三十三軍に担任させ、方面軍の戦略予備兵団をトンダ、ビョベ地区に保持し、主作戦方面の決定に伴い、これを使用する如く配備した。この間状況最悪の場合においても攻勢の続行により、次の雨季到来まで持ちこたえ、雨季を利用して次期新作戦に転移し得べしと期待していた。

方面軍司令部がこの作戦構想に基き、三軍に与えたる任務の骨子は次の通りであつた。

一、第三十三軍（第五十六、第十八師団）はラシオ附近よりモンロン山脈の要線を堅固に占領し、来攻する敵を撃擯すると共に、成し得る限り印支ルートへの遮断妨害に努む

二、第十五軍（第十五、第三十一、第三十三、第五十三師団、但し第五十三師団はメークテラ周辺に集結し随時方面軍の使用に供し得る態勢に在らしむ）はマダヤ北方高地サゲイン橋頭堡、バコック附近の要域に転進し同要線を堅固に占領し、来攻する敵を撃擯し、イラワヂ河南岸要域を確保す

第十五軍正面反撃作戦を整作戦と呼称す

三、第二十八軍（第五十四、第五十五師団、独立混成第七十二旅

団）はエナンジョン、アキャブ、イラワヂ河口に亘る要域を縦深に堅固に占領し来攻する敵を撃破してエナンジョン、イラワヂ河、ラングーンを連ぬる要域を確保す

第二十八軍正面の反撃作戦を完作戦と呼称す

四、各軍間の作戦地境

第三十三軍

モゴック、スマサイ、カローを連ぬる線

第十五軍

バガン、キャクパドンを連ぬる線

第二十八軍

五、方面軍戦略予備兵団（第二、第四十九師団）は、夫々ビョベ、トンダ地区に位置し随時整完両作戦に参加し得る如く準備す

〔第十五軍のイラワヂ河に向う転進計画〕 十月下旬、片村新第十五軍司令官は、方面軍から前述の新任務を受領した。崩壊寸前にある軍が、向後二カ月に亘つて現戦線において軍を再建して敵を阻止したる後、更に五〇〇軒に上る退却を続行し、イラワヂ河畔に邀撃態勢を採ることは最も至難なるものであつた。

軍司令官は十月中旬、各師団參謀長、關係部隊長を召集し、その統帥方針と次の如き作戦計画の大綱を示達し嚴厲なる服行を要求するところがあつた。

第一、方針

軍は直ちに現戦線に於て敵を阻止しつつ速にイラワヂ河に向ふ機動を準備す

機動準備及機動期を夫々概ね五十日と予定し、敵に企図を秘匿す

第二、指導要領

一、イラワヂ河畔陣地占領腹案

1 第十五、第三十一、第三十三師団を第一線第五十三師団を

第二線兵団とする

2 第十五師団はマダヤ北方高地チエウミヨ橋頭堡シング附近を占領す

3 第三十一師団はサゲイン橋頭堡及ミンム附近イラワヂ河南岸台地を占領す

4 第三十三師団はミンギヤン、バコック附近を占領す 又有力なる前進部隊を以てモニワ、ガンゴウを占領す

5 第五十三師団はメークテラ周辺に複郭陣地を占領す

二、イラワヂ河への転進要領
1 十二月上旬機動を開始し約五十日を以てイラワヂ河畔への転進を完了す

2 第五十三師団はイラワヂ河東岸をマンダレーを経てメークテラ北方に転進す

3 第十五師団はイラワヂ河西岸シェボー東北側を経てチエウミヨに転進し、同地附近にてイラワヂ河を渡河し陣地を占領す

4 第三十三師団は主力を以てシェボー、モニワを経てバコックに転進す

5 第三十一師団はコリン東西及シェボー周辺に收容陣地を占領し第五十三、第十五、第三十三師団の転進を收容したる後サゲイン及ミンムの橋頭堡陣地に転進す

軍司令部及び師団司令部の首脳更迭し心機漸く一新しつつありし秋、片村新軍司令官の嚴肅なる統帥と補充給養の施策改善とによりて、各部隊は急速に軍紀士気を回復し戦力の向上を認め得るようになった。

〔第十五軍の退却実施——英印軍の総追撃〕

第三十三師団は印度第五、第二十、東亞第十一の三箇師団の急迫包囲を随所に反撃阻止しつつ退却を続行し、十一月下旬漸くカレワ周辺に戦線を収縮し得

た。しかしながら溢出する敵は早くもチンドウイン河東岸に先廻りを始めていた。

第五十三師団は十月中旬以来、当面の敵第三十六師団の攻撃を受け、十一月初旬早くも戦線の維持困難を訴え始めた。

第十五師団は十一月下旬以来、英印軍第十九師団のため左翼の危機を報じたが、十一月末軍の全線は危急に直面した。

サゲイン地区に転進を終えた第三十一師団は河田新師団長の陣頭指揮の下に予定の收容陣地を占領し士気を回復しつつあつた。

なおイラワヂ河畔の予定陣地に先遣された各師団の築城班は、住民を駆り集めて陣地の構築に着手していた。又退却路の整備と、イラワヂ会戦に應ずる兵站諸準備も着々進捗しつつあつた。

ここにおいて第十五軍は機動開始の機熟せりと認め十二月一日を期し先ず第十五、第五十三師団の退却を、次いで十二月四日、第三十三師団の退却を發動した。五十日間に亘る退却準備は完全に秘匿され得た。各師団は計画通りに順調に退却を続行した。いずれも敵の空軍、機甲部隊の活動困難なる丘陵密林地帯を経つて後退した。軍の退却開始と時を同じくして敵は全力を挙げてシェボー平地に突進を開始し、その兵力は六乃至七箇師団に上つた。第十五師団と第三十三師団の一部は、シェボー東北方及び西方において追躡する敵と混戦を惹起した。二十数機の残存戦力に過ぎぬ第五飛行師団はこの敵に対して犠牲的攻撃を加えた。在シェボー第三十一師団の一部は、第三十三師団方面に増援せられ反撃戦闘により第三十三師団の急を救つた。カンバル、シェボーの第三十一師団收容陣地は一月上旬中殺倒する敵を反撃阻止し、第十五、第三十三師団のその両袖の庇護下に收容する偉大なる役割を果たし、第三十一師団の士気は今やその面目を回復し得たことを立証した。第三十一師団は收容任務を完遂した後、八日夜サゲイン、ミンムの主陣地に転進した。

第十五及び第三十三師団も一月初め概ねイラワヂ河の新陣地に転

進を了えた。

四十日に亘る軍の退却は計画通りに進展し、大なる犠牲を払うことなく成功裡に終末に近づいた。兎と亀の競争に比すべきこの退却間、一小隊も敵に捕捉せられることなく奇蹟的成功を収めた。

第十五軍は、イラワヂ河の線においては敵は相当慎重に渡河準備を整えるものと判断し、敵の本格的渡河攻撃に直面するまでには少くも三十日以上の時間的余裕があるであろうと期待した。

〔盤会戦指導要領〕 これより先十一月末日、機動開始の命令を下達するや片村軍司令官は自らイラワヂ河の陣地偵察と会戦指導要領を現地について研究を遂げた。十二月初め既述のイラワヂ河陣地占領の腹案の線に沿うイラワヂ河畔（盤）作戦計画が決定せられた。本計画における会戦指導要領は次の通りであった。

一、シング附近第十五師団橋頭堡、シェボー附近第三十一師団收容陣地及モニワ附近第三十三師団前進陣地に依り我が主陣地を秘匿し且敵のイラワヂ河進出を遅延せしむ

二、各橋頭堡を利用し、前岸に於て大規模の挺進作戦を展開し敵戦力の消耗と渡河準備の妨害を図る

三、敵の渡河に当つては橋頭堡河洲陣地に依り主陣地と相俟つて敵を混乱に陥れ各箇に撃破す 師団及軍の反撃は河畔に於て短節に反復実施す

四、軍主力を以てする前岸への反撃又は追撃は全般状況特に有利なる場合の外実施せず

五、予定反撃正面

一号攻勢（キャクタロン正面） 一軍主力（第三十一、第三十三二号攻勢（ミンム正面） 一師団主力第五十三師団、戦車

第十四聯隊、軍砲兵隊、新に増援せらるる兵団）を以て遂行す

三号攻勢（シング正面） 軍の有力なる一部（第十五、第五十

三師団、戦車第十四聯隊、軍砲兵隊の一部）を以て遂行す

四号攻勢（バコック正面） 軍の有力なる一部（第三十三、第五十三師団、戦車第十四聯隊、軍砲兵隊の一部）を以て遂行す

六、メークテラ及メイミュー周辺要域に対空挺反撃拠点を設定し、後方部隊及決戦兵団の一部を以て反撃し得る如く準備す

かくしてビルマにおける作戦の焦点はイラワヂ河畔に移行しつつあつたが、当時第十五軍各部隊の軍紀士気漸く回復しつつありとはいえ、その戦力は著しく低下してゐた。方面軍司令部の補給補充の努力に拘らず、第十五師団は約五千五百名、第三十一師団は約六千名、第三十三師団は約四千名、軍直部隊は約三万名内外に過ぎなかつた。主要兵器の充足も三〇乃至三五％程度に止まつた。かかる兵力を以て正面約二〇〇軒以上に達する広大なる作戦正面を担任し会戦を完うすることは殆ど所期すべからざる難事であると考へられた。

〔第三十三軍の奮戦——晩町、モンミット反撃〕 第十五軍方面において整作戦のお膳立が慌しく進んでゐる秋、第三十三軍正面において、印支ルート遮断のための最後の奮戦が行われてゐた。十二月中旬バーモ守備隊の救出に成功した第三十三軍は、第五十六師団を以てセンウイ周辺を、山崎支隊を以てナンカン周辺を占領し芒市、センウイ正面の遠征軍と、バーモに進出せる米支軍に対し持久態勢を占めてゐた。第十八師団主力は西方モンミット周辺において敵と対峙してゐた。第五十六師団正面の遠征軍は晩町を包囲し更に瑞麗江の北岸に溢出し、その重圧は愈々急を告げてゐた。

木村方面軍司令官はこの情勢と戦力減耗甚だしい第三十三軍の現狀に鑑み、十二月末、第二師団の一部（一聯隊）及び第四十九師団の一部（吉田聯隊）を引続き第三十三軍に配属する命令を下達した。第三十三軍はその両部隊を第二線部隊としてセンウイ附近及び

西方に陣地を占領せしめた。昭和二十年の元旦を迎えるや、遠征軍は愈々総攻撃を再興せんとしつつあること及びモンユ方面において瑞麗江を渡河すべく準備中なることを知り、この敵をその半渡に撃破すべく吉田部隊を以てモンミットを、一刈部隊を以てナンカン東南方のナンパッカを占領せしめ戦機の到来を待つていた。幸に敵の企図動向はその暗号電報の解読により手にとるよう明かに承知することが出来た。第三十三軍の巧妙なる内線作戦は実にこの情報の裏づけを得て確信を以て断行された。元旦早々十数倍の敵は曉町の陣地を猛攻した。第三十三軍はこの敵を陣内に誘致し紛戦乱闘の後これを撃滅し、辛うじて陣地を確保することが出来た。

敵はこの間モンミット正面から約二箇師団を以て一月五日、渡河を開始していた。かねて敵の行動を予期し満を持して待機していた第十八師団長中永太郎中将は、その全砲兵を以て集中砲火を浴びせたる後、二箇聯隊を以て敵の半渡に乗じてこれを攻撃し、甚大なる損害を与えて北岸に撃退した。

〔印支ルート遂に再開さる〕 パーモに進出した米支軍は、同地に在再二週間を空費し前述遠征軍の攻撃に策應するところがなかつた。一月八日頃に至つて漸く南進を開始し十日頃瑞麗江を越え、ナンカン正面に進出して山崎支隊に対する攻撃準備を開始した。かくて敵の両軍は愈々相呼応して打通作戦を敢行する段階となつた。暗号解読により蔣介石はその攻勢を督励しあることを知り得た。今やセンウイ、ナンカン両地区は同一戦場となる趨勢を鑑み、本多軍司令官は松山第五十六師団長をしてこの方面の戦闘を統指揮せしむることとした。山崎支隊は一月十日以来、三箇師団内外の米支軍により包囲せられ、その鉄環を逐日圧縮せらるるに至つた。ここにおいて本多軍司令官は同支隊をナンパッカ東方に撤退せしめることとした。支隊は一月十八日夜壮絶なる夜襲を遂行し、敵の重囲を突破して新陣地に転進を完了した。かくして第三十三軍は曉町、ナンパッ

カ間公路に沿う地区約三〇料の縦深に収縮するに至つた。敵の攻撃は愈々急となり、一月三十日に至り第五十六師団の状況は最悪の状態に陥つた。陣内に侵入せる敵のため公路は随所に切断せられた。第五十六師団は二月上旬末、センウイ南方の新陣地線に後退した。かくて敵遠征軍と米支軍の提携成り、印支ルートは遂に敵のため完全に打開せられた。昭和十七年五月以来、実に二年八カ月有余の間遮断していた援蔣ルートは再開せられ、連合軍の大陸作戦は連接せらるるに至つた。

印支ルートの打通に成功した遠征軍及び米支軍向後の行動判断は、ビルマ方面軍向後の作戦指導上、最も重要な課題であつた。即ち引続き英印軍と策應してビルマ領内に深く作戦するや、或は本国に撤退するやの問題であつて、諸情報により後者を選ぶ算が大であると信ぜられた。時あたかもイラワヂ河畔においては整作戦の戦機は愈々熟しつつあるに反して、第十五軍の戦力は既述の如く低下している。今や第三十三軍方面の作戦を緊縮し整作戦に臨むため方面軍の全努力を傾倒すべき秋となつた。

〔盤決戦の序曲 第十五軍の三号攻勢〕 ビルマ方面軍の運命を決する盤作戦は、我が予期に反し一月初旬早くも開始された。即ち第十五師団に追躡しつつあつた敵第十九師団の一部が我が第十五師団の虚を衝いてシンガ東岸に橋頭堡を占領するに及び会戦の幕が切つて落された。

第十五軍司令部は、英印軍がイラワヂ河の渡河攻撃を開始するためには少くも一カ月内外の準備を要すべしと判断していた。この間を利用し、イラワヂ河東岸を孤立南下しつつある敵第三十六師団を各箇に撃破せんことを企図した。第十五師団はシンガ附近占領部隊の大部を抽出し、北進して敵第三十六師団の攻撃に立ち向かわせた。シンガ河岸の陣地には僅かに二箇中隊が残置せられた。敵第十九師団の一部はこの虚を衝き、同地の我が守備隊を急襲した。守備

隊は潰走し、敵は同地に橋頭堡を確立した。第十五師団の反撃は機を失し、徹底を欠いたために同師団の攻撃は容易に奏功するに至らなかった。第十五師団が此の橋頭堡の掃蕩に焦慮しつつある時、敵は更にその南方シング、チョーミヨ正面において大規模なる砲撃を開始し、その一部は渡河を開始した。この正面においても容易に敵に橋頭堡の獲得を許し反撃の機を逸した。転進勿々にして防禦態勢未完なる上土氣の回復未だ十分ならざるところに、上述の如き作戦指導の錯誤が加わりこの始末だとなつた。今や敵はその第三十六、第十九師団を以て、先ずモロン山系一帯の要域を攻略せんとし、本格的渡河攻撃を開始せることが明かになつた。

これより先シング渡河の報に接した片村軍司令官は、方面軍司令官の認可を得てキヤウセに向ひ南進しつつある第五十三師団を急遽反転せしめ、マダヤに集結してチョーミヨ以南の防備を担任せしめた。片村軍司令官は、戦況正に三号攻勢を発動すべき時期なりと認め一月二十日これを発令した。かくて第十五軍は態勢を整える暇なく、退却に引続き整決戦に臨むこととなつた。

三号攻勢の部署は次の通りであつた。

- 一、第十五師団は、一部を以てシング橋頭堡を、主力を以てチョーミヨ（含む）以北の橋頭堡を攻撃す
 - 二、第五十三師団は、チョーミヨ以南の敵を攻撃す
 - 三、重砲兵一箇聯隊を以て両師団のチョーミヨ攻撃に協力す
 - 四、第三十三師団の一箇聯隊を軍予備としてマダヤに控置す
- 軍司令官はマダヤに戦闘司令所を推進し戦闘指揮に當つた。激戦は一月三十日に亘り、敵を河岸に圧迫し得たが、今一息のところまで攻撃頓挫し、その橋頭堡を完全に掃蕩するまでに至らなかつた。第十五師団の損害は三〇%に上り、漸く疲労の色が見え初め、軍の攻撃力の弱화가痛感せられるに至つた。

〔一、二号攻勢への転移準備と意見具申〕 しかるに第三十一師団

方面においても、一月中旬以来サゲイン橋頭堡に対し英第二師団の猛攻が反復せられていた。しかし同師団の勇戦敢闘により同橋頭堡は確保せられ敵に甚大なる損害を与へつゝあつたが一月末に至りキヤクタロン対岸の我が前進部隊が潰滅するに至つた。

又第三十三師団正面においてもモノワ前進部隊は、二週間に亘る善戦の後一月二十二日南岸に転進した。当面の敵は第二十師団である。シムム正面においても一月下旬同じく第二十師団が進出し、我が前進陣地を力攻しつつある等、敵は全面的にイラワヂ河北岸に進出し、主力を以てキヤクタロン、シムム正面において近く渡河を強行せんとする氣配が濃厚となつてきた。一方ガンゴウ方面から英印第十七師団と判断せられる一兵団がバコック方面に接近しつつある等、情勢愈々樂觀を許さぬものがあつた。

第十五軍司令官は以上の情況に鑑み三号攻勢を中止し、一乃至二号攻勢準備に転換すべき秋なりと認め一月三十日その処置を採つた。即ちチョーミヨ正面に対しては第十五師団独力を以て攻撃を続行せしめ、第五十三師団をキヤウセ周辺に、第三十三師団の主力をシムム南方の台地に、第三十一師団の有力なる一部をマンダレー附近にそれぞれ集結し、一号、二号攻勢に転移する準備につかした。なおメークテーラ周辺の警備強化のため、所在の兵站部隊及び患者を以て臨時集成大隊を編成し、粕谷兵站司令官をしてその守備に当らしめた。

片村軍司令官は敵主力渡河の機切迫し、しかも軍の戦力予想以上に低下しある状況を確認し、今や方面軍の全力を傾け三軍を挙げて盤会戦に臨むべき緊急の事態に當面しつつありと信じ、吉田軍參謀長をラングリン方面軍司令部に派遣して、盤会戦の急速発動、即ち三軍を挙げての会戦実施及び第二師団の第十五軍への増加等に関して意見を具申せしめた。

〔ビルマ方面軍の会戦指導〕 時あたかもフィリッピン方面におい

ては既述の如く敵は、昭和二十年一月九日大挙リンガエン湾に上陸していた。

又仏印は今や米軍の上陸を考慮し急速防備を整えなければならぬ羽目に立ち至つていた。

寺内南方軍総司令官は、一月末、主敵米軍の本土又は中国大陸に向う進攻を制扼すべき新任務を接受していた。ビルマ戦場は全局の上からも、又南方軍の使命上からもその戦略的重心から益々遠のいていた。寺内総司令官は以上の情勢に鑑みイラワヂ会戦を目前に控えつつも、一月中旬、第二師団主力をビルマから仏印に転用するに決した。大局上已むを得なかつたとは云え、盤決戦に臨まんとするその矢先にその骨幹戦力として期待していた第二師団の転用はビルマ方面軍の計画に齟齬を生じた。のみならず方面軍司令部は盤会戦の指導に関してまだ第十五軍の意見に直ちに同調する域に達していなかつた。僅かに第二師団の一部（歩兵一箇聯隊、砲兵一大隊基幹、青葉兵団と呼称）が第十五軍に配属せられただけであつた。

英印軍は第十五軍の判断に違わず、二月十三日、先ずミナム正面から渡河を開始した。第十五軍は直ちに予定の計画に基き反撃を開始した。抑々イラワヂ河南岸地帯からメークテラ南方に至る地域は、広漠たる大波状地帯で砂漠的地質の開闢地区を成している。空軍、火力、機甲兵力に恵まれた敵が、その優勢を發揮するため最も有利なる戦場である。第十五軍の攻勢は各部隊の勇戦敢闘に拘わらず、折角夜間攻撃により奪回した陣地も天明後は敵の砲爆撃と戦車の反撃により確保することが出来ず、敵の橋頭堡は逐日拡大せられた。二月下旬、会戦の前途は漸く憂慮せらるる状況となつた。

二月二十三日に至つて方面軍は、三軍の幕僚をメークテラに招集し、イラワヂ河正面に方面軍の主要戦を指導する協定を行つた。南方軍の沼田総参謀長もこれに列席した。方面軍の指示した構想は

雄渾なる前岸攻勢であつた。即ち第十八師団及び第三十一師団の二箇師団を以てマンダレー北方地区から、又第三十三師団を基幹とするものを以てイラワヂ、チンドウイン河合流地区から北岸に対し短節なる攻勢をとり、当面の敵を撃破した後、再び原態勢に復帰せんとするものであつた。

二月二十五日、第十八師団は第三十三軍から第十五軍の指揮下に転じた。第二十八軍もまた歩兵四箇大隊内外の兵力を以てイラワヂ河沿いにバコック方面に攻勢を採り、第十五軍に策応することと定められた。しかしイラワヂ河畔の戦勢は既に決し戦機は去らんとしていた。

〔メークテラの危急〕 かくの如き作戦協定が行われ、これに基づく作戦準備に着手しつつある秋、メークテラの北方及び西方においてこれと逆行する重大なる戦勢の変化が進展しつつあつた。即ち北方においては第十五、第三十一、第三十三師団共に連日の死闘により戦力愈々減耗し、担当する広大なる正面の随所から溢出する敵のため各師団間は勿論、師団内聯、大隊さえ敵のため却つて分断せられ包囲せらるる状態に立ち到りつつあつた。

一方西の正面においては二月二十一日第二十八軍との作戦地域沿いのバコック南方においてイラワヂ河を渡河せる不明の敵は、意外にも有力なる敵の機甲兵団にして我が配備の弱点を抜き、メークテラに穿實的に突進し來つた。第十五軍は直ちに第五十三師団の主力をタウンタに急派しこれを阻止せしめんとしたが失敗し、この敵は二月二十六日早くもメークテラに迫り、同日、同地の飛行場は敵手に陥ちた。同地にあつた兵站諸部隊や飛行場勤務部隊は、或は蹂躪せられ、或は潰乱して為すところを知らない有様であつた。

メークテラはイラワヂ河南岸扇形地帯の要を占め第十五軍の死命を制する交通上の要衝なるのみならず、ビルマ最大の航空基地の

所在地でもあつた。腹背敵を受け、絶体絶命の窮地に立つた第十五軍は、先ずメークテラの敵を撃滅するを焦眉の急と認め、イラワヂ河正面の攻勢を中止し、メークテラ会戦を指導する決心に転向した。即ち第十八師団を骨幹とし第十五、第三十三師団より抽出せる歩兵一箇聯隊、重砲兵の主力を以てこれを増強し、第十八師団長をして南面してメークテラを攻撃せしむる計画を樹て、攻勢開始を三月十日と予定した。これがためイラワヂ河の正面は、最少限の兵力を以て敵の南進を阻止せしめ、第十五師団正面においてはマダヤ北方高地に戦線を収縮せしめた。第五十三師団は依然タウンタ附近においてメークテラに向う敵の後続兵団を阻止せしめることとした。

〔イラワヂ戦線の崩壊〕 一方メークテラに敵侵入の報に接した方面軍司令官は、第十五軍をして方面軍が企図する盤主作戦を強行せしめんと欲し、ヤメセンに控置していた第四十九師団を急遽北上せしめた。メークテラの情勢を重大なるものと判断しかねていた方面軍首脳は、当初第十五軍の決心の変更に不満の意を持っていたが、二月二十八日情勢の判明に伴い漸くこれを是認した。三月に入るや、情勢は決定的に悪化した。

イラワヂ河の戦線においては、第十五師団は三月中旬マンダレーに殺到する敵戦車部隊に対処するため同市街に反転した。しかし時既に遅く、辛うじて市街の南半を保持し紛戦に陥つていた。第三十一師団正面もまた敵のため突破せられ敵は深くマンダレー南方に侵入した。ために第十五師団はマンダレーに孤立してしまつた。三月十二日にはメイミョーも敵手に陥ち、第三十三軍との連絡は遮断され、第三十一、第三十三師団は随所に分断包囲せられたまま死闘を反復していた。かくしてイラワヂ河の防衛線は、三月中旬、収拾すべからざる破綻に陥つた。

〔メークテラの失陥〕 一方、メークテラ戦線においては、第

十八師団が三月六日から攻撃を開始していたが、既に十日間に亘つて同地を固めたの敵の抵抗は頑強を極め、就中敵戦車の猛威は日本軍のため最も痛手となつた。しかも敵は毎日延二〇〇機の輸送機を以て続々兵力軍需品を増強しつつあり、第十五軍の力攻も効なく、作戦の推移は前途容易ならざる状況に陥つていた。メークテラの喪失はビルマ方面軍の死命を制する。飽くまでこれが奪回確保を完うしなければならぬ。しかるに第十五軍はイラワヂ河、メークテラ両戦線において前述の如き困難なる戦況に陥り的確なる指揮が望み難い実情にあつた。ここにおいて木村方面軍司令官は、三月十六日第三十三軍司令官をメークテラに転進せしめ、同方面の会戦を指導せしむることとした。第三十三軍に対する方面軍の絶大なる期待に拘らず、戦勢は既に狂瀾を既倒にかえす術もなく、三月二十日にはマンダレーを、二十二日にはミンギヤンを失ひ、メークテラ会戦もまた断念の余儀なき状況に立ち至つた。

当時第十五、第三十一師団はキャウセ東方の山地に圧縮せられ、メークテラ西方には第三十三、第五十三師団が敵の包囲下であり、又第十八、第四十九師団はメークテラ周辺にあつていずれも甚大なる損害を被り、戦力極度に低下していた。第十五軍司令官はキャウセ東南方に、第三十三軍司令官はメークテラ東方に位置して困難なる指揮に當つていた。

ラシオ方面の第五十六師団は、第三十三軍司令官のメークテラ転進に伴い方面軍直轄となり、重慶軍の一部と対峙していたが、幸に重慶軍の主力は本国に引上げ、大なる敵の圧迫はなかつた。

〔完作戦——第五十四師団の奮戦〕 第十五軍の整作戦に併行し、第二十八軍方面においても、アラカン山系東西地区で海陸両正面ともに、凄壮なる激戦が繰り展げられた。

アラカン山系西方沿岸地帯においては、第五十四師団（師団長宮崎繁三郎中将）が独力、敵第十五軍団の四箇師団（第二十五、第二

十六、西阿第八十一、同第八十二師団)の反攻を一手に引受けて、敵を一步もアラカン山系以西に侵入せしめじと攻防正奇の戦法を尽し、艱強なる戦闘を続けていた。同師団長宮崎中将は「如何なる場合に於てもアン、タウンガップ地区を確保し、敵をアラカン山系以西に阻止する決意の下に、先づヨマタン、ミエボン以遠の地区及び沿岸島嶼を利用し持久を策し、次でその以南縦深地区に於て敵を拒止撃擯する」方略を樹て敵の反攻を邀えた。

当方面完作戦は、昭和二十年一月三日、敵第二十五師団のアキヤブ島上陸を以て火蓋が切られた。

これより先、既述マユ半島に作戦中であつた桜支隊は、十二月二十六日より転進を開始し、一カ月の後ブROOMに集結了えた。次いでその転進を掩護するためアキヤブ島及びカラダン河谷正面に作戦していた松支隊も、前記敵のアキヤブ上陸に伴い、逐次戦線を縮少し、二月下旬、ミエボン周辺の陣地に合流した。

かくして戦線は、一月十二日ミエボン半島に、二十一日ラムレ島に、二十五日頃ガンゴウ、タマドンに移行し、三月下旬にはアン、タウンガップの反撃陣地帯に拡大し、大牙錯綜の激戦に發展していった。この地区における師団の反撃戦闘は最も果敢、艱強を極めた。

(エナンジョン正面の激戦) フラカン山系東方地帯においても、先ずイラワヂ河西岸地区から滲入して来た東阿第十一師団に対し、二月末以来、困難なる作戦の段階を迎えた。即ち独立混成第七十二旅団(旅団長山本募少将、第五十五師団及び印度国民軍の各一部属)を以て、エナンジョン油田地帯を根拠とし、ポバ山附近よりセクビュー附近に亘るイラワヂ河沿岸地区の要線において、この敵を邀えた。

桜井軍司令官は、かねて第十五軍方面の戦況逐日重大化し、しかも第十五軍戦力の低下とイラワヂ河畔の地勢に鑑み、当方面の防衛を重視し、作戦指導の焦点をこの方面に移しつつあつた。これがた

め、更に第五十四師団の一部(カラダン河谷より転進した木庭部隊)及び第五十五師団の一部(搜索聯隊、歩兵一大隊、山砲一中隊)を同旅団に増強し、三月十日からその主力を以て、先ずイラワヂ河西岸の敵に対し攻勢を採り、第十五軍の整作戦に策応せしめた。本攻勢が敵の反撃に遭い所期の目的を達し得ざるうち、メークテラ、ポバ山方面の戦況悪化したため、同方面の作戦指導の焦点は同河東岸に移行された。メークテラ戦線の崩壊に伴い、敵の重圧はポバ山方面にも拡大し、第二十八軍は敵第三十三軍団の猛攻に直面することとなつた。ラングリーン—マンダレー街道を敗走する方面軍主力の側背を掩護すべき第二十八軍は断乎としてポバ山戦線を死守し、四月初めに及んだ。

4 南西方面の防衛

(レイテ決戦に伴う防衛態勢の整備) 南方軍は昭和十九年四月その新統帥発動後、南西方面においてはビルマ及びベンガル湾正面を主作戦正面とし、バレンバン地区を絶対防衛地域とする方針を決定した。

右方針に基き南方軍は五月、第七方面軍に対し来攻する敵を撃破して南方中核要域を安定確保すると共に、軍政を統理し、南方圏の総兵站基地として重要国防資源の開発及び内地還送並びに隣接他軍に対する兵站を担任せしめた。

又第三航空軍に対しては戦力の充実増強と随時太平洋正面、ベンガル湾、ビルマ等に対する反撃決戦のための機動及び集結運用の態勢を整えしめ、バレンバン地区防衛のためには一部の兵力を常置し、随時所要兵力を集結せしめる如く指導した。

(第七方面軍——第三十七軍の設置) 四月頃における第七方面軍防衛態勢の概要は次の如くであつた。

マレー地区——第二十九軍(軍司令官石黒貞蔵中将)

独立混成第三十五乃至第三十七旅団

第十二、第十八独立守備隊

スマトラ地区——第二十五軍（軍司令官田辺盛武中将）

近衛第二師団（師団長武藤章中将、昭和十九年八月以降久野村

桃代中将）

第四師団（師団長馬場正郎中将、昭和十九年十二月以降木村松

治郎中将）

独立混成第二十五、同第二十六旅団

ジャワ地区——第十六軍（司令官原田熊吉中将）

独立混成第二十七、同第二十八旅団

ボルネオ地区——ボルネオ守備軍（軍司令官山脇正隆中将）

独立守備歩兵二箇大隊

当時方面軍は、敵はビルマ方面の作戦と関連を持ちつつ主として英印軍を以て先ずアンダマン諸島を攻略し、次いで北部スマトラに航空基地を推進した後、マレー頭部に上陸して南方圏の分断を策し嘗つて開戦当初日本軍の敢行したマレー攻略作戦と類似の要領を以て、シンガポールの奪回を企図する算が大であるが状況によつては、一挙シンガポールの攻略を企図することもあり得ると判断していた。方面軍は右判断に基いて、海軍及び第三航空軍と緊密に協同して速かに戦備を強化し、来攻する敵を撃破してアンダマン、ニコバル諸島、スマトラ、ジャワを連ぬる要線を本防禦線として、絶対に確保する方針の下に作戦計画を策定し、各軍の戦備強化に関し指導するところがあつた。各方面の概況は次の通りであつた。

マレー方面においては、第二十九軍はアンダマン、ニコバル諸島の戦備強化を重視し、方面軍もまたこれを最優先的に推進した。蓋し該諸島は、ビルマ、北部スマトラの連接基地として又マレー半島の前方拠点としてその戦略的意義は極めて大であつて、これが領有を敵に許す場合には、スマトラ資源要域及びシンガポールは全く敵

航空の攻撃圏内に曝される結果となるからである。該諸島の戦備は鋭意努力の結果、概ね所期の如く強化することが出来た。

次いでビルマ方面の戦況不如意に伴い、マレー頭部の防衛強化が頗にその重要性を加えるに至つたので、十月第十二、第十八独立守備隊を基幹として第九十四師団（師団長四手井綱正中将）を編成し、該地区の強化に任ぜしめることとなつた。

第二十五軍は北部スマトラの築城施設の増強に努めたが、兵力に比し海岸長遠にして防衛上常に心痛の種となつていた。バレンバン及びバンカランプランタン等の製油施設の防衛は絶対的の要請で第三航空軍所屬の第九飛行師団が主としてこれに当たつた。

ジャワにおいては、濠洲方面からの敵機来襲のほかは今俄かに来攻は予想されないで、第十六軍は各地区の防衛を強化すると共に、軍政の滲透を図り、総兵站基地としての生産補給、重要国防資源の開発に努め、多大の貢献をなした。

ボルネオは、元來作戦的には殆ど顧みられなかつたが昭和十九年初夏の候、ニューギニア方面からの敵の進攻急速に進展するに及んで、フィリピン方面における捷号作戦と関連し、その作戦的地位は頗に向上を見るに至つた。特にスール海方面からの敵の突破企図に対して北部ボルネオの戦備を強化すること及びフィリピン方面航空作戦のための基地整備は、焦眉の急務となつた。

これがため取敢えず七月独立混成第五十六旅団を守備軍に増加し、九月十日同守備隊を第七方面軍戦闘序列から除き南方軍の直轄とした。次いで九月二十二日ボルネオ守備軍の称号を変更して第三十七軍とし、名実ともに作戦軍となり、同年末に亘り逐次兵力を増強された。比島決戦において、ボルネオ地区は敵の来攻は見なかつたが、造成した一箇の航空基地は航空作戦のため有利に使用された。

〔第三航空軍の編成改組〕 第三航空軍（軍司令官木下敏中将）の

ビルマ方面イムパール作戦に伴う航空作戦に関しては既に述べた通りである。

第九飛行師団(師団長島田隆一中将、十月二日以降橋本秀信中将)は、スマトラ資源要域の防空専任の部隊でその兵力も昭和十九年二月には戦闘四箇戦隊、高射砲四箇聯隊(約二〇〇門)を基幹とするものに増強せられた。しかし比島決戦に伴い逐次その兵力を抽出せられ再び弱化するに至つた。

六月下旬バンカラランブランタンに対し最初の空襲があり、又バレンバンに対し八月十日夜B29による空襲があつたが、幸い軽微なる損害に止めることが出来た。

比島決戦逐次我に非となるに伴い、仏印及びタイ地区戦備の急速強化を要請せられ、ビルマ方面第五飛行師団(師団長田副登中将、十二月二十日以降服部武士中将)は、その根拠をブノムベン、クラコール地区に転移し、各方面に対し随時戦力を集結發揮し得る態勢を整備した。

十二月末第五十五飛行師団司令部(師団長木下勇中将)新設せられ、教育飛行団を統率することとなつた。

昭和二十年一月第七飛行師団を軍の隷下に、又同時第四航空軍の第十四方面軍司令官の指揮下編入に伴い第二飛行師団を作戦に関し区処せしめられることとなり、軍の作戦地域は殆ど東方全域に亘ることとなつた。

当時航空軍の重要任務の一は、海上輸送の掩護であつた。内地への物資運送、各軍に対する兵站援助、南方圏内兵力転用等すべて航空掩護を絶対とする状況で、その努力は並ならぬものがあり、作戦準備に影響するところ甚大であつた。

(寺内元帥フィリップピンからサイゴンへ) 昭和十九年七月イムパール作戦失敗に帰し、南西方面特にビルマ及びマレー方面の局面は一大幅換を生起せんとする情勢となつた。

南方軍総司令官寺内元帥は、ビルマ方面の戦況の及ぼす影響極めて大なるを憂慮し、全局作戦指導の見地から、機を見て戦闘司令所をシンガポール又はサイゴンに転移するを適當と考え、これに関し數次に亘り大本營に意見を具申した。この意見具申は十一月に至つて認可せられ、サイゴンを適當とする旨指示された。

当時フィリップピンにおいては、レイテ決戦続行中であつたが各般の情勢に鑑みて、総司令官は同月中旬その戦闘司令所をサイゴンに移転し、印度洋方面における対英戦備の促進強化をも図ることとなつた。

〔南方軍持久に転移、陸海軍指揮統一成る〕 眼を南西方面に転ずると、国軍の運命を賭けた比島決戦の敗北に伴い南方圏の政戦略的地位は根本的に変化して、南方軍は本土方面から孤立し、戦力の補給増援を期待し得なくなつた。更にルソン島に上陸した米軍は、この年春以降仏印東海岸に上陸してくる算少しとしない。又イラワザ河に殺到しつつある英印軍は、引続き南部ビルマ方面からタイ及びマレー方面に進攻を企図すること必至の勢いにあつた。

既に述べた如く期あたかも仏本国においてはドゴール政権出現し、これに伴つて仏印総督の対日態度は逐次非協同的となり、共同防衛の実践を拒否し対日敵性を帯びつつある。米軍の仏印或は海南島上陸を見るが如き場合には、仏印軍の実力反抗まで危惧せられるに至つた。

今や南西方面は、春以降印度支那半島の東西両正面において米、英印両軍の大反攻に直面し、しかも仏印軍の策応反抗を見ることがあるを予想しなければならぬ境地に立ち至つた。印度支那半島並びに北部マレー半島の戦備強化と仏印の軍事支配の確立とは南西方面作戦指導上焦眉の重要課題となつた。

かかる重大な情勢に対処するため、大本營並びに南方軍はそれぞれ南西方面における新作戦指導の検討を急ぎ、大本營は沼田総參謀

長（飯村総參謀長は前年末第二方面軍司令官に転出し後任に沼田多稼藏中将が着任した）を東京に招致して一月二十七日、これに関する大本営命令を下達した。

その要旨は次の通りである。

南方軍総司令官は来攻する敵を撃破して要域を確保し以て本土又は支那大陸方面に向ふ敵の進攻を制扼し、全軍作戰を容易ならしむべし。

特に準備すべき要綱左の如し

一、比島方面に在りてはルソンの要衝を確保し、来攻する敵を撃破するに努む
二、印度支那、泰、馬來並にスマトラは南方の中樞地域としてその要域を確保す

三、前二項以外の方面に在りては、敵の攻略奪回を企図すべき政略上の要衝特に重要資源又は重要基地を重点としてその要域を確保するに努む
四、随処縦深に亘り、極力敵戦力の積極的撃破を図る

南方軍はこの大本営命令に基き印度支那半島東正面の戦備を急速に強化すると共に、西正面においてはマレー頭部の戦備強化を速かに実施し、来攻する敵を撃破し、本土又は支那に向ふ敵の進攻を制約し、以て全軍作戰に寄与する方針の下に作戰大綱を策定した。この計画において、特に河内、サイゴン、パンコック、シンガポールを結ぶ紐帯を確保して有機的作戰を遂行することを重視した。南方軍は二月中旬サイゴンにおいて參謀長會議を実施し、作戰大綱を開示すると共に所要の命令を下達した。

又二月七日海軍第十方面艦隊（司令長官福留繁中将）及び第四南遣艦隊は南方軍総司令官の指揮下に入り、永年の懸案であつた陸海軍指揮の統一漸く実現を見ることがとなつた。

〔仏印及びタイへの戦力集中〕 これより先、前記フィリッピン及

ビルマ方面の戦局悪化に鑑み、大本營及び南方軍総司令官は印度支那半島特に仏印への戦力集約を急いでいた。即ち昭和十九年十二月、印度支那駐屯軍及びタイ国駐屯軍をそれぞれ第三十八軍（軍司令官土橋勇逸中将）及び第三十九軍（軍司令官中村明人中将）に改編し、この改編に伴い在支那第三十七師団（師団長佐藤賢了中将）を第三十八軍の戦闘序列に編入した。次いで一月中旬、南支及びビルマから第二十二師団（師団長平田正判中将）及び第二師団（師団長岡崎清三郎中将）を、それぞれ第三十八軍司令官の隷下及び指揮下に、又スマトラから第四師団を第三十九軍司令官の指揮下にそれぞれ転用する処置を断行したが、第二十二、第二、第四師団の転進は二乃至四か月を要した。タイ、仏印の海軍部隊はそれぞれ現地陸軍軍司令官の指揮下に入り、陸海軍統一指揮の下にその防衛に當ることとなつた。

第三十九軍は第四師団をランパン、チェンマイ地区に、独立混成第二十九旅団を南部テナセリウム地区に配置して、ビルマ及び印度方面の英印軍に対し備えしむると共にパンコック防衛隊を以てパンコックの警備に当らしめ、タイ国軍隊及び警察の背反を警戒せしめた。第三十八軍は第二十一師団（師団長三国直福中将）、第二十二師団及び第三十七師団を北部仏印に、独立混成第三十四旅団（昭和十八年十月内地から逐次到着）を中部仏印に、同第七十旅団（昭和十九年西貢防衛隊を改編）及び第二師団主力を南部仏印に、海軍の第十一特別根拠地隊をサイゴン及びサンジャックに配置して仏印の防衛並びに仏印の武力処理の準備を進めた。

〔マ号作戰——仏印武力処理と安南等の独立〕 かくの如く作戰準備を急いでいるうち、かねて日本軍が懸念していた通り仏印の敵性は日を逐うて露骨になつてきたため、政府及び大本營は三月九日、遂に武力処理を決心するに至つた。即ち同日午後六時松本俊一大使は、ドクレー総督に対し「仏印軍及武装警官隊を挙げて日本軍の統一

指揮下に入れると共に鉄道、海運、通信等作戦上必要なる機関を日本軍の管理下に置くべきこと並に仏印の全機能に対して全面的且忠実に日本の要請に即応協力すべき旨の指令を発する」との二件を要旨とする強硬要求を行なつた。この要求は二時間以内に全面的に受諾を回答すること、応諾の回答なき場合は独自の行動を採るべきことが附言された。

総督の回答は午後十時十五分に至つてもたらされたが、その内容は回答期限の延期と日本軍武力発動の中止を要請するものであつた。かくて第三十八軍司令官土橋中將は十日午前二時十七分全部隊に対して武力発動を令し、日本軍の軍事行動が全仏印に亘つて開始された。この軍事行動をマ号作戦と呼称した。

この武力処理は、南部仏印においては順調に進展したが、中、北部仏印においては仏印軍の意外に頑強な抵抗に遭ひ渋滞した。即ちハノイ、ユエは十日夕刻に、ランソンは十四日に至つて仏印軍を降服せしめ得た。我が武力処理の成功に伴い、先ず安南が逸早く独立を宣言し、次いでカンボヂヤの独立声明を見た。日本の仏印民族運動に対する例外的態度に久しく慍然なかつた現住民は歡喜して我が武力発動を迎えた。

當時九万五千を数えた仏印軍の主力は、武装を解除せられ、重要施設機関は日本軍の手に接収運用せられる運びとなつた。しかし数万の仏印軍は山地方面に逃避して抗戦を継続し、又北部仏印地区においては越盟軍の跳梁を見、これに対する討伐作戦は五月中旬まで続行された。これがため米軍に対する第三十八軍の作戦準備は著しく制扼せられる結果となつた。

シンガポール周辺の戦備強化 既述の如く比島決戦の失敗とビルマ戦線の崩壊は、濠洲及び英印軍を以て東西相呼応して実施するシンガポール奮回作戦を許す状況となつた。しかし英印軍の印度洋方面よりするシンガポール攻略は、アンダマン諸島又は北部スマ

トラを攻略することなく一挙マレー半島に上陸する算大となりつつありと觀察せられた。

第七方面軍は三月九日シンガポールを中核としてマレー半島の要域を確保すると共に、極力スマトラ及びジャワの重要資源並びに軍需品自給要域を確保する方針の下に各部隊を部署した。即ち第十九軍を以てマレー縦貫鉄道の確保を第一義とし、已むを得ざる場合半島の要域を確保しシンガポール外郭の防衛に遺憾なからしめ第二十五軍及び第十六軍を以てそれぞれスマトラ及びジャワ地区の重要資源並びに軍需品自給要域を確保せしめ、又昭南防衛隊を以てシンガポール本島の防衛強化を策した。

南方軍はマレー半島強化のため、一月下旬濠北方面から第四十六師団（師団長国分新七郎中將）を転用して、これを第七方面軍の指揮下に入らしめた。方面軍はこれを第二十九軍の指揮下に入れ、南部マレーの強化に充当した。

抑々マレー半島頭部の防衛強化は、昭和十九年十月第九十四師団の新設を以て、漸く軌道に乗つたが、従来アンダマン、ニコバル諸島の防衛を第一義とした關係上、本格的に力を入れたのは昭和二十年初頭以降であつた。方面軍はシンガポールを中核とし、第二十九軍を成るべく南部マレーに集約せんとし、南方軍及び第二十九軍は直接マレー頭部を確保せんとし、三者の間において思想的統一困難で第四十六師団の配置に関しても問題となつた点であつた。

スマトラは既に述べた如く、第四師団のタイ国転用に伴い機動兵力を失ひ防衛に大なる欠陥を生ずるに至つた。近衛第二師団は北部スマトラの防衛施設の強化に営營として努力し、五月頃には相当強度の施設を整えることが出来た。

一月二十四日。パレンバンは敵艦載機約一五〇機の攻撃を受け、続いて二十九日にも略々同数の敵機の攻撃を蒙り、施設に相当大なる被害があり、一時機能を停止するの已むなきに至つた。爾後これ

が復旧に努め、三月末約三分の一、五月約二分の一程度の生産能力に達した。

ジャワにおいては従来防備施設の重点を南岸に沿う東部ジャワに保持したが、フィリッピンの失陥に伴い、敵の来攻はジャワ海方面を重視するの必要大となり、これに添う如く北岸に沿う西部ジャワに配備変更の処置をとつた。

〔ボルネオ地区——サンダカン死の行軍〕 既に述べた如き英印軍のシンガポール攻略企図に対する濠洲軍の東方よりする策応作戦は、先ずボルネオ西海岸のブルネイ附近の要域攻略を以て始められ

第四章 戦争指導上の諸問題

既に世界情勢判断に述べたように、今や日本は最悪事態——本土における総力戦争——に直面しようとしている。従来屢々論議の対象となり、しかもこの国家危局の関頭に立つて、是非とも解決を要するにも拘らず、解決至難なものとして残されていた戦争指導上の二つの問題があつた。

その一つは、戦争指導機構の問題であり、他の一つは陸海軍合同の問題であつた。この両者は、本質的には表裏一体の關係において考究せらるべきものであつて、当時における戦争指導上のあらゆる施策の根源をなすものであつた。

1 戦争指導機構問題

〔戦争指導機構の致命的欠陥〕 第一次世界大戦の所産たる所謂総力戦に対する深刻な試練を経なかつた日本は、戦争指導の面においては、武力戦主体の国家機構のまま大東亜戦争に臨んだ。云いかえれば、日本には第一次世界大戦の様相から更に飛躍している総力戦である第二次大戦を乗り切るための戦争指導機構は存在せず、従つて

るものと判断された。

南方軍は右判断に基き、従来の北及び東海岸の配備の重点を西海岸に転移せしめるに決し、一月これに関し部署した。

東海岸部隊は一月末機動を開始し、ボルネオ中部の背梁山脈を横断し、近きも三〇〇軒遠きは六〇〇軒の嶮難密林の山地を踏破し、途中悪天候と飢餓のため多大の犠牲を生じた。二月末その先頭漸くアビ附近に進出し得たが、爾後の兵力の集結意の如くならず、六月敵のブルネイ湾周辺上陸時において、到着せるものの半数に過ぎない状況であつた。サンダカン死の行軍と呼ばれるのがこれである。

真の意味の戦争指導は行なわれていなかったと見るも過言ではなかつた。

およそ近代的高度の総力戦争時代の戦争指導は、複雑、多岐、広汎なる戦争要素を分析綜合して確立せらるべき戦争方略——政戦両略を渾然一体とする最高方略——に基いて行ふことが必要であつて、そのためにはそれを企画運営するにふさわしい国家の機構が整備されていなければならなかつた。政略——国務——も、戦略——統帥——も共に右戦争方略の枠内において計画し実行せらるべき性格のものである。

右のような戦争指導の要請に應ずるため、世界の列強は、程度の差はあつても悉く強力な機構を整えていた。独、伊、ソ連は勿論のこと、英國の戦争内閣制度と首相の権限、米国の大統領の権限とそれに應ずる機構等皆然りであつた。ところが、日本においては、既に述べたように国務と統帥は併立して天皇に帰一していたが、その実をあげるため両者を十分に綜合一体化して輔佐すべき機関は存在しなかつた。しかのみならず、国務と統帥の各々の面においてもま

たそれぞれ分裂して総合性がなかった。

即ち、国務においては、各省大臣がそれぞれ直接輔弼の責に任じていたので、内閣総理大臣の統制力は極めて弱く、強力なる総合的戦争施策の企画、運営には遺憾の点が多かった。一方統帥の面においては、大本営には陸、海軍部が併立し、両統帥部長はそれぞれの立場において輔翼の責に任じ、両者を一体化した輔翼機関はなかった。従つて、本来一体であるべき統帥の面において、陸海対立の禍根が難局に逢う毎に露呈していたのである。更に陸海軍部内においても、省部がそれぞれ独立した権限をもつて併立していた。

かかる機構上の致密的欠陥——国務と統帥の対立及び内閣の弱体と陸海の対立——の下に行われる日本の戦争指導には、大本営及び政府がいかに努力しても自ら一定の限界の存したことは当然の帰結であつた。即ち既に述べたように、開戦以降の日本の戦争指導は支那事変当初に定められた大本営政府連絡会議の運営をそのまま踏襲したものであつて、その狙いとするところは大本営と政府との協議による政略の吻合調整を図ることであつた。従つて前述した総力戦即ちの眞の意味の戦争指導とは相当の距りがあつたばかりでなく、連絡会議決定の權威についても明確ではなかつた。大本営及び政府共にそれぞれの立場において連絡会議の決定を尊重し且つこれが実行に努力はしたが、窮極において各国务大臣及び両統帥部長の輔弼と輔翼の責に帰するものであつて、法的に総合的連帯の責任はどこにも存在しなかつた。勿論重要転機に際しては御前会議において議決せられたが、これとても本質的には、連絡会議に形式的威重を加へたに過ぎないものであつた。

このような戦争指導上の国家機構の弱点を克服するため既に述べたように特旨によつて東條総理兼陸相が参謀総長に、又嶋田海相が軍令部総長にそれぞれ原職とは別個の性格において就任するという措置が採られたが、それでも根本的解決とはならなかつた。又小磯

内閣においては、大本営政府連絡会議を解消して最高戦争指導会議を設置したが、これもまた名称変更の範囲にとどまるものであつた。問題解決の鍵は、総力戦指導の感覚に徹して、国家機構の改革——憲法の改正——に對決することである。そして、それにも拘らず七十年の伝統を揚棄し得なかつたところに、大東亜戦争における日本の悲劇の根源があつたように考えられる。

〔統帥に対する小磯首相の不満〕 小磯首相が、組閣に當つて戦争指導に関する三条件を陸海軍に提案して拒絶せられ、遂に最高戦争指導会議の設置に落着いたことは既に述べた通りであるが、小磯首相の眞の狙いは、大本営の統帥の機微な実情を適時適切に承知し、為し得れば作戦指導に関与したいというにあつた。従つて前に詳述したような戦争指導の本質を衝こうとするのではなく、総理が大本営に列するか、或は陸軍大臣を兼任することによつて目的が達せられるものと考えていたようである。

果して然りとするならば、最高戦争指導会議若しくは大本営政府情報交換の適切な運用によるか、或は閑僚たる陸、海軍大臣を通じて解決し得るものであつた。

小磯総理は、レイテ決戦が起るや「レイテ天王山」を強調し、その推移に重大な関心を持つた。統帥部もまたあらゆる努力を傾注して勝利の獲得に邁進したが、遺憾ながら所期の目的を達成することが出来なかつた。これに對し、小磯総理は期待が切羽つまつたものであつただけに失望は大きく、大本営がレイテ決戦の終結を決意した後におけるフィリピン全般の作戦指導については、非常に不満であつた。小磯首相は、兎に角前年八月十九日の御前会議の比島決戦の根本方針を決定した以上、飽くまで決戦を続行すべきであるとの見解であるに對し、大本営は、能否に関する現実の見透しによつて措置を進めて行つた。

右に述べた小磯総理の不満は、次に述べる終戦後の小磯総理の果

鳴における述懐によつても窺い知ることが出来る。

昭和十九年八月十九日の御前に於ける最高戦争指導会議で、戦争指導方針を議決しました。その時の陸海両統帥部の次の戦場判断は比島でした。……今度会戦が起つたらそこに一切の力を傾倒して一べん勝たうぢやないか、勝つたところで手を挙げよう。……最後の勝利を得る覚悟で戦ふのかと統帥部に聞いたところが、いや骨を切らせて骨を切る覚悟だと云ひました。……そんな覚悟でやるより仕方がない、かう云ふのです。兎に角勝利を期して戦さすると云ひますから、よろしい、全力を挙げてそこで決戦をやつて勝利を期して貰ひたい。……

ところが一向はかばしくないでせう。何をしてゐるんだ、レイテ決戦をすると云つて置きながら、……何日でしたか戦争指導会議が始まる前に陛下に拝謁しようとしてゐる時、そこにいた杉山陸相が「総理、どうも統帥部はレイテ決戦を止めたらしい」と云ふのです。じやうだんぢやない……拝謁上奏が済みまして退らうとすると、陛下が、「小磯、統帥部はレイテ決戦を止めてルソンで決戦することに變更した」とかう云はれたんです。……「何か報告はあると思ひますけれども、総理の知らない間にかう云ふやうなことが起つては、なかなか務めにくうございます」と云うことでその場はすみましたが、もう少し前に陸相は知つてゐたと思ふのですが、何故言はなかつたと思ふのです。……

戦争指導でレイテが決戦場である、最後の切札を出して決戦する、と決つた以上は戦場統帥もその線に沿つて最善をつくしてやるべきはずと私は考へて居つたんです。……ところが、私の知らない間に決定事項がこはされたんですが、実はそこで諦めてもよかつたんです。けれどもとにかくルソンで決戦すると云ふのですから……ところが出血作戦とか云つて攻撃をとらない。それで参謀総長に云つたんです。「何をしてゐるんだ、百歩を譲つてレ

イテからルソンへ行つた、決戦はして居らんぢやないか、もつと活動したらいいぢやないかと」云つたところが、「おれは陛下の幕僚長たるに過ぎない、戦場統帥は出先でやつてゐるから仕方がない」と云つてゐるんです。これはとてもいかに私は思つたんです……私の辞めた問題について色々お聞きになつてゐると思ひますが、そこいらから既に発足してゐるんです。それで少し話が飛躍しますが、それだから統帥の機微をつかまなければ駄目だ、陸軍大臣をやつてゐるならば統帥の機微がつかめる。最後に駄目だと思ひましたから、陸軍大臣を兼摂すると杉山に云つたら、けられたんです。……

「小磯総理特旨により大本営に列す」 右小磯総理の記憶による述懐にも明かなように、総理は陸相を兼摂することによつて統帥の实相に触れ、それによつて戦争指導が好転するとの見解を持つていたことは確かであつて、戦局全般の悪化に伴い愈々その考え方は強くなつていつた。

そこで昭和二十年三月八日夜、小磯総理は単独で梅津参謀総長を訪問し、「総理を大本営の議に列せしむること及び戦争指導は大本営にて実施すること」の具体化について要請するところがつた。これに対し、梅津参謀総長は、趣旨としては異存がなかつたので、これが実現を期するため取敢えず大本営令改正の要否を検討せしめた。

しかし、大本営が従来純然たる統帥府たるの性格より戦争指導機関の性格に飛躍するためには、単に大本営令を改正することで出来るものではなく、それは憲法改正につながる重大問題であつた。そこで結局陸海軍首脳協議の結果、戦争間の特例として措置することを可とする意見に一致した。

よつて、三月十六日、総理、両総長は列立して「戦争指導強化の爲小磯内閣総理大臣は特旨に依り大本営に在りて作戦の状況を審に

すべき」旨を上奏し御允裁を得るに至つた。

かくして、小磯総理の提案は一応実現したかに見えるが、實際問題としては総理が大本営において作戰の実情に或る程度触れ得るというに過ぎないものであつて、戦争指導を大本営でやるという所謂「大本営内閣」の実現は達成せられなかつたのである。何故ならば、戦争指導のためには依然最高戦争指導會議が存置せられ、大本営と政府との協議による議決方式は改められなかつたばかりでなく、根本的に憲法問題と取り組み大本営令及び内閣官制を改正する法制的措置を伴つていなかつたからである。

2 陸海合同問題

〔宿命的陸海の対立——国力二分〕 宿命的陸海対立は、既に述べたような国家機構の欠陥に加うるに陸戦と海戦との本質的差違、陸海軍の生い立ち、伝統及び思想の相違に起因していたが、これに感情問題や更に時として国内の政治問題等がからんで一層根深いものとなつていた。

右のような陸海の対立は、米国始め列強においても軌を一にするところである。日本においても戦局の悪化に従ひ愈々激化し、しかも前記国家機構の欠陥を迅速適切に調整処理すべき機関を欠いていたので、戦争指導及び統帥の面において致命的影響を与えた。又この対立は、国内の各部門において戦争遂行上物心両面に亘り極めて好ましくない結果をもたらした。それらの具体的事例は、全篇を通じて枚挙に遑がないほどである。

想えば、総力戦時代であるにも拘らず、依然陸海の統帥までもなお併立しているところに禍根があつた。陸海空の統合戦略の下に来攻する敵に対し、わが方はややもすれば遊離せんとする陸海協同作戰の方式を以て押し切らうとしても無理であり、須らく陸海の觀念を超脱し統一ある戦略を以て対応すべきものであつた。勿論陸海軍

間には、作戰協定及び連絡、情報交換、幕僚の相互兼勤等意識疎通のためのあらゆる措置が講ぜられてはいたが、それらは協議、協定、認識の範囲を越えるものではなかつた。

かかる陸海統帥の併立は、当然の帰結として軍政の対立となり、船、人、物、金等の争奪に發展し、国内のあらゆる分野に対立と混乱とを惹起し、戦争遂行力の發揮を著しく阻害する原因ともなつた。この故に、大本営政府連絡會議や最高戦争指導會議の運営においては、大本営と政府間の意志の疎通を図るばかりでなく陸海調整の役割をも果たすことが多かつた。

〔対立解消への努力——論議に事れる〕 右に述べたような対立の解消については、陸海軍ともに努力した。しかし、どちらかと云えば陸軍は積極的であり、海軍は消極的であつた。解消の手段についても、陸軍は主として根本的解決を狙ひ、海軍は現状の修正程度に止めようとする傾向があつた。又陸海軍を通じ首脳部は比較的受動的であるに反し、事務当局は身を以て対立の弊害を痛感していたが故に、解決への焦慮が深かつた。

開戦以来重要転機に際会するたびに、陸海軍問題は年中行事のやうに論議が繰り返されたが、その主なるものについて回顧して見ると次のようなものがあつた。

既に述べたように、昭和十八年十一月一日軍需省が発足してから陸海軍の主要軍需生産管理に関する業務中必要なのは軍需省に移管され、就中航空機については航空兵器総局において陸海を一体とする生産体制が確立されたが、これを要求すべき立場にある統帥部が併立しているため十分には機能發揮出来なかつた。

昭和十九年初頭においては、陸海軍航空機の機数を決定するためアルミニウムの配分問題を繞つて陸海合同促進の空氣が濃厚であつた。当時配分問題は事務的には解決の目的がなかつたので、数次に亘る陸海四巨頭——河総長、阿大臣——会谈（陸海阿次長陪席）

によつて解決しようとしたが、容易には妥結しなかつた。前年九月の御前會議において採択された航空機の大増産問題も、陸海の主張する機数の調整が出来ないため、なかなか実行が出来なかつたのである。

秦參謀次長は、このような行詰り状態は陸海合同を政治的に解決する絶好の機会であると見て、二月十日の四巨頭會談に次のような爆弾動議を提案しようと考えた。以て当時の空氣を窺い知ることが出来る。

申すまでもなく帝國におきましては、平時陸海軍相對立して統帥、軍政諸般に亘り協議し、戮力一致出師準備に遺憾なきを期しますことは、陸海建軍の本義に鑑み帝國の國情より考察して至当の事と存じますが、戦時下而も此の國家重大危局に落着きました今日に於て依然協議を事とし、各種の問題につき陸海軍間に於て之が解決に多大の努力を要しますことは誠に遺憾に堪へません。このことは、独り作戰遂行上のみならず國家全般として國家戦力に及ぼす影響は蓋し甚大なるものがありまして、上御一人に對し奉り恐懼に堪へませぬのは勿論、下國民に對しても信倚に背く所以であります。

此の際陸海軍両者折衝の勞力を國內に浪費せず、陸海軍一体其の戦力を統合して外國に傾注する如く機構を革新することが出来ますれば、帝國の戦争遂行上効果絶大なることは疑ひないことであります。此の機会に以下述べる趣旨に準拠致されまして、申合せて戴きたいと存じます。

一、先づ陸海軍を合同し國防軍を編成することは理想と存じますが、憲法上即急に実現至難なことでありますので、陸海軍を一体に統合することに努力致したいと存じます。

若し急速に実現困難でありますれば、某年月を目途に実行するに努めたいのであります。

二、次に陸海軍両大臣及両總長をこの際各々一人宛に統合することを研究して見たいものであります。

尚此の機会に陸海軍相對立しある為國家戦力統合發揮に支障ある如き其他の重要事項についても、是非抜本基源的刷新を図りたいと存じます。

右秦次長の動議は、その日の會議において、陸軍側がアルミニウム配当量を海軍側に譲歩することによつて一応の解決を見るに至つたので、遂に提案されなかつたが、かかる秦次長の氣持はその後陸海軍調整の空氣の溫醸を促進したことは事實である。

次いで二月十七日のトラック空襲を契機として再び本問題が抬頭した。三月十二日、陸軍省事務局は、陸海軍の協同調整を図る一案として、大本營總幕僚制を海軍に提案した。その狙いは、とりあえず大本營陸海軍部幕僚を二位一体化しようとするものであつた。

これに對し海軍の意見は、少數の大本營總參謀を臨時に設け、兩總長に直屬させて陸海協同及び戦争指導關係事項の企画に任ずるといふものであつた。しかし、これとても具体化するには至らなかつた。

その後、昭和二十年初頭に至りフィリッピンノ状況が決定的に悪化するや、陸海軍問題は前に述べた戦争指導機構問題と共に最早觀念論ではなく、現実の問題として對決を要すべき事態となつてきた。即ち、作戰、兵備、輸送等、陸海併立による運用の域を遙かに超えてしまつた。殊に本土決戦に真面目に取り組むためには、何を措いても陸海軍調整問題の先決が必要となつてきた。

右事態に應ずるため、陸軍において、二月二十六日の省部首腦者會談において「本土決戦完遂基本要綱」を決定し、その施策の第一眼目として陸海合同の早急なる実現を期することとなつた。ところが、この頃における海軍部内の空氣としては、海軍戦力の著しく減少した今となつて陸海合同をすることは、結局海軍の併合を意味

するから到底応じ得ない、それよりはこの際陸海の指揮を統一化し且つ軍需整備の一元化を図ることが先決なりとの意向が強かつた。

しかし陸軍は本問題を飽くまで具体化するため、三月三日陸海両軍の首脳会談に提議した。陸軍の主張は、陸海合同を速かに決定せよ、そのためには陸軍航空は全部海軍に入れたるもよい、戦局の現段階において陸海合同が実現しなければ官民の結集は最早不可能なり、というにあつた。これに対し、海軍の見解は、先ず大本営陸海軍部の合一を実施せよ、そのためには取敢えず陸海軍同一場所勤務から実行を可とする、というのである。

〔陸海合同に関する御下問と奉答〕 右陸海軍間の論議は、上聞に達し、陛下は本問題を憂慮せられ、同日陸海軍大臣を別個に御召の上、陸海合同の可否に関し御下問あらせられた。

右御下問に關連し、三月五日軍事參議官朝香大将官殿下は、非公的に陸海軍大臣に対し「大本営総長案」を提案せられたが、米内海軍大臣は即座に不可なる旨お答えした。

三月六日、秦參謀次長は、本問題について軍令部次長と懇談したが、軍令部次長は、「宮中に於て陸海軍が一緒に勤務し、天皇御親政の実を挙ぐるを可とする」との意見であつた。

三月十九日夜、杉山陸相は院内において米内海相と本問題を二時

第五章 硫黄島の作戦

1 彼我の情況

〔硫黄島の価値と敵の動向〕 本土防衛の新作戦方針が漸く決定したものの、その具体的準備さえ未だ緒に就きかねている昭和二十年二月中旬、早くも硫黄島を繞る凄惨苛烈なる攻防戦が展開された。硫黄島は東京及びサイパンよりそれぞれ約一、二〇〇料に位置

間に亘つて懇談したが、米内海相は応ずる意志なく何等の結論をも得なかつた。

かかる行詰りを打開するため、三月二十日陸軍三長官に小磯首相も加わつて懇談したが、結局「海軍に一案を出させて促進する」との意見に落着いた。しかし、その後においても海軍の拒否的態度には変りはなかつた。

よつて、三月二十六日に至り杉山陸軍大臣は、海相とは別個に次のように陛下に奉答した。

過般陸海軍の合一に関し洵に畏き御下問を拝しましたが、爾來速かに大御心に副ひ奉るべく海軍大臣等とも隔意なく相談致しましたが未だ充分意見の一致を見るに至らず急速に運びませぬので誠に恐懼の至りで御座ります。然しながら終局の目標に就きましては陸海相通ずるものがありますので急に理想に趨らず又形式に捉はれず能く現実即し、序を逐ひ刻下の戦局に処して實質的に目的を達成する様至誠以て更に更に工夫を重ね必ずや大御心に副ひ奉らんことを期して居ります右謹みて奉答致します。

かくして、陸海合同への努力も水泡に帰し、陸海軍は宿命的対立のまま消滅していった。

し、小笠原群島の中核を成す島である。東西八料南北四料に過ぎず、しかも硫黄瓦斯を噴出し、地熱が高く（洞窟温度四八度に達す）、水も乏しい猫額の孤島ではあるが、島の中部及び南部に飛行場を持つてゐるため、既に敵手に歸したるマリアナ基地と帝都とを連ぬる唯一の戦略的中継基地を成してゐた。換言すればこの島が一度敵手に陥ると、帝都を始め東部日本の要域は敵戦爆連合群の奇

襲的攻撃に曝されること必至である。

大本営はかくの如き戦略的地位に鑑み、敵が基地推進の主作戦線を東支那海方面に指向する場合においても、先ずこの島が狙われる運命にあることを期していた。特にこの島に対して日増しに激化する敵の動向に鑑み、早ければ二月中に敵を迎えるであろうと判断していた。蓋しサイパン陥落以降この年一月までの間敵機動部隊の来襲は十二回、延一、二六九機、敵基地空軍の空襲は六九回、延一、四七九機を数え、水上艦艇の攻撃は八回、延六四隻に上り、一月に入ってから特に活況を呈するに至つたからである。

〔我が防備——孤立無援〕 先に昭和十九年夏、捷号作戦が計画された当時、大本営はこの島を本土防衛線の一環として確保し、米軍来攻の際は航空戦力を集中して敵を撃滅する方針を定め、作戦準備を進めていた。

これがため東部日本に配備されている陸軍の教導航空軍と海軍の第三航空艦隊をしてこの航空作戦を担任せしむる計画であつた。又地上防備に任ずる小笠原兵団は来攻米軍を撃破し、小笠原群島を死守し敵の飛行場利用を成るべく長く制扼して、我が航空作戦を容易にする使命を与えられていた。

しかるにフィリピン方面の敗戦により航空戦力の精鋭を失ひ三、四月頃予想せられる東支那海周辺の作戦までにその再建が出来るか否かさえ懸念せられる状況と、我が航空基地の配置が硫黄島方面に対する航空作戦に不利なる状況に鑑み、従来の積極的な作戦計画を断念することとなつた。

かくて硫黄島は殆ど我が空海の支援に見離された小笠原兵団が、孤立無援、独力を以てその守備に当ることとなつた。

硫黄島守備部隊の作戦に関し、後退配備と水際直接配備の両案が陸海軍間論議の種となつていたが、前項作戦方針の変更に伴つて、守備部隊指揮官栗林中将は縦深に構築せる坑道陣地を利用する持久

出血戦法を選んだ。

硫黄島守備部隊の編組と戦力の概要は次の通りであつた。

一、編組の主なるもの
第百九師団主力
混成第二旅団

歩兵第四百十五聯隊
独立混成第十七聯隊第三大隊
戦車第二十六聯隊

独立機関銃第一、第二大隊
独立速射砲第八、第十二大隊
中迫撃第二、第三大隊

独立臼砲第二十大隊
その他

海軍部隊約七千五百名

二、戦力
人員約二三、〇〇〇名

2 兵器
兵器

名	称	数	量	弾	薬
火砲	(七五耗以上)	一二〇	一〇〇〇	各門	一〇万発
対空火器	(三五耗以上)	三〇〇	三〇〇〇	各門	五〇〇発
小銃、其の他の小火器		二〇、〇〇〇	二〇、〇〇〇	各砲	二〇〇万発
迫撃砲	(八匁と一〇匁)	一三〇	一三〇	各砲	九〇発
臼砲		二〇	二〇	各砲	四〇発
噴進砲		七〇	七〇	各砲	五〇発
対戦車砲	(四七耗)	四〇	四〇	各砲	五〇〇発
戦車	" (三七耗)	二〇	二〇	各砲	五〇〇発
戦車	" (三七耗)	二三	二三	各砲	五〇〇発

3 糧秣二カ月半分

なお硫黄島の築城は元山を中核とし、坑道二八軒に及ぶ陣地の構築が計画せられ、敵来攻時には概ねその七〇％程度概成して、その延長は約一八軒であつた。又摺鉢山と元山との坑道連接は完成していなかつた。一酸化炭素と硫黄とを含有する熱気のため坑道作業は防毒面を着用しなければならぬ状況で、作業を阻害すること甚かつた。

硫黄島の兵力配備及び攻防戦の経過は附図第八の如くであつた。

2 硫黄島の攻防

【米軍上陸——水際の反撃】 一月下旬我が海軍無線謀報はマリアナ、ウルシー方面における米軍船団の動きが高潮しつつあることを

報告した。次いで二月五日には中部太平洋方面における米軍飛行機の呼出符号が一斉に変更され、しかも小笠原群島方面に対する新企図を示唆する交信状況の変化を掴んだ。これがため敵の進攻企図を警戒しつつある折柄、二月十三日海軍偵察機は米軍艦船一七〇隻よりなる大船団がサイパン島西方八〇哩沖を北々西に航進しつつある報を打電した。小笠原兵団は直ちに戦備を下令した。十六日米軍機動艦隊は延千機を以て関東地方を襲撃し、一方早朝より硫黄島に対し、熾烈なる艦砲射撃を開始した。遂に敵の硫黄島上陸の秋が来た。十八日には水際陣地及び飛行場破壊のため、大規模の艦砲射撃を加えた。前年六月二十四日以降、この日までの来襲延機数は三、三七一機に上つた。敵は十九日午前八時より戦艦三隻、巡洋艦九隻、駆逐艦三〇隻の艦砲射撃及び空母五隻の爆撃の掩護を受けつつ舟艇約一三〇隻を以て上陸を開始した。上陸準備のため敵が沿岸の陣地に浴びせた艦砲射撃の巨弾は約八、〇〇〇発を数えた。午前十一時頃には上陸兵力は一万、戦車二〇〇以上に達した。我が守備隊

はこの敵の猛砲爆撃を冒し水際陣地の部隊と砲兵火力を以て果敢なる反撃を加えた。就中独立速射砲第八大隊小隊長中村少尉及び同第十二大隊早内大尉は敢然自ら砲を操作して、中村少尉は敵戦車二十数輛、早内大尉は数輛をそれぞれ擱坐炎上せしめ早内大尉は更に爆薬を抱いて敵戦車に肉迫突入し、いずれも壮烈なる戦死を遂げた。二月二十二日傍受した敵の電報は損害続出、苦戦を訴えつつあつた。このような敢闘の甲斐もなく絶対優勢なる敵の火力に圧倒されてしまつた。上陸敵軍は米海兵第四、第五師団と推定せられた。この日の砲爆撃により海岸の我がコンクリート製トーチカの全部が破壊せられ、火砲陣地は半減した。敵は上陸後も約六〇隻の艦隊を以て砲撃を続行すると共に、空母六隻を以て一日延約千六百機の銃爆撃を加えた。二十日には早くも千鳥飛行場を失い南北地区を分断せられた。二十一日には更に米軍は大型輸送船三〇隻の後続新兵団の揚陸を開始した。

二十二日夕刻米軍第一線は南波止場、元山飛行場北側、千鳥部落の線に達し、その進出深度は二軒に及び、橋頭堡を概成した。この日の砲撃は実に三万発を数えた。

第六航空軍は一部を以て艦船及び上陸地点の攻撃を敢行し、数隻を撃沈し、又第三航空艦隊の一部も同様一部を以て米艦艇に対する攻撃を敢行し米航空母艦一隻を撃沈した。しかしながら大勢を左右するに由なく二十三日には早くも元山第二飛行場も奪取せられた。

【主陣地帯の激戦——敵全島を耕す】 二月二十三日から三月三日に亘り中央地区主陣地帯において日米両軍の寸土を争う必死の攻防戦闘が反復せられた。

二十六日頃には米軍のため主陣地帯を蚕食せられて田原坂、城山等の陣地を失い、元山砲台、屏風山において必死の争奪が反復された。これより先、この島の東南端にある最重要拠点摺鉢山を死守していた厚地海軍大佐の指揮する海軍の守備隊は、十九日の艦砲射撃

により全火砲を破壊せられ大多数は戦死し、摺鉢山の山容は一変する状況であつた。二十一日までのこの砲撃は継続せられ飛行機と戦車の猛撃を受け二十三日に至るまでこの高地を繞る戦闘が続いたが、遂に大部は全滅した。

孤島を取囲む米艦隊の砲撃と、早くも陸上基地を併用する米航空部隊の支援を受ける米上陸部隊は、優勢なる砲兵、戦車とを以てローラーの如き攻撃を不斷に反復した。その耕すに似た破壊は我が陣地を顛覆し、死物狂いに敢闘する我が勇敢なる将兵の血肉をさらつた。我が将兵はこの絶望的な苦闘にも断じて屈することなく、上下一丸となつて敢然として孤島死守の任務に奮闘した。次の数字は激戦の模様を髣髴たらしめるに足る。

二十六日までの彼我の損害推量

我が損害

兵員 第一線部隊平均五〇%

重火器 大半破壊

火 砲 六〇%

米軍に与えた損害

兵員 一三、〇〇〇名

戦車破壊若しくは擱坐 二二〇輛

飛行機撃墜 六〇機

艦 船 撃沈 戦艦又は巡洋艦二隻、巡洋艦四隻、駆逐艦九隻、

艦 船 上陸用舟艇三隻

炎上 上陸用舟艇等三隻

二月二十七日、守備隊は玉名山、東山地区、北部落、漂流木附近の独立拠点に陣地を収縮して持久戦を行う方針をとつた。米軍は海兵第三、第四師団を第一線に出し、海兵第五師団を第二線に控置して力攻を続け、これらの拠点は孤立の形勢となつた。三月二日、三日の激戦により我が火砲戦車の大部は破壊せられ、指揮官は六五%

死傷し兵員は三千五百名に減耗して、最早組織的戦闘の遂行が困難になつた。

【最後の玉砕戦闘——咽ぶ硫黄ガス】 栗林中将は三月五日、残存兵力の主力を北地区の複郭陣地に集め、最後の戦闘を準備した。十三日には米軍の一部がこの複郭陣地に侵入し、我が部隊は午前九時軍旗を奉焼した。

兵団長は、この苦しい激戦の間にも沈毅冷静に作戦を指導し、しかも日々貴重な戦訓を大本営に打電することを努めながら、戦闘の苦難、増援の希望等には一言も触れなかつた。全将兵はこの兵団長を信頼して一丸となつて戦ひ抜いた。米軍に与えた損害は三三、〇〇〇、戦車二七〇台と推定された。かくて今は掘るべき最後の複郭陣地も形骸なきまでに破壊せられ、将兵の大部は斃れ火砲は破壊し尽された。任務を履行した兵団長は、三月十七日別項の如き訣別の辞と辞世の歌を大本営に打電し、同夜残存将兵八〇〇名と共に出撃し、最後の力闘と光榮ある戦死を求めた。その奮戦の状況は二十二日まで報ぜられた。

遂に一カ月に亘る硫黄島の戦闘は終焉した。爾後小笠原群島守備の指揮は父島守備隊長立花芳中将がとることとなつた。

三月二十二日には早くもこの島の飛行場に進出した米軍大型及び小型飛行機は一〇機を数えた。

かくて米軍の次の攻撃の矢が、台湾若しくは沖縄方面のいずれかに指向せられることが確定的に予期せられる段階に入つた。

【栗林兵団長訣別の電報】 戦局遂に最後の関頭に直面せり 十七日夜半を期し小官自ら陣頭に立ち 皇国の必勝と安泰とを祈念しつつ全員壮烈なる総攻撃を敢行す 敵来攻以来想像に余る物量の優勢を以て空海陸よりする敵の攻撃に対し克く健闘を続けたるは小職の聊か自ら悦びとする所にして部下将兵は真に鬼神をも哭かしむるものあり然れども執拗なる敵の猛攻に将兵相次いで斃

ために御期待に反しこの要地を敵手に委ねるの已むなきに至れるは誠に恐懼に耐へず幾重にも御詫び申し上ぐ。特に本島を奪還せざる限り 皇土永遠に安からざるを思ひ縦ひ魂魄となるも誓つて皇軍の捲土重來の魁たらんことを期す。今や彈丸尽き水涸れ戦ひ残れる者全員愈々最後の敢闘を行はんとするに方り熟々皇恩の忝さを思ひ粉骨碎身亦悔ゆる所にあらず 玆に永へに御別れ申

第六章 沖 繩 作 戦

1 九州沖航空作戦

〔米機動艦隊の九州沖來攻と我が出撃〕 丹作戰に失敗し、硫黃島の戦況また終焉に近づきつつある三月十七日、聯合艦隊の通信諜報は、米機動艦隊が三月十四日頃ウルシーを出航し、九州方面に進攻しつつありとの情報を報じた。

この機動艦隊に対する作戰の方針について、聯合艦隊と第五航空艦隊の間に意見の相違を生じ、敵を目前にしつつ三月十七日激しい応酬が交わされた。もともと天号作戰計画の基本方針では、敵機動部隊が上陸部隊を伴わない場合は攻撃を差控え、兵力を温存する方針であつた。聯合艦隊司令長官豊田大將は三月十七日朝、重ねてこの方針を電命した。ところが第五航空艦隊司令長官宇垣纏中将は、次の二つの理由により、この米機動艦隊を攻撃すべきであると、聯合艦隊司令長官に対して強硬なる意見の具申を行った。

一、米機動部隊が上陸部隊を随伴してゐるか否かを適時確認することが困難である。確認し得る時期を待つてゐる間に敵機動艦隊の攻撃を受け、我が航空部隊が地上で潰滅される。

二、仮令上陸部隊を伴はぬことが確実であつても無為に待機する間に米機動艦隊の攻撃を受け、戦はずして基地に於て大損害を

上ぐ

終りに左記駄作御笑覧に供す

国のため重きつとめを果し得て矢彈尽き果て散るぞ悲しき仇討たて野辺には朽ちじわれは又七度生れて矛を執らむぞ醜草の島に蔓る其の時の皇国の行手一途に思ふ

受ける。朝鮮、本州方面への退避は基地の準備が不十分な為困難である。

聯合艦隊及び大本營海軍部は、遂に第五航空艦隊司令長官の意見に引きずられてその決心を第五航空艦隊司令長官に一任することとなつた。

第五航空艦隊司令長官は直ちに戦闘準備を下令した。機動艦隊攻撃を重視する海軍戦法の伝統の然らしむところであつた。三月十七日午後十一時敵の機動艦隊四群を確認し、直ちに全力攻撃を決意し、これを発令した。

〔第五航空艦隊の攻撃——戦果の誤判〕 三月十八日の午前三時三十分第五航空艦隊の第一撃が開始された。丁度これと入れ違ひに米機動艦隊の艦上機は午前五時四十分から南九州及び四国方面に対し連統的に攻撃を始めた。この日の攻撃において空母二隻、戦艦二隻、巡洋艦一隻、駆逐艦二隻撃沈、空母二隻大火災の戦果を挙げ得たものと判断された。

三月十九日米機動艦隊は依然西日本一帯に対する攻撃を続行した。第五航空艦隊もまたこれに対する反撃を継続した。二十日更に都井岬東方一二〇哩を南下中の米機動部隊に対し攻撃を続行し、エセックス、サラトガ型空母各一隻に大火災を生ぜしめた。同夜更に

攻撃を続行すると共に、米機動部隊は甚大なる損害を蒙つて南方に退避しつつあるものと判断し、二十一日追撃攻撃を加えたが、豈計らんや我が航空部隊は敵艦上機の反撃に遇つて全滅し、今までの確認戦果に疑念が生じた。

本作戦において、第五航空艦隊は六九機の特攻機を含む一九三機の飛行機を使用し、精鋭機の八〇%即ち一六一機を失つた。別に地上被害五〇機があつた。しかしながら第五航空艦隊の報告した綜合撃沈戦果は、空母五隻、戦艦二隻、大型巡洋艦一隻、中型巡洋艦二隻、不詳一隻に達した。これがため米軍の東支那海周辺地域に対する次期進攻企図は一頓挫を来し、その時機は遅延するだらうと判断すると共に、米機動部隊は戦力恢復のためウルシーに帰投するものと即断した。

註 三月二十一日米ニミッツ司令官報告によると米軍の損害は艦船一隻(空母フランクリン)大破、数隻小破せるも運動し得る状態であつた。

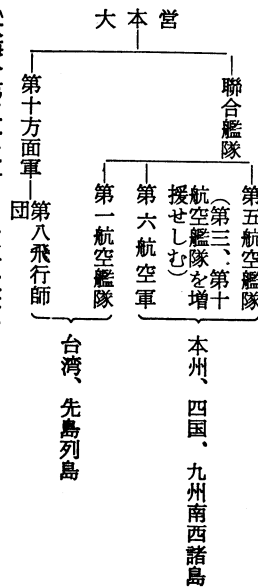
〔沖縄へ来攻——真企図再び誤判〕 しかるところ、三月二十三日早朝から沖縄諸島に対し予期しない米機動部隊の攻撃が突如として開始された。大本営を始め第五航空艦隊は九州沖の戦果に若干の疑念は持つていたが、なお相當の戦果を収め得たものと確信していたため、米機動艦隊のこの攻撃はウルシー帰投の途次、九州沖航空戦において蒙つた大きな損害に対する腹癢せをやつていゝものと甘い判断をした。あたかも昭和十九年秋、台湾沖航空戦の戦果を過信し、米軍のレイテ湾侵入の真企図を誤判したと同様の過失が再び繰返えされた。

2 米軍の沖縄上陸

〔指揮関係の改訂——陸海航空統一指揮〕 天号作戰計画における陸海軍航空部隊の指揮関係は協力の関係であつたが、三月十九日聯

合艦隊司令長官が統一指揮することとなり、第六航空軍は天号作戰に関し聯合艦隊司令長官の指揮下に入つた。

天号作戰に参加する主なる部隊の指揮関係は次の通りとなつた。



〔大海令第五一三三号——天号主体の思想〕 海軍の天号作戰に対する熱意は三月に入り急速に向上し、遂に決戦思想に発展し、決号(本土)作戰従、天号作戰主の構想に変わつてきた。三月二十日、海軍は大海令第五一三三号を以て「当面の作戰計画大綱」を策定発令し、この思想を明かにした。即ち「当面作戰の重点を沖縄航空戦」に置き、「航空戦力を徹底的に集中發揮し、進攻米軍主力を撃滅す(本作戦を天号作戰と呼称す)。此間極力皇土防衛を強化す」との趣旨の命令であつた。又本命令において「沖縄に進攻する米軍の大部を洋上に撃破し、沖縄本島の地上防衛軍は残余の一部上陸に成功する敵の基地獲得を阻止し、天号作戰の遂行を容易にする」戰略思想を明示した。既述第三十二軍の北、中飛行場放棄の持久戰略思想とは根本的な相違が認められた。

〔天号作戰発動——無理と未完、初動遂機〕 三月二十五日、沖縄本島南東七〇乃至一七〇哩の海域に三群の機動部隊を認め、沖縄本島周辺の米艦船は七〇隻に達した。二十四日以来、米軍の上陸企図について懸念していたところ、その懸念は現実となつた。即ち二十五日現地軍は米軍の慶良間列島上陸を報じた。(実際は二十六日)

今や米軍の沖縄上陸の企図は明確になつた。しかるに日本軍航空部隊の態勢はこの重要な戦機に投じ得ない状態にあつた。即ち海軍では本作戦の主役たるべき第五航空艦隊は九州沖航空戦において戦力を消耗し、第三航空艦隊、第十航空艦隊は未だ練成未完のもの多く、しかも未だ九州に転進してゐなかつた。一方陸軍の第六航空軍もまた特攻機の九州推進意の如く進歩しないのみならず、攻撃の前駆となるべき第十二飛行団司令部はまだフィリッピン¹の損耗補填が出来なため、指揮活動を開始出来ぬ有様であつた。況んや南西諸島に予め展開を予定してゐた十二隊の特攻隊の展開は、その緒にもつてゐなかつた。

聯合艦隊司令長官は三月二十五日午後八時天号作戦を命令し、二十六日これを発動した。第三航空艦隊、第十航空艦隊は第五航空艦隊司令官の作戦指揮下に入れられ九州への推進を下令された。両航空艦隊の可動兵力は三月三十一日に至つて漸く九州に展開を完了した。

第六航空軍司令官菅原道大²中将は三月二十八日、漸くその一部を徳之島に推進中、敵船団発見の報に接し、攻撃を下令した。しかしこの攻撃に使用し得た機数は僅かに重爆一〇機、襲撃機約一五機に過ぎなかつた。但し台湾の第八飛行師団は、三月二十六日より慶良間周辺の敵艦船に対し攻撃を開始し、三十一日までに特攻機四五機、爆撃機一七機を使用し、戦果轟沈破三一隻を報じた。

かくて天号作戦初動の貴重な戦機は、わが作戦準備未完のため逸せられた。天号作戦計画自体に無理があつたこと、九州沖航空作戦による第五航空艦隊の戦力消耗と敵情判断の誤判等がその主なる原因であつた。

米機動部隊は三月二十八、二十九日、再度九州方面に來攻してきたが、第五航空艦隊はこれに対して有効なる反撃を行う戦力を持たなかつた。

〔米軍の本島上陸〕 慶良間列島の攻略に成功した米軍は、四月一日大型舟艇一五〇隻、小型舟艇六〇隻を以て、北、中飛行場正面嘉手納海岸に上陸を開始した。沖合には数百隻の米艦船が海面を圧した。この地区に配備せられていた臨時編成の前進部隊は潰滅し、米軍は夕刻早くも北、中飛行場を占拠してしまつた。この報は大本営並びに陸海軍航空部隊に大いなる衝撃を与えた。

註 戦後の米側資料によると沖縄作戦に参加せる米軍艦船は一四五七隻（内輸送船四三〇隻）に上つてゐた。上陸せる陸軍並びに海兵部隊の総兵力は一八万三千名を数えた。

四月三日には、その第一線は第三十二軍の主陣地の前線、普天間東西の線に進出し、本島の中部地区は米軍が完全に占領するところとなつた。

第八飛行師団は四月一日より三日に亘り特攻機四〇機、爆撃機一九機、誘導機二〇機を使用し、嘉手納沖敵艦船に対し、果敢なる攻撃を加え、撃沈破二十数隻の戦果を報じたが、大勢を左右するに由なかつた。

〔第三十二軍出撃に決す〕 第三十二軍は、攻撃要望電により四月四日朝、四月七日より攻撃を決定し、各方面に打電したが、五日には中止電を發した。ついで第十方面軍司令官の「第三十二軍は北、中飛行場に向ひ攻撃すべし攻撃開始は四月八日とす」との電命により、四月八日を期し総攻撃を実施し、北、中飛行場を奪回することとなり、四月六日午後二時、これに関する命令を下達した。この決心は第三十二軍の持久戦略方針と相反するもので、上司の要求で已むを得ず採られたものである。

註 戦後の米軍資料によると米軍は上陸第六日迄に、戦闘機約二百機を北、中両飛行場に進出せしめた。

3 航空総攻撃と第三十二軍の戦闘

〔菊水一号作戦〕 聯合艦隊は、米軍が北、中飛行場の使用を開始するに先だち、米軍に大損害を与え、戦勢を有利に展開する必要を認め、四月五日第三十二軍の地上総反攻と相呼応して航空総攻撃を実施することとなった。この作戦を「菊水一号」と命名した。

聯合艦隊司令長官は更に残存海上部隊の主力——第二艦隊（戦艦大和、巡洋艦矢矧及び駆逐艦八隻）を以て海上特攻隊を編成し、沖縄米軍泊地に突入せしむる決意を固めた。四月六日、本島周辺海域の敵艦船は戦艦九、巡洋艦一五、駆逐艦三二、輸送船六四、その他五八隻を数えた。

菊水一号作戦は四月六日、七日の両日に亘り決行せられた。台湾の第一航空艦隊、第八飛行師団もこの総攻撃に呼応する攻撃を決行し、六九九機がこの総攻撃に参加した。そのうち、特攻機は三五五機に達した。この攻撃は奇襲に成功し、大成功が報ぜられた。撃沈戦艦二隻、巡洋艦三隻、駆逐艦八隻、輸送船二一隻、掃海艇三隻、その他二七隻のほか、撃破六一の戦果を数え挙げた。

〔海上特攻隊の悲劇——帝國艦隊葬送曲〕 海上特攻隊は四月六日夕、伊藤整一中將統率の下、内海を発航し、豊後水道を南下して四月七日朝、大隅海峡を西進したが、不幸にして豊後水道において敵潜水艦に、次いで米軍哨戒機マーチン一機に発見せらるるところとなった。我が特攻隊は基地航空部隊の掩護もなく、一機の搭載機も持たず、猛牛の如く沖縄の敵泊地に突進を続けたが、午後零時四十分と午後一時三十三分の二次に亘り米艦載機約三〇〇機の攻撃を受け、戦艦大和を始め主力が沈没した。不沈を誇る六四、〇〇〇噸の戦艦大和が沈没したのは正に午後二時二十三分であつた。巨艦大和は激闘二時間余、魚雷一〇本、大型爆弾五箇、小型爆弾多数を被り、遂に九州西南方沖約五〇哩の海底に没し去り、伊藤中將以下約三千の将兵は艦とその運命を共にした。ここに伝統を誇つた帝國海軍の海上勢力は文字通り潰え去つたのである。

〔第三十二軍の総攻撃決行寸前に中止〕 第三十二軍は第六十二、第二十四師団、独立混成第四十四旅団、海軍陸戦隊を四線に重畳展開して、総攻撃を準備しつつあつたところ、偶々四月七日午後三時頃、米船団一〇隻が新たに牧港沖合に出現したので、側背に対する敵の上陸を憂慮し、かねて持久戦略を最も強く固執しつつあつた八原作戦主任参謀の意見具申により、決行の寸前に総攻撃は中止せられた。かくて最も重要な地上総反攻の戦機は失われてしまつた。後に至つて第三十二軍のこの決心の変更を知つた大本営及び陸海航空部隊は痛嘆したが、如何ともなし得なかつた。

米上陸部隊総指揮官バックナー陸軍中將は海兵第三軍団を以て国頭地区を掃蕩せしめつつ、第二十四軍団を以て第三十二軍主力の陣地に近迫し、着々攻撃準備を進めつつあつた。

〔菊水二乃至五号作戦——地上漸く攻勢〕 菊水一号作戦の戦果と第三十二軍地上総反攻決行とを信じ、米軍動搖の兆ありと確信する聯合艦隊は、四月九日引続き総攻撃を継続し、米艦船を全滅せしむべく、次の如き要旨の壮烈なる電命令を発令した。

一、諸情報綜合するに敵は動搖の兆ありて、戦機は將に七分三分の兼合にあり

二、聯合艦隊は此の機に乗じ、指揮下一切の航空戦力を投入総追撃を以て飽く迄天号作戦を完遂せんとす

第二次総攻撃は四月十日の予定であつたが、四月十二、十三日に決行された。この攻撃には三九二機（内特攻二〇二機）が使用せられ、戦果は各種艦船四七隻の撃沈を報じた。沖縄進攻米軍の損害甚大なりとの外電報道は、大本営海軍部や聯合艦隊首脳の決戦思想を掻き立て、言論は一斉に沖縄決戦を高唱し、国民の間にも戦勢挽回を本作戦に期待する氣運が愈々昂まつて来た。

第三十二軍司令官は前述第十方面軍司令官の意を体し再び陣前出

撃を決意し、十二日夕から攻勢を開始した。しかし部署と決意の不徹底も禍し、却つて莫大なる損害を蒙つて中止した。

陸海軍挙げての航空総攻撃は第三次（四月十六日）第四次（四月二十一日、二十二日）第五次（五月四日）と相次いで続行された。そして総攻撃の合間にも連日不断の小規模攻撃が執拗に実施された。四月六日から五月四日の間に使用せられた飛行機の総延機数は一、七一一機の特攻機を含む五、〇六八機に及び、そのうち一、六一機が失われた。戦果は米艦船の撃沈一六一隻、撃破二四一隻と報ぜられた。

註 米軍の資料によると米艦船の沈没はこの間一七隻内外に過ぎなかつたが、多数の艦船が損傷を受け、大なる脅威と苦痛を蒙つたものの如く、次の資料でもこれを窺知し得る。

1 昭和二十年四月十七日、第五艦隊司令長官スプルーアンス大將が、太平洋艦隊司令長官ニミッツ元帥に対し具申せる意見

敵の特攻攻撃の手練と効果、それによつて受ける我が艦隊の喪失と損傷は、これ以上の攻撃を喰止める為、とり得るあらゆる方法をとらなければならぬ段階に到達した。使用し得るすべての飛行機で九州及び台湾の飛行場を攻撃することを進言する。

2 沖繩作戦に従軍したニューヨーク・タイムス紙の軍事記者ハンソン・ボールドウィンの記述

敵機の攻撃は昼も夜も絶えたことがない。慶良間の錨地は損傷艦で埋めつくされ、太平洋到る所跛を曳く艦船の列が東へ東へと進むのが見られた。

〔陸海軍作戦構想の相違〕 海軍は本作戦の成功を愈々確信し、沖繩奪回をも志すようになると共に、天号作戦に対する陸軍の熱意に不満を感じ初めた。四月二十一日、聯合艦隊が指令した次の作戦方

針がこの間の消息を物語っている。

聯合艦隊は愈々航空作戦を強力に遂行し、好機沖繩に逆上陸を遂行して戦局を打開す之が為

一、第三、第十航空艦隊より極力航空戦力を抽出し、第五航空艦隊の戦力を強化し、全航空兵力を挙げて天号航空作戦を強行す
二、陸軍に対し第六航空軍に対する戦力補充を督促し、第六航空軍を鞭撻して天号作戦に一途邁進せしむ

三、台湾の第一航空艦隊、第八飛行師団の作戦協力を強化する如く措置す

海軍が沖繩決戦に熱中している一方、陸軍は後述する如く四月下旬以来本土決戦の本格的準備に懸命の努力を傾注しつつあつた。勿論第六航空軍を聯合艦隊の指揮下に入れ、可動航空戦力をこれに投入したが、当時日毎に激化するB 29の本土空襲に対処するため、防空兵力までも天号航空作戦に投入することは出来なかつた。蓋し本土の防空を担任している陸軍としては戦争完遂上防空を重視せざるを得なかつた。海軍側では陸軍が本土決戦を重視するの余り、天号航空作戦に対する航空戦力の出し惜しみをしているのでは無いかという疑念さえ持つた。

元來陸軍の沖繩作戦に対する考え方は、本土決戦準備のため出血、持久作戦を行うにあつた。本土に約六〇箇師団の戦力を準備しつつある陸軍としては増援の方途も無く、二箇師団有るの兵力しか存在していない離島沖繩において決戦を遂行する構想はもともと持ち得ないところであつた。一方海軍は既に海上部隊全滅し、残存の航空部隊が唯一の戦力である。加うるに航空作戦の戦果を過信しつつある海軍としては、海軍戦略の特性と相俟つて沖繩決戦を願望するのままた故あることであつた。

〔第三十二軍の敢闘〕 航空部隊が沖繩決戦に必死の願望と努力とを賭け、又戦果を過信しつつある間、沖繩の戦況はその判断に反し

て悪化しつつあつた。

米第二十四軍団は四月十九日以来、全線に互り総攻撃を開始した。聯合艦隊の米艦船大量撃沈破の報告に拘らず、沖縄方面の米艦船は減勢を見せず、全島を圍繞して史上空前の艦砲射撃を第三十二軍の頭上に浴びせていた。第三十二軍は西海岸正面の主陣地を逐次蚕食せられ、四月二十二、三日頃には、第六十二師団は連日の死闘にかかわらず戦線の保持漸く危殆に当面临しつつあつた。第三十二軍は、南部にあつた第二十四師団及び独立混成第四十四旅団を第一線に増強するの余儀なきに至つた。

当面の米軍は、第二十四軍団の三箇師団と国頭方面にある海兵第三軍団の二箇師団のほか、更に中間地区に一乃至二箇師団を控置しているものと判断せられた。天号航空作戦の大目的たる敵の上陸軍の洋上撃破には完全に失敗し、第三十二軍は無疵のまま上陸した敵六乃至七箇師団を邀えたのである。

今や第三十二軍は五、六倍の米地上軍の攻撃と全島を覆う米艦砲射撃の中に孤立し、寸土を争う死闘を遂行しなければならない境地に立つていたが、四月下旬、第三十二軍の陣地は左翼から崩壊し始めた。

〔最後の地上攻撃〕 第三十二軍の消極的態度は大本営や海軍及び航空部隊の焦慮と不満とを一層深刻にした。

四月二十九日、第三十二軍司令官は、全般の戦況及び我が戦力より判断し、最後の攻勢を決意し命令を下達した。攻勢決行は五月四日と予定され、第三十二軍の全兵力の使用が計画された。五月四日、第三十二軍の最後の攻勢は予定の如く決行された。しかし戦況の把握が十分であつた上米軍の砲爆撃に遮ぎられ、五月五日、第三十二軍は攻勢失敗せるものと認めこれを中止し再び陣地に拠る持久抵抗に復帰した。

この攻勢により、第二十四師団はその戦力の二分の一を損耗し

た。その他の部隊も甚大なる損害を蒙つた。貴重なる弾薬を多数消費し、爾後一門、一日、一〇発に制限しなければならぬ状態に立ち至つた。最後の攻勢失敗は首里戦線崩壊の端緒となり、沖縄の戦況は俄然悪化する契機となつた。このような戦況の決定的悪化に拘らず、海軍の沖縄奪回の願望と熱意は益々強いものがあつた。

かくて陸海軍間における作戦構想の相違は五月上旬、第三十二軍の攻勢失敗、戦況の急速悪化に伴い愈々顕著になつて来た。即ち陸軍においては逐次天号作戦の前途に見切りをつけ、本土決戦準備に徹底せんとする傾向を示したのに対し、海軍は依然天号航空決戦の続行の熱意を堅持したことであつた。

4 天号作戦の続行

〔米空軍の反撃——沖縄基地活動〕 我が航空特攻に悩まされた敵軍は五月に入るや俄然活発なる空軍の反撃を開始した。その一つは、B 29と機動部隊の九州航空基地に対する攻撃であつた。B 29の攻撃は数回反復せられ、その延機数は約三〇〇機に達した。又艦載機の攻撃は五月中旬、二回に亘り南九州の基地に対して行われた。その延機数は約一、六五〇機に及んだ。他の一つは、四月下旬以来使用を開始した沖縄基地米戦闘機の我が特攻機に対する遠撃作戦であつた。前者は我が空軍の活動を相当制扼したが、掩護施設が徹底していたので飛行機の直接被害は比較的少かつた。後者は米軍の優秀なリーダー装備及び暗号解読能力と相俟つて、我が特攻作戦に致命的な打撃を加えた。もともと特攻機は多数の改修練習機を含み、器材は不備で、操縦士は烈々たる殉国の精神には燃えていたが、遺憾ながら練度が低く、しかも航路は南西諸島沿いに限られ、攻撃海域は限定されていたため、準備万全なる敵機の遠撃に遇うこととなつた。

その上米軍は既に沖縄基地が使用し得るようになったためにその

空母艦隊は、我が航空特攻攻撃の威力圏外に位置し、新たに進出せる基地航空部隊と共に我が特攻機に対する脅威を倍加した。本島の北、中飛行場を過るに米軍の手中に与えたことはこのように我が天号航空作戦を困難ならしめた。航空総攻撃は回を追う毎に損耗が増大し、戦果が減少してきた。

〔菊水六乃至八号作戦〕 五月十一日、第六回目の航空総攻撃が行われた。二一七機(内特攻機一〇四機)を使用し、一〇九機を失つたが、戦果は輸送船一隻、不詳七隻の撃沈破が報告せられたのみであつた。第七、第八回の総攻撃は五月二十四、五日及び五月二十七、八日に遂行せられた。計七三七機(内特攻機二〇八機)を使用し、一六八機を失つたが、戦果報告は撃沈一〇隻、撃破八隻に止まつた。

〔義号作戦——義烈空挺隊のなぐり込み〕 かくの如く沖縄基地米空軍の反撃は逐日強化せられ、我が特攻機の損害と戦果の比は愈々悪化してきた。ここにおいて大本営は沖縄米基地に決死の挺進隊を使用し、一時基地の使用を不可能に陥れ、その好機に航空総攻撃を決定せんことを企図した。この計画は五月中旬実行する予定であつたが、五月二十三日夜に至つて決定された。この挺進隊を義烈空挺隊と名づけ、この作戦を義号作戦と呼んだ。

その編成は奥山道郎大尉の指導する陸軍挺進部隊一二〇名(五箇小隊と指揮班に分る)から成り、爆撃機一二機に分乗し、破壊用の爆薬と軽兵器を以て装備せられた。作戦の方法は北、中飛行場に夜間強行着陸を実施し、米軍の飛行機、飛行場施設等を破壊し、基地の使用を一時不能に陥らしめる、所謂「なぐり込み戦法」であつた。

五月二十三日夜愈々この作戦を決定したが、聯合艦隊は計画に反し、二十四日の午後米軍機動部隊を発見し、この攻撃に戦力を使用したため、第六航空軍が独力本作戦及びこの機を利用する特攻攻撃

を行うこととなつた。挺進隊中、四機は不時着又は反転し、八機が北及び中飛行場に着陸し、五月二十七日まで奮闘を続け、五月二十五日は完全に敵基地を制圧し得た。しかるに五月二十五日、二十六日は天候不良のため、特攻攻撃を遂行することを得ず、あたら義烈空挺隊の戦果を利用することが出来なかつた。

〔陸軍、天号作戦を見限る〕 陸軍は上述のような作戦推移の景況に、既に予定した可動航空戦力の大部を投入した現況に鑑み、五月下旬天号航空作戦の前途に見切りをつけた。

五月下旬聯合艦隊司令長官豊田大將は軍令部総長に転任し、小沢中将がその後を襲つた。たまたま小沢中将は聯合艦隊の指揮下にある陸軍の第六航空軍司令官菅原中将より新参であつたので、五月二十六日、第六航空軍は聯合艦隊の指揮下から脱し、航空総軍司令官の指揮下に復帰せしめられた。

大本営陸軍部は五月二十六日の命令を以て航空総軍司令官に対して九州及び朝鮮海峡方面を重点とする本土航空作戦準備を命じ、一部を以て米軍の沖縄基地制圧の作戦を実施すべきを附加した。かくして陸軍は天号作戦を打ち切り、決号作戦に移行することとなつた。

〔海軍、天号作戦を続行す〕 海軍は、依然天号作戦の継続に熱意を持ち続けていた。六月一日軍令部の情勢判断においても天号航空作戦の戦果を相当確信していた。即ちこの判断においても「敵海上兵力に多大の損耗(撃沈大破は航母一〇乃至一一隻、護衛空母一三乃至一四隻、戦艦五隻、巡洋艦二九隻、駆逐艦九二隻、輸送船七五隻、掃海艇三二隻、不詳艇一〇二隻、中小破は二一一隻)を与え米機動部隊の飛躍的進攻を不可能ならしめた」と述べ、更に我が採るべき方策として「沖縄周辺敵艦船及敵航空基地に対する航空作戦を軌強に続行し、敵艦船の漸減並増援補給遮断を計ると共に、基地の整備並に基地航空兵力の増勢を阻止す……戦況有利に展開し、沖縄周辺敵艦船を撃破したる場合は機を失せず総力を結集して航空撃滅

戦に転移し、これと併行して沖繩方面増援作戦を行ひ得る如く準備す」と謳つた。なお決号作戦準備は天号航空作戦に支障なき範圍において、先ず四国、南九州に重点において実施することを明かにした。これによつて陸海兩軍の航空作戦指導の方針が愈々對蹠的となつた。但し前記方策の内容が示す如く海軍の天号作戦は、このごろ決戦思想から漸次出血持久作戦に變つて来た。

〔地上軍喜屋武の複郭陣地に退却〕 これより先、第三十二軍は敵の重圧を支え難く、五月二十四日、首里を捨ててその後方に戦線を収縮することを決定した。五月二十日頃における全軍の戦力は三万名内外に減少し、火炮六〇%、機関銃三〇%に減少し、敵の攻撃は愈々急を加えた。

第三十二軍はまず後方を整理し、主力は五月二十九日から沖繩本島南端喜屋武半島の新陣地に向ひ最後の退却を開始し、その運命も一、二旬の裡に尽くべき戦況に当面した。

5 沖繩の失陥

〔最後の航空総攻撃と第三十二軍の全滅〕 六月上旬及び下旬の二回に亘り航空総攻撃が敢行された。この両総攻撃において延五〇二機（内特攻機一〇四機）が使用せられ一三機が失われた。戦果の報告は僅かに七乃至八隻に過ぎなかつた。

第三十二軍は、六月三日頃概ね順調に新陣地の新配備につき、六月十一日からその陣地における最後の死闘に入つた。十七日頃戦況は絶望的段階に入り、最早組織ある戦闘も行われなくなつた。十九日、軍司令官は各方面に訣別を打電した。喜屋武半島複郭陣地における第三十二軍の抵抗も六月二十二日、遂に終焉となつた。

〔牛島軍司令官、長参謀長の切腹〕 軍司令官牛島満中將は参謀長長勇中將と共に六月二十三日午前四時三十分、海岸に面する坑道陣地の入口において次の辞世の歌を詠じつつ日本古武士の礼式に則つ

て切腹して果てた。

秋をまたで 枯れゆく島の青草は

皇国の春に 蘇へらなむ

矢弾つき 天地染めて散るとても

魂かへり魂かへりつつ 皇国まもらむ

小祿地区における太田少將の指揮する海軍地上部隊もまた、六月十三、十四日全部隊突撃を敢行し、太田少將及びその幕僚は十三日午前一時従容自決を遂げた。

敵が沖繩本島上陸以来、正に八十三日に亘る死闘の連続であつた。かくて沖繩は完全に敵の手中に帰し、該基地の米空軍は西日本一帯を制圧することとなり、又敵本土進攻軍の大基地と化した。

六月二十五日、大本営は沖繩作戦の終焉を公表した。

〔海軍の天号作戦中止〕 海軍は沖繩失陥後、なお米艦船及び沖繩基地の制圧に対する熱意を保持し、六月二十三日以降更に延五九九機（内特攻機六二機）をこの作戦に使用した。

陸軍は六月二十七日、長い間聯合艦隊の指揮に入つていた雷撃戦隊二箇も航空総軍司令官の指揮下に復帰せしめた。海軍は七月上旬に至り天号作戦を概ね断念し、漸く決号航空作戦準備に全力を傾けることとなつた。

〔本作戦の異色と彼我の損害〕 この作戦の異色は、史上空前の大航空特攻作戦の遂行と国民の戦闘参加であつた。数千の若人が祖国の難に赴き、一機克く一艦を屠るべく装備不十分なる改修練習機を駆つて、防空砲火の火ぶすまと敵艦の邀撃網を衝いて、敢然として敵艦船に突入してゐた。又十七歳より四十五歳までの男子を始め、可憐なる男女中学生に至るまで義勇隊を組織し、戦闘、通信、衛生、後方等の各種勤務に参加し、文字通り軍民一丸となつて闘つた。数万の老幼婦女子もまたこの死闘の渦中に巻き込まれて、将兵と運命を偕にしたのであつた。

本作戦における日本軍は島民義勇兵を含めて約九万九千名が玉砕し、更に島民非戦闘員の犠牲は実に一〇万に上つた。軍の生存者は七千八百余名を数えたがその一半は負傷者であり、他の一半の多くは沖繩作戦終焉後、なお坑道陣地に立籠つて抗戦を継続し、その中にはこの年の秋に及んだものがあつた。一方米軍の損害もまた四万九千名（内戦死一万一千四百名）に達し、米軍司令官ベックナー中将も六月十八日午後、陣頭指揮に斃れた。

米艦船攻撃のため使用せられた日本軍飛行機の延機数は、特攻機二、三九三（内陸軍機九五四）機を含め七、八五二（内陸軍機二、二二〇）機を数えた。敵艦船の撃沈破は約四〇四隻と報ぜられた。本作戦間における航空攻撃の実施の経過は左表の通りであつた。

〔戦果誤判の戦訓と沖繩作戦の意義〕 因みに戦後の資料により米軍艦船の実損害は沈没三六隻、損傷三六八隻なることが明かになつた。但し米航空母艦、戦艦、巡洋艦の撃沈は一隻もなかつた。

このように戦果を過大に誤判する原因として当時考察せられたのは次の如き諸点であつた。

第七章 大本營の本土決戦準備

1 決号作戦準備要綱

〔策定の経緯〕 大本營陸軍部は前に述べたように、昭和二十年初頭、この年の九月以降連合軍の本土進攻必至の情勢を見透し、新作战方針に基づく本土の兵備に着手すると共に、本土決戦の計画策定に心血を注いでいた。

その作戦計画は一月二十日策定せられた「帝国陸海軍作戦計画大綱」に基き三月中旬策定を終り、「決号作戦準備要綱」と呼称され、三月二十日、本土各方面軍の参謀長及び関係幕僚を召集してこれを

一、生還しない航空特攻作戦の特性上、戦果確認が困難である
戦果確認機も敵航空勢力の優勢に遮ぎられる

二、水柱、火柱等に眩惑せられて視察を誤る 殊に多くの場合薄暮、夜間攻撃なる為一層誤認し易い

三、同一の戦果を参加各部隊から二重、三重に報告され易い
四、将兵の戦場共通心理から戦果（含艦種）を誇大に報告し易い
なお空母、戦艦、巡洋艦等の撃沈実戦果が無かつたのは、練習機改造の特攻機を以て大型艦への突入又は致命的効果を収めることが困難なることを物語るものであらう。かくの如き戦果の誤判が台湾沖海戦以来、作戦指導を誤り、作戦の成否に影響するところが大きかつた。

颱風期直前に亘る沖繩作戦三カ月の敢闘は以上の如き数的戦果を超える重要な作戦目的を達成した。即ちこの敢闘により獲得せる貴重なる時により、後述する如く本土決戦作戦準備を概成し、敵の本土攻撃を遅延せしめた。その上敵を震撼せしめた本島軍民の敢闘は、敵をして本土攻撃を一段と慎重ならしめた。

内示し、本土の作戦準備を促進する処置を採つた。

たまたまこの日、大本營海軍部は「帝国海軍当面作戦計画要綱」を以て総力を挙げて沖繩決戦完遂の決意を明示すると共にこの間極力皇土防衛態勢を強化せんとする作戦計画を発令し、陸海軍作戦準備の比重が本土と沖繩との関係において対照的であつたことは既述したところである。

陸軍の「決号作戦準備要綱」は四月八日、後述する総軍司令部設置の際正式に関係総軍司令官及び方面軍司令官に示達された。

この計画の基本思想は後に詳述するが、本土の特性を活用し、一

沖縄航空作戦における陸海航空部隊の投入並に損失機数表 (自五月二十五日至六月二十二日)

計											
月 日	第五航空艦隊		第六航空軍		第一航空艦隊		第八飛行師団		投入機数		
	投入機数 (特攻機数)	損耗 機数	投入機数 (特攻機数)	損耗 機数	投入機数 (特攻機数)	損耗 機数	投入機数 (特攻機数)	損耗 機数	投入機数 (含む特攻機)	投入特 攻機数	損耗 機数
第一次 総攻撃	4月6.7日	443 (201)	162 (118)	138 (173)	19 (21)	9 (1)	28 (19)	26 (6)	699	355	335
第二次	" 12.13	179 (92)	101 (90)	97 (105)	16 (13)	1 (1)	2 (53)	2 (29)	392	202	205
第三次	" 16	375 (132)	110 (50)	63 (111)	42 (20)	5 (37)	29 (54)	317	498	196	182
第四次	" 21.22	111 (49)	35 (36)	52 (95)	37 (29)	11 (53)	38 (104)	381	317	131	121
第五次	" 4	195 (75)	49 (50)	61 (325)	61 (91)	11 (53)	104 (359)	196	381	196	159
4月6日 ~5月4日 小規模 計		1,963 (373)	308 (91)	144 (108)	289 (89)	53 (108)	104 (359)	205	2,781	631	609
		3,267 (922)	771 (435)	555	424 (149)	80	205		5,068	1,711	1,611
第六次	" 5 11	137 (64)	61 (40)	48 (106)					217	104	109
第七次	" 24.25	334 (98)	45 (20)	38 (71)			5 (5)	5	445	123	88
第八次	" 27.28	221 (46)	34 (39)	46 (71)					292	85	80
第九次	" 3.7	161 (6)	20 (31)	36	13 (9)	3			245	46	59
第十次	" 21.22	234 (45)	54		23 (23)				257	68	54
5月11日 ~6月22日 小規模 計		772 (34)	70 (96)	102 (96)	81 (43)	26	183 (83)	59	1,328	256	257
		1,860 (293)	284 (226)	270	117 (75)	29	188 (88)	64	2,784	682	647
總 計		5,127 (1,215)	1,055	825	541 (224)	109	547 (293)	269	7,852	2,393	2,258

億国民の蹶起協力の下、先ず残存全海空軍を挙げて特攻攻撃に任せしめ敵上陸軍を洋上に撃滅するに勉め、次いで本土の全地上戦力を決戦要域に集中し、縦深部署を以て上陸敵軍に対し決戦攻勢を断行し、戦争の帰趨を一挙に決せんとするにあつた。

しかしながら既に海上戦力を喪失し、航空戦力もまた乏しい本土の決戦においては、勢いその勝敗が地上決戦に賭けられ、実質的には陸軍の双肩にかかるの已むなき実情となつた。

この「決戦作戦準備要綱」は作戦、兵力運用、国内抗戦、国内警備、交通、通信、兵站等の諸計画から成り、更に「本土作戦に関する陸海軍中央協定」も附せられていた。その要旨は次の通りである。

作戦要綱

一、作戦の名称及び区分

本土方面の作戦を決戦と呼称し左の如く区分す

- 決一号 北海道、樺太及千島列島方面
- 決二号 東北方面
- 決三号 関東方面
- 決四号 東海方面
- 決五号 近畿、中国及四国方面
- 決六号 九州方面
- 決七号 朝鮮方面

二、作戦準備の進捗予定

作戦準備及指導を次の三期に区分す

- 第一期 四月乃至七月の間
- 第二期 八月乃至九月の間
- 第三期 十月以降

第一期に於て応急態勢兵備を整備し、第二期に於て之を強化し、第三期初頭に於て完整す

但し九州、四国に於ては六月上旬、応急態勢を整備す

三、作戦

1 帝國陸軍は速かに戦備を強化して敵必滅の戦略態勢を確立し、主敵米軍の侵襲を本土要域に於て遡撃す

之が為主戦面は太平洋及支那海正面とし、戦備の重点を関東地方及九州地方に保持す

2 敵の空襲を撃破して敵機の跳梁を制するに努め帝都及本土の要部特に生産、交通並作戦準備を掩護す

3 敵の本土要部攻略企図に対しては努めて之を洋上に撃破すると共に、上陸する敵に対し果敢なる陸上攻勢をとり神速に決勝を求む

(イ) 航空作戦指導の重点を敵の上陸企図破摧に指向し、其の主攻撃目標は敵輸送船団とす

之が為航空撃滅戦（敵基地航空及上陸部隊を伴はざる敵機動部隊に対する攻撃）防空作戦及地上作戦協力等は前項趣旨達成を主眼とし適宜其の限度を律し、以て対上陸作戦に於ける戦力の維持培養に遺憾なからしむるものとす

(ロ) 陸上作戦は上陸せる敵を求めて沿岸要域に圧倒撃滅して戦局に最終の決を求むるを主眼とす陸上部隊は縦令航空部隊等の協力を欠くも独力作戦を遂行し其の目的の達成を期するものとす

4 海軍の行ふ海上交通保護、水上、水中特攻作戦及海峡防衛に協力す

5 国土の特性を活用し特に挙国皆兵たる伝統の精髓を発揮して作戦目的の完遂を期す 又敵一部の内陸侵襲其の他情勢の推移に対応し、国土全域に亘り国内抗戦を準備すると共に国内警備の万全を期す

四、航空作戦——対上陸作戦

1 通信諜報等と相連繫し太平洋上に於ける敵空海基地に対す

る戦略搜索に努め、全般情勢判断の憑拠を求む

2 敵就中輸送船団の動靜に対する監察を厳にし適時其企図偵知に努むると共に、本土要域特に関東地方及九州地方に対する敵の侵寇に方り極力之を洋上に撃滅す

此間要すれば一部を以て右上陸行動を掩護する主要敵航空基地を制圧す

3 敵の上陸直後に於ては努めて橋頭陣地の設定確保に協力する敵護衛艦艇を制圧し、地上軍の作戦を容易ならしむ 又極力敵の補給遮断を継続す

4 地上作戦協力は緊要の時機、所要の方面に対する指揮連絡を主旨とするも、當時に於ける我戦力之を許せば局部的制空權の獲得に努め、地上作戦の遂行を容易ならしむることに努む

五、地上作戦

1 地上軍は速に敵主力の進攻方面を判断し、機に先んじ成るべく多くの兵力を該方面に機動集中し、敵の縦方向又は横方向に於ける戦力分離に乘じ神速に決戦を求む

2 敵の進攻同時数方面に亘るときは敵主力に對し主作戦を指導す 敵主力の存在不明なるときは我主戦力の指向容易なる方面に對し決戦を求む

支作戦方面に在りては一部を以て所要の期間持久を策し、主力の作戦を容易ならしむ

3 敵の進攻逐次数方面に亘るときも亦前項に準ず但し敵主力に先ち一部の進攻を見る場合に於ては全般的情勢之を許せば所要の兵力を指向して之を各個に撃破す

4 地上作戦軍は敵の確乎たる上陸態勢を占むるに先ち、努めて沿岸要域に於て敵を撃破する如く作戦を指導す

5 地上兵力は予め計画する所に準拠し、他方面より作戦の焦

点に之を集中するの外、敵の上陸方面に非ざる方面より更に兵力を抽出転用して作戦予備と為し、所要に應じ之を主決戦正面に増加し或は戦局の変転に対処す

6 敵の進攻を受けざる方面の軍は能く全局の作戦を容易ならしむる如く諸般の措置を講ず

当該方面最高指揮官は予め計画或は臨機指示せらるるものの外、所要の兵力軍需品等を隨時迅速に他方面に転用し得る如く計画準備すると共に転用後に於ける担任地域の作戦準備及指導に遺憾なきを期するものとす

7 本土沿岸の島嶼は之を堅固に専守して敵の空海基地の獲得設定及活用を妨害すると共に、所要に應じ協力する航空及水上、水中特攻と相俟ち成るべく多くの敵戦力を消耗するに努む

陸上交通不便なる本土僻遠の地点の防衛に關しても前項に準ず 此際特に敵の本土上陸全般の企図判断と関連し、敵の利用する虞ある飛行場適地又は泊地の状況を詳かにすると共に、之に對する敵企図に對処するの準備を周密ならしむるものとす

8 上陸企図に伴ふ敵の空挺作戦に對しては主として地上部隊を以て速に之を撃破す 前項の外、重要航空基地、作戦路及交通要點の對空挺防備を嚴ならしめ、又内陸後方に對する擾亂空挺企図に對する準備に遺憾なからしむ

〔兵力運用計画（集中計画）〕 兵力運用に關しては関東若しくは九州地方を主とし、決号作戦が起きた場合、或は米軍の進攻が予察出来た場合における決戦方面に、地上戦力を集中する計画を示した。この計画によれば、九州方面の決戦に即応してこの方面に集中せらるる兵力は東海、近畿、中国若しくは四国から転用する四箇師団であつた。別に関東及び東北から三乃至四箇師団が近畿地区に推

進し、第二次の集中を準備することとなつてゐた。

一方関東方面の決戦に即応して集中せらるる兵力は、東北地区から三箇師団、近畿から三箇師団、九州地区から二箇師団合計八箇師団をそれぞれ先ず宇都宮、長野、松本地区に転用する計画であつた。別に状況許せば東海地区から更に二箇師団の集中を考えてゐた。更に北海道から東北に二箇師団を、九州、四国から近畿地方に五箇師団を推進し、第二次の集中を準備することとしてゐた。

この兵力機動の準備は九月末までに完了することとした。第二次以降の集中は情勢の推移に応じ臨機定めることとなつてゐた。

集中は米軍の交通破壊を予想し、徒歩行軍を立前として計画したが、状況許せば鉄道、船舶を利用することは勿論であつた。この集中の主幹線路は、青森—盛岡—仙台—郡山—宇都宮—東京—甲府—諏訪—名古屋—京都—大阪—岡山—下関道を予定してゐたが、本土縦貫各種の道路をも集中幹線として利用する計画であつた。なおこの集中のため本州と北海道間、本州と四国間、本州と九州間各海峡にそれぞれ日量二万噸、三、五万噸、六万噸の舟艇航路帯を設定することとした。

しかしこの計画には、実施に相当の困難が予想せられた。この計画においては関東決戦に當つて、九州方面から松本、長野地区に転進すべき師団の転進所要日数は約六十五日に達した。更にこの集中地区から決戦場に到着するためには、砲爆撃下においては十日以上を要するであらう。前述の如き米軍の交通破壊の模相を考慮する時、九州若しくは関東地方内部の機動さへ非常な困難が予想される。況んやこの計画の如き遠距離の兵力機動が、果して戦機に投合する如く計画通り実施し得るか否かに多大の不安があつた。

〔国内抗戦及び国内警備〕 国内抗戦は軍を中核として官民を統合し国家総武装を整え、軍官民を挙げて侵寇米軍に敵対せんことを期した。

国内抗戦は、作戰部隊の配備手薄い正面又は支作戰方面において内陸作戰に移行する場合、若しくは戦況膠着を予想する戦場にこれを採用し、師管区部隊、警備隊（在郷軍人を以て編成す）及び官民の義勇兵組織等を以て遊撃、偵察、偽騙、宿營妨害等のゲリラ行動を策した。その組織は全国各府県若しくは支庁毎に聯隊区司令官を警備司令官とし、又横浜、名古屋、神戸、京都、大阪等の都市には別に警備司令官を設け、これらを当該地区の師管区司令官が統一指揮し、更に軍管区司令官は、その管区内の師管区司令官の統轄に當ることとなつてゐた。なお一師管区部隊の兵力は歩兵二乃至四箇大隊、砲兵一箇大隊を基幹とするものであつた。

国内警備は、国内の騷擾、不逞行動に対し、軍の行動や重要施設、交通等を掩護し治安の維持に努むるのを主眼とした。使用兵力は国内抗戦の場合と同様であつたが、更に憲兵を活用する如く計画された。

〔交通及び通信〕 本土決戦の場合の交通に関しては、軍隊、軍需品の集中及び補給と国民生活維持の最少限輸送力を確保するを目的とした。これがため船舶は、内海、日本海、青函及び關門海峡等の航路帯の確保を期した。

鉄道は決戦に際し軍事輸送に關しては大本營統轄の下内地鉄道隊を以て軍事鉄道輸送を実施する計画を立てた。この場合においても管理運営は、運輸通信省に担任させて軍がこれを支援する計画であつた。但し作戰発動後、状況によつては管理運営部門をも全面的に軍機關とする腹案も持つてゐた。

通信は猛烈なる砲爆撃下において、航空作戰の指導、情報の速達等、作戰通信を第一義として通信重要施設の防護運営を企図した。

〔兵站〕 兵站は、国土を速急に戦場態勢に転移し万物を戦力化して、昭和二十年六月末頃までに後方準備を概成し、十月末頃までに完整し、特に関東及び九州、四国地方を重点として、この年の中期頃までに完整する如く勉め、又航空兵站準備は六月末完整を目標と

して生産態勢を戦時生産態勢に切換えるを方針とした。その計画の要点を摘記すると次の通りである。

一、要綱

- 1 本年前半期に於ける戦力整備を最大限に強行し大陸より為し得る限りの戦力を国土に転用する
- 2 軍は食糧並燃料生産を極力支援し、一部自ら実施する
- 3 陸海輸送の逼迫を考慮し、各軍管区毎に独立自給自活作戦能力を培養する 食糧の自活、兵器諸資材の修理、一部兵器器材、燃料の生産をその重点とする
- 4 爆撃被害極限の為徹底した分散配置と掩護を行ふ

二、資材の整備

- 1 部隊の装備充足を優先し作戦集積はこれに次ぐ部隊装備は沿岸配備兵団を又地域的には関東、九州地方を優先する
- 2 飛行機充足の優先順位は特攻部隊直掩戦闘隊、防空飛行部隊、その他の部隊とし特攻隊は別に計画充足する
- 3 本土に転用する在満部隊は船腹節約上馬匹や不急資材を残置し、弾薬一会戦分、燃料二週間分、糧秣一箇月分及築城建築用資材を成るべく多く携行する（筆者註 弾薬一会戦分は

区 分	人員 (万)		
	総兵額	馬匹 (万)	自動車 (千)
基礎配置	関東方面 九州方面	三、一五、〇 九、五、〇	三、三、一 一、〇、〇
決戦時配置	朝鮮方面 関東方面 九州方面	二、四、七 一、四、四 一、〇、二	九、五、〇 二、八、〇 一、六、八

備考 本表の外別に海軍部隊の給養兵額約一五〇万名

概ね二千噸)

- 4 民需を緩和する為自動車は決戦生起を予想する時機迄、又馬匹は七月頃迄徴用を避ける

三、基礎配置

- 1 重要方面の基礎配置及決戦時の兵額は上表の通り
- 2 作戦資材は部隊装備を除き国土全兵力に對し弾薬約一会戦分、糧秣燃料、常統補給用資材各一ヶ月半分を準備し、沿岸配備兵団用と予備とに区分集積する
- 3 沿岸配備兵団の資材は関東、九州地方及離島は弾薬一会戦分、その他の地区は半会戦分を集積する但し燃料は離島に三ヶ月分、その他は一ヶ月分を集積する 予備資材は方面軍以上の運用予備資材で決戦方面に投入を容易ならしむる如く本土の全域に適宜集積する その集積区分左の如し

区 分	沿岸配備兵団用集積			予 備 集 積		
	彈薬 (會戰分)	燃料 (斤)	糧秣 (人二万 月分)	彈薬	燃料	糧秣
北東方面	一	四〇〇	一、六、五〇	二	二、一〇〇	四四〇
東北方面	一	三〇〇	一、六、五〇	一	三、一〇〇	三七〇
関東方面	八	二、〇〇	二、四、四〇	一	一、一〇〇	一六四
東海方面	二	六〇〇	一、二、〇〇	一	四、一〇〇	一六〇
近畿中国	三	五〇〇	一、二、〇〇	二	五、〇〇〇	一四〇
九州方面	八	一、〇〇	二、三、〇〇	四	七、〇〇〇	二一八
朝鮮方面	二	七〇〇	二、三、〇〇	二	二、八〇〇	五〇六

備考 糧秣欄の右は人員用、左は馬匹用

四、運用

決戦生起の場合は主作戰方面に第三項配置資材を含み、主作戰方面兵力（増援兵力を含む）に應ずる彈薬二会戦分、燃料、糧秣、常統補給用資材約四ヶ月分を本土各方面より集中する

〔陸海軍間の作戰指揮協定〕 陸海軍間の作戰指揮に關しては昭和二十年四月、新たなる中央協定を遂げてこれを示達した。即ち本土決戦に即応する如く、本土及び近海における陸海軍の作戰分担、指揮關係について協定せられたものである。その特色は陸上作戰は第一、第二兩総軍司令官が鎮守府、警備府区域をも統一指揮することとなり、水上及び水中作戰は聯合艦隊司令長官が統一指揮することとなつた点である。その他防空部隊及び主要航空、その他海上特攻基地部隊も敵の來攻に際しては、それぞれその方面の陸軍若しくは海軍の最高指揮官の統一指揮を受ける如く定めた。

陸軍側においては、作戰準備間より陸上作戰の全面的統一指揮を希望する意見が強かつたが、海軍側に難点があつて実現しなかつた。結局作戰準備間は、第一、第二兩総軍司令官は、陸上防備計画と所要の教育、訓練に關してのみ指示することに落ち着いた。

〔海軍の本土決戦計画——天号作戰間〕 海軍は前述の如く三月二十日「帝國海軍当面作戰計画大綱」を發令し、沖繩決戦の遂行間、本土防衛態勢を強化せんとする趣旨とその計画を示した。その本土防衛計画の要点は航空及び舟艇を以てする特攻攻撃を主体とするものであつた。この大綱のうち、本土防衛に關する事項の要旨を適記すると次の通りである。

- 一、天号作戰遂行の傍ら、極力本土防衛の態勢を強化し、敵の直路本土要域來攻に対しては機を失せず機動兵力特に航空及特攻兵力を移動集中して之を反撃撃滅す
- 二、皇土防衛態勢の強化に當りては先づ其の重点を關東方面及南九州方面に集中指向する如く準備すると共に、主要海峡、灣口

の防備強化を計り日本海に於ける海上交通を確保す

三、戰勢の推移に依り機を失せず益々皇土防衛に徹する作戰準備を強化推進し、國家総力の戦力展開を計り、之を重点に集中統合して來攻する敵上陸軍を撃滅す（本作戰を決号作戰と呼称す）

四、決号作戰に於ては各種特攻攻撃を以てする敵船団の洋上及水際撃破を重視す

五、敵空襲激化を予期し戦力の維持昂揚に万全を期すると共に生産交通通信の防衛及治安の確保に努む

2 本土の決戦統帥組織

〔陸軍の新統帥組織——第二次兵備〕 既述の如き本土の兵備の急速なる増強に伴つて、防衛總司令部が、本土全域の各軍を統轄指揮することが困難となつた。又大本營自らが海外遠征軍のほか、これら本土内多数の方面軍を直接強力に統率することは更に困難なことであつた。殊に当時既に人的、物的資源の窮乏、交通の逼迫、作戰と行政の節調難等の原因に阻まれて作戰準備は渋滞勝ちであつた。その上本土決戦に際しては、關東及び九州において重要決戦が予想せられ、しかも米軍の強烈なる破壊攻撃により本土の各地区が孤立に陥り、大本營若しくは防衛總司令部の適切な指揮が困難に陥ることが懸念せられたため、三月に入り本土及び航空総軍設置の要が議せられた。硫黃島の失陥に相次ぐ沖繩の戦局は、愈々以て本土の統帥組織を強化し、作戰準備を強力に促進することが焦眉の急と認められた。

ここにおいて大本營は第一、第二總軍司令部、航空総軍司令部を新設すると共に、かねての計画に基き第二次兵備の軍司令部七箇（内朝鮮一箇）決戦師団八箇、独立戦車旅団六箇の動員を下令し、本土の統帥組織と戦備とを画期的に強化することとなつた。これら

新設決戦師団には二百代番号が与えられた。

かくて防衛総司令部を廃し、大本営直轄の下第一総軍司令部、第二総軍司令部と航空総軍司令部の新設を見、四月八日その戦闘序列が下令せられた。

昭和二十年四月八日、九日の両日に亘り総軍司令官以下その幕僚は大本営に召集せられ、大陸命第一二九七号乃至第一二九九号を以て戦闘序列及び任務が附与せられた。各総軍司令部は、四月十五日を以てその編成を完結し、第一総軍司令部及び航空総軍司令部は東京都市ヶ谷台上に、又第二総軍司令部は広島市の騎兵營跡に位置してそれぞれその統帥を發動した。

総軍司令官は隷下各軍を統率したが、軍管区の業務はその管轄外とし、軍管区司令官（方面軍司令官兼任）は天皇に直隷し、陸軍大臣の直接区処下に業務を行つた。しかし総軍司令官は防衛に関し軍管区司令官を指揮する権限が与えられた。この改編により、陸軍の本土防衛の指揮は次のようになった。

即ち第一総軍司令官杉山元帥は第十一（東北）、第十二（関東）及び第十三（東海）方面軍を統率し、東部日本の作戦を担当した。第二総軍司令官畑俊六元帥は第十五（近畿、中国、四国）、第十六方面軍（九州）を統率し西部日本の作戦に當つた。第五、第十七方面軍司令官は従前通りそれぞれ北東及び朝鮮方面の防衛作戦を担当した。航空総軍司令官河辺正三大将は、第一（東部日本）、第六（西部日本）航空軍及び第五十一、第五十二、第五十三航空師団を統率し、本土陸軍航空作戦を担当することとなつた。

各総軍司令官は、大陸命第一二九九号を以て、本土要域に侵寇する敵を撃滅する任務を附与された。その任務達成の準拠を要約すると次の通りである。

一、第一総軍司令官及び第二総軍司令官任務遂行の準拠
關東地方及び九州地方を夫々重点として速急に戦備を強化し、

本土要域に侵寇する主敵米軍に対して決戦を指導してこれを撃滅する。

又米空軍の来襲に対し本土樞要部及び重要施設を掩護し、海上交通保護及び海峽防衛に関し海軍に協力する。

尚作戦地境は第一総軍と第五方面軍間津輕海峽、第一総軍と第二総軍間鈴鹿山系、第二総軍と第十方面軍間北緯三十度十分、第二総軍と第十七方面軍間朝鮮海峽とする。

二、航空総軍司令官任務遂行の準拠
本土要域特に關東地方及び九州地方に侵寇する敵を洋上に撃滅する。

又米軍の動向と企図の偵知に努め、好機に乗じ本土に対する米来襲機を邀撃し、米航空基地の攻撃、米機動部隊の制圧を実施する。

なお各総軍司令官の右作戦準備の準拠は前述した「決号作戦準備要綱」及び「陸海軍中央協定」を以て示された。

〔海軍の新統帥組織——総司令部、日吉台に〕 一方海軍においても既述の如く昭和二十年一月、聯合艦隊司令長官は捷号作戦に関し、本土方面各艦隊各鎮守府警備府司令長官を指揮する如く定められていたが、これを更に徹底せしむる如く指揮組織を改編した。

即ち四月二十五日、新たに海軍総司令部を創設し、南東方面艦隊、南西方面艦隊を除く全海軍部隊を名実共に統一指揮する海軍総司令官豊田副武大將を任命すると共に、同日大海令第三十九号を以て新任務を附与された。その司令部は横浜市日吉台上に位置した。なおこの新統帥組織においては海軍総司令官が聯合艦隊司令長官及び海上護衛総司令官を兼ねることとなつた。

〔沖繩作戦末期の本土作戦準備の概況〕 五月初頭、沖繩における第三十二軍の攻勢は失敗に帰し、沖繩戦局の帰趨決定的となるや、米軍がその余威を駈つて我が本土作戦準備の不備に乗ずるため、比

較的早期に九州方面に直路來攻するのではないかと懸念が大きくなつた。これに対処するため、本土の作戰準備を更に急ぐと共に、九州四國方面の作戰準備を優先する措置が相次いで採られた。

當時九州の作戰準備は遲滞し寒心すべき実情であつた。即ち沿岸の配備についている兵力は、僅か四箇師団半のみで、しかも素質就中指揮能力は低く、その裝備は未だ充足せられていなかった。そのほか宮崎平地の防備に就くべき第五百五十四師団は輸送途上であり、満洲から転用された第二十五師団も、南九州に輸送中であつた。又第五十七師団は、博多に上陸集結中であつた。南九州の作戰を担当する第五十七軍司令部（軍司令官西原實治中将）は漸く都城に司令部を開設したばかりであり、北九州を担当する第五十六軍司令部（軍司令官七田一郎中将）は編成未完の状況であつた。

陣地の構築は、有明湾正面が五〇〇程度の進捗を見ているのみで、その他の正面は二〇〇前後に止まり、しかも作戰の方針に合致しないものが多かつた。軍需品の集積も着手されただけであつた。四國もまた大同小異であつた。

一方関東方面においても、沿岸配備について陣地構築を開始しているものは七箇師団半（伊豆諸島を除く）のみで、相模湾正面以外には陣地偵察或は計画の域を出ていなかった。これら師団の素質、裝備や軍需品の集積等は概ね九州同然であつた。僅かに中部関東地区に集結されていた第三十六軍（戦車師団二箇と一般師団二箇から成る）は、機動決戦戦力として、素質、訓練ともに比較的良好なる状態にあつた。

〔九州作戰準備の優先——決号輸送〕

大本營は東支那海方面における敵の進攻態勢に鑑み、アリュシヤン列島方面から北東方面に対し敵の進攻し来る算は、一層少くなつたものと認めた。これがため同方面は持久戰略構想に転移し、同方面の兵力を思いきつて抽出し、これを関東、九州に転用すること

となつた。即ち四月中旬より五月末に亘り、逐次九州方面には第七十七師団と海上機動第四旅団を、関東に対しては第四百四十七師団と海上機動第三旅団を転用した。これに伴つて五月九日、第五方面軍司令官の任務を更改した。即ち千島、樺太は要域のみを確保し北海道においては來攻する敵を撃破して、敵空海基地の推進を破摧し、本州九州方面の作戰を有利ならしむべき持久任務を与え、決一号を實質的に解消した。

一方五月八日には航空総軍司令官の統一指揮下に日、満、華全航空戦力を本土の決戦に結集するための作戰計画と改編とを断行した。即ち「決号作戰に應ずる航空作戰指導要綱」を以て陸軍の決号航空作戰指導の輪郭を指示した。その要点は次の通りである。

一、方針

天号航空作戰に併行しつつ六月末迄に決号航空作戰準備を概成し、決号作戰生起に當りては本土の外、中国、満洲、朝鮮、北海道方面の全航空戦力を集結す

二、要領

1 決号作戰生起に當りては中国及び満洲方面航空部隊の主力を本土方面に転用す

又決号作戰生起の時機切迫せば北海道方面航空部隊の主力も主作戰方面に転用す

2 決号作戰生起に先ち敵が東支那海沿岸に來攻する場合は第五航空軍司令部並鮮満方面より所要の部隊を敵上陸方面に転用し敵を攻撃す

此の航空作戰は支那派遣軍総司令官之を担任す

この作戰指導要綱に基き、満洲の第二航空軍（軍司令官原田宇一郎中将）、中国の第五航空軍（軍司令官下山琢磨中将）北東方面の第一飛行師団をそれぞれ航空総軍司令官の隷下に入れた。第五航空軍は、その第十三飛行師団を支那派遣軍総司令官の下に残置し、主

力は朝鮮に転進した。しかし第二航空軍と第一飛行師団は依然関東軍総司令官及び第五方面軍司令官の指揮下に残され、本土決戦生起の際、招致せられることとなつた。なお五月二十六日、聯合艦隊司令長官の指揮下に入つて天号作戦に従事しつつあつた第六航空軍もその指揮を脱し、航空総軍司令官の指揮下に復帰せしめ、同時に航空総軍司令官に対し九州及び朝鮮海峡方面を重点とする本土決戦準備を行うよう命令した。

これより先五月十日には、前述第二次兵備の兵団を九州方面に四箇師団と三箇の独立戦車旅団を、関東方面に三箇師団と三箇独立戦車旅団を、又東海方面に一箇師団を配分した。但し第二総軍司令官は、その一箇師団を四国(高知平地)の第五十五軍(軍司令官原田熊吉中将)に配属した。そのほか関東の第三十六軍に隷属すべく満洲より転用途中の第五十七師団も第十六方面軍に転属された。又五月十四日、台湾から第四十軍司令部を南九州に転用し、同方面の統帥組織を強化することとなり、同司令部は六月上旬、伊集院に転進した。

一方朝鮮海峡防備強化のため第七艦隊(司令長官岸福治中将)が特設された。

更に五月下旬、敵空軍の鉄道破壊に先だち九州方面の軍需品集積、新設兵団の人馬、装備の充足を優先し、関東方面の作戦準備を一時犠牲とする方針を定め、緊急鉄道輸送を強行し、六月中にこれを概成した。この輸送は決号輸送と称し、西日本の鉄道輪転材料を挙げ南九州に突込み輸送が断行された。

〔第三次兵備前の各方面軍〕 以上本土方面第一、第二次兵備における新設兵団並びに転用兵団の方面軍軍別の区分は次の通りとなつた。

註 ○は第一次若しくはこれに準ずるもの、※は他方面からの転用、その他は第二次を示す。

第一総軍

第十一方面軍

○第百四十二、○第百五十七師団

第十二方面軍

第五十一、第五十二、第五十三軍司令部

○第百四十、○※第百四十七、○第百五十一、○第百五十二、第二十一、第二十二、第二百十四師団※戦車第一師団、独立戦車第二、第三、第七旅団

第十三方面軍

○第百四十三、○第百五十三、第二百九師団

第二総軍

第十五方面軍

※第五十五軍司令部

※第十一、○第百四十四、○第百五十五師団

第十六方面軍

※第四十、第五十六、第五十七軍司令部
※第二十五、※第五十七、※第七十七、○第百四十五、○第百四十六、○第百五十四、○第百五十六、第二百五(四国の第五十五軍に配属)、第二百六、第二百十二、第二百十六師団

○独立混成第百七、同第百九旅団、独立戦車第四、第五、第六旅団

第五方面軍

○第八十八、○第八十九師団、独立混成第百一旅団

〔第三次兵備の繰上げ実施〕 五月二十三日には第三次兵備を繰上げ実施するため、軍司令部二箇、師団一九箇(内一箇は朝鮮、独立混成旅団一五箇(内一箇は朝鮮)の大動員を下令した。これらの兵団はその編成の進捗に伴つて六月中旬次の如く隷属を令せられた。(二百代番号は決戦師団、三百代番号は沿岸配備師団)

第十一方面軍

第五十軍司令部（軍司令官星野利元中將）

第二百二十二、第三百八師団、独立混成第百十三旅団

第十二方面軍

第二百二十一、第二百三十四、第三百十六、第三百二十一、第三百五十四師団

独立混成第百十四、同第百十五、同第百十六、同第百十七旅団

第十三方面軍

第五十四軍司令部（軍司令官小林信男中將）

第二百二十四、第二百二十九、第三百五十五師団

第十五方面軍

第二百二十五、第二百三十、第二百三十一、第三百四十四師団、独立混成第百二十一、同第百二十三、同第百二十四旅団

第十六方面軍

第二百三十三、第三百十二、第三百五十一師団

六旅団

この動員においては、本土の在郷軍人の大部分が召集され、その中には多数未教育兵及び老兵を擁していた。しかも各兵団は装備不十分のまま配備に就かざるを得なかつた。若し米軍が、六、七月の頃一挙に南九州に進攻して来たならば実には恐るべき事態となつたであらう。幸にその徴無く、七月頃には敵の来攻は十月以降に延びるものと予想せらるるに至り、日本軍は愁眉を開いた。真に沖繩作戦における我が将兵の敢闘の賜であつた。かくして九州方面の作戦準備は漸く明るい見透しがつた。大本營は切迫する戦況に鑑み、六月十五日、広島師管区司令部を第五十九軍司令部と中国軍管区司令部に、又善通寺師管区司令部を四国軍管区司令部に昇格改編した。

更に同二十三日、帝都固守の態勢を整えるため、東京防衛軍を新設し、これを第十二方面軍司令官の隷下に入れた。

〔本土防衛総兵力と陸海軍指揮組織〕 昭和二十年二月に予定された四〇箇師団動員（除朝鮮北東）はこれを以て実現した。二箇師団と二箇独立混成旅団が本州、四国、九州において計画以外に動員された。七月末におけるその配備は附図第十の如く進展していた。

その動員兵力は、陸海軍合し約二四〇万（内四〇万は特警、その他の特別召集）に上り、なお後述する如く以上の野戦軍のほか、国民抗戦を徹底するため、国民義勇戦隊の編成が実施或は企画せられた。

本土方面における陸、海軍指揮組織は挿表の如く整備せられ、又本州、四国、九州及び近辺島嶼の終戦頃における作戦可能総兵力は次のようであつた。（筆者注、北東、朝鮮方面は後述）

一、地上兵力——五三箇師団、二二箇混成独立旅団、三警備旅団、二箇戦車師団、七箇独立戦車旅団、四箇高射師団

二、航空戦力 約一〇、〇〇〇機（内約七五％は練習機改修の特攻機）

三、海上特攻戦力 約三、三〇〇隻

四、その他の決戦用海上戦力 駆逐艦一九隻、潜水艦三八隻

五、陸軍関係の軍人軍属の総数は約二二五万

六、海軍関係の軍人軍属の総数は約一三〇万

七、特設警備隊の兵力数は約二五万

八、国民義勇戦隊の要員は二、八〇〇万

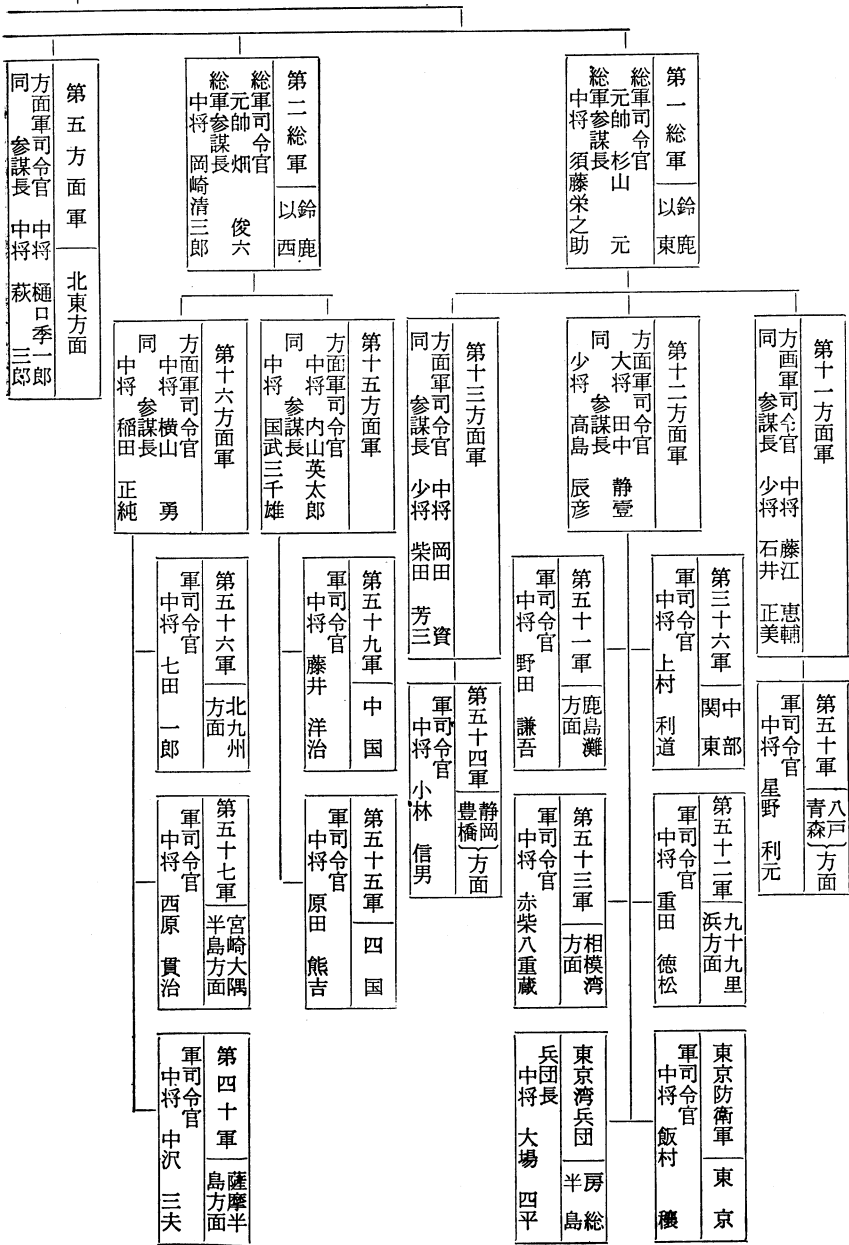
3 航空及び海上部隊の作戦計画

〔航空部隊の攻撃目標——陸海軍の調整〕 航空及び海上部隊は、その精鋭を傾けて沖繩作戦を遂行したので、地上部隊の作戦準備に比し更に遅れていた。殊に海軍は既述の如く本土作戦準備を犠

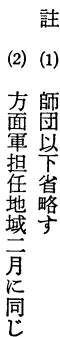
軍指揮組織一覽表

大本营

(昭和二十年七月)



本土決戦に臨む陸海



牲にしても天号作戦を完遂せんとし、総力を挙げていたため一層立ち遅れていた。即ち陸軍は、四月以来天号作戦に併行して本土の航空作戦準備を進め、五月初め沖縄における第三十二軍最後の攻勢失敗を契機として本土を重点とする航空作戦準備に移行し、次いで五月下旬本土決戦準備に透徹することとなつた。海軍が天号作戦を断念して、本土航空作戦準備に全力を傾注することとなつたのは七月上旬であつた。

即ち七月十三日に至つて、陸海軍共通の本土航空作戦計画「決号航空作戦」に関する陸海軍中央協定が、漸く策定された。本計画の主旨は、米上陸軍を上陸直前輸送船諸共に撃滅するにあつた。これのために航空作戦は米上陸軍輸送船団の攻撃に徹底し、全機特攻戦法を以て泊地進入前後に鉄錐的強襲を加えんとするもので、作戦準備の重点を先ず九州及び朝鮮海峡に置かれた。

抑々航空部隊の攻撃目標に関しては陸海軍間に種々論議せられ、陸軍は敵輸送船の攻撃を重視し、海軍は敵空母の攻撃を重視するのが伝統となつていた。捷号作戦においては、海軍は敵機動部隊を、陸軍は敵輸送船団を攻撃した。天号作戦においても同様の協定が行われたが、作戦開始後は海軍航空部隊も船団攻撃を重視するように変つた。本土作戦の協定においては、陸軍側の主張が通つて陸海軍航空部隊の主力を挙げて米輸送船団の攻撃に徹底する如く協定を見たのであつた。

〔航空攻撃に関する中央協定〕 大本営は即日それぞれ航空総軍司令官及び海軍総司令長官に対し本協定に準拠して作戦を実施すべき命令を下達した。協定の骨子は次の通りである。

一、方針

陸海軍全航空戦力を統合發揮し米軍を本土来攻の初動に於て成るべく至短期間に之を洋上に捕捉撃砕す又本土の防空及潜水艦に対する作戦を強化す

二、作戦指導の大綱

1 敵上陸軍に対する作戦指導

主として特攻戦法を以て米軍上陸船団を撃滅す
之が為先づ九州、四国、南鮮に作戦準備の重点を指向し之を概成す 其の後は之を増強すると共に他の方面特に關東地方の作戦準備を進む

敵の上陸企図を早期に看破する為米軍の進攻基地及其の作戦基線に対する索敵を周密に実施す

敵上陸船団に対する攻撃は概ね十日間程度の期間特に船団の泊地進入前後に最大戦力を投入し昼夜に亘り果敢、執拗なる奇襲、強襲を反復し其の撃滅に努む

敵機動部隊に対しては好機を捉へ攻撃し其の敵上陸船団に対する有効なる支援を阻止す

地上作戦協力は第二義とし当時の戦力之を許せば一部の兵力を以て上陸前後に上陸軍の支援砲撃に任ずる米艦艇を攻撃す

2 決号作戦生起迄の防空及潜水艦に対する作戦要領
陸軍は其の航空戦力を統合し本土に対する米空軍特に其の大規模機に対し遠撃作戦を実施す
海軍は之に協力す

陸海軍航空部隊協力して米空軍大型機の重要基地特にマリアナ、硫黄島及沖縄方面の基地を奇襲す

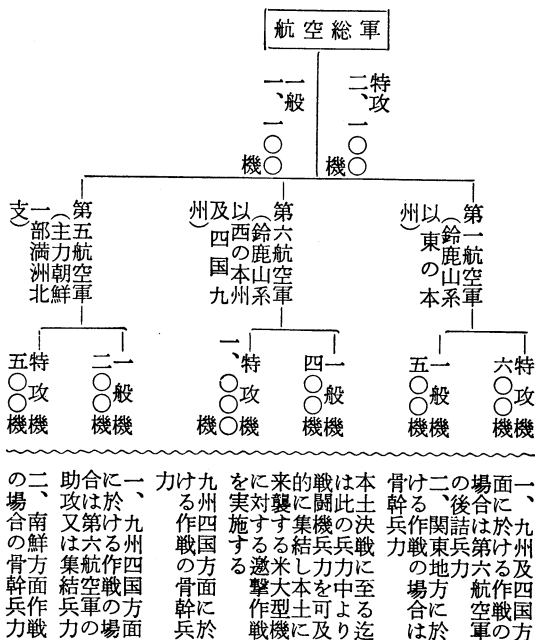
海軍は日本海方面の米潜水艦に対する作戦を強化し米潜水艦の進入阻止と掃蕩に努む

陸海軍協力して本土主要港湾に対する米空軍の機雷封鎖企図を制圧する如く努力す

三、兵力配備並運用計画の大綱

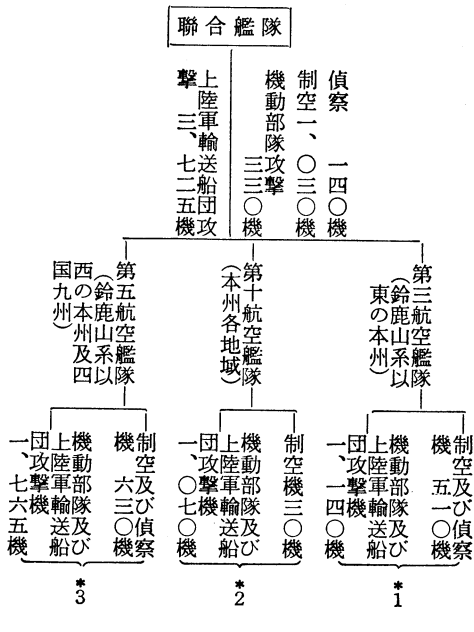
前記計画に基く兵力配備と其の運用の大綱は次表其の一及び其の二の通りである。

其の一 (陸軍航空兵力配置並運用計画)



- 備考
- 1 本表兵力以外に七、八月間に特攻機五〇〇機乃至一、〇〇〇機整備の予定であつた。
 - 2 本表の外在北海道第一飛行師団(約六五機)の増援が予定されていた。又在台湾第八飛行師団(約六〇〇機)が南西諸島方面米軍基地を攻撃し九州方面の作戦に策応することとなつた。

其の二 (海軍航空兵力配置並運用計画)



- 備考
- *1 関東方面の決戦に当り初動の骨幹戦力となり、之に第五、第十航空艦隊が加入する。
 - *2 第五若しくは第三航空艦隊に増加し、当該方面の決戦に参加す。
 - *3 九州四国方面の決戦に当り初動の骨幹戦力となり、之に第三、第十航空艦隊が其の指揮下に加ふる。
- 決戦に当つては第五航空艦隊司令長官が決戦方面全航空部隊を指揮する予定であつた。

四、指揮関係

陸海軍協同作戦を立前とし協同を緊密ならしむる為作戦間陸海軍航空部隊の指揮官は同一場所又は至近の距離に位置す

九州方面の作戦に当つては航空総軍司令部は大阪近郊の大正飛行場附近に、又海軍総司令部は奈良県大和飛行場に位置す

又第六航空軍司令部は一時第五航空艦隊の位置する大分に転移す

上述のような作戦準備の重点移行に伴い、関東方面の作戦準備は一時犠牲となる部分を生じ、その結果昭和二十年末でなければ概成出来ない見込みとなつた。しかも九州作戦に次いで関東作戦が生起する場合は、我が空海戦力の大部は九州作戦に投入、消耗し尽される結果、関東方面においては、立体作戦が遂行出来ない状況となる虞れがあり、又直路関東に攻めることあれば、関東決戦は作戦準備上に相当の弱点を藏していた。

〔本土の航空兵備——全航空特攻と要塞化〕 攻撃計画と、これに基づく作戦準備はこのように立ち遅れていたが兵器、資材の整備や飛行場の新設、附属施設就中飛行機の掩体構築並びに訓練等は陸海軍ともに鋭意努力を払つていた。その状況は次のようである。

一、飛行機の整備

この年の春以来国内に在る全飛行機を作戦機、練習機の如何を問わず、全航空特攻の思想に徹底し、その特攻機の改装、整備を急いだ。即ちその計画機数は次表の通りである。

種別	陸軍	海軍	計
偵察機	一、八八〇	一、三五〇	一〇、四四〇
爆撃機	七二〇	一、〇九〇	
練習機	二、八〇〇	二、六〇〇	

備考

一、海軍はこのほかに九月末までに特殊機約一、〇〇〇機^(註)の整備を計画していた。

二、七月末には此の計画の約八〇%が実現していた。九月末には一応概成し得る見込みであつた。

特殊機は製造、操縦共に容易且つ簡單で、燃料の所要量が少いものという当時の絶対要請に迫られて生れたものである。桜花、橘花、藤花の三種があつた。

桜花は、親飛行機によつて目標附近まで運ばれ空中で離脱発進して敵艦に命令する、謂わば人間爆弾で、終戦時には地上から射出する型式のものが出来た。爆弾量は千二百匁であつた。

橘花は、地上から射出する人間爆弾でルビンロケット二箇を備え、最高速度は海面で三三五節航続距離は高度六、〇〇〇米で三〇〇哩、爆弾は五〇〇乃至八〇〇匁一箇であつた。

藤花は、量産容易な低翼、単葉、単発、単座機で、最高速度は高度四、二〇〇米において二八〇哩、航続距離は六〇〇哩、爆弾は五〇〇匁一箇であつた。

なお陸軍では、沖繩作戦の頃から威力強大なる桜弾を製作使用していた。この爆弾は重爆撃機胴体頭部に炸薬を装したもので、その弾丸に相当する部分の全重量は三噸である。

二、飛行機の新設、飛行機用掩体の構築

この両者の新設、構築は全航空特攻作戦の遂行と米空、海軍の徹底的航空撃滅戦予想とに基いて徹底して行われた。既設の飛

行場は、敵の事前破壊により使用不可能に陥るものと予想し、本土内の牧場、演習場等を利用する簡易な秘匿飛行場の設定に意が用いられた。又特攻機や爆弾の事前損耗を防ぐため、飛行場周辺の山林を利用し、分散洞窟格納庫や掩体（土堤で囲んだ格納庫）を構築するほか、偽飛行機の配列等が重視された。七月末本土の飛行場総数は建設中のものを合して三二五を数え、そのうち秘匿飛行場は九五に達した。

三、訓練

全航空特攻化のため陸軍においては、四月以降多数の実施学校を七箇の教導師団に改編してそれぞれ作戦任務をも与え、又海軍も、教育を任務とした海軍練習聯合航空総隊を第十航空艦隊に改編して聯合艦隊に編入し、作戦即訓練の態勢に切換えた。そして将来の航空戦力培養を目的とする搭乗員養成教育を中止し、目前の単純な特攻操縦技能の附与を重点とした。その教育は沖繩作戦において述べたものより更に簡単なもので、二〇乃至三〇時間の教育に止まるものが多かった。

四、燃料

本土航空作戦における最も重大なる隘路は、実に燃料の窮乏であつた。七月の保有量は、陸海軍合して約七九、八〇〇千（内海軍の保有約二〇、八〇〇千）に過ぎず、しかも当時の月間消費は訓練及び防空戦闘すら抑制するほどにしても約二四、六〇〇千を要し、月間生産は一万千に満たない有様であつた。しかも決号作戦のため、ぎりぎりの必要としてこの中から陸軍は約四万千、海軍は一万三千千を控置せんとしていた。海軍の控置量は、その計画機の一出击分にも不十分な量であつた。向後数カ月の間に松根油等の生産向上を予期していたが、爆撃被害や緊急所要による喰い込み等を較量すると、果して計画の如き航空作戦を実行し得るや否や多大の懸念の存するところであつた。

た。まして敵が我が予期せざる正面に上陸し来る場合の航空兵力の転進や、敵が本土の封鎖、焼爆作戦に徹底してその米攻時期が延びた場合等を考慮する時、航空作戦は燃料の面から重大危機に達する虞れがあつた。因みに四月、沖繩作戦最高潮時の月間消費量は約五万六千千であつた。

〔海上特攻作戦計画〕 既に海上部隊を喪失せる海軍は、各種特攻舟艇による特攻作戦を作戰の主体とし、これに僅かに残存せる駆逐艦及び潜水艦を加え、本土における最後の反撃作戦計画を樹てた。海上特攻には海竜、蛟竜、回天、震洋、伏竜の五種類があつた。

註 蛟竜は、真珠湾、シドニー攻撃等において世界的に勇名を馳せた豆潜水艦の別名で、秘匿名を甲標的と呼んだこともある。終戦時のものは全長二六、一五米、直径二、〇四米、排水量六〇、二噸、速力水上八節、水中一六節、航続力は八節航速で一・二五時間の諸元を具えていた。

海竜は、翼を具えた小型豆潜水艦（全長七、二八米、直径一、三米、排水量一九、二噸）で、簡の下部両側に魚雷発射管二箇を、又頭部に爆薬を装備し、敵艦船に肉迫して魚雷発射に併行して体当たり攻撃を加える。最大速力六、五節、特別全速力七、五節で一・二時間連続行動し得、行動可能日数三日間である。

伏竜は、最も原始的な人間機雷である。簡易潜水器を装着した特攻兵が棒付き地雷を持つて、敵上陸点の海中に潜水待伏せて上陸用敵舟艇が頭上を通過する時、棒付き地雷で舟艇を突き上げて敵舟艇諸共自爆せんとするものである。

回天、震洋については既に述べた通りである。

なお陸軍においても、別個に震洋と同種の特攻艇を整備し、連絡艇若しくは◎と呼称して海上特攻を計画していたばかりでなく、実行していたことは既述した。

七月末における特攻舟艇の整備数は概ね次の通りで、生産遅滞のため、九月末予定整備数の四一乃至二一％に止まつた。

一、蛟竜 七三隻
二、海竜 二五二隻 四一％
三、回天 一九隻

四、震洋二、八五〇隻（内七〇〇隻は陸軍の連絡艇）二一％

これらの海上特攻部隊は、海軍においては昭和二十年三月頃から逐次拡張、改編せられ、七月末頃には八箇戦隊に達し、各戦隊は数箇の突撃隊から成り、突撃隊の総数は三二箇を数えた。又突撃隊は要度に応じ、各種特攻舟艇を配合編成せられた。なお伏竜は六月、先ず横須賀に二箇大隊が配置され、十月末までに一〇箇大隊の編成が計画されていた。一方陸軍もまた海上挺進戦隊三〇箇（各戦隊は概ね連絡艇一〇〇隻）の編成を志し、七月末七箇戦隊の編成が出来ていた。

しかしてその配備は先ず九州、四国方面、次いで関東方面を優先的に実施し、逐次他の地域に及ぼす如く計画された。七月末における編成及びその兵力配当は次頁挿表の通りであつた。

〔残存海上部隊の攻撃計画〕 本土反撃作戦に使用し得る残存水上部隊の兵力は、僅かに駆逐艦一九隻、各種潜水艦三八隻（外に補給用三隻）に過ぎなかつた。しかも燃料は、駆逐艦の場合僅かに沿岸出撃の一、五撃分即ち三千五百噸を有するのみであつた。戦艦長門、榛名等が残存していたが、燃料不足と修理を要する等のため、呉軍港に撃留して軍港の防空火力に使用する以外方途無き実情で、遂に敵機の攻撃に曝されてしまつた。

右水上反撃部隊の中、第三十一水雷戦隊は内海西部伊予灘北方に配備し、一夜行程を以て到達し得べき限界——祝島を中心とする半径一八〇浬圏以内——主として九州東岸及び四国沖に出撃し、敵輸送船団を求めて攻撃する如く計画された。

潜水部隊は、特大型四隻を以て遠く敵艦隊の泊地（例えばウルシ等）を、大型一三隻を以て敵の洋上補給路及び艦隊の攻撃を、中、小型一三隻を以て敵上陸正面海域の艦船攻撃をそれぞれ担任せしめ、その他の小型八隻を以て本土近海の哨戒に充てる如く計画された。

〔特攻作戦による戦果の期待〕 本土決戦勝利の鍵の一つとして、航空及び海上特攻作戦に大きな期待を抱いていたことは、前述の諸計画にも明かなところであるが、昭和二十年六月八日の御前会議における岡統帥部の次の発言が、端的に期待の度を物語っている。

豊田副武軍令部総長発言要旨の一部——「米軍が早期に本土に來攻する場合は敵全滅は不可能とするも、約半数に近きものは水際到着前に撃破し得る算ありと信じて居ります」

河辺虎四郎參謀次長——「我国独特の空中及水上特攻攻撃は……本土決戦に於ては特に成果の大なるを期待して居る次第であります」

しかも又六月二十一日、軍令部の情勢判断における「対策」の項にも「敵来攻部隊を海上撃滅に努むべきであるが早期（夏期）來攻の場合には全軍特攻を以て反撃する場合と雖も約半数の敵地上兵力は上陸を許すこととなるものと予想する……尚敵の來攻が遅延する場合は作戦が有利となり海上撃滅の可能性が増大する云々」とこれを裏書している。

なお昭和二十年七月四日、五日の両日福岡の第六航空軍司令部において、航空総軍、聯合艦隊共同主催の下に、本土各航空軍及び航空艦隊の幕僚を招集して、決号航空作戦、特に航空特攻に関する兵棋演習を実施し、期待し得べき戦果が具体的に検討された。

この演習は米軍約一六箇師団が昭和二十年十月X日に南九州に來攻する場合を想定して指導研究された。その結果、航空特攻により敵輸送船約五〇〇隻を撃沈し得べしとの結論であつた。海上特攻に

海上特攻部隊の編制及兵力一覽表

区分	鎮守府 警備府 区分	戦 隊 区 分	突 撃 隊 区 分		兵 力 (隻数)				備 考
			突 撃 隊 番 号	所在地	蛟竜	海竜	回天	震洋	
聯	横須賀 鎮守府	第七特攻戦隊	第 十 四 突 撃 隊 第 十 二 " " 第 十 七 " "	野々浦 勝浦 小名浜		180	36	775	陸軍の海上挺進戦隊は九州東海岸に三箇、西南海岸に三箇、北海岸に三箇をそれぞれ配備された。
		第一特攻戦隊	第 十 八 突 撃 隊 第 十 一 " " 第 十 六 " " 第 十 五 " " 横 須 賀 第 七 十 一 " "	勝 山 油 壺 下 田 江 ノ 浦 野 比					
			八 丈 島 警 備 隊						
		第四特攻戦隊	第 十 三 突 撃 隊 第 十 九 " "	鳥 羽 的 矢					
合	大 阪 警備府	第六特攻戦隊	第二十二突撃隊	小松島		24	4	50	
	呉 鎮守府	第二特攻戦隊	光 突 撃 隊 平 生 " " 大 神 " " 笠 戸 " " 第 八 十 一 " "	呉	48	24	32	225	
		第八特攻戦隊	第 二 十 三 突 撃 隊 第 二 十 一 " " 第 二 十 四 " "	須 崎 宿 毛 佐 伯					
艦 隊	佐世保 鎮守府	第五特攻戦隊	第 三 十 五 突 撃 隊 第 三 十 三 " " 第 三 十 二 " "	細 島 油 津 鹿 児 島	4	24	46	1000	
		第三特攻戦隊	川 棚 突 撃 隊 第 三 十 一 " " 第 三 十 四 " "	矢 岳 唐 津					
		第 七 艦 隊	第三十六突撃隊	対 馬					
	舞 鶴 鎮守府		舞 鶴 突 撃 隊	3			100		
	鎮 海 警備府		第四十二突撃隊						
	大 湊 警備府		大 湊 防 備 隊						
		第十特攻戦隊	第 百 一 突 撃 隊 第 百 二 " " 大 浦 " " 小 豆 島 " "		18				

よる撃沈予想一二五隻を加算すると、敵上陸軍の三四%、これを兵力に換算すると、五箇師団と三分の一師団とを洋上に撃滅し得ることとなった。

本研究の結果、特攻作戦の戦果は敵の上陸部署、船団の構成、敵の航空撃滅戦の様相、天候等各種の要素によつて著しく左右せられるが、三〇乃至五〇%を屠り得べしとの結論に達し、御前会議における発言と大差の無い期待が持たれた。

〔戦果算定の基礎と一部の懸念〕 本演習の算定基礎として用いられた数字は、次の通りである。

一、使用特攻兵力

(一) 航空特攻	特攻機	四、三〇〇機
	実用機	七〇〇機
(二) 舟艇特攻	震洋	一、一二五隻
	回天、海竜、蛟竜	七〇隻

何れも九州、四国方面に於ける予定整備数よりも一〇%内輸の数字を使用してゐる

二、実働率と命中率

(一) 航空特攻	実働率	六〇% (機動間及び基地損耗等四〇%)
	命中率	1/6 (比島、沖繩の戦例は約1/3と見られてゐた)

(二) 海上特攻	基地の損耗	一〇%
	震洋	1/10
	回天、海竜	1/3
	蛟竜	2/3

三、敵の上陸部署

- (一) 第一次上陸×一、日六箇師団を以て薩摩半島に上陸
 - (二) 第二次上陸×日主力一〇箇師団を以て宮崎海岸に上陸
- 四、敵の輸送船隻数

- (一) 第一次上陸部隊は、大型上陸用舟艇LSI(三〇〇噸内外)及LST(三、五〇〇噸)を主体とし、一箇師団は二二〇隻内外
 - (二) 第二次上陸部隊の第一回上陸兵団四箇師団は右と同様、その他は一箇師団五〇隻内外の大型輸送船
- 五、攻撃要領

(一) 第一次上陸部隊に対し	飛行機	四、〇〇〇機
	震洋	七〇〇隻
	海竜	一二隻
	飛行機	一、〇〇〇機
(二) 第二次上陸部隊に対し	震洋	四二五隻
	回天、海竜	五八隻

この算定の諸要素は、当時としては相当控え目に計数されてはいたが、米海空軍の激烈なる破壊攻撃様相や、我が特攻部隊の機材練度の低い実情を想う時、果して計画の如く特攻戦力を適時決戦場に集中し、所期の実動、命中率を実現出来るかどうか、又既述燃料の窮迫と相俟つて一部の関係者には懸念が抱かれた。殊に命中率の如きも当時信じていたフィリッピンや沖繩の作戦における戦果報告を基礎とし、又一機一舟艇を以て、それぞれ一輸送船を屠るという前提に立つて算定されていた点が問題であつた。地上作戦部隊の関係者の間には、かくの如き戦果を収められることを念願しつつも、一五乃至二〇%程度の戦果と見るのが無難ではなからうかと考えられた。

4 敵情判断

〔情報収集いよいよ困難度を増す〕 五月に入り、本土の防衛が漸く軌道に乗り初めた頃から前に述べた如く沖繩の戦況は悪化し、敵の本土空襲もまた日を逐うて激化し、交通の逼迫、産業の麻痺、イ

ンフレの昂進、人心の不安焦慮等本土の様相は愈々深刻となつていった。しかも五月八日の独軍屈服を契機とし、ヨーロッパ戦場から太平洋及びシベリア方面に対する連合軍特に米、ソ両軍の兵力転用が愈々急潮となつた。六月二日同盟通信リスボン電は、トルーマン大統領が次の如き対日戦略を披瀝して、日本攻撃に関する強烈なる意志と万全の用意とを表明したことを報じた。

ワシントン来電——大統領トルーマンは二日対日戦略を綜合して次の通り述べた。

- 一、日本軍を各地域に釘付け孤立させ、各個撃破戦略を採る
- 二、攻撃目標に対し、圧倒的な兵力を集中する
- 三、凡ゆる兵器を大量に集中し、人命の損害を極力少くして勝利を確保する

四、陸海兵力を最大限に動員し、不断の仮借なき圧迫を加重し、敵をして態勢を立て直すひまを与へない

かくて六月には、太平洋方面から日本本土に対する米軍の強大なる圧力が押し寄せつつあり、しかも北方においては、ソ満国境方面に対するソ軍の増強が著しくなつていた。今や長遠なる海岸線を持つ本土の列島は、四周から敵の攻撃を顧慮しなければならなくなつた。

大本營は、かくの如き戦局の推移に応じ、連合軍の本土進攻を繞る戦略並びに戦術判断について苦心を重ねた。受動防衛的地位に陥り、その上戦力の機動性を喪失せる日本軍にとつては、敵情判断の適否が勝敗の關鍵となる重要性を持つていた。しかるに当時既に制海、制空権を失い、又海外諜報網を圧縮せられていた日本軍の情報収集は一層困難の度を増していた。中立諸国に残存する乏しい海外諜報、不十分なる通信諜報、作戦軍の報告、敵空海軍の本土に対する攻撃状況等を主なる資料として判断するよりはかなかつた。

〔七月初頭の敵情判断——米軍の対日戦略〕 我が敵情判断は四月

以降逐次具体化せられた。次に述べる敵情判断は、七月初頭の判断を要約したものである。

連合軍特に米軍は有利なる戦勢に乘じ、更に空海作戦を激化して日本本土の無力化を策しつつ一挙に日本本土に対し短期決戦を企図するであらう。これがため南西諸島特に奄美大島、鬼界ヶ島において更に基地を推進拡充しつつ九月末（颱風季明け）以降、直路九州、四国方面に上陸作戦を強行し、同地区に大空海基地を獲得したる後、明年春頃関東地方に上陸して最終決戦を求むる算が最も多い。

因みに後述するところの昭和二十年六月八日御前会議における「世界情勢判断」においては米軍の九州、四国方面上陸を六月以降、関東上陸を初秋以降と判断されている。沖縄の戦況が悪化していた四月末から六月に亘る時期には一時このような判断も行われた事実もあるが、万一という用心感と多分に作戦軍の準備と政府の用意とを督励せんとする大本營の含みもあつたようである。

七月に入つてからは、前記のような判断に固まつた。

なお右のような判断のほか次のような色々の判断も行われた。

米空海軍の事前作戦により、日本の国内情勢特に本土の空軍が潰滅せりと判断した場合においては、伊豆諸島に基地を推進しつつ晩秋の頃、一挙に関東地方に上陸し来ることも有り得る。

又右九州若しくは関東地方に対する主作戦を容易にするため、北海道若しくは東北方面に、一部の牽制若しくは陽動作戦を行うことも予期された。

更に、九州及び関東方面の作戦準備に一応の目途が樹つに伴い、敵が本土の分断を策し、伊勢湾方面から名古屋、京阪神地区に進攻し来る場合も考慮せられた。又敵の一部が朝鮮海峡を突破して山陰沿岸に上陸することさえ懸念せられた。蓋し敵の制海制空権が絶対的となり、六月十日、小樽沖における第二大源丸の海没を契機とし

て、日本海にまで敵潜水艦が跳梁するようになったからである。

以上の如き直路本土に進攻する戦略を避けて、先ず華中、華北要域、朝鮮要域のいずれかに更に戦略基地を推進し、その優勢なる空海軍の威力を完全に發揮した後、本土に進攻し来ることも無しとしない。この場合は本土と大陸とを完全に分断し、且つソ連及び中国に対する政略的目的も重要な狙いとするであらう。

このほか米軍が本土周辺要域を攻略し、その空海軍の威力を以て相当長期に亘り徹底した封鎖と焼爆作戦を遂行し、日本の屈服を求め、しかもなお日本の屈服を見ない場合は、本土各要域に対して一挙同時進攻を企図するかも知れないとの懸念も抱かれた。

〔米軍の対日指向兵力判断〕 米軍が本土進攻のため使用すべき兵力量は、地上兵力については総兵力五〇箇師団を超えることはなく、上陸作戦に使用し得る可動船腹とヨーロッパ方面からの転用速度とを較量した結果、昭和二十年八月頃以降は約一五箇師団を、晩秋の頃には約三〇箇師団を、昭和二十一年春には約五〇箇師団を本土攻撃に指向し得るものと推定した。しかし昭和二十年秋、先ず九州作戦を遂行する場合は、一五乃至二〇箇師団を使用すべしとの結論に達した。

直接本土攻撃に使用し得る航空兵力は、基地航空約六千機、空母搭載機約二千六百機、海上兵力は各種軍艦四二四隻に上るものと推算した。

註 この敵の使用兵力判断は次のような検討の結果、結論を得たものである。

- (1) 欧洲戦争終了時の米軍地上総兵力判断は、約一三〇箇師団と見られた。そして昭和二十一年三月までに、これを約一〇五箇師団に縮少し、その中欧洲及び本国に各一〇箇師団を配置するとの情報に基き、太平洋方面に充当し得る兵力は約八五箇師団と推定された。更にこの中から南方戦場や中国大陸

作戦等に充当する兵力を差引くと、六〇箇師団を超えることはないとの結論を得た。

なお太平洋の基地から本土に進攻する場合の所要船腹は、三〇箇師団の場合は五二五万噸、五〇箇師団の場合は八七五万噸を必要とするとの検討が行われ、英国船腹二二〇万噸の増援を得れば、この作戦が可能であるとの判断に達した。

- (2) 米軍基地航空総兵力は、約一九、七〇〇機と判断された。しかしその中ヨーロッパ、本国、太平洋後方地域の控置兵力を排除し、本文の如き結論となつた。六、〇〇〇機の内訳は超重爆一、五〇〇機、重爆一、四〇〇機、中爆一、一〇〇機戦闘二、〇〇〇機と推定された。

なお母艦搭載機は、昭和二十一年春には更に三、一〇〇機に増加することが予想された。

- (3) 海上兵力は、昭和二十年八月末頃の推定兵力でその内訳は空母二六隻、特空母七四隻、戦艦二四隻、巡洋艦三六隻、駆逐艦二五四隻であつた。尚別に英国艦隊（空母一二隻戦艦六隻を基幹とす）の対日作戦参加が予想された。

かくの如き米軍戦略に関する我が判断は、大綱において概ね適中していたことが戦後の米軍諸資料によつて確認された。

註 太平洋方面陸軍総司令官マックアーサー大將は太平洋方面海軍部隊総司令官ニミッツ提督と協力し、昭和二十年十一月一日を期し、第六軍の約一四箇師団（内、海兵師団三箇、空挺師団一箇）を以て南部九州（宮崎及び鹿児島県）に進攻し、同地域に大空海基地を獲得したる後、翌年春第一、第八及び第十軍の三軍——二五箇師団（内機械化師団二箇、海兵師団三箇、空挺師団一箇）——を以て関東に進攻し、日本軍に対し最終決戦を求め、関東平野特に帝都を攻略する計画であつた。前者をオリンピック作戦、後者をコロネット作戦と呼んでいた。

この世紀の渡洋大作戦に参加する海空戦力は、有史未曾有の勢力が予定されていた。即ち海上部隊は、第三及び第五艦隊より成り、その兵力は戦艦二三、空母二六、特空母六四、巡洋艦五二、駆逐艦三二三、護衛艦隊二九八、大型上陸用舟艇二、七八三隻に達した。又航空兵力は、陸軍航空部隊たるケニー大將麾下の極東米航空隊（第五、第七及び第十三航空軍より成る）及び海軍航空部隊（戦闘用飛行機一四、八四七機）のほか、スパーン大將麾下の戦略航空部隊（B 29 部隊）の第八及び第二十航空隊が参加する計画であつた。

〔重慶及びソ連軍の戦略判断〕 重慶政権及びソ連の政略判断は後に述べるが、重慶軍は、米軍の中國大陸又は日本本土進攻作戦に策応し、大陸日本軍に対して攻撃を展開するであろう。その対日戦使用兵力は八月頃、三〇箇師（内一〇箇師は完全米式化、他は半米式化）、年末頃九十箇師（内三〇箇師が完全米式化、他は半米式化）に上るであろう。

又ソ連が対日参戦を決意した場合は、絶対優勢の兵力を以て極めて短期間にその政略目的の貫徹を期するであろう。

即ち本年八、九月頃開戦する場合においても、狙撃四〇乃至五〇箇師団、飛行機六、〇〇〇乃至七、〇〇〇機、戦車四、〇〇〇輛基幹の兵力を使用するであろう。開戦決意と共に先ず空軍を以て満、鮮、蒙疆、華北の我が航空撃滅戦を開始し、交通網破壊及び要地攻撃を反復したる後、地上軍の全面的進攻を見るの算が大である。この際地上軍の主力を以て満洲、一部を以て北鮮、蒙疆の各要域及び樺太に進攻するであろう。その主攻勢は、満洲西部正面に指向するものと判断された。

〔米軍の本土攻撃要領及びその様相〕 米軍が昭和二十年秋、九州に、次いで翌年春、関東に進攻し来るべき算が最も多いこと並びにその作戦目的、使用兵力については前述したところであるが、その

攻撃要領に關しては次のように判断された。

米軍の本土攻撃はいずれの場合においても、先ずその海空軍の全力を挙ぐる事前攻撃を以て開始されること必至である。即ち現在の焼夷爆撃と封鎖作戦を愈々強化しつつ、上陸前一、二カ月間我が本土航空戦力の殲滅、本土内重要交通網の破壊を主目的とする戦略爆撃を実施する。次いで上陸前一部を以て依然この戦略爆撃を続行しつつ、主力は上陸方面広域に亘る軍事施設、交通、通信網の徹底的破壊を目的とする戦術爆撃に移行する。

この戦略戦術爆撃によつて、我が航空基地は巧妙に秘匿せられたもの以外は破壊し尽される。又本土は、九州、四国、本州、北海道はそれぞれ孤立するだけでなく、これらの島嶼の内部においても分断され、戦場方面の鉄道は不通となり、著明なる道路は昼間の交通が困難となるものと思われた。

かかる海空軍の事前攻撃の進捗に伴い、米上陸軍船団は海軍護衛の下に日本本土に向つて発航する。

上陸開始二、三日前から米海空軍の砲爆撃は、日本軍の空海軍特攻基地の制圧、上陸正面陣地の破壊、日本軍の戦場における兵力機動を封鎖する交通破壊等を重点とする攻撃を徹底的に遂行する。この攻撃に膚接して上陸正面に砲爆撃の弾幕を構成し、その掩護下に上陸を開始する。

この砲爆撃により、戦場における部隊の昼間行動等は殆ど不可能となり、月明の場合夜間といえども車輛部隊の行動が困難となるものと予想した。又陣地を始め軍事施設の露出せるものは破壊を免れ得ないと思わねばならぬ。

米上陸軍は、従来島の嶺上陸作戦に比して一段と第一次の上陸兵力を強大にし、又第一日より砲兵、戦車を主体とする大部隊を揚陸する。しかも迅速に橋頭堡を固め、堅実にこれを拡張し、万全の兵力を上陸せしめたる後攻勢前進に移るであろう。この間、海空軍は

主として上陸軍を強力に直接支援する。

敵はかくの如き上陸攻撃に併行し、空挺部隊を以て空からの降下攻撃を実施する算が極めて多い。その攻撃は直接上陸軍の戦闘に策応するため、上陸正面の海岸に近い地域に降下するほか、上陸正面後方地区の日本軍航空基地と戦略上の要点占領を企図する。沖縄基地の關係上、九州方面において特にその算が大である。

なお日本本土進攻のため、米軍が使用すべき進攻基地に関する判断は、次の通りであつた。

一、海軍基地 主力はウルシー又はレイテ、一部はマニラ及び沖縄

二、空軍基地 マリアナ、沖縄、硫黄島、並に今後獲得推進すべき基地

三、上陸軍発航基地 沖縄、比島、中部太平洋基地

註 日本軍航空特攻による輸送船の被害を減少するため奄美大島、種ヶ島、小笠原群島等を中継基地として獲得し、この中継基地を利用して多数の上陸用舟艇に移乗した後、本土に進攻し来る場合あることを予想した。

5 本土決戦の思想と戦法

〔基本思想〕 以上の敵情判断に対し、本土決戦計画は那邊に勝利の基礎を信じ、如何なる戦法を以て勝利を求めんとしたか、それは昭和二十年六月八日御前会議において行われた河辺参謀次長の発言及び第一、第二総軍の決戦綱領等に最も好く表明されている。その思想を要約すれば次の通りである。

米軍は長遠なる洋上補給路に依存しつつ、大兵を提げて日本本土の牙城に立ち向ふ本質的弱点を持つてゐる。これに対し日本軍は、父祖伝承の本土に無疵の陸軍骨幹武力を擁し、敵の上陸点にその全力を集中し、大なる縦長戦力を以て連続不斷の攻勢を断行

し得る。しかも航空及び海上特攻部隊の全力を傾けて本土の沿岸洋上に邀撃し得る。更に本土の特性は、皇国守護の忠誠と不敗の大和魂に凝り固つた一億の国民が軍に協力し軍と共に戦ふ外、地の利は絶対的である。即ち従来の離島や遠洋作戦に於て、日本軍が孤立無援補給の途を断たれつつ、所在の寡少なる戦力を以て一手に米大軍の集中攻撃に立ち向つた場合と比較すると、彼我その戦略的立場が反対になる。

本土のこの特質に勝利の基礎を認めて、先づ速かにこの本土の特質を発揮し得べき必勝の戦略態勢を確立し、皇土の万物万象を戦力化する。敵軍の来攻にあつては、一億特攻の攻撃精神を発揮してこれを撃滅し、敵軍の一兵と雖も生還せしめない覚悟を以て戦ふ。即ち敵上陸軍が本土近海に接近せば、先づ海空の全戦力を挙げ我が国独特の空中及び水上攻撃を以て米輸送船団を撃沈し、洋上撃滅に努める。しかも猶上陸し来る敵軍に対しては、本土陸軍の全兵力を敵軍の上陸点に集中し、連続不斷の猛烈なる攻撃を強行してこれを神速に沿岸地域に撃滅する。地上戦法も亦特攻戦法に徹底する。一方国民はその総力を挙げて軍の後方諸勤務に、防空に、築城に、将又直接戦闘に協力する。

〔沿岸決戦思想の浮動〕 しかしながら「決号作戰準備要綱」が策定、示達された三、四月の頃は、本土の兵備が僅かに緒に就いたばかりで作戦準備も不十分であつたため、大本営を始め作戦軍指揮官は、敵上陸軍に対し直ちに沿岸に攻勢を採つてこれを撃滅するだけの自信を持ちかねてゐた。その上、水陸決戦を企図したサイパンやその他の島嶼防禦における敵艦砲撃や爆撃並びに火焰戦車の威力等に関する深刻なる体験に基き、既述の如く縦深攻撃防禦方式を強調せられていたことと相俟つて、この基本思想は決号作戰準備要綱及び四月二十日、大本営陸軍部が示達した「国土決戦教令」に必ず

しも鮮明ではなかつた。殊に後者には、敵上陸軍に橋頭堡の獲得を許すの已む無きを前提とし、これに対する準備周到なる統一攻撃をも重視する思想さえあつた。

又作戦部隊の中には、敵の砲爆撃による損害を考慮するの余り、海岸から後退し、高地帯に洞窟陣地を構え、敵上陸の初動に沿岸攻勢を断行する用意の十分でないものがあつた。例えば関東の第十二方面軍においても、九十九里浜若しくは相模湾方面より上陸し来る敵に対して、利根川上流地区に決戦兵団を保持して敵軍主力の主攻方面を判定した後、その方面に決戦を求める作戦構想であつた。

従つて会戦場は、筑波山、千葉の線以東或は八王子南方山系以南の地区と予想し計画されていた。その他の方面も大同小異の傾向にあつた。

〔決戦思想の固成及び普及徹底〕 昭和二十年五月頃、本土の兵備が漸く進捗し、大本營及び新設総軍司令部の首脳にこの実情が認識されることが及んで、かかる消極的傾向を一新して、前述基本思想に透徹することが厳しく要望された。即ち六月上旬參謀總長は本土全陸軍に対し「本土作戦は攻勢作戦にして、決戦地域は沿岸特に水際地域たるを要し、其の作戦指導は上陸敵軍が未だ橋頭堡を構成せざる以前に縦深部署を以て其の上陸未完の弱点を強襲すべき」とを指示した。又六月六日、大本營陸軍部は「国土決戦法早わかり」を配布し、この趣旨を將兵に平易に解説した。第一、第二兩総軍司令官も亦この大本營の意図を享け、それぞれその作戦計画を修正し、これを徹底せしむるため、特に決戦綱領を定めた。

かかる経緯を経て、本土作戦は沿岸決戦に徹底する如く指導された。蓋し本土決戦は国軍最終の決戦であり、日本陸軍は、建軍以来八十年の光榮をこの最後の一戦に賭し、本土決戦においてこそ最後の勝利を収めなければならぬ。しかして勝利の關鍵は敵上陸の戦線浮動時に全軍挙げての必死の強襲を措いて他に方途なしと考えた。

しかも沿岸地域は独り国民の多数が居住する政治、經濟、交通の要域であるばかりでなく、本土の地勢上重要航空基地の多くが、この地域に施設せられてゐる。しかも沖繩その他の戦例の訓うる如く一旦これを敵手に委し橋頭堡を固めさせる時は、我が火力や突撃裝備を以てはこれを抜くことは極めて困難であり、我が作戦は著しく不利となるからである。

もとより敵の艦砲射撃や爆撃の損害は重視せらるべきであるが、沿岸における巧妙なる築城の利用と、沿岸配備の積極果敢なる防禦戦闘によつて敵火を分散させると共に、彼我の戦線を紛戦混淆せしめて、敵砲爆撃の威力發揮を困難ならしめることが可能であることが特に強調された。

註 「国土決戦法早わかり」において特に強調せられた項目を列記すると次の通りである。

一、国土決戦は攻勢に依る殲滅戦である。
二、防禦と築城に頼るのは不可。沿岸防禦も決戦的にやれ。
三、陣地は敵の必ず來攻する地点を選んで造れ。平地の築城を重視せよ。

四、飛行場の確保を重視せよ。

五、築城も、訓練も、戦闘も對戦車戦闘を基調とせよ。

六、挺身斬込戦法を重視せよ。

なおこれより先、四月二十五日大本營陸軍部は「國民抗戰必携」を配布して國民に決戦参加の心構え、即ち一億特攻皇土護持に奮戦すべきこと、並びに國民義勇戦闘隊として戦闘の訓練、陣地の構築を実行し、各々その郷土を守り、挺身斬込戦法によつて軍の作戦に協力すべきことを要望した。

〔戦法——邀撃決戦の一般要領〕 以上の基本思想を具現するため、我が陸、海、空各部隊が採らんとしていた戦法を要約し、これを原則的に述べると次の通りである。

我が攻撃は、先ず上陸準備の爆撃のため本土に近接する敵機動部隊に対する海軍航空精鋭部隊及び潜水艦の攻撃に始まる。

これに前後して敵上陸軍船団が、本土の距岸三〇〇杆内外に接近した頃から、陸海全航空部隊及びこの海域に配備された中小型潜水艦がその輸送船団に対し猛然特攻を開始する。この攻撃に呼応して沿岸に集中伏撃した特攻舟艇も、その主力を以て敵輸送船団を泊地進入の前後に攻撃する。沿岸洞窟陣地に秘匿された長射程砲も、泊地敵輸送船に対し砲撃を実施する。

敵輸送船に対する攻撃は、敵輸送船団の泊地進入前後において最高潮に達する。この攻撃間、航空部隊や潜水艦の一部を以て敵機動部隊や支援砲撃に任ずる艦艇及び補給に任ずる輸送船に対して攻撃し、特攻舟艇のうちの蛟竜、人間魚雷の一部をこれに参加させる。敵上陸軍が海岸に達着し進撃を開始すると、上陸点に全火器の火力を集中する。沿岸陣地の諸部隊は、神出鬼没の反撃を執拗に反復して米軍の橋頭堡構成を阻止し、彼我の戦線を混戦状態に導いて、米軍の爆撃と艦砲射撃とを困難な状態にする。一方決戦兵団は、米軍の上陸方面が予想し得る状況を認めると、直ちに教条の準備せる道路を利用して予定の主決戦方面に急進し、集中し、主攻勢正面の攻撃陣地に展開する。

攻勢を迅速に開始するため、主決戦方面及びその方面の主攻勢正面を予め概定し、戦車、重砲、決戦兵団の砲兵等を先遣して展開を完了せしめ、又全決戦兵団の集中を待つことなく攻勢を開始する。主力の攻勢は、沿岸配備兵団が敵上陸軍と沿岸において紛戦中の好機に乘じ攻勢を敢行する。この攻勢兵団は、縦長の大なる部署を以て予め準備せる攻撃築城をつたつて海岸に近迫し攻撃する。遅れて到着した第二線兵団は、主攻勢正面の第二線兵団として使用するが、或は他方面に使用する。

〔対戦車肉迫攻撃〕 なお本土における敵上陸軍との地上戦闘にお

いて、日本軍が最も頭を悩ました問題の一つは対戦車戦闘であつた。蓋し従来各戦場で日本軍が最も苦手とするところは、米軍戦車就中火焰戦車であつた。しかも来るべき本土決戦においては、米上陸軍はその骨幹戦力として更に大量の戦車を使用すべきことが予想せられた。決戦攻勢たる本土の戦闘においては、この敵戦車群との対決に成功し得るか否かが、勝敗の重要関鍵となること必至であつた。

しかるに我が戦車は、その数においても装甲においても火力、装備においても敵戦車に比し著しく劣弱であるばかりでなく、我が対戦車砲は、数と装甲侵徹力において不十分であり、増産を焦慮した自走砲も空襲被害のため、到底要求を充足することが出来ない有様であつた。

かかる対戦車近代装備の劣勢を補う方法は、結局特攻戦法——（註）機一艦を屠らんとする航空特攻と同様、一兵一輛必碎の肉迫攻撃——よりほかなかつた。日本軍は、南方各戦場や硫黄島沖繩戦場において屢々この戦法を以て奇功を博した戦訓に鑑み、七月十六日日本本土の全軍に「対戦車戦闘要綱」を発令し、各般の作戦準備就中築城砲兵、戦車の運用等は対戦車戦闘を基調として実施することを要求すると共に、特に対戦車戦闘は一死必碎の特攻による肉迫攻撃を主体とし、この戦法を対戦車決戦手段として用うべきことを要求した。なおこの戦法を、全將兵に対し兵科部の別を問はず徹底せしめた。しかしながら訓練未熟且つ素質も低下している新動員部隊において、果して所期の目的を果し得るや否やは少からぬ懸念があつた。

註 肉迫攻撃手段一例左の如し。

一、手投爆雷——円錐形有孔爆弾で黄色薬六〇〇瓦を装填してある。十米以内に近迫して敵戦車に投げつける。徹甲威力は五〇—七〇耗

二、刺突爆雷——手投爆雷を命中を確実にするため長い柄をつ

けたものである。

三、火焰瓶——空瓶にガソリンを充填し敵戦車に肉迫して機関部に投げつけ炎上させる。

四、「フトン」爆雷——小型の爆薬を座蒲団状の袋に入れ、延期信管をつけたもので敵戦車に肉迫してその正面或は突起部にひつかけて爆発させる。

五、急造爆雷——黄色薬約十匁を梱包して信管をつけ、攻撃に当る将兵が之を背負つて、敵戦車の軌間に突入して諸共に自爆する。

〔終戦頃の作戦準備進捗状況〕 かくて本土の予定兵備は完遂せられ兵団の配備は一応態勢を整えることが出来た。しかしながら空襲の激化に伴う軍需品の生産低下、交通の逼迫、燃料食糧の不足等に基因し、作戰準備の実質的内容特に部隊の装備と訓練と後方準備は九州、四国方面を除いて著しく遅滞していた。

即ち作戰部隊の装備は第一次兵備兵団においても火炮、重火器の一部を欠き、特に馬匹、自動車の数が多かつた。第二次兵備兵団の装備充足は、九州四国方面においても七〇％程度、関東方面も略々同程度であつたが速射砲及び迫撃砲は殆ど欠いていた。その他の

第八章 主要方面の作戰計画

(附図第十参照)

一 九州及び関東に対する米軍攻撃要領の判断

〔九州攻撃要領〕 米軍の南九州進攻の目的は前述のように、関東進攻のため大空海基地の獲得にある。南、北九州ともに空海基地に恵まれているが、南九州は本土の末端に当り、地勢上からも日本軍の戦力集中と發揮とが困難である。これに反して米軍は沖縄の基地

方面は五〇％程度を出なかつた。更に第三次兵備兵団は、特に優先装備された九州方面においても五〇％内外の充足に過ぎず、特に小火器、速射砲、迫撃砲、自走砲等の欠数が多かつた。その他の地区は僅かに装備の一部に止まつた。

これらの兵団の装備充足は、九州四国方面においては概ねこの年の十月頃に完整し得る見込みであつたが、関東方面は次の年の春頃、その他の地区は更に遅延することが予想された。

陣地の構築は計画に対し九州、四国、関東地方沿岸の重要正面は六〇乃至八〇％に達していたが、その他の正面は五〇％内外のものが多かつた。

訓練は後方に集結された決戦兵団を除き膨大なる陣地構築に忙殺せられ、殆ど実施の余裕がない状態であつた。

最も重要な後方準備は、既述基礎配置の計画に対し、九州、四国方面は弾薬一〇〇％、燃料九四％、糧秣一六％の集積を終えていたが、決戦時集中する兵力に必要な集積には大なる懸念があつた。関東方面においては糧秣は五〇％集積し得ていたが、弾薬、資材の集積は九州優先により僅かに一部が実施されていたに過ぎなかつた。その他の地域は北東方面を除いて更に遅延していた。

を利用し、戦闘機の有効なる支援下に攻撃し得る。しかも鹿児島、有明、阿波の艦船基地及び鹿屋、知覧、都城、新田原の航空基地群を始めとし、宮崎、国分、鹿児島、出水等良好なる飛行場に恵まれ、米軍関東進攻のため屈強の基地となる。

北九州は更に産業、交通上西日本の死命を制する重要地位を占めているが、九州島、五島、対馬、壱岐等を予め攻略するを要し、進攻作戦が複雑、困難となるので、北九州に來攻する算は比較的少い

と考えられた。因みに四、五月頃は第十六方面軍においては、米軍が済州島若しくは五島列島等に足場を占めて北九州に来攻するのはないかとの考慮もあつたが、その後南九州を一層重視するようになった。

南九州に対する敵の予想上陸正面は宮崎海岸、有明湾、薩摩半島の西及び南海岸の三正面で、その二乃至三正面を選び、且つ主攻を有明湾に指向する算が多いと判断した。なお各正面における予想主上陸地点は、それぞれ住吉海岸、志布志西南海岸、吹上浜及び枕崎海岸であつた。

なおこの上陸作戦に併行して、鹿屋及び都城航空基地群に空挺兵団を投下すること必至と判断した。

註 昭和二十年五月頃までは敵の主攻は宮崎平地に指向すべしとの判断が強く、この判断に基づいて作戦計画及び準備が進められたが、その後有明湾方面に変つた。

戦後公表された米軍資料によると、米軍は第一、第十一軍団及び第五海兵師団等の一〇箇師団を以て三正面に併行上陸を企図し、しかも薩摩半島突端の開聞岳正面にも上陸する計画であつた。第九軍団（三箇師団）は四国に陽動作戦を実施した後、第十一空挺師団と共に予備兵団となる予定であつた。

この三正面に上陸せる米軍は、それぞれ当面の日本軍の反撃を撃破し、相策応して肥薩國境以南の南部九州特に海、空基地の占領確保を図るであらう。

なおこの南九州に対する上陸に先だつて種ヶ島を占領し、戦闘機及び舟艇の基地を推進する算が極めて多い。吹上浜西北方の甑島を攻略するであらうとの判断は比較的少なかつた。

註 戦後の資料によると、米軍は種ヶ島を素通りして先ず第六軍

直轄の第四十師団を以て甑島を攻略する計画であつた。

この南九州攻撃に併行し、一部を以て四國特に土佐平地、状況に

より四國西南隅の宿毛湾に上陸すべしと判断されたが、米軍は単に陽動作戦のみを企図していたことは前述した通りである。

米軍が北九州に来攻する場合は、決戦的企図が強く主力を以て博多東方の福岡沿岸に、一部を以て博多湾及び関門正面に上陸し、九州及び本州方面から反撃して来る日本軍を撃滅して広く関門博多、久留米平地を占領しその屈服を策するものと考察された。なお北九州進攻のためには、これに先だつて済州島、五島を占領し、対馬、杣岐の攻略若しくは制圧を計るであらう。従つて北九州来攻の時機は更に遅延すべく、使用兵力も南九州の場合に比し、一層強大となることが予想せられた。

〔関東攻撃要領〕 米軍が愈々関東に最終決戦を求むる場合、その予想上陸正面は相模湾、九十九里浜及び鹿島灘の三正面であつた。その中相模湾、九十九里浜を重視し、この両正面に併行して上陸するものと判断した。この三正面における予想主上陸地区は、それぞれ相模川左岸地区、東金地区、久慈川右岸若しくは諏訪地区であつた。

米軍が相模湾、九十九里浜のいずれに主力を指向するかの判断は最も論議のあつたところであつたが、上陸が容易という観点から九十九里浜に指向するだろつとの判断が強かつた。蓋し相模湾正面は距離的には東京に近いが、大島を含む東京湾の諸要塞と、上陸防禦に好適の地形により、上陸に不利であると考えられたからである。

各正面上陸部隊は、それぞれ当面の日本軍を撃滅し、次いで相呼応して帝都を攻略すると共に、広く関東地方を領有する。なおその一部は三浦及び房総両半島の東京湾要塞の攻略、啓開を遂行するものと予想した。この主上陸に先だつて、大島、御前崎若しくは館山附近を攻略し、戦闘機基地の推進を企図することも有り得ると予期された。

註 戦後の米軍資料によると米軍は第八、第十軍を以てそれぞれ

相模灣及び九十九里浜に併行上陸し、第一軍が予備兵团となり、これに続く計画であつた。その主攻は相模灣に予定されていた。なお上陸後の作戰は概ね我が判断に一致していた。

二 西日本における作戰準備

1 九州及び四国方面の作戰準備

〔九州重点思想の萌し——九州決戦の意義〕 五月以来、九州方面の作戰準備優先の措置が断行せられたことは既に述べたところであるが、更に戦局の進展に伴つて敵が先ず九州に来攻する算増大せりと判断し、本土決戦の運命を九州決戦に賭ける決心を採り、主決戦方面を九州方面に概定し、作戰準備の重点を九州に徹底すべきであるとの思想が抬頭し初めたが、決断に至らずして終戦となつた。

抑々米軍の九州進攻は、空軍基地の獲得を目的とし、地域的にも制限された作戰と判断されたが、日本軍としては、これに対し本土の全戦力を結集して決戦を強要し、米上陸軍を撃攘し、米軍の本土攻略企圖を挫折せしむることが作戰目的であつた。

当時毎日に激化する空襲被害と封鎖により、本土のあらゆる生産は低下し、九州、四国方面を除く各方面新設兵团の装備は、昭和二十一年春においても完整が危ぶまれる有様であつた。更に燃料と食糧の逼迫は、昭和二十一年春以降の決戦遂行に自信を持ち兼ねるほど、重大な事態に当面していた。

しかも前述の如く九州方面の作戰準備優先の結果、一層他方面の作戰準備が遅延し、その上ひとたび九州決戦を遂行し、本土の全戦力を投入すれば、本土の他の方面において第二次の決戦を遂行することは、到底不可能となることは明かであつた。

一方沖縄作戰の進展、九州方面に対する敵機の跳梁激化と偵察の

活発化並びに小笠原群島に対する敵の動向が比較的静穩なる等、一般の徴候から米軍の九州先攻の算が愈々濃くなつて来た。

大本營の首脳は、この来るべき九州決戦において、来攻米軍に対して甚大なる損害を与え、少くもその第一次上陸軍を決定的に撃破して、日本軍民の強烈なる抗戦意志と本土遠征の困難性を米軍に知らしめ得たならば、関東地方に対する敵の進攻は避け得られるかも知れない。しからざる場合においても米軍の関東進攻を遅延せしめ、或は戦争を比較的利益に終結に導くチャンスを得る算がある。従つて万難を排し、その実現に努力すべきであると考えた。即ち九州決戦は名誉ある戦争終結の契機を掴まんとする最後の努力となり、戦争指導上決定的な意義を持つものとなつた。

ここにおいて九州作戰準備優先から更に竿頭一步を進め、速かに主決戦方面を九州に概定し、速かに国軍の総力を挙ぐる乾坤一擲の決戦態勢を採るを可とするとの意見に傾いた。

〔第三十六軍の九州推進問題〕 海軍や航空総軍の作戰準備は、既にその態勢にあつた。問題は、関東に配置せられている本土地上軍の最精銳、大本營の総予備ともいふべき第三十六軍（戦車二箇師団及び一般決戦師団六箇を基幹とす）の運用に懸つていた。

米軍が、直路関東に進攻する懸念が完全に解消する時期を待つことなく、本土の交通特に鉄道が破壊せられる以前において、第三十六軍の主力を九州に、少くも近畿、中国地区に推進する決断の要が、五月末以来数回に亘り、第二総軍から大本營に具申された。大本營作戰当事者の間でも、七月頃からこの問題を研究する運びとなつたが、米軍が万一直路関東に来攻する場合を懸念し、更に敵情の推移を的確に見究めんとして、遂に終戦時までその決断も準備も行われなかつた。蓋し、帝都を持つ関東の防衛を重視する従来の思想を脱却することは、容易ならぬ重大決心であつたからである。

註 第三十六軍はもとと大本營の総予備的性格のものとして編

成されたのであつたが、関東の防衛を担任する第十二方面軍の隷下に入れられ、専ら関東方面の決戦軍として、その作戦準備に邁進していた。なお戦後の米軍資料によると、米空海軍は九月から日本本土の鉄道に対し、徹底的攻撃を企図していた。

かくて西日本における決戦は、九州及び四国就中霧島山を中核とする南九州を舞台とし、作戦準備が進捗し、有史以来未曾有の本土決戦の戦機は熟して行つた。

〔指揮組織と作戦の分担——陸海一体〕この方面の地上作戦は、九州方面においては、第四十軍と第五十七軍が南九州の、又第五十六軍が北九州の作戦をそれぞれ担任し、横山第十六方面軍司令官がこの三軍を統率し、更に陸戦に関し佐世保鎮守府部隊（司令長官杉山六藏中将）をも併せ指揮し、全九州の地上作戦を担当していた。

四国方面においては、第五十五軍が内山第十五方面軍司令官統率の下に全四国の作戦に當つていた。畑第二総軍司令官は広島に位置し、この第十五、第十六両方面軍司令官を統率し、両方面の作戦を統轄する組織であつた。航空作戦は、陸軍においては第六航空軍が河辺航空総軍司令官の統率下に、海軍においては第五航空艦隊が、小沢聯合艦隊司令長官統率の下に協力してこれに當つた。

一方海上作戦は、九州方面の大部を佐世保鎮守府司令長官が、又四国方面と豊後水道に面する九州方面を呉鎮守府司令長官が担任した。

この方面における陸、海軍の協力関係は緊密に行われた。例えば陸軍兵力の不足を補うため、佐世保地区の海軍の陸上担任地域が拡大せられ、又海軍担任地域外にその陸戦隊を派遣し、更に陸軍が作戦を担任する重要正面に艦砲を転用し、鎮守府地区の対空火器を陸軍防衛区域の交通掩護に割愛する等の取極めが円滑に実施された。

この組織と分担の下、陸、海、空の戦力が渾然一体となり、更に国民の総力を結集し、九州方面においては南部九州と北部九州とを

主力を以て決戦を敢行する地域と予定し、特に南部九州の決戦完遂を重視した。四国においては土佐平地を同方面作戦軍主力の決戦場と予定した。

決戦に當つては、航空及び海上部隊は、全力を揮つて敵輸送船の洋上撃滅を、地上部隊は、米上陸軍をその上陸未完の間に神速に攻撃撃滅する如く鋭意計画準備が進められた。又官民は軍の後方諸勤務や陣地構築に協力するほか、その一部は軍の戦闘部隊に協力して情報勤務やゲリラ戦闘への協力が計画された。

〔航空及び海上作戦要領〕 航空及び海上作戦は九州及び四国を重点として計画せられ、その兵力配備については前述したところであるが、その作戦要領は次の如くであつた。

一、偵察

偵察飛行隊と潜水艦とを以て比島、沖縄、マリアナ進攻基地より九州、四国に向ふ進攻海面を偵察哨戒する。遠距離及夜間偵察は海軍部隊が担任し、近距離搜索は海軍偵察飛行隊一四〇機と陸軍の可偵隊とを以て本土の距岸六〇〇哩圏内を昼夜に亘り搜索し、又九州の距岸二〇〇乃至三〇〇哩に配置する潜水艦を以て哨戒を強化して、遅くも米上陸軍の輸送船団を泊地進入の前日迄に捕捉する。

二、展開

初動の攻撃に任ずる第五航空艦隊と第六航空軍はその特攻隊の主力を九州、四国、西部本州の攻撃発進基地に縦深に秘匿展開し、その他の部隊は中、北部、九州、西部本州及朝鮮に展開する。

増援戦力たる第三、第十航空艦隊及第一航空軍は決戦発動と共に逐次九州、四国、中国方面の攻撃発進基地に機動し展開する。三、米機動艦隊に対する攻撃

米機動艦隊に対する攻撃は、敵の上陸企図が明かになり、輸送船団を伴う場合に限り実施し、使用兵力を海軍の精鋭機三三〇機と陸軍航空部隊の一部に限って攻撃する

四、米輸送船団に対する攻撃

米輸送船団が我が攻撃圏内に入るや、昼夜間断なき航空特攻を開始する。泊地侵入前には比較的優秀なる部隊を充当し、泊地進入前後に最大戦力を投入して総攻撃を実施し、概ね十日間に航空の全力を使用する。戦闘機二千機を以て此の特攻を掩護する。一方第三十一水雷戦隊は回天を搭載し、宮崎沖若くは有明湾方面敵船団の泊地進入時夜暗を利用してこれに肉迫し、先づ回天攻撃を加へ、次いで自ら敵船団に突入攻撃する。

又海上特攻部隊も夫々最寄り敵上陸方面に於て特攻を敢行する、即ち蛟竜及海竜を以て夫々敵船団の泊地進入前及進入時に、震洋を以て泊地に、敵船団を攻撃する。回天は上陸支援に任ずる敵艦隊及泊地の船団攻撃に任ずる。

五、米軍基地に対する攻撃

潜水艦の一部を以て事前にウルシー攻撃を実施する外、特に敵上陸時に沖繩の基地に対し約一、二〇〇名の空輸挺進部隊に依る強行着陸攻撃を実施する。

〔地上軍の兵力と配置〕 九州の地上兵力は、師団一四箇、独立混成旅団六箇、独立戦車旅団三箇、高射砲師団一箇、軍直部隊、熊本及び久留米兩師管区部隊、対馬及び壱岐守備隊（計一五箇大隊）、下関要塞部隊、佐世保地区陸戦隊（一〇箇大隊）等が主なるものであつた。又四国の地上兵力は師団四箇、独立混成旅団一箇及び善通寺師管区部隊のほか陸戦隊数箇大隊から成り、それぞれ附図の如く配備された。

なお九州決戦に當つては先ず中国、近畿地区の三箇師団と、状況により四国の一箇師団を使用し、次いで東海、関東方面から二乃至

四箇師団を増援する計画であつたが、前述のように九州決戦に徹底するため、関東の第三十六軍主力を事前に九州に推進せんとする氣運にあつたので若しこれが適時実現すれば、九州決戦の兵力は二十數箇師団に達する予想であつた。問題は、これらの増援兵力が敵の熾烈なる交通破壊に先だつて、或はその攻撃下に適時決戦場に到着し得るか否かにあつて、大本營及び第二總軍司令官の作戦指導上の最重要課題であつた。

四国は、敵上陸に當つては同島所在の兵力を以て決戦を遂行し、兵力の増援を予定されていなかった。又前述の如く敵が来攻しない場合は、一箇師団を九州方面に転用する如く計画された。

〔地上軍の決戦要領〕 決戦は敵主力の上陸正面に求める。しかし敵主力の判明が困難なる場合は自主的に決戦正面を決定し、戦機を逸せざる如く攻勢を断行する。即ち南九州においては有明湾、宮崎海岸及び薩摩西岸の三正面に予想し、敵の主力不明の場合は有明湾正面に、又北九州においては、福岡正面を決戦正面とする。又四国においては、敵の主攻を土佐平地の物部川河口より浦戸湾東側に亘る地区に予想し、この正面に対し主作戦を指導する。

南九州においては、敵の上陸企図判明すると共に第十六方面軍司令官は、直ちに九州地区の決戦兵団を霧島山周辺に集中する。一方第二總軍並びに大本營は、それぞれ本州方面の決戦兵団を九州に推進する。決戦正面を担当する軍司令官は、これら決戦兵団全力の集結を待つことなくこれを決戦場に推進し、敵上陸開始後遅くも一週間以内に決戦攻勢を開始する。その間逐次到着する兵団は、第二、第三練兵団として決戦場に投入する。その他の正面においては持久作戦を指導し、決戦正面の作戦を容易にする。なお関東の第三十六軍が事前に九州に推進されている場合は、更に他の一正面に対しても決戦を併行して指導することも腹案された。

北九州においては、決戦兵団の主力を飯塚周辺に、一部を南部博

多平地に集結し、福岡正面の米上陸軍を挾撃する如く攻勢を遂行する。主力の攻勢開始は、米軍上陸開始後十四日以内と予定された。

九州方面決戦要領を图示すると附図の通りである。

又四国方面においては、浦戸湾東側の鉢伏山及び物部川左岸の金剛山を拠点とし、海岸洞窟陣地と相俟つて中央より反撃し、敵を水際に撃滅せんとする水際撃滅戦方式に徹した計画であつた。

〔九州決戦の勝算——官民の敢闘精神〕 九州就中南部九州の決戦準備が、他方面の犠牲において優先実施せられ、しかも最も懸念せられた敵の夏期侵寇が解消し作戦準備に天与の時を得ることが出来たため大本営及び作戦軍の首脳は九州決戦においては、少くも敵第一次上陸軍の撃擯に成算を持つていた。

その根拠の一は、我が海、空の特攻作戦によつて少くも敵上陸軍の二〇％は、洋上において撃滅し得べく、敵上陸軍の兵力が一五箇師団内外の場合、これを実力一二箇師団に減殺し得る。特に第一次上陸軍（一〇箇師団内外）に対しては、攻撃を集中するを以て更に甚大なる損害を与え得る可能性がある。

第二は、沿岸砲台や水際陣地並びに主陣地の砲兵群により米上陸舟艇を攻撃し、これにより二〇％内外の敵を撃擯し得るものと期待した。九州方面の海岸は、これらの火砲を有効に配置するに適していた。これらの火砲や重火器は、凡て敵眼、敵弾に完全に遮蔽された洞窟陣地を占有し、敵上陸用舟艇や水際に蟄集混雑する敵軍を、最も有効に十字砲火を以て狙撃し得る如く火網編成を行つていた。^{（註）}この攻撃が我が胸算の如く成功すれば、我が地上軍が邀撃すべき敵上陸軍は一〇箇師団以下に減殺すべく、特に第一次上陸軍には半減に近い損害を与え得る。

註 有明湾正面砲台を例示すると二四榴及び二八榴榴砲各四門、一五榴加農七門、一〇榴加農八門、その他約四〇門であつた。

この敵に対し、南部九州に一週間以内に集め得る地上戦力は、沿岸配備師団を合し一乃至一二箇師団に達する計画であつた。従つて敵第一次上陸軍に対する決戦就中主攻撃正面においては九州所在の戦力を以て勝算ありと確信せられた。しかし敵の第二次、第三次上陸を撃擯し得る確信には到達していなかつた。

地上軍の沿岸配備及び決戦の要領を有明湾方面について例示すると附図の如くであつた。

若し敵の上陸企図を事前に適時看破し得れば、中国、近畿方面の三箇師団を戦機に適応し得る如く決戦場に集中し得るであらう。又既述の如く、大本営が関東の第三十六軍主力を事前に九州に推進する決断をとつてゐる場合は、決戦場における彼我戦力の相対比は絶対優勢を期し得べく、その場合は敵の第二、第三次上陸に対しても決戦を完遂し得るものと想われた。

なお一千万に上る九州国民の旺なる敢闘精神は、作戦軍の士気を昂める大きな背景をなし、その真摯なる協力は作戦準備の促進に偉大なる貢献を果してゐた。決戦に當つてはこの官民の協力により、軍の後方勤務を著しく軽減し、殆ど全軍が決戦戦闘に参加し得ることも強味であつた。

〔決戦遂行上の懸念〕 しかしながらこのような胸算の反面には、前述の如く特攻作戦に関する不定なる要素及び計画の如く決戦場に適時全戦力を集中發揮し得るか否かの大きな懸念が伏在していた。更に又敵の来攻が来春以降に延びた場合、陣地構築や訓練等の作戦準備は一段と強化せられるけれども、燃料や食糧の窮乏と戦災の悪化に伴う国民士気等の観点から、決戦軍の戦力発揮が困難若しくは不可能になるような重大なる事態に当面することも憂慮せられた。

このほか沿岸決戦遂行上、同地区住民殊に老幼、婦女子、病弱者等の退避が現実なる課題となつた。南九州地区においては、

これらの国民は事前に霧島山周辺に退避せしむる方針が定められていたが、居住、衛生の施設も食糧の集積もない山岳地帯に附添いを要する数十万に上る非戦闘員を退避せしめ、そして収容することは殆ど不可能なる難事であつた。しかも当時これらの国民が生産を担当していた關係上、早期に退避せしむることが困難なる実情にあり、本問題処理の困難性を倍加した。結局敵の上陸企図判明と共に、比較的安全なる最寄りの戦線後方地区に収容し、作戦軍はこれらの国民を懷に抱いて決戦を遂行するほか方法はなかつた。これらの問題は独り九州に止まらず、本土決戦に伴う各地区共通の難題であつた。

なお当時最も重大化しつつあつた食糧問題と関連し、敵が収穫直前の稲田に対し大規模の焼夷作戦を遂行して食糧飢饉を起すのではないかということも憂慮された。

2 近畿、山陰方面の戦備

〔近畿方面〕 以上の如く西日本の作戦準備は九州及び四国を重点として推進されたが、紀伊水道沿いに、阪神地区の攻略を目指す米軍の企図に対しても真剣なる警戒と作戦準備が行われた。敵のこの作戦は、四国の攻略若しくは伊勢湾進攻と関連して生起すべしと判断された。

これに対し、附図の如く紀伊半島和歌山地区及び田辺地区に第十五方面軍直轄の一箇師団と一独立混成旅団が配備せられ、又淡路島及び潮の岬にそれぞれ独立聯隊一箇が増強若しくは新たに配備せられた。なお四国方面においては、徳島地区に第五十五軍所属の独立混成旅団一箇が配備された。決戦に当つては当方面空、海の特攻を集中すると共に、先ず近畿、中国地区の三箇師団の増援が予定された。航空作戦は、第五航空艦隊と第六航空軍が、海上特攻作戦は、主として呉鎮守府部隊が担当することとなつていた。

〔山陰方面〕 なお五月頃から、既述の如く山陰方面沿岸の防備にも努力が注がれた。当初陣地の構築は、師管区部隊並びに舞鶴鎮守府部隊が主として国民の協力により、山口県の西及び北海岸、鳥取県的美保海岸、京都府下の峰山、舞鶴、小浜海岸並びに福井県の敦賀地区を重点として坑道陣地の構築が開始された。次いで六月、広島に第五十九軍が新設せられて中国地区の防衛を担当すると共に、第三次兵備の三箇師団を附図の如く山口、岡山、姫路に配置し、その一部を以て山陰方面の作戦準備を促進せしむると共に、独立混成旅団一箇を山口県西岸の小串に配備した。

又舞鶴鎮守府地区には陸戦隊六箇大隊の編成が進められた。

三 東日本の作戦準備

1 関東方面の作戦準備

東日本における作戦は帝都を中核とする関東地方を重点として計画準備された。

〔指揮組織と作戦の分担〕 地上作戦は、第五十一軍が鹿島灘正面の、第五十二軍が九十九里浜正面の、第五十三軍が相模湾正面の防禦をそれぞれ担任し、又東京湾正面においては東京湾兵団が南部房総半島の、横須賀鎮守府部隊が三浦半島の防禦を担当し、その外部の伊豆諸島の大島、新島、八丈島にはそれぞれ一兵団が防備につき、帝都は東京防衛軍がその防衛に當つた。別に第三十六軍が決戦軍として中部関東地区一帯に位置していた。

田中第十二方面軍司令官は東京に位置し、以上の五箇の軍とその他の兵団を統率し、又横須賀鎮守府司令長官を陸戦に關し指揮して、全関東及び甲信越地区の作戦を担当し、杉山第一総軍司令官に隸属していた。

なお東京湾兵団及び横須賀鎮守府兵団の使命は米軍の東京湾口突

破を阻止し、又九十九里浜、相模湾方面決戦攻勢の支撐となるにあつた。

第一総軍司令官は東京湾正面の作戦を統一するため、房総、三浦両半島の陸上作戦を横須賀鎮守府司令長官統轄の下に、東京湾兵団長に統一指揮せしむる意見を提言したが、鎮守府司令長官の同意を得るに至らなかつた。結局独立混成第百十四旅団を三浦半島に増強し、鎮守府司令長官の指揮下に入れることとなつた。

航空作戦は、陸軍においては第一航空軍が航空総軍司令官の統率下に、海軍においては第三航空艦隊が聯合艦隊司令長官の統率下に相協力してこれに当り、海上特攻作戦は、横須賀鎮守府司令長官がこれを担任した。航空兵力は既述「決号航空作戦に関する中央協定」の挿表に示す如く陸、海軍合して約八千機（内特攻六千機）が予定されていたが、九州作戦にこれを使用せばその補充は期待し難く、又九州方面に重点が置かれたため実質的準備は不十分な実情であつた。海上特攻母艦の準備は、約八〇〇隻（海上特攻部隊の反撃計画参照）に過ぎなかつたが、九州方面充足後増強せられる予定であつた。

航空及び海上特攻作戦の計画は、九州方面と構想を一にしていたが、敵が直路関東に来攻する場合においてもその作戦準備及び兵力の関係上、九州におけるような戦果は望み得ないと思われた。

【地上軍の兵力と作戦要領】 関東方面の地上兵力は、伊豆諸島を合せて一般師団一八箇（内一箇は新潟に配置せられ、外に皇居守衛の近衛第一師団があつた）戦車師団二箇、独立混成旅団七箇（内一箇は沼津方面）独立戦車旅団三箇、独立歩兵聯隊二箇（内一箇は下田方面）高射師団一箇、軍直諸部隊、警備旅団三箇、宇都宮、東京、長野各師管区部隊のほか、横須賀海軍特別連合陸戦隊（一八箇大隊）から成り、それぞれ附図の如く配備された。

なお関東決戦に当つては、既述の如く東北及び近畿方面から各三

箇師団を、九州方面から二箇師団を、又状況これを許せば東海地区から二箇師団を転用する計画であつたが、このうち何箇師団が戦機に投じて決戦に参加し得るかは大いに疑問とするところであつた。

第一総軍司令官は、先ず第十二方面軍司令官をして従来の作戦計画を踏襲して作戦準備を統行せしむると共に総軍としての作戦計画の検討を急いでいたが、七月に至り附図の如くその計画に根本的な更改を行つた。従来の中央準備陣的な構想を一擲し、自主的に九十九里浜方面を決戦正面と概定して、これに即応する如く第三十六軍を利根川下流地区に推進し、又沿岸決戦に徹底する如く強い指導を行つた。即ち決戦正面の戦闘指導は米軍上陸開始の第二日に当正面の軍が先ず攻勢に転移し、次いでその紛戦状態に乗じて第三十六軍主力が攻撃を断行する計画で、その攻撃開始も米軍上陸開始後第三乃至第四日目と予定された。万一米上陸軍の主力が他の正面（相模湾或は鹿島灘正面）に上陸する場合においても、先ずこの正面に予定の決戦を完遂した後、他の正面に決戦を移行する計画であつた。

第二次決戦は相模湾正面に予定された。但し敵が九十九里浜正面に上陸しない場合は、第一次決戦を相模湾正面に求めること勿論であつた。

第一総軍のこの新計画は七月十七日、方面軍に開示せられ、この際特に「第一総軍決戦綱領」を示達し、沿岸決戦思想が明示された。しかしこの構想に基く各軍の会戦計画の確定を見ぬうちに終戦を迎えた。

因みにこの関東決戦計画は米軍が直路関東に来攻する場合の計画であつて、米軍が我が判断の如く、先ず九州に上陸したる後関東に来攻する場合は、残存戦力を挙げて抗戦するに止まり、組織ある決戦は不可能となるものと予想された。

【帝都防衛——多分に名目的】 かくの如く米攻米軍を沿岸要域に攻撃撃滅する強烈なる意志を以て作戦準備を進めつつあつたが、一

方最悪の事態に備えるため、六月下旬より東京防衛の新しい措置が講ぜられた。

即ち六月二十三日、大本営は既述の如く帝都固守に任ずべき東京防衛軍の戦闘序列を下令し、これを第十二方面軍に編入すると共に、「帝都防衛作戰要綱」を以て帝都要域の作戰に關し、その準拠を示達した。

東京防衛軍は、司令部と警備第一乃至第三旅団及び独立工兵第八十三、第一百六大隊から成り、関東決戦生起と共に、関東以外の地域から集中される師団二乃至三箇、独立戦車旅団一箇、野戦重砲兵聯隊二箇、山砲兵聯隊一箇、高射砲聯隊約二箇の増強が予定された。東京防衛軍が大本営の指示に基いて計画した作戰要綱の骨子は次の通りであつた。

一、方針

一ケ年の持久を目的とし、宮城を中核とする帝都の枢要部を確保し、宮城を奉護し、その防衛の重点を帝都の西正面に置く

二、築城要領

宮城を中核とし、浅草附近を経て品川に至る概ね山手線に沿う地域及び品川、隅田川両河口間の海岸附近を主抵抗地域の前縁とし三箇師団分の主陣地帯を構築する。又宮城周辺の麴町、神田附近の地域に複郭陣地を構成する。陣地は戦車及爆撃に抗堪し得る如く坑道編成とする。又飛鳥山、駒場、南品川に前進陣地を、江戸川右岸及栗原、川口市、赤羽、天沼、下高井戸、田園調布、六郷村、羽田町、多摩川の線に警戒陣地を設定する

三、作戰指導要領

主陣地帯の前方に於て游撃戦を指導し、主陣地帯に於て靱強なる抵抗を遂行し、状況真に已むを得ざるに至れば複郭陣地を死守する

以上の計画に基いて、陣地の構築計画が進められたが、近衛師団

によつて実施せられていた宮城の防衛施設のほか、終戦時なお着手の域に至らなかつた。

僅か三箇の警備旅団の市民の協力のみを以て、しかも築城材料や器材の欠乏下に、この長大なる築城計画がどの程度に実現し得るか、都内の特殊の事情と相俟つて懸念されたが、元来これが設置には多分に政策的セスチアが含まれていた。

〔大本営、政府の移転問題——松代大本営〕なお本土の防衛就中関東の防衛に關連し政府及び大本営の移転問題があつた。陸軍省は、本土決戦の非常事態に備へ、既に昭和十九年の春以来、秘密裡に長野県松代に大本営の工事を開始していた。この施設は全施設強力なる爆撃に堪え得るようにベトンで固められた坑道施設で、昭和二十年七月頃には既に概成していた。

このように施設は準備されていたが、六月六日最高戦争指導會議において移転問題が討議された結果、帝都を固守する意見に一致した。鈴木総理は翌七日閣議の席上、閣僚に対しこの決定を伝え、帝都固守の決意を明かにした。しかし陸海軍作戰当局者間において、大本営の作戰室推進の意味を以て、先ず西日本に、次いで中樞松代に大遷を進むべき構想の下に、事前の偵察及び準備をしていた。

2 東海及び東北の戦備

〔東海方面〕東海方面に対する米軍の攻撃は、主として次の二つの場合が予想された。

一、前述関東決戦を容易ならしむる為、先づ静岡、浜松正面特に御前崎地区に関東進攻基地就中航空基地を獲得せんとする場合
二、名古屋、京阪地区を占領して本土を分断せんが為、紀伊水道方面よりの阪神攻撃と呼応しつつ、伊勢湾及その両側地区就中渥美半島正面より上陸して名古屋地区の攻略を企図する場合
この敵の企図に対し、第十三方面軍司令官は第五十四軍を以て最

も重要な渥美半島を含む以東の防衛を担任せしむると共に、愛知県の大部及び岐阜、三重、富山、石川県の防衛を直轄した。

第五十四軍は、渥美半島から浜松に亘る地区及び御前崎正面を重点とし、その独立混成旅団三箇を以て御前崎から静岡に亘る地区を、各一箇師団を以てそれぞれ浜松及び渥美半島、豊橋地区の沿岸を占領せしめ、決戦師団一箇を飯田に、独立戦車旅団一箇を浜名湖北側及び東北側地区に配置し、御前崎、知多半島、いずれの正面にも機動し得る如く部署した。このうち、知多半島沿岸防備の第七十二師団及び独立戦車第八旅団は方面軍直轄兵団であつたが、軍隊区分により第五十四軍に配属されたものである。

方面軍直轄地域においては、一箇師団を以て志摩半島の伊勢湾沿岸地区を占領せしむると共に、名古屋地区には高射師団の主力が配備され、方面軍司令部は名古屋に位置した。伊勢湾の閉塞と湾口島嶼の守備に特に注意が払われた。なお第三次兵備において編成せられた第二百二十九師団は、編制地金沢市東北地区から高岡に亘る地区に位置し、又姫路において追加編成された第三百五師団は編成未完のため、その配備は、まだ決定していなかつたが、渥美半島の第七十二師団と沿岸防備を交代し、第七十二師団を決戦兵団として後方に集結するか、或は御前崎正面沿岸防禦の強化に使用するか、二通りの用法が研究された。なおこのほか名古屋及び金沢師管区部隊が、後方警備に當る如く計画された。

これらの地上部隊は附図の如く配備され、敵の上陸に當つては、大井川右岸地区、或は豊橋、浜松平地に主決戦を指導する如く計画された。

〔東北方面〕 東北方面に対する米軍来攻の算は本州、四国、九州の中でも最も少いと判断されていたが、次のような攻撃を予想し、戦備が進められた。

一、関東決戦を容易ならしむる為、有力なる一部を以て仙台平地

に上陸し関東地方に南下を企図する場合

二、航空基地推進或は津輕海峡突破作戦を容易ならしむる為、有力なる一部を以て八戸平地、大湊地区の占領を企図する場合
この敵の企図に対し、第一方面軍は附図第十の如く、第五十軍の二箇師団と一箇独立混成旅団を以て八戸市から小川原沼北側に亘る八戸平地方面の防衛を担当せしむると共に、方面軍直轄兵団たる二箇師団を以て仙台平地を、一箇独立混成旅団を以て小名浜地区をそれぞれ占領せしめ、決戦師団各一箇を福島及び黒沢尻地区に配置した。このほか大湊警備府地区——下北半島——には陸隊第六箇大隊の配備が計画された。

方面軍の作戦指導は、当初沿岸決戦を回避する構想であつたが、第一総軍の強い要望を容れ、八戸若しくは仙台平地に可動全戦力を集中して沿岸決戦を遂行する計画に変更された。

第十一、第十三方面軍の作戦準備は以上の如く進められたが、次等方面なるため、部隊の装備を始め、軍需品の補給、集積は関東方面に比し更に遅延し終戦時の状況は極めて不十分な状況であつた。なお航空作戦は関東或は近畿地方の決戦と関連して生起する場合は期待が困難であり、又海上特攻作戦も鳥羽及び小名浜に小兵力が配備されただけで戦力として数うるに足りない有様であつた。

第二総軍の担任する西日本方面においては、山陰方面沿岸防備の手配が行われたことは既述したところであるが、東日本方面においては、その考慮が一段と少いと判断に基き防備は殆ど行われなかつた。

四 北東及び朝鮮の作戦準備

北東及び朝鮮方面の作戦準備も主敵を米軍とし、太平洋或は東支那海正面を重点として行われたが、いずれもソ軍に対する作戦準備を併せて考慮を要するところに特色と複雑性があつた。

1 北東方面

既述の如く五月九日、大本營が北東方面における第五方面軍の決戦任務を本土方面の作戦を容易ならしむための持久任務に更改し、兵力を抽出したため、当方面の作戦準備は根本的な変更を必要とするに至つた。

〔敵情判断——米・ソ両軍〕 米軍が、大挙北東方面に進攻し来る算は殆ど無いものと信ぜられたが、本土方面の主作戦を有利にするため、一部を以て基地の推進或は牽制の目的を以て作戦することはあり得ると判断せられた。又ソ連が参戦する場合は有力なる兵団を以て、海陸両正面より南樺太に進攻し来ることに必至なるのみならず、北千島に來攻することも予想せられた。

しかして米軍の攻撃は主として次の三つの場合を判断した。

一、航空基地推進の爲、択捉島又は北海道東部の計根別附近を攻略する。使用兵力は三乃至四箇師団を以て、前者の場合は単冠湾、後者の場合は標津若しくは釧路正面に上陸する。

二、北東方面の死命を制し又本土方面の主作戦を有効に牽制せんとする場合は更に有力なる兵力を以て苦小牧、札幌以南の西南部北海道を攻撃する。その際は苦小牧海岸に上陸して札幌平地に進攻する。此の作戦を容易にする爲海陸より津軽海峡の突破も併行する算がある。

三、この外宗谷海峡沿岸要地を占領し、日本海方面より本土に脅威を与へんとする場合或は南樺太の要地を攻略する場合があり得る。

そして一乃至三の順序にその算が多いと予想した。

なおソ軍の南樺太攻撃は、主力を以て国境を突破南下すべく、一部を以て豊原北方、大泊及び真岡附近に上陸を企図することありと判断した。

〔作戦構想と兵力配置〕

方面軍が千島、樺太、北海道の広大且つ相互隔絶せる地域を防衛するため、所有する兵力は師団五箇、独立混成旅団二箇、独立混成聯隊二箇のほか、津軽、宗谷要塞部隊、室蘭、根室防衛隊、旭川師管区部隊のみであつた。第一飛行師団の兵力は僅々八三機に過ぎず、海軍部隊は挙げるに足るものがなかつた。方面軍はこの兵力と敵情判断に基き、任務達成のため、六月三十日「方面軍作戦準備要綱」を策定した。

その兵力部署は次の通りであつた。

北千島に師団一箇、中千島に独立混成旅団及び独立聯隊各一箇、南千島に師団一箇を、又樺太に師団一箇をそれぞれ配備し、南千島及び樺太の師団の状況により、前者は有力なる一部を、後者は主力を北海道に転用し得る如く準備せしめられた。

なお樺太師団（第八十八師団）は、一部（歩兵三箇大隊、砲兵二箇中隊）を以て敷香・恵須取の線以北特に国境陣地を死守し、師団主力を以て豊原・西南方留多加川河谷を確保すると共に、歩兵一箇大隊、砲兵一箇中隊を以て西能登呂附近の保持を要求した。

北海道本島においては、敵上陸軍に對し、計根別平地若しくは苦小牧平地において主決戦を求めるものとし、敵が両方面に併行して上陸して来る場合は、東部においては国民抗戦等により持久を策し、軍の全力を挙げて苦小牧平地に決戦を遂行する方針を定めた。

兵力配備は、東部北海道の計根別平地及び宗谷海峡正面にそれぞれ一箇師団を、苦小牧平地に一箇独立混成旅団を配備すると共に、津軽、宗谷各要塞部隊及び室蘭、根室両防衛隊を以てそれぞれ当該地区を確保せしめた。

計根別平地の決戦に當つては歩兵約二七乃至二八箇大隊、砲兵三〇箇中隊を、又苦小牧平地の決戦に當つては歩兵三二乃至三三箇大隊、砲兵三七乃至三八箇中隊を集中する計画であつたが、その集中に要する日数は約四週間と予定せられ、交通網の不備と相俟つて極

めて困難なる作戦となることが予想された。

前述の如く、僅か八三機の航空戦力は、敵輸送船攻撃に徹底する如く計画された。但しこの兵力も本州方面の決戦に転用せられることになつていたため、確実に胸算し得るものではなかつた。

2 朝鮮方面

〔六月の情勢——腹背共に重大化〕 朝鮮方面においては、五月下旬、沖縄の戦況が重大化するに伴い、愈々敵は九州方面に進攻する算が増大し、敵若し北九州を攻撃する場合は必然的に、事前に先ず濟州島の攻略を企図すべく、又本土と大陸の分断を企図する場合には朝鮮特に群山方面に進攻すべしと判断せらるるに至り、朝鮮及び濟州島の戦備が愈々急を叫ばれるようになった。一方ソ連の参戦は米軍の本土或は朝鮮進攻と関連し、同時或はその以前にも起り得るとの懸念が強くなり、その際は北朝鮮に対するソ軍の出撃必至と判断せられ、朝鮮の防衛は腹背共に重大化した。

〔朝鮮の作戦準備状況——北鮮分離〕 大本営はこの情勢に対処するため五月三十日第十七方面軍司令官（上月良夫中将——昭和二十年四月七日以降）をして中部及び南部朝鮮の防衛に専任せしめ、北鮮における対ソ防衛作戦準備はこれを山田関東軍総司令官の任務とした。又同日、北鮮に配置せられていた第十七方面軍隷下作戦部隊を関東軍総司令官の隷下に転属した。

註 隷属を転移された部隊は第七十九師団、混成第一百聯隊及び羅津、永興湾要塞部隊であつた。

北鮮の対ソ防衛については改めて後述するが、南鮮の防衛は既述の如く、この年の春着手せられたばかりで、北東方面とその経緯を著しく異にしていた。

即ち濟州島の地上防衛は、次の如く二箇師団半が四月上旬頃より逐次同島に進出したばかりで、しかも編成日浅く、戦力不十分であ

つた。

一、第五十八軍司令部（軍司令官永津佐比重中将）は四月十五日編成完結、四月下旬進出

二、第九十六師団は三月十日編成完結、四月上旬進出

三、第一百一師団は満洲より転用せられ、五月上旬進出

四、独立混成第八旅団は内地より転用せられ、四月中旬進出
南鮮方面は四箇師団半が、次の如く配備或は集結中であつたが、装備の欠数も多く素質も不十分であつた。

一、第五百五十、第六百六十師団は五月下旬、編成を完結し、前者は木浦、法聖浦地区に、後者は扶安、群山地区に逐次進出し、陣地構築に着手

二、第二百二十、第二百二十一師団は満洲より転用せられ、前者は五月下旬主力を以て大邱に集結し、各一部を以て釜山要塞の増強、三千浦、固城地区及び蔚山、浦項地区に配備、後者は機動兵团として六月上旬、大田附近に集結

三、戦車第十四聯隊は駐蒙軍より転進中

四、鎮海警備府地区は陸戦隊三箇大隊を編成中

又五月二十五日編成を下令せられた第三次兵備の第三百二十師団、独立混成第二百二十七旅団を始め独立混成聯隊二箇、その他多数の戦闘、兵站部隊の編成完結は二、三カ月を要する実情であつた。

しかも鮮内残存在郷軍人の殆ど大部と、多数の朝鮮人壮丁を召集して編成せられ全般の素質低下に加うるに装備の如き、火砲は皆無に近く、重火器の如きも編制定数の二〇乃至二五%を充足し得る見込みに過ぎぬ状況であつた。がとも角、第三次兵備が完結せば中、南鮮の総兵力は師団七箇、独立混成旅団二箇、独立聯隊二箇、戦車聯隊一箇を基幹とするものとなる予定であつた。

一方航空作戦準備は支那派遣軍から転用された第五航空軍主力が逐次到着中で、下山軍司令官は五月二十一日、南京より京城に到着

し、在鮮第五十三航空師団を併せ指揮し、朝鮮海峡方面を重点とする作戦準備に着手したばかりであつた。

〔作戦計画の修正——対米、ついに対ソ〕 第十七方面軍司令官は、前述の情勢及び作戦準備の実情に鑑み、六月上旬、作戦計画を修正して済州島の防備を速急強化すると共に、南鮮西南正面に戦力を集中し、決戦配備を採るに決した。

即ち第二百二十一師団を済州島に増強すると共に、大田及び全州にそれぞれ第二百二十師団と第三百二十師団を集結し、群山、木浦、三千浦正面の決戦に即応し得る如く態勢を整えた。これがため、釜山方面の防備は独立混成第二百二十七旅団をして担任せしめることとなつた。この配備変更は七月より八月に亘つて進捗した。

七月末南鮮地上兵力の配備は概ね附図の如く概成していた。

かくて済州島の兵力は三箇師団半に達し、七月末には骨幹陣地を概成し、作戦準備が漸く軌道に乗ることとなつた。この時大本営は、第十七方面軍に対し済州島に更に一箇師団を増強するよう要望するところがあつたが、朝鮮本土方面の兵力過少に鑑み、第十七方

第九章 対ソ作戦準備

1 ソ連の対日企図判断

〔対ソ情勢判断——参戦は時機の問題〕 昭和十九年十一月六日スターリンが日本を侵略国と極めつけた演説を行つて以来、ソ連の動向は注視的であつたが、果せるかな、昭和二十年二月下旬に入るやシベリヤ鉄道による欧ソ方面からの兵力東送が開始がされた。このソ軍の東送は、五月頃にはシベリヤ鉄道の平時輸送力の最大限に達しつつあるものと認められた。

この間四月六日にはソ連は日ソ中立条約の一方的破棄を通告して

面の切なる意見を容れ、「一箇師団基幹の兵力を南鮮に準備し、済州島に対し敵来攻の算大なるに至らば適時之を済州島に投入し、第五十八軍の戦力を増強す」ることに落着いた。

七月下旬、第十七方面軍司令官は情勢を検討の結果、愈々第二百十師団を同島に推進する決断を採り、八月中旬より進出せしむべく準備を進めた。

しかるに八月九日、突如ソ連参戦の重大事態が勃発しこれに対処するため、大本営は全面的対ソ作戦を発動し、八月十日午前六時を期し第十七方面軍を関東軍の戦闘序列に入らしめた。第十七方面軍は直ちに第二百二十師団の一部を新高山に、主力を竜山に北進せしむる如く部署し更に第三百二十師団をも出動準備せしむべく研究中、翌十日本営命令により第十七方面軍は関東軍の戦闘序列に入らしめられ、次いで関東軍命令により、北鮮の第三十四軍を第十七方面軍の指揮下に入らしめられ、第二百二十師団は関東軍直轄となり、平壤附近に集結を命ぜられた。かくて第十七方面軍は対米決戦態勢から急遽対ソ作戦のため北面を余儀なくせらるることとなつた。

きた。五月八日には独逸は遂に無条件降伏を行つた。来るべきものは遂に來たのである。今やソ連の対日参戦は必至と認められるに至つた。

以上の状況に処し、大本営陸軍部は五月上旬大要次の如き対ソ情勢判断を行つた。

一、判決

ソ連は好機に投じ要すれば武力を行使して東亜に於ける勢力の伸張を企図しあるものの如く東亜向兵力輸送は既に開始せられあるを以て夏期以降に於ては隨時対日攻勢に出で得る状態とな

るべく敵に警戒の要あり

二、ソ連の対東亜企図

ソ連はその世界政策の一環として今次世界大戦争を機として東亜に對してもその勢力の扶植伸張を企図しあるべきは疑ひを容れず而して其の最も期待する所は東亜大陸就中滿洲、支那に對する勢力の扶植にして延いては西亜、中亞方面よりする印度洋進出と相俟つて南方資源圏に向ふ勢力の伸張に在るべし

之が為大東亜戦局の推移に應じて好機に投じ之に介入し以て大陸に於ける地盤の伸張を企図すべし

三、ソ連の対日動向

最近に於けるソ連の対日動向はその論調及極東ソ軍の動向等に徴するも逐次帝國を敵國視するの態度を露骨化しあり又二月下旬頃以來東ソ兵備の本格的増強を企図しあること確實にしてその対日動向は從來に比し一層積極化の方向を辿りつつあり而して過般の日ソ中立條約廢棄意志の通告に對するソ側の態度は極めて露骨且積極的にして昨秋のスターリン演說に於ける論旨と同様その意圖する所は戦局の進展に伴い之が介入の為の戦争名目乃至は対日全面政治攻勢の前提たらしめんとするに在りと見るべく向後一年の中立條約期間の存在は既にその実効を喪失せるものと認めざるを得ず

四、対日武力戦発動の時機

ソ連の対日武力戦発動の時機は左の条件を考慮せば遅くも本年夏秋の交以降特に警戒を要するものと判断せらる

- 1 我本土又は南鮮、中北支に對する米軍の進攻時機との關係
- 2 對滿進攻は冬季の作戰制約を顧慮し極寒期到来以前にその作戰目的を達成するの要あること

3 作戰準備所要期間

ソ軍が狙撃約四〇箇師団を基幹とする兵力を使用するものと

せばその増加兵力（機甲及航空を含む）及軍需品輸送の為大約四乃至五箇月を要すべく二月下旬乃至三月中旬より既に之を開始しあるにより現状を以て推移せば六月末乃至七月末頃には所要兵力及軍需品を東ソ要域に集中し得べく集中後の作戰準備期間を見積れば八、九月の交に於ては前記兵力を以てする作戰発起に支障なからしめ得べしと考察せらる

右情勢判断中に述べられた極東ソ軍の動向積極化の一端としては、昭和十九年十月ソ連兵がハバロフスク上流約三〇浬の黒竜江滿洲國領光風島を不法占拠して事実上我が方の航行阻止を行つたこと、同年十二月東滿國境虎頭附近において前後五回に亘るソ側の不法射撃があつたこと、同じく十二月四日ソ軍の沿海州沿岸オリガ警備隊長の發した電文中に「敵日本」という語を使用したこと等があり、いずれもソ軍の動向視察上注目すべき件であると認められた。七月に入り米、英、ソ三国のポツダム會談が行われたが、その頃における大本營陸軍部の對ソ情勢判断の要点は次の如くでつた。

一、ソ連の對日作戰準備は予想以上の進展を示し八月末頃には武力発動の態勢を一応概成し得べく軍事上より観るときは本年秋の候對日武力発動の算大なり

二、ポツダム三頭會談は遅くも八月月上旬には終了すべく次いで行はるるソ支會談亦遅くも八月末頃迄には何等かの形に於て妥結を見るべしと予想せられこの時期に於てはソ連の對日態度は最後の決定に到達するに至るべし

三、沖繩失陥後のソ連の對日論調は悪化の傾向を辿り戦局の推移と日本の戦争遂行能力とをソ連が如何に觀察しありやをトすべく注目を要するものあり

〔ソ軍の増強とその推移〕 ソ連の兵力東送開始以來關東軍の滿洲國境方面監視部隊は昼夜連続最大の緊張を以てソ領の鉄道輸送状況及びソ軍の動きを睨み続けた。六月頃以後になると、鉄道輸送の内

容に自動車類が著しく増えた。これは既に後方部隊の輸送に移つたことを示すものであつた。又各方面で、ソ軍が兵力や軍需品を国境方面に向つて推進するのが認められた。特に東部国境綏芬河正面においては戦術展開とも思われるような行動も見られ、一段と緊迫感を加えて来た。

大本営では、六月末頃までの東ソ兵力の増勢推移を概略次の如く判断していた。

時期	区分	東ソ兵力増勢推移判断表			
		人員	数	飛行機数	戦車数
昭和十九年末		七〇〇、〇〇〇	一、五〇〇	一、〇〇〇	
昭和二十年一月末		七五〇、〇〇〇	一、七〇〇	一、〇〇〇	
同 四月末		八五〇、〇〇〇	三、五〇〇	一、三〇〇	
同 五月末		一、〇五〇、〇〇〇	四、五〇〇	二、〇〇〇	
同 六月末		一、三〇〇、〇〇〇	五、六〇〇	三、〇〇〇	

因みに、昭和十九年末における極東ソ軍の兵力は概ね次の如く判断されていた。

人員	七〇〇、〇〇〇
陸軍	五五〇、〇〇〇
海軍	五〇、〇〇〇
内務人民委員部軍隊	一〇〇、〇〇〇
飛行機	約 一、五〇〇
戦車	約 一、〇〇〇
狙撃師団	一九
狙撃旅団	一五—二〇
騎兵師団	一
飛行師団	約 二四

戦車旅団

装甲自動車旅団

以上の如き状況から観て、ソ軍の兵力集中は予想以上に進捗しており、狙撃四〇箇師団基幹を以てする場合には八月末、狙撃五〇箇師団を以てする場合には九月末には作戦発起の態勢を整え得るであろうと見られるに至つた。

2 対ソ作戦方針の改定

〔東正面攻勢の方針——黄金時代〕

満洲事変以後における日本の対ソ作戦の方針は、終始一貫沿海州のソ軍航空根拠の覆滅に置かれてきた。即ち万一日ソ戦争が起つた場合には、日本本土をソ軍航空の空襲から護ることが国防上最大の要件であるとせられた。これがため我が航空は固より、地上軍も満洲東正面から攻勢をとり沿海州方面ソ軍航空根拠を覆滅することを用兵の基本方針とされた。

満洲における日本軍の編制装備、部隊配置、築城施設、兵站的諸準備、飛行場、鉄道、道路、通信網の建設整備、教育訓練等すべてはこの用兵方針によつて律せられ、関東軍は万に備えるため營々として逐年これらの実行に努力した。

この方針は対米英蘭開戦にあつても何等変化はなかつた。ただ関東軍に対しては、大本営はソ連に対し極力戦争の発生を防止するの企図を明示し、北辺の静謐維持を要望した。

開戦当時の関東軍司令官梅津美治郎大將は、中央の意図を体して全軍を戒しめ、北辺の護りに遺憾なきを期した。南方戦線における友軍の勇戦奮闘の報を聞きながら、関東軍將兵は戦備の充実に、猛訓練に黙々として傍目もふらず精進した。実に昭和十七、十八年頃における関東軍の各兵団は、自他共に許す精銳度に達していた。正に北辺の護りは磐石であつた。

〔全面持久構想——今昔の感〕 しかし、この関東軍の黄金時代も

昭和十八年後期を峠として急速に消えていった。南東太平洋方面に引続く中部太平洋方面における戦局の急迫は、大本営をして遂に満洲防衛の骨幹戦力をも相次いで太平洋戦線に送り込むの余儀なきに至らしめた。昭和十九年夏までにおける満洲からの戦力抽出は関東軍の二分の一に達したが、その補填は未教育の人員以外には見るべきものがなかった。しかも尚その後の戦局見透しからすれば、なお多くの兵力及び軍需品の関東軍からの抽出転用が予察せられた。

関東軍は、太平洋正面の決戦のためには喜んでその戦力を差出したが、一方自体の戦力激減による対ソ作戦構想の行詰りについては、次第に苦悩を増した。即ち、東正面のソ軍航空根拠を覆滅する作戦構想は、我が戦力の激減によつて既に成り立たなくなつてゐる。一方、少い戦力に依じて関東軍が堅実に生存を続ける方策は、白紙的にはいろいろ成立するが、さらばと言つて過去十三年に亘り日本と一体となつて歩んできた満洲国を事実上放棄すること及び用兵の基本構想に基き多年に亘り孜孜として築き上げた作戦準備を御破算にして新たな作戦準備を急速に完成することがいそいそと出来るであらうか。なお又関東軍だけが自己本位の安全と延命を事とする間に日本本土が敵から蹂躪され空爆に曝されてよいものであらうか。

昭和十八年の末から昭和十九年の夏までの間、関東軍総司令部の首脳は真剣にこの問題と取組み、数次に亘つて中央部と折衝を繰返した。大本営にもまた関東軍に劣らぬ苦慮があつた。関東軍の苦衷はよく解つていたが、何とかして満洲の大部を確保し得る作戦方策がとれないものか、そして日満華を一体とする戦争遂行態勢を崩さぬ方策がないものかと苦心し、各種の策案について研究を続けた。しかし、捷号作戦準備のための満洲幹戦力の大量抽出は、遂に大本営をしてこれまでの経緯を一擲して所謂全面持久作戦構想の採用を決意せしめるに至つた。

即ちこの構想は、満洲国境方面の前方要域においてソ軍を撃破すると共に、満洲の広域を利用し、ソ軍の侵入を阻止妨害して持久を策し、已むを得ざるに至るも満洲東南部より北鮮に亘る地域を確保して長期持久を図らんとするものであつた。

かくて、大本営は関東軍に対し昭和十九年九月十八日左記要旨の命令を発令した。

一、大本営の企図は大東亜戦争完遂の爲帝国国防圏域を確保すると共に敵の継戦意志を破摧するに在り之が爲本年後期以降降軍主力の進攻に対し之が撃擢を企図す

又ソ国に対しては極力戦争の発生を防止す

二、関東軍司令官は満洲国及関東州の防衛に任ずると共に現戦争の遂行を容易ならしめ又北方情勢の推移に應ずる爲所要の対ソ作戦準備を実施すべし

任務遂行に関しては別冊帝国陸軍対ソ作戦計画要領に準拠すべし

三、関東軍総司令官は対ソ作戦準備に関し所要に応じ朝鮮軍司令官を区処することを得

右命令中の「帝国陸軍対ソ作戦計画要領」は即ち新持久作戦の構想に基く関東軍の作戦要領の基本を示したものであつた。なお大本営は右命令と同時に、従来関東軍に示達してあつたところの旧構想に基いた作戦準備の準拠に関する訓令を廃棄した。

2 関東軍の対ソ作戦準備

〔関東軍の新作戦計画〕 大本営の決心に基き、関東軍は新構想に應ずる作戦準備の準拠となるべき持久作戦計画の研究に着手した。

新作戦構想はおよそ従来の考え方を百八十度転回させるものである。そこで関東軍では、所要の上級司令部幕僚を集めて各方面毎の持久作戦要領を研究兵棋により具体的に検討し、計画策定の資とす

ると共に隷下兵団首脳者の新構想への頭の転換を図つた。かくして
関東軍の新作戦計画は、昭和二十年一月月上旬に至り概ね完成され
た。

この関東軍新作戦計画の骨子は次の如くであつた。

侵攻し来る敵を国境地帯（北鮮東部山系——牡丹江西側山系
——小興安嶺——大興安嶺——齊々哈爾、四平鉄道の線より外方
の広き地帯を指す）に於て地形と施設を利用して撃破するに努
め、爾後満鮮の広さと地形とを利用して敵の侵入を撃破阻止妨害し
て持久を策し已むを得ざるに至るも南滿北鮮に亘る山地帯を堅固
に確保して飽く迄抗戦し、以て全般の戦争指導を有利ならしむる
を根本の方針とする。

これがため、予じめ兵力資材を全滿、北鮮に配置し且つ全作戦
地域内に所要の施設を行ふも、その戦力の重点はこれを国境地帯
に置き、威力を以てする持久作戦は国境地帯に於て行ふ。又各軍
はその作戦地域内に於て作戦を終始するものとし、航空勢力の劣
勢等に鑑み兵力の二重使用及追送補給に期待することを避け、各
部隊の全能力をその担任地域に於て最大限に發揮せしめることに
より持久目的の達成を期する。又特に挺進、遊撃戦を賞用する。

〔態勢の大転換——複郭中心は通化〕 さて関東軍は、全く新しい
構想に立つて作戦準備を進めることとなつたが、これは容易ならぬ
大事業であつた。即ち、滿洲の中部、南部及び西南部はソ軍の侵攻
に対しては全く裸といつて良い状態であつて、すべては新しく着手
せねばならない上に、これに要する資材は不十分であり、その上ソ
連の動向からして一刻も早く準備を整えねばならない。一方我が企
図の秘匿を要するという難しい条件の山積であつた。

そこで関東軍は、国境方面に重点が置かれていた全般態勢を転換
するため、先ず作戦準備実行の頭脳たるべき高等司令部を後方に移
し且つ所要の兵力を後方地域に配置することを断行するに決し、東

正面から着手した。

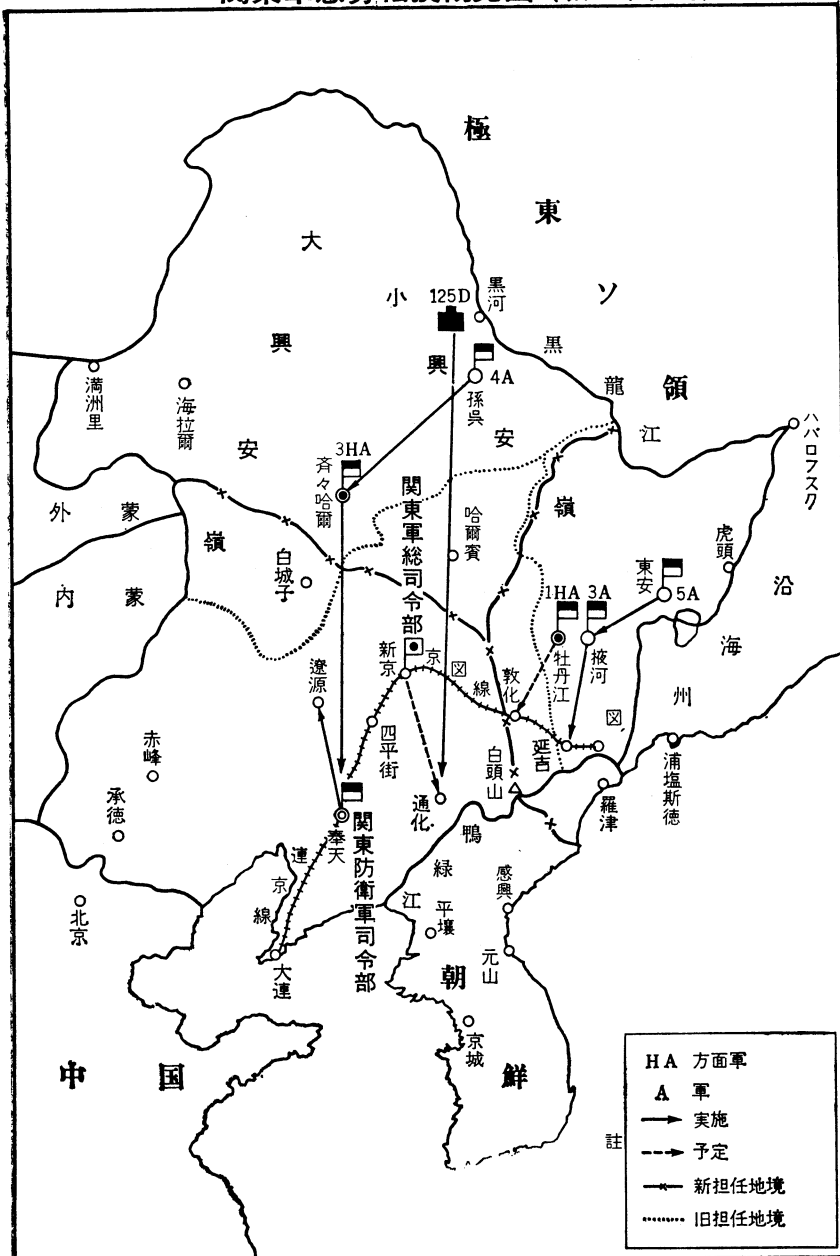
東正面においては、三月末までに第三軍司令部は被河（牡丹江市
東側）から延吉（間島）に、第五軍司令部は東安から掖河に移駐を
終つた。これに伴つて第三、第五軍間の防衛担任地境は南方に移さ
れた。又牡丹江市の第一方面軍司令部は戦時教化に移ることとし、
隠密裡にその準備が進められた。

これより先関東軍は、滿洲西正面を担当する軍司令部と、滿洲内
部及び複郭地域を担当する軍司令部の必要を感じて、新たに軍司令
部二箇の増加を、大本營に要求していたが、その実現を見ない間に
日ソ中立条約破棄通告という重大事態を迎えるに至つた。よつて関
東軍は自力によつて速かに態勢を整えるに決し、五月中旬、第三方
面軍司令部を齊々哈爾から奉天に、関東防衛軍司令部を奉天から遼
源（鄭家屯）に、第四軍司令部を孫吳から齊々哈爾に、又第百二十
五師団を黒河附近から通化附近に、それぞれ移動させる処置をとつ
た。

関東防衛軍司令部を遼源に移したのは、最も顧慮を要するに拘わ
らず今なお全く開放されている西正面を担当させるためであり、従
来中部及び南部滿洲の治安警備を任務としていた同軍司令部は、作
戦軍司令部としての性格に変わることとなつた。五月末関東防衛軍
司令部は第四十四軍司令部と改称せられた。又第百二十五師団の移動
は、複郭地域を担当する軍司令部の設置までその任に当らせるため
であつた。そして中部以南の滿洲における防衛の強化、全く新たに
行う作戦準備、複郭の設定等を統轄し、且つこれらを強力に推進す
るために第三方面軍司令部を奉天に移し、又第四軍司令部をして第
三方面軍司令部の任務を継承して北及び西北正面を担当させるため
にこれを齊々哈爾に移したのであつた。そして右に伴う指揮關係及
び担任地境の変更が行われた。

関東軍総司令部の位置もまた全般の態勢上後方に変更するを至当

関東軍態勢轉換概見図 (昭和二十年五月)



とした。しかしながらこの移動は、政治的考慮は全図秘匿、諸施設就中通信中枢の新設等の関係上しかく簡単にはい行い得なかつた。従つて総司令部は依然新京に位置し、開戦後戦況の推移に応じて後方に移ることとして、隠密裡に複郭中心地の通化に戦闘司令所を準備するに止められた。

かくして関東軍は五月末までにその態勢の大転換を行い、春の訪れと相俟つて新作戦準備に進捗することとなつた。第二百二十五師団を除く他の兵团配置には大なる変化はなかつた。

〔大連会談——三大將の作戦会同〕 沖繩の激闘は五月下旬大勢既に決し、米軍の本土若しくは朝鮮、華中方面への来攻は愈々時日の問題となつてきた。一方ソ軍の極東増強は最高潮に達してきて、戦局は最後の段階に刻々近づいてゐる。ここにおいて大本営は、対ソ作戦生起に備える第一段の重要処置を行うに決した。

昭和二十年五月三十日大本営は、関東軍の戦闘序列を令すると共に関東軍に対し左の要旨の命令を下した。

一、大本営は鮮滿に於ける対米作戦及対ソ作戦準備の強化を企図す

二、関東軍総司令官は現任務を遂行するの外来攻する米軍を撃滅すると共に北鮮に於ける対ソ作戦準備を実施すべし

之が為所要の隷下、指揮下部隊を北鮮に配置し且北鮮に於ける対ソ作戦準備及対米作戦に關し朝鮮軍管区司令官を指揮すべし

なお大本営は同日関東軍総司令官に対し「滿鮮方面対ソ作戦計画要領」に準拠して対ソ作戦準備を実施すべき旨を、第十七方面軍司令官に対し北鮮に在る第七十九師団、混成第一百聯隊、羅津及び永興灣兩要塞守備隊を関東軍に転属せしむべき旨を、支那派遣軍総司令官に対し四箇師団その他の部隊を滿洲に転用すべき旨をそれぞれ命令した。又別に支那派遣軍総司令官に対しては、努めて速かに概ね湖南、広西、江西省方面における湘桂、粵漢鐵道沿線の占拠地域

を撤して兵力を華中、華北方面に転用し、同方面の戰略態勢を強化すべきこと及び軍司令部一箇を速かに滿洲に転用し得る如く準備すべきこと並びに所要の対ソ作戦準備を実施すべきことを命令した。

以上の処置は、正に大陸正面の我が軍をして、日露戦役以後四十二年目に巡り來つた対ロシア全面戦の身構えを取らせる重大な意義を持つものである。しかもやがては日本本土と大陸間の交通も杜絶するであろうことも觀察に難くない。よつて參謀総長梅津大將は、勅命を奉じ自ら大陸に赴いてこの重大処置を律し、且つ関東軍及び支那派遣軍兩最高指揮官より軍狀を聴取することとなつた。

かくて參謀総長は六月四日空路大連に到着し、大連郊外星が浦の滿鉄總裁公邸において、関東軍総司令官山田乙三大將及び支那派遣軍総司令官岡村寧次大將に対し前記の諸命令を伝宣すると共に兩軍の狀況を聴取した。そして三巨頭は重大な時局に關し隔意なき懇談を遂げたのである。

五月三十日大本営が示達した「朝鮮方面対ソ作戦計画要領」は、「滿洲に侵入する敵を撃破し概ね京図線（新京——図們鐵道）以南、連京線（大連——新京鐵道）以東の要域を確保して持久を策し以て全般の作戦を有利ならしむ」るを作戰目的とし、対ソ作戰兵力規模の変化、その後における滿鮮の作戦準備の狀況等に基き、前年九月に示達した「帝國陸軍対ソ作戦計画要領」に所要の修正を加えて滿鮮を一九とする全面持久計画としたものであつた。

〔作戦準備の実情〕 関東軍は中央の新作戦計画に基き、既に策定していた計画を補備修正して六月十四日これを隷下方面軍等に示達し、作戦準備概成目途を九月下旬と定めて鋭意新計画に應ずる準備の実施に努力した。

関東軍総司令部以下の実施すべき主要な作戦準備は、新構想に基く部隊配置の変更、国境方面より滿洲内部に亘る防禦諸施設、復郭のための築城その他の諸施設、後方地域の飛行場の増強、交通通信

網の補備、作戰資材の縦深配置、全満の動員、戦闘教令の約定等広汎な範圍に亘るものであつた。各兵団は冬が終ると共に本格的作戰準備を開始したが、部隊の転用、改変等による変動激しく又資材の不十分等により中々進捗を見ず、関東軍首脳の焦慮と不安は次第に高まつた。

即ち重要な作戰準備事項である築城作業についてみれば、関東軍築城部を増強した関東軍建設団を始め全兵力をこれに当てるほか、七月からは満洲国軍約三万、満洲国勤労隊等の各種作業力をも増加して鋭意その促進を図つたが、七月末頃においては、国境方面後方築城は主要火器の陣地を略々完成したに過ぎず、各火点を連続する陣地組織は未だ構成せられておらず、又満洲内部の築城は九月末概成の予定であつたが各方面とも未だ計画中のものが多く更に複郭地域の築城は一部の前進陣地の構築に着手したほか大部はなお未だ計画中という状態であつた。

4 関東軍の増勢

〔瘦せ細つた関東軍——在来師団全部転用〕 太平洋戦局の進展に伴い、関東軍の精鋭な常設師団の大部は昭和十九年相次いで太平洋戦線決戦場に引抜かれた。そしてこれら兵団の中でグワム、ペリリュー、レイテ、ルソン、沖繩に配置されたものは、敵の大軍を引受けて勇戦闘克くその真価を發揮した。

在満常設師団転用の穴埋めに新設された六箇師団の中二箇師団及び残された在来の常設師団全部は、昭和二十年三月主として本土方面に転用された。以上の兵団転用状況は下表の如くである。

右のほか、第二方面軍司令部及び第二軍司令部は昭和十八年十月臺北方面へ、第二十軍司令部は昭和十九年九月華中へ、第六軍司令部は昭和二十年一月華中へそれぞれ転用せられ、又昭和十八年以降関東軍から抽出せられた独立部隊の数は二〇〇を超える多数であつ

摘要	昭和二十年		昭和十九年							転用発令時期
	三 月	一 月	十二 月	十 月	七 月	六 月	二 月	兵 団		
右の外第二十七師団は中国大陸打通作戦のため昭和十九年一月華北に転用せられた。										
	第十一師団	第七十一師団	第十二師団	第二十三師団	第一師団	第九師団	第二十九師団	兵 団		
	第二十五師団				第八師団	第二十八師団	第十四師団			
	第五十七師団				第十師団	第六十八旅団				
	戦車第一師団				第二十四師団					
	第百二十師団				戦車第二師団					
	第百二十一師団									
	團(昭和二十年二月新設)									
	南 鮮	台湾	台湾	ルソン島	ルソン島	台湾(後にレイテ)	沖繩(後に台湾)	グワム		
	南 鮮				台湾(後にルソン島)	宮古島	巴拉オ	転 用 先		
	南 鮮				沖繩					
	南 鮮				ルソン島					

た。

関東軍の航空戦力も逐次太平洋戦線に転用せられたが、特に比島決戦準備のため殆ど全力を抽出せられた。第二航空軍が、昭和二十年七月末保有していた飛行機は、旧式機を含み、戦闘機一五五機、襲撃及び軽爆四〇機、重爆二〇機、司偵一五機計二三〇機に過ぎず、作戦部隊としては南滿要地防空のための戦闘飛行隊一箇及び独立戦闘飛行中隊二箇のみであつて、他はすべて教育飛行部隊であつた。

関東軍が永年に亘り蓄積した莫大な作戦資材は、累次に亘る太平洋戦線への転用、就中日本本土の決戦準備のための転用により、七月末頃にはその保有量は次の如く減少していた。

弾薬

一三、五師団会戦分（部隊装備を含む）
一六、〇〇〇軒

航空燃料
自動車燃料

揮発油 二〇、八一九軒

軽油 二、七三六軒

（右は自動車一万五千輦に対する半月分）

糧秣

主食 一三、〇〇〇師団日分
副食 八、三〇〇師団日分

馬糧 一二、一〇〇師団日分

〔水膨れの関東軍——根こそぎ動員〕 昭和二十年五月三十日以降、北方に対する舞台は廻り始めた。大本営が支那派遣軍から四箇師団を滿洲に転用するに決したことは既述の通りであるが、この兵力は左表の如く滿洲及び北鮮に鉄道転送せられた。

なお北鮮にあつた第七十九師団等は五月三十日第三軍に編入せられた。次いで大本営は六月十七日在漢口第三十四軍司令部（軍司令官柳淵（一中将））の北鮮転用を発令すると共に、翌十八日第三十四軍の戦闘序列を令し且つこれを関東軍戦闘序列に編入した。第三十

兵 団	滿華国境 通過時機	新 所 属	到 着 地
第六十三師団	六月十九日	第四十四軍	通遼附近
第六十七師団	六月二十五日	第四十四軍	白城子、洮南
第五十九師団	七月十九日	関東軍直屬	咸興附近
第三十九師団	七月二十一日	第三方面軍	梅河口、清源附近

四軍は当初第五十九師団を基幹とし、「ソ軍の侵攻に対し威鏡南道平地の要域に於て之を撃砕し止むを得ざるも主力を以て平壤方向に突進する敵に対し又一部を以て京城方向に突進する敵に対し之を拒止する」る作戦の基本任務とせられた。同軍には後日七月三十日の発令を以て新設の第三百三十七師団及び独立混成第三百三十三旅団を増加せられた。

これより先本土方面への兵力抽出の前提として、昭和二十年二月新たに八箇師団を滿洲に編成せられており（内一箇師団は三月南鮮に転用、昭和十九年新設兵団で転用せられなかつた四箇師団、北鮮の一箇師団及び支那派遣軍から転入の四箇師団を合し、七月頃の関東軍兵力は漸く十六箇師団に達したが戦力極めて低く、これだけでは対ソ全面戦の遂行になお大なる不安があつた。

そこで関東軍は、滿洲における動員可能の人員約二五万人と国境守備隊の装備その他利用充當し得るあらゆる兵器資材とを以て自力による最後の兵備を断行して兵力を増強するに決した。これが所謂滿洲根こそぎ動員であつた。この動員によつて編成されたものは、第三十軍司令部、師団八箇、独立混成旅団七箇、戦車旅団一箇、砲兵聯隊五箇その他若干の部隊であつて、このほか対ソ戦生起せば、最後の十万名の召集による師団一箇及び新設各師団の後方部隊、欠数中隊並びに兵站部隊等の動員を計画して置くこととした。

右の動員は七月上旬先ず司令部を編成し、次いで師、旅団内各部

隊の編成に及び、その進捗に伴つて七月二十日大本営は新設兵团及び部隊の隷属を發令し、同時に第三十軍戦闘序列を令してこれを第三方面軍に編入した。

第三十軍（軍司令官飯田祥二郎中将）は四箇師団を基幹とし、軍司令部を梅河口に置き、複郭地域及びその外周の作戰準備を担当することとせられた。

かくて関東軍は師団二四箇、独立混成旅団九箇を基幹とする約七五万の兵力に膨脹した。しかしその戦力の実体はどうであつたろうか。最も古い師団といえども昭和十九年五月編成された第百七師団があるのみである。他は悉くそれ以後の新設兵团であつて、編制、素質、裝備劣弱しかも訓練不十分な兵团である。七月おこなつた根こそぎ動員では、人員はどうやら充足出来たが、兵器の不足は野砲四〇〇門、機関銃二二六挺、擲彈筒四、九〇〇、銃劍約十萬に及んだ。又支那派遣軍から駈けつけた兵团は、第三十九師団を除いては聯隊編制をとつていない所謂警備師団であつて、活潑な作戦行動不自由なるのみならず戦力もまた十分と云い難く、又對ソ連戦法の教育訓練はいずれも行つておらなかつた。

二四箇師団、九箇混成旅団を擁する関東軍の実戦力を過去の在滿常設師団に換算すれば、実に八箇師団半に過ぎなかつた。関東軍の増強は蓋し水膨れといえよう。

しかしながら、太平洋戦線に母国に送れる限りのものを送り尽した後、今や螳螂の斧を揮ひ敢然として最後の血戦に臨まんとする関東軍の姿は、往年のその威容と実力とを知る者にとつて正に悲痛の念を抱かしめるものであつた。

〔増強の二の手——中国戦線から抽出〕 大本営は五月末對ソ戦に備える第一の措置をとつたが、これでは未だ滿洲、朝鮮の戦備は極めて不備と云わねばならない。そこで大本営は引続き大陸正面の戰略方策を検討し、七月末頃には次の如き結論に到達した。

一、滿洲に於ては持久戦、朝鮮に於ては決戦を指導し、作戰意の如くならざる場合に於ても南滿の要域、朝鮮の要域を確保するに努める

二、滿洲方面の所要兵力を充實する為、中國大陸より転用可能な最大限の兵力を抽出する

三、中国方面の作戰指導は、昭和二十年末を目途として先ず湖南、広西方面の戦面を收縮し此の間成るべく多くの兵力（約一〇箇師団と一〇箇旅団基幹）を滿鮮に転用すると共に来攻する米ソ軍に對し華北の要域を確保して全局の作戰を容易ならしめる如くする

右に基き、大本営は大陸方面に對する第二段の措置を行うべき準備を進めたが、この発動を見ないうちにソ軍の侵攻を受けることとなつてしまつた。

5 北東方面等の對ソ作戰準備

〔樺太及び千島の戦備〕 北東方面における戰略態勢は米軍の千島方面よりする進攻に對処することを重点として律せられ、これに基く戦備を着々整えられてきた。昭和二十年四月下旬ソ連の對日參戰必至と予想せられるに及び大本営は北東方面における對ソ作戰準備の強化を企圖し、五月九日第五方面軍に對し「對ソ作戰準備を実施す」べきことを命令した。

しかしして第五方面軍の実施する對ソ作戰準備の準備として示された大本営の計画は次の如くであつた。

對米作戰中ソ國參戰せる場合に於ける

北東方面對ソ作戰計画要領

第一 作戰方針

来攻する敵を擊破して北東方面皇土の要域を確保す
第二 作戰指導要領

一、樺太に在りては作戦の重点を対ソ作戦に指向し来攻する敵を撃破して南部樺太の要域を確保す

二、千島列島及宗谷海峡は依然其の要域を確保して米ソの遮断に努む

三、ソ軍の北海道来攻に方りては情況に即応し随処に敵を撃破するに努め以て北海道本島の要域を確保す

以上に基き第五方面軍は六月末方面軍の作戦準備要綱を策定し、対米ソ作戦準備を促進した。方面軍の樺太、千島方面における作戦構想は以下の如くであつた。即ち樺太方面においては、第八十八師団の一部を以て敷香、恵須取の線以北、就中国境陣地を固守し、同師団主力を以て豊原以南の要域を確保する。又千島方面においては第九十一師団主力を以て幌筈海峡を、独立混成第二百二十九旅団の主力を以て得撫島北部を、又第八十九師団主力を以て択捉島西部の天寧

第十章 本土における防空作戦

1 本土防空の基本理念とその適用

〔防空の基本理念——積極防空〕 わが国の対ソ防衛の第一線が、東亜の大陸に推進され且つ一方ソ軍がウスリー州方面を基地としてわが国を空襲し得るような態勢になつてからの陸軍部の本土防空に関する基本理念は、開戦後速かにわが国土空襲の基地たり得る地域を迅速にわが手中に収めんとする積極防空を本旨としていた。軍の編制、装備、作戦、教育、訓練、技術、研究等はすべてこの基本理念によつて律せられ、従来その殆ど全力を外征軍の強化に向けられていた。従つて国土の直接防空に関する各般の本格的準備は、大東亜戦争においても、真にその必要に迫られるまで、これを具体化し得ないものが多々あつた。限られた国力で龐大な野戦軍と防空軍とを同

地区を、同師団の一部を以て色丹島をそれぞれ確保する如くした。千島方面の配備は我が主要飛行場の確保を主眼としたものであつた。

〔蒙疆方面の戦備〕 蒙疆方面の対ソ作戦準備に關しては、大本營は昭和十八年夏「蒙疆方面作戦準備要綱」を定め、外蒙ソ軍に対し概ね阿巴嘎、西薛尼特、百靈廟の線以南の要域を確保すると共に所要に應じ外蒙方面の敵を牽制して関東東軍の作戦を容易ならしむる作戦準備の準備として、使用兵力二箇師団に應ずる築城その他の準備を行う計画を立てた。しかし、この実施は戦局の影響を受けて所期の如く進捗せず、張家口北方地区、大同及びその北方豊鎮附近に陣地施設を行つたに過ぎなかつた。駐蒙軍は昭和二十年七月頃独立混成第二旅団を張家口地区に、第四独立警備隊を大同地区に配備していた。

時に編成裝備することは、事実不可能であつたであらうが、しかし、この理念は攻撃を以て最良の防禦となし、又守れば足らずとする兵學上の鉄則を重視する國軍の伝統的思想に深く根をおろしていた。即ちわが軍は、外征軍を極力強大にし、その神速なる作戦により、困難なる国土防空の問題を解決しようと企圖したのであつた。

海軍部もまた陸軍と概ね同様に「敵機を本土に近づけないことが第一義であり、来襲した敵機を邀撃するのは第二義である」との見解に立つていた。

この理念は、大東亜戦争においても何等の変化を見なかつた。昭和十六年十一月四日開催された軍事參議官會議の席上、東條陸相は、百武海軍大將の国土防空に関する質問に対して、次のように答弁した。

防空は、陸海軍殊に航空部隊の積極進攻作戦を基礎として考へざるべからず。即ち国土防空は、軍の積極作戦を妨害せざる範囲に準備せらる。

我防空兵力は陸軍約一〇〇機、海軍約二〇〇機の空中兵力と要地直接防空のため高射砲陸軍約五〇〇門、海軍約二〇〇門とを有し、微弱ながら最近其整備を終り訓練中なり。

敵の空襲は開戦直後にあらずして、若干の余裕あるものと考へあり。時々空襲を受ける程度にあらざるか。先ず航空母艦を進めて空襲す。敵がソ連を基地として空襲を行ふに至れば相当危険なるも開戦初期には起らずと考ふ。

この答弁は、前記の防空に関する伝統的基本理念を明瞭適確に示したものであつた。

緒戦以来、わが軍は南方及び西太平洋の要域を占領し敵の第一線を遠隔の地に撃退したので、開戦初期においては当時の敵機の性能上、わが本土は敵の本格的空襲を受ける懼れは全くなかつた。従つて本土自身の防空防備は極めて微弱なものであつた。危険はそこに伏在した。即ち外征軍にして一度崩れんか、本土上空を忽ちにして敵機の跳梁に委するという危険がここに包まれていた。この積極防空の理念は防空部隊の兵器と編成との上にも現われていた。即ち開戦時の防空用飛行機は防空目的のため特に研究製作されたものではなく、野戦用をそのまま充当されたため、その性能は防空戦闘の特殊の要求を充足するには不十分であり、防空部隊の素質もまた野戦部隊に比し見劣りするものであつた。

〔戦線の後退に伴う防空態勢の整備〕 昭和十七年四月十八日、本土は既述のように敵機の奇襲を受けた。その作戦の性質は、我が戦線の崩れから来たものではなかつたので、さして恐るべきものでもなかつたが、わが国は、本土防空陣が余りにも貧弱なのを痛感し、これを契機として全般態勢の許す範囲において本土防空態勢の強化

を急いだ。陸軍においては昭和十七年五月、防空専任の飛行部隊として第十七(東京)、第十八(大阪)、第十九(小月)の各飛行団を編成し、又京浜、中部、小倉各防空隊を増強してそれぞれこれを東部、中部及び西部防空旅団に改編し、更に航空情報網の整備強化を企図した。海軍においては昭和十八年三月一日、防空戦闘隊なる第三百二航空隊を横須賀鎮守府に編入し、次いで第三百三十二航空隊を呉鎮守府に、又第三百五十二航空隊を佐世保鎮守府に編入した。しかし、防空兵器の性能向上は、国力就中科学、技術、工業力と直接関連し、又防空兵力の強化は外征軍の戦力増強との兼合であつたので、これらの実現は容易なことではなかつた。

南東方面及び中部太平洋方面で我が第一線部隊が敵に押され、前記の基本理念が近き将来通用しなくなるかも知れないと判断された昭和十九年春頃に至り、防空態勢の整備強化は、不十分ながら漸く軌道に乗つた。

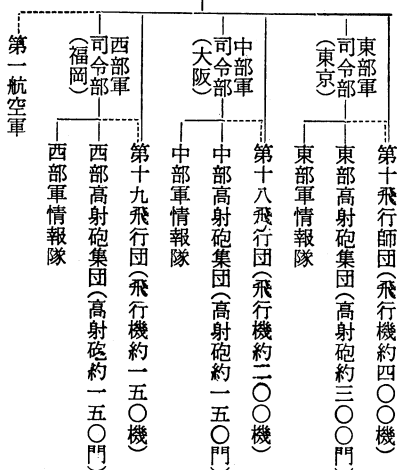
2 防空組織

〔防空組織の大綱〕 本土の防空に関しては、陸海軍中央協定により、全般の防空を陸軍の担任とし、海軍は、軍港、要港所在地及びその附近の防空のみを担当することとなつた。

本土が、中国大陸の基地から初めてB29の空襲を受けた直前、昭和十九年六月初頭における防空組織の概要は次のようであつた。

この組織は、広く情報網を本土の周辺及び内陸に配置して米襲敵機を迅速適確に探知し、これに基づき、機を失せず防空飛行隊をして敵機の要地進入に先立ちこれを遂撃せしめ、次いで高射砲部隊の戦闘を開始して空地の戦力を集中し、敵の企図の挫折するのを主眼とした。これがため組織上の最も緊要な要件は、敵機の来襲を探知する情報機関とこれに即応して出動する飛行部隊とを真に一体不可分の関係に立たせ、しかも両者を組織上の最短距離で結ぶことであ

防衛総司令部(東京)



備考

一、は隷属系統を、……は指揮系統を示す

二、海軍の第三百二、第三百三十二、第三百五十二航空隊は、昭和十九年七月十一日、防衛総司令官の指揮下に入った

三、第十八、第十九飛行団は、昭和十九年七月、第十一、第十二飛行師団に改編増強された

四、東部高射砲集団は昭和十九年十二月高射第一師団に、又中部(西部)高射砲集団は昭和二十年四月、高射第三師団(高射第四師団及び第四高射砲隊)に改編増強された

五、陸軍航空総監(陸軍航空本部長)隷下の官衙、学校には優秀な飛行機と搭乗員とが存在していたので、情勢に応じ臨時にこれらを防衛総司令官の指揮下に入れ、東二号部隊と呼んだ

六、民防空監視哨は、本表のほか広く国土全域に配置され敵機の監視、情報収集にあたつた

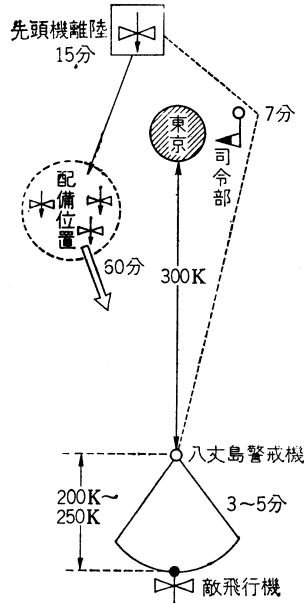
つた。換言すれば、縦深の浅いわが国土の弱点を補うように、特に情報の手早く入手と、間髪を入れざる飛行部隊の出動とを可能ならしむることが防空組織決定の眼目でなければならなかつた。しかるに上記の組織では、敵情は先ず軍司令部に集まり、次いでこれを飛行師団司令部と高射砲集団司令部とに流すようになっていた。そこに大切な時間を無駄にする組織上の結節があつた。それは本情報機関が地上部隊において発達し、しかも民防空機関の育成、訓練等が地上部隊の組織と努力とに俟つたことが大きかつたからであらう。しかしながら、これは防空戦闘の特質に合致するものではなかつた。東部軍では、この要求に応ずる応急対策として昭和二十年春、その情報隊を第十飛行師団長の指揮下に入れた。

次の問題は、この組織の内容たる本土の地理的特性に応ずる情報網の構成と防空戦闘機及び高射砲の性能とにあつた。

〔情報網の構成——電波警戒網〕我が本土の防空作戦上の地理的特性は、広正面を以て太平洋に面し、その縦深が浅いことである。最も深い地区でも大約三〇〇軒に過ぎず、如何にも縦深がない。しかも、日本の心臓部は挙つて太平洋沿岸にある。これは、わが心臓部に対する敵の奇襲の成立を約束するものであつた。この国土を太平洋方面から来襲する敵機に對し防護するためには、何を措いても最も速かに敵の来襲を予知することが先決問題であつた。要地周辺で敵機を待つ高射砲部隊に比較し、敵機をその要地進入に先だち遡撃しようとする飛行部隊にとつては、この要求は痛切であり、情報入手の速速は遡撃作戦の成否を左右した。南西諸島、小笠原、伊豆諸島及び千島列島等は、この痛切な要請に応えるためにも重要な存在であつた。

東京防空のための、情報の入手伝達と防空戦闘との関係を、第十飛行団の戦闘の統計に基き、図示すれば次の如くであつた。

備考一、



行	動	時所要	時間計
八丈島南方二〇〇—二五〇軒に飛行機発見		三—五分	
各隊に警戒戦備を下令			
八丈島上空にて敵を確認		七分	
師団に報告到着、出動下令		八—五分	
戦隊先頭機離陸		一五分	
戦隊が師団の部署に基づく配備位置に就く		六〇分	
この間所要の高度を採る—約一萬米			

備考二、

八丈島、東京間は約三〇〇軒、B 29の巡航速度で約六〇分を要する。

この図の意味するものは、敵が、わが軍の弱点を衝いて来る場合

には、情報入手を更に早くするか、或は所要時間特に飛行戦隊の配備につく時間を著しく短縮しなければ、我が戦闘機が敵を攻撃する前に東京は爆撃されてしまうということであった。

中国大陸方面から来襲する敵機に関する情報は、先ず支那派遣軍及び第五航空軍等から機に先んじて通報を受け、次いで本土周辺の情報網によりこれを探知確認するように部署されていたので、その入手は比較的確実且つ容易と見られていた。

情報網は、電波警戒機（電波探知機とも呼んだ）甲、同乙、目視監視哨、監視艇、特種無線隊（通信課報）及びこれらと司令部とを結ぶ通信網から成つていた。その最も重要なものは警戒機乙で、その配置の概要は捕国第二のようであった。

電波警戒機甲 二点間に直線状に電波を放射し、この電波を横ぎる飛行機を探知したもので配置数は僅少であった。

同乙 方向性を持ち有効距離は約二五〇軒、その数は陸海軍合して約一〇〇箇であったので、もろすことなく敵機を捕捉すべき筈であつたが、性能の欠陥もあり当初は充分とは言えなかつた。

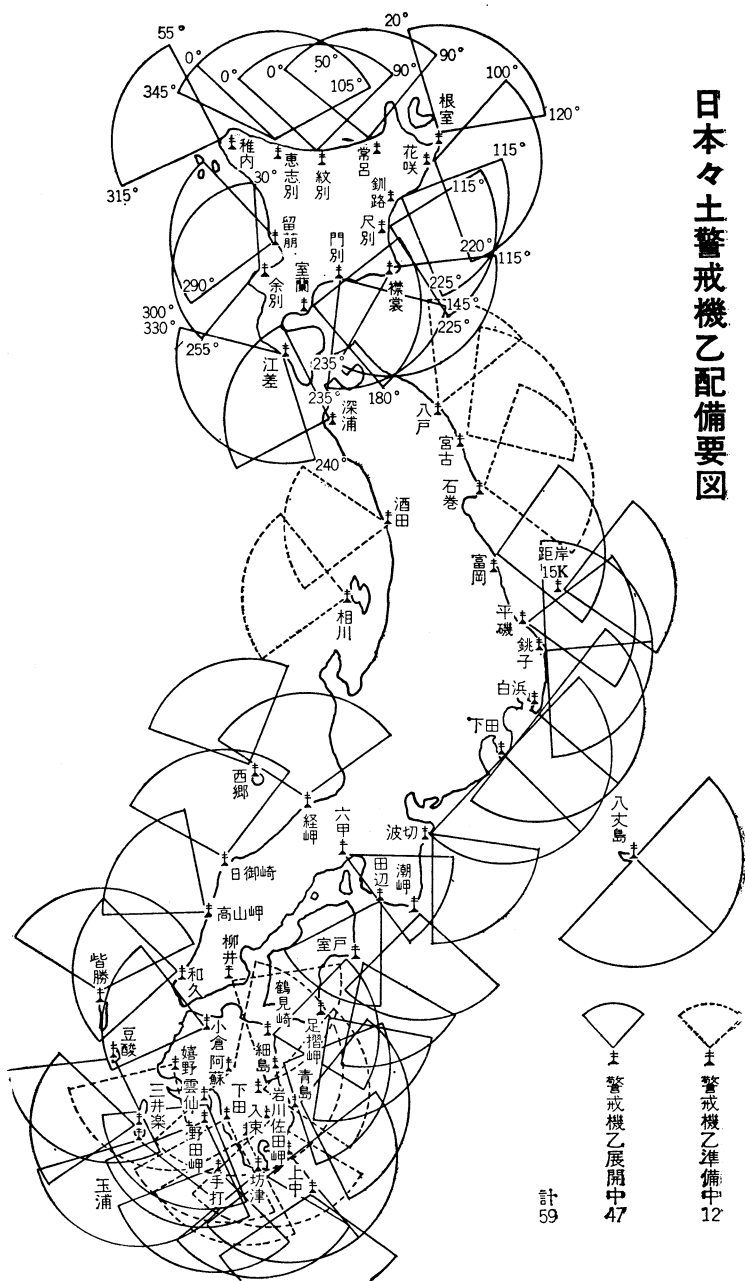
目視監視哨 肉眼及び眼鏡を用いて敵機を監視したもので、軍で編成したものと、民で編成したものとあつたが、これらは電氣的監視機関と必ず併用され又広く全国に亘り数多く配置された。

監視艇 電波警戒機を搭載した一〇〇—三〇〇噸の舟艇でこれを太平洋上に推進し、早期に敵の来襲を探知した。情報を早期に入手せんとする窮余の策であり海軍が小笠群島東西の線附近に配置した監視艇は約五〇隻であつた。

特種無線隊 敵の基地或は機上通信を傍受し敵の企図判断に資したもので司令部に配属された。

情報網は概ね以上のように構成され、その組織的機能と、偵察飛

日本々土警戒機乙配備要図



行隊の直接搜索とにより、防空作戦上最も必要な敵情は、先ず、戦闘実施に概ね支障なき程度に入手出来たが、敵の単機に対しては事前の捕捉が困難であつた。又敵機の高高度測定は、実用上信頼が置ける程度までには発達していなかつた。

〔防空戦闘機及び高射砲の適性〕 防空戦闘機は上昇限度と上昇速度とをその性能上の生命とする。既述の如く、我が戦闘機は野戦の進攻作戦を主眼として製作され、高度概ね五千米附近の空域で最大の能力を出すように設計されたものであつた。従つてこの戦闘機を防空用に充当しても、当時の技術水準においては、そのまま防空作戦の要求する上昇限度と上昇速度とを充足し得るものとは云えなかつた。

当時防空用に充当された戦闘機の上昇限度と上昇速度は次のようであつた。

機種	区分		
	上昇限度(米)	上昇速度(時間／高度米)	
陸 軍 機	三 式 戦	一〇、〇〇〇	六分二五秒／六、〇〇〇
	二式単戦	一〇、八二〇	五分五四秒／五、〇〇〇
	一 式 戦	一〇、五〇〇	六分二〇秒／五、〇〇〇
	二式複戦	一〇、五〇〇	七分〇〇秒／五、〇〇〇
海軍機	紫 電	一〇、七六〇	七分二秒／六、〇〇〇
	月 光	九、三三〇	九分三五秒／五、〇〇〇

高射砲に関しても亦概ね同様の状態で、その最大射高は概ね次の通りであつた。実用威力圏は最大射高の約八割とされていた。

防空兵器の以上の性能は、一万米以上の高高度で来襲する敵機に対しては、相当苦しい戦闘を交えねばならぬことを示すものであつた。

七 高射砲	九、一〇〇米
八 高射砲	一〇、〇〇〇米
一〇 高射砲	一〇、五〇〇米
一二 高射砲	一四、〇〇〇米
一五 高射砲	二〇、〇〇〇米

3 防空作戦準備

〔防衛総司令部の防空作戦要領〕 防衛総司令部は既述の如く、昭和十九年五月本土防衛に関する大本営命令を受領し「敵の空襲破壊を第一義とし、航空に重点を置き速かに防空作戦準備を完整する」とこととし、大要次のような防空作戦要領を策定した。

一、空地の防空戦力を徹底的に集中して来襲敵機を撃墜し、重要な国力増強関係施設を掩護する。これがため航空部隊及び高射砲部隊は特に戦闘空域を区分することなく同一空域に於ても夫々の特性に応じて戦闘を実施する。

航空部隊にありては、所要の兵力を以て要地を直接掩護すると共に爾余の兵力を以てなるべく遠距離に敵を捕捉してこれを撃墜するに勉む。

追撃に方りてはその作戦地域に拘らず執拗に追撃を敢行し生還敵機を撃破する。

二、東部軍は皇居を始め主として京浜地区に於ける戦政略及び生産中樞を掩護する。又立川、太田、常陸、釜石等に一部の兵力を配置しその生産施設を掩護する。

京浜地区掩護のため戦闘二〇箇戦隊を運用し得る如く飛行場を準備する。

電波警戒網を推進するため八丈島警戒機に連接し距岸三〇〇料附近の洋上に電波警戒機を搭載した船舶二隻を配置し得るよう準備する。

三、中部軍は主として名古屋及び阪神地区の重要生産施設を掩護する。又広島、浜松、清水、広畑、京都等に一部の兵力を配置しその生産施設を掩護する。

名古屋地区及び阪神地区掩護のため各々戦闘五箇戦隊を運用し得る如く飛行場を準備する。

電波警戒網を推進するため八丈島警戒機に連接し、距岸三〇〇軒附近の洋上に電波警戒機を搭載した船舶一隻を配置し得るように準備する。

四、西部軍は主として倉幡地区（関門を含む）に於ける重要生産施設を掩護する。又長崎、福岡、大牟田等に一部の兵力を配置しその生産施設を掩護する。

倉幡地区掩護のため戦闘一〇箇戦隊を運用し得る如く飛行場を準備する。

五、第一航空軍は敵機動部隊の来襲に方りては第五飛行団等を併せ指揮し、海軍と密に協同し、敵の航空母艦を求めてこれを撃滅する。

防衛総司令官東久迩宮稔彦王大將は、この防空作戦要領に基き所要の事項を各軍に示達し、作戦準備並びに作戦実施の憑拠たらしめた。

〔敵の本土空襲に関する判断〕昭和十九年初頭における、敵の本土空襲に関する判断は、概ね次のようであつた。

昭和十八年四月頃から対日空襲兵器として製作を開始されたB29は印度を経由して中国大陸に推進され、本年五月頃までにはその数約五〇機に達すべく、本年初夏の候には、敵の中国大陸を基地とし、わが本土に対する空襲を開始するであらう。

而してその性能は進攻距離（航続半径）約二、八〇〇軒、常用高度約九、〇〇〇米と推定せらるるを以て、敵の空襲は本土西部に限定せられ又好んで高々度若しくは夜間に行動すべく、又その

攻撃目標は、当初重要工業施設に指向せられるであらう。

敵の小型機は、基地の關係上当然戦闘圏外にあり、又機動部隊による攻撃も目下の戦況から見れば顧慮する要度は先づ少ないであらう。

〔防空部隊の作戦準備〕防空作戦要領と空襲判断とに基き防空各部隊は作戦準備を急いだ。中央現地を通じての最大の悩みは、當時威力大なる高々度戦闘機を欠いているところであつた。蓋し當時の戦闘機は、既述の如く、高空性能が良好でなかつたので、本土防空の目的を達成するためには、敵の予想行動空域において威力を発揮し得る戦闘機を絶対必要としたからであつた。

高空性能の最良のものは、一〇〇〇式司令部偵察機を第一とし、三式戦二式単戦、一式戦、二式複戦これについだ。概して各機種とも、一萬米の高度においては姿勢を保つのが精一杯で、機体を傾けると忽ち之つて高度を低下した。従つて攻撃は一撃に限られ、同一目標に対する攻撃の復行は問題にならなかつた。

高空性能の良好な一〇〇〇式司令部偵察機は、このため改造され戦闘機として使用され、又四式重爆撃機に中口径砲を搭載して来襲敵機の攻撃に任せしめた。

部隊は与えられた飛行機で最善を尽すため、高々度の訓練に精進し、昭和十九年夏頃には九〇〇〇米附近で部隊戦闘を実施し得るに至つた。しかし待望の高々度戦闘機は、試作の範囲にとどまり遂に最後まで実戦には供し得なかつた。陸海軍の協同試作によるロケット機秋水もまた、試験飛行の段階で終戦を迎えた。

夜間戦闘能力の向上も作戦準備の尤なるものであつたが、その戦力の最大限は照空燈に照らし出された敵機を撃墜し得るにとどまり、夜間又は悪天候時、随所に威力を発揮するため絶対必要な電波兵器は完成するに至らなかつた。

高射砲隊は当初主として七糧高射砲で装備されたが、その威力圏

及び破壊力は所望の域に達しなかつたので、昭和十九年初頭から逐次八種、次いで十二種高射砲で改編された。その作戦準備は、高度及び大航速の目標に対し、又雲上、若しくは夜間に行動する敵に対して十分威力を発揮するを主眼として実施されたが、電波標定機の未完成等のため、雲上の敵機に対し実効を収めるには程遠きものであつた。

以上のほか、飛行場の整備、燃料彈薬の集積、高射砲台の建設、衣糧、薪炭の準備等戦闘準備を整えつつある間に本土西部において敵の空襲を被るに至つた。

4 空襲の激化と我が防空作戦

〔中国大陸基地B29の九州来襲〕 本土における真面目なる防空作戦は、昭和十一年六月十五日夜、中国の成都基地から倉幡地区に来襲せるB29約二〇機に対する遼撃に始まつた。シェンノートの指揮する中国大陸の米空軍は、北九州特に八幡製鉄所及び長崎造船所を狙つて昭和二十年一月六日までの間、前後一〇回、四〇機乃至七一八〇機の大編隊を以て来襲した。

この敵来襲機の行動は毎回、支那派遣軍及び濟州島、対馬等の警戒部隊より事前に刻々適時適確なる情報入手し得たため、我が第十九飛行団（長は九月十五日までは古屋健三少将、以降は三好康之少将）及び西部高射砲集団（集団長井原茂次少将）は常に万全の遼撃態勢を整へ、有効適切なる作戦を遂行し、要地の防衛を完うし得たのみならず、敵機に大なる損害を与えこれを潰走せしむることが出来た。特に六月十六日の第一回来襲には撃墜七機（不確実三機）、撃破三機の戦果を挙げ、又十一月二十一日の遼撃作戦においては撃墜二六機、撃破二四機の戦果を報じ、しかも我が方の損害は常に軽微であつた。敵機は我が遼撃に遭い、盲爆若しくは不確実なる敵撃を実施するに止まり、時に九州沖から勿々反転することもある

つた。

本作戦を通じ痛感せられたことは防空作戦における情報価値の極めて重要なことであつた。

〔マリアナ基地B29の本土来襲〕 マリアナ基地B29の本土来襲は昭和十九年十一月一日関東方面に飛來せる二機の偵察行動に始まり、十一月二十四日、約七〇機の帝都空襲を以て、本格的空襲に入つた。十一月、十二月には主として帝都附近の工場地帯に、一部は東海地区に来襲し有力なる編隊を以てする来襲回数七回に達した。一月は主として東海地方に五回、二月は関東地方に二回来襲した。二月までに来襲せるB29の延機数は約一、一〇〇機を数えた。

一月から中国大陸のB29はマリアナ基地に転進しつつあつたが、その転進が進捗したもの如く、三月に入りマリアナ基地のB29本土来襲は機数、回数ともに俄然増加した。即ち回数は九回に及び、機数は二月までの来襲総機数に匹敵した。又編隊も従来一〇〇機以下であつたが、三月の最高は一七〇機に増加し、しかも敵は三月九日夜の東京空襲を契機とし、大編隊を以てする夜間攻撃に移行し、都市の無差別焼夷攻撃を始めた。その攻撃は上旬には関東地方に、中旬には東海地方に指向せられ、下旬、沖縄作戦に策応するためか北九州の飛行場及び都市攻撃に移行し、又三月二十八日には閩門地区に機雷の投下を開始した。

これに対し我が防空部隊は前述のような組織を挙げて遼撃作戦に當つたが、兵力の不足に加うるに兵器、資材の性能が高々度及び夜間若しくは雲上の敵機に対する戦闘に適應し得なかつたため、所期の戦果を挙げることが出来なかつた。

大本営は硫黄島を中継としマリアナ基地に対する積極的攻撃を企図し、十一月三日を皮切りに、昭和二十年一月三日まで前後八回、陸海軍延五六機を以て攻撃を実施し、相当の損害を与えたが、兵力微弱なるため敵の増勢を抑圧するほどの影響は与え得なかつた。又

陸軍は昭和十九年末マリアナ基地に対する空挺攻撃を準備したが実施するには至らなかった。このとき準備された部隊が、後に沖繩に空挺攻撃を敢行した既述の義烈空挺隊である。

〔機動部隊——艦載機の本土初襲来〕 マリアナ基地B29の空襲が漸く激化の徴を呈しつつあつた二月十六日、関東地方は突如、敵艦載機延約一、二〇〇機の奇襲を蒙つた。事前に何等の情報も入手し得なかつた上に、低空にて侵入して来たため、警戒機乙も捕捉し得ず、沿岸監視哨の報告によつて初めて知る始末であつた。

この機動部隊はミッチャー中将麾下の第五十八特別任務部隊で硫黄島上陸作戦に協力する目的を以て、関東方面の我が航空勢力を撃滅せんがため来襲したものであつた。

敵は七波に分れ、関東一円の飛行場を攻撃し、翌十七日もまた荒天を冒してその六〇〇機が同様の攻撃を反復した。幸に陸軍部隊は飛行機の遮蔽が適切であつたため飛行機の地上被害は二機に過ぎなかつたが、海軍部隊の地上被害は五八機に達した。

我が第十飛行師団は十六日敵の奇襲に対し遑撃したが、従来、防空戦闘の必要上対爆撃機戦闘訓練を主として実施していたため、損害三七機を出し、しかも優秀操縦者を失ひ師団の戦力を著く低下した。これがたゞ翌十七日の遑撃作戦は精彩ある戦闘が出来なかつた。高射第一師団も敢闘の結果一四機撃墜の戦果を報告した。この両日の防空作戦における陸軍部隊の戦果は敵機撃墜九二機と報ぜられた。一方海軍航空部隊も全力を挙げて遑撃し、戦果は撃墜破一六三機、損害は未帰還機五七機と報告された。しかしながら地上監視哨の彼我識別未熟等により、この戦果は疑問と認められた。

註 米長官ヤング氏の正式報告によると米軍の損害は四九機にしてその戦果は四九機撃墜破、艦船一隻撃沈となつてゐる。

この来襲に次ぎ、沖繩作戦に先んじて三月十八、十九日及び三月二十八日、二十九日、それぞれ南九州に艦載機が来襲したことは沖

繩作戦において述べた通りである。

〔空襲の激化——無差別、戦略、戦術爆撃〕 四月以降、本土決戦準備が本格的に開始せられ、官民必死の努力が展開せられるや、これに併行して敵の空襲もまた加速度的に激化し、特に七月に入り一段と苛烈となり、被害もまた激増して来た。

既述三月九日夜の東京大空襲を契機とし敵は四、五、六の三カ月間大都市の焼夷攻撃と沖繩に向う我が特攻基地の制圧並びに我が重要港湾、海峡に対する機雷投下等を重点とする空襲を反復した。なお六月から中、小都市に対する焼夷攻撃をも開始した。この間、四月七日には伊勢の神城が爆弾に犯され、同十三日には宮城と大宮御所の一部が炎上し、明治神宮が烏有に帰し、全国民を切歯悲憤せしめた。

六月末本土に直接威力を及ぼしつつある敵基地航空兵力は沖繩方面約七百機、硫黄島約三〇〇機、マリアナ方面約一、〇〇〇機（主としてB29）計約二、〇〇〇機に達し、爾後の増勢は次の如く判断された。

時 期	計		機 種				区 分	
	飛行艇		戦闘機	軽爆機	B二四	B二九		
昭和二十年 九月	三、二〇〇	一一〇	一、四〇〇	五〇	六五〇	一、一五〇		
同 十二月	五、五〇〇	一一〇	一、七五五	△二〇〇	一、一〇〇	一、五〇〇		
昭和三十年 三月	六、一〇〇	一一〇	一、三三三	一、〇五〇	一、五〇〇	一、五〇〇		

備考 飛行艇は各基地に、戦闘機は沖繩、硫黄島両基地に、軽爆及びB24は沖繩基地に、B29はマリアナ基地に展開す。
特に沖繩基地航空兵力の急増を予期す。

七月に入るや、敵の我が中、小都市に対する差別爆撃は一段と苛烈を極め、又内海、日本海の港湾及び海峡に対する機雷攻撃も益益執拗を加え、内海の交通は殆ど杜絶に瀕した。しかも硫黄、沖縄、阿鼻基地航空部隊の本格的攻撃と機動部隊の大規模の連続的攻撃が相次ぎ、その攻撃は上陸準備のための戦略爆撃の様相さえ呈し、又南部九州に対する沖縄基地戦闘機の攻撃は戦術的攻撃の色彩を帯びて来た。

七月二十四日の来襲はB29の機数は実に七〇〇機を数えた。又硫黄島基地の戦闘機は関東、東海近畿一帯の航空基地や鉄道、船舶、工場等を攻撃目標とし、その来襲延機数は七月二十八日には二八〇機に上った。沖縄基地の戦爆部隊は主として九州就中南部九州の航空基地、鉄道、沿岸陣地を始め、沿岸の村落にまで執拗なる銃爆撃を反復しその一部は朝鮮海峡、南洋にもその威力を及ぼした。

このような基地航空部隊の跳梁にも増して猛威を逞くしたのは七月十日から関東方面を皮切りに開始された敵機動部隊の攻撃であった。第一日の来襲機は、一、二二〇機に上り、その上硫黄島約P51一五〇機が阪神地区を襲った。わが方は完全に奇襲を受け、当初全く反撃を加え得なかつた。この空襲は七月三十日に亘り、我が海空反撃戦力の減耗と決号作戦のため航空兵力を温存せんとする方針と相俟つて傍若無人本土の全域を蹂躪した。特に七月十三日、十四日阿比に亘る北海道東北地方に対する攻撃は激甚を極め、その来襲延機数は一、八二〇機に上り、その上艦砲射撃を併用した。

昭和二十年一月以降、月別来襲機数並びに被爆都市数、被爆弾量の状況は次表の通りで、月を逐つて激化する空襲の状況を知ることが出来る。

昭和二十年一月より八月に至る
月別来襲機数一覽表

月別	区分		機	数
	来襲	延襲		
一	B二九 マリアナ基地	B二四 P三八	P五一 硫黄島基地	艦載機 計
二	B二九 マリアナ基地	B二四 P三八	P五一 硫黄島基地	艦載機 計
三	B二九 マリアナ基地	B二四 P三八	P五一 硫黄島基地	艦載機 計
四	B二九 マリアナ基地	B二四 P三八	P五一 硫黄島基地	艦載機 計
五	B二九 マリアナ基地	B二四 P三八	P五一 硫黄島基地	艦載機 計
六	B二九 マリアナ基地	B二四 P三八	P五一 硫黄島基地	艦載機 計
七	B二九 マリアナ基地	B二四 P三八	P五一 硫黄島基地	艦載機 計
八	B二九 マリアナ基地	B二四 P三八	P五一 硫黄島基地	艦載機 計
(三日迄)				

備考 一、大本営陸軍部作戦課戦況手簿に依る。但し島嶼、朝鮮半島来襲機及び偵察機と少数機の来襲を含まず。

二、一月分B29には中国大陸からの来襲機数を含む。

三、六月以降硫黄島及び沖縄基地の機数は機種と行動区域から筆者が判定区分したものである。

註 この来襲機数は当時大本営に報告記録せられた数字であつて、実数は更に多かつた。例えばB29の出撃延機数を米側記録について見ると三三、〇四一機に上り、本表の二倍以上に達している。その原因は日本軍の報告、記録漏れ、夜間の機数誤判、本土以外の地域に対する来襲機数並びに少数来襲機等と昭和十九年の来襲機数を含まないこと等のほか、本土に到着前に基地に引還したもの等があつたためと考えられる。

昭和二十年一月以降七月まで百噸以上の被爆都市数及び被爆噸数月別一覽表

月別	百噸以上の被爆都市数	被弾噸数	月別	百噸以上の被爆都市数	被弾噸数
一月	一	一五二	五月	七二〇、六八〇	
二月	二	六三一	六月	一四一八、〇二九	
三月	四	九、三六八	七月	三三三二、六七〇	
四月	五	二、九一六			

備考 一、本表の数字は米軍爆撃調査団の資料に拠る

二、昭和十九年以降終戦までの総被弾噸数は一六万八百噸

〔決号防空作戦の計画〕 大本営は昭和二十年四月八日、総軍司令部の新設に当り、本土の防空作戦に関し各総軍司令官に対し既述の如き任務達成の準拠を命ずると共に決号作戦準備要綱において次の如き防空襲作戦の要綱を示達し、本土決戦準備に即応する防空作戦の方針を明かにした。

一、航空作戦

- 1 敵の本土要部空襲に対し好機来襲敵機を遂撃すると共に適時敵航空基地を制圧す又好機に乘じ敵機動部隊の跳梁を制す
- 2 航空基地を強化し又秘匿飛行場を設定する等に依り戦力の保全蓄積を図り軌強なる航空作戦の遂行に遺憾なからしむ

二、地上防空作戦

- 1 地上防空部隊は敵空襲に対し、勉めて兵力を節約し敵機の漸減を図る

防空の重点左の如し

- (イ) 帝都特に皇居の防衛
- (ロ) 交通幹線上の要点
- (ハ) 重要生産施設
- (ニ) 重要飛行場
- (ホ) 主要軍需品集積地

- 2 地上防空部隊及情報部隊の配置は敵航空基地の強化推進、我防空戦闘隊の戦力、要掩護地域の状況に即応し適宜重点構成を図る。之が為兵力増加に依るの外予め所要の予備陣地を準備し適時の配備転換に遺憾なからしむ

- 3 敵基地航空勢力の増勢に対処し愈々消極防空を重視す

- 4 敵の上陸企図に対する地上作戦軍の作戦行動開始に方りては要点に於ける機動集中を掩護す。之が為適時所要の防空兵力の転用を準備す

なお同日、決号航空作戦に関する陸海軍中央協定において陸海軍の本土防空作戦に関し、次の如く協定を遂げた。

- 一、陸軍は勉めて其の兵力を統合運用し短切且機略に富む遂撃作戦を実施し以て敵大型機の本土空襲作戦の破摧に努む
- 海軍は右作戦に協力す

- 二、陸海軍協力して敵大型機所在重要航空基地特にマリアナ、硫黄島及沖縄方面に対する奇襲制圧に努む

- 三、陸海軍協力して本土主要港湾に対する敵の機雷封鎖企図の制圧に努む

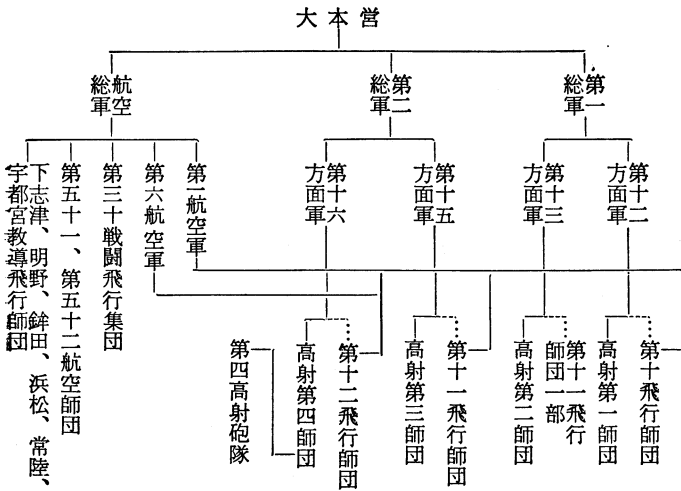
即ち陸軍は本土の防空全般を担任し、特に敵大型機に対する遂撃作戦を重点として防空作戦に当り、更に陸海軍協力して敵大型機基地に対する進攻作戦並びに主要港湾の防空作戦を実施する如く協定された。なお陸軍は本土決戦、特に敵上陸陸軍に対する攻撃に備え航空兵力の温存を一般の方針とした。

〔指揮組織と兵力——陸海の調整〕 昭和二十年五月における陸軍

の防空組織は次表の如く第一、第二両総軍司令官がそれぞれ隷下高射砲部隊と作戦地域内の防空飛行部隊を指揮して本土の防空に任じ、航空総軍司令官はその機動航空部隊を以て第一、第二両総軍司令官の防空作戦に協力することとなつていた。前述方面軍司令官の指揮下に入つていた鎮守府、警備府の海軍防空専任飛行部隊は二月

十九日原所屬に復帰したため防空作戦は陸海軍完全なる協力關係に還元していた。

海軍にあつては各鎮守府、警備府司令長官はその高射砲部隊を以てそれぞれその担任地区の地上防空に任じ、航空部隊を以て行う防空作戦は聯合艦隊司令長官が統合する如く改められた。即ち敵機動部隊の本土來襲激化するに伴い、防空作戦と敵機動部隊に対する反



撃作戦とを区分することが出来なくなつたため、前記鎮守府及び警備府の防空専任部隊を聯合艦隊司令長官の指揮下に入れた。即ち五月五日から六月五日に亘りこれらの部隊を以て第五十三、第七十一、第七十二航空戦隊を編成し、それぞれこれを第三、第五航空艦隊に編入し、本土全戦闘機戦力を聯合艦隊司令長官の下に統合した。

六月における本土の防空兵力は飛行機約九七〇機（内海軍機五一〇機、但し敵機動部隊に対する邀撃兵力を含む）高射砲約二、五九〇門（内海軍九三五門）を数えた。しかし飛行機の出動可能数はこれより更に下廻つていた。なお鎮守府警備府及び海軍の基地防空のみを担当する海軍の高射砲数が本土全域の地上防空を担当する陸軍のそれに比し著しく豊富であるため、陸軍側からこれを陸軍地域の防空に割愛する如く執拗に要求されたが一部を除き実現は困難であつた。

〔多難を増す防空作戦〕 このように激化する敵の空襲に対し、我が防空作戦は愈々多難を極めた。

その第一は海軍は沖繩作戦に全力を傾注しており、一方陸軍は来るべき本土決戦に備えて乏しい航空戦力を蓄積温存しなければならなかつたことである。

その第二は硫黄島を失い、沖繩に戦火が拡大したため、防空作戦上最も重要な遠隔監視（洋上監視艇の配備を含む）が困難になり、しかも電波兵器の性能が不充分なのに対し、敵は通信諜報を始め情報に優れ、その上戦爆連合の攻撃が可能となつたことである。

その第三は我が防空戦力が劣勢且つ増勢が出来ないのに対し、敵の来襲勢力は日を逐つて急増し、しかも同時に数目標を併行的に攻撃し、その侵入行動も巧妙となり又夜間高々度の雲上爆撃を行う等、我が防空部隊の戦闘が益々困難となつたことである。

その第四は敵の爆撃による直接間接被害のため、飛行機や高射砲

や弾薬の生産が急激に低下したことである。例えば陸軍の五月の高射砲及び同弾薬の生産は四月のそれに比べて、前者は六〇％に、後者は五三％に減少した如きその一例である。

以上の諸要素と既述の如き本土の本質的弱点と相俟つて有効なる反撃が益々困難となつて行つた。特に艦載機や基地戦闘機の大挙来襲に対しては、対爆戦闘訓練を重視する防空飛行隊には苦手であつた。

我が邀撃出動機数は各戦場毎に通常二〇乃至五〇機程度が多が多く、一〇〇機に達することは少い状況であつた。前述の本土の特性上適時航空兵力を敵機の来襲空域に集中することが困難なことに基因するものであつた。これがため、敵機は銀翼を輝せて悠々本土の上空を跳梁するのを殆ど坐視するが如き観を呈し、国民は我が航空部隊の健在をさえ訝しみ、軍に對し不信任を抱く一因となつた。

五月頃より敵機の機雷攻撃に對する港湾防空並びに地上作戦準備の直接掩護等の重要性が痛感せられ、又敵の爆撃が漸次中小都市に移行することが予想せられたため防空部隊特に高射砲部隊の配備を従来の大都市と重要生産地重点配置からこの要求に即応する如く変更することとなつた。この配置転換は九州において最も徹底して行われた。即ち倉庫地区を重点として配置せられていた高射砲第四師団主力を南九州に推進すると共に、鉄道要点に各一部を配置し、決戦即応の態勢に切り換えられた。

〔制号作戦〕 かかる折柄前に述べたように六月に入つてから敵の爆撃は本土の広範囲に拡大し、中、小都市攻撃と交通阻止に發展し、空襲の被害は愈々深刻となり、この傾向を以て推移すれば我が戦争指導の根基を危くし、又作戦準備にも重大なる支障を來たす懼れが認められた。大本営陸軍部は事態を重視し、従来の航空兵力温存の方針を緩和し、敵大型機に對して本土の航空兵力を統一運用して果敢なる邀撃作戦を遂行することとなつた。即ち七月一日以降、

從來第一、第二総軍司令官の指揮下に防空作戦を遂行していた第十乃至第十二飛行師団を航空総軍司令官の指揮下に復帰せしめ、同時期以降航空総軍司令官をして航空部隊を以てする本土の防空作戦を担任せしむるため次の要旨の指示を与えた。

一、航空総軍司令官は密に海軍と協同し、敵機の撃墜を主眼として防空作戦を指導するものとし、準備すべき要綱左の如し

1 所要の兵力を防空専任部隊として各地域に配備すると共に成る可く有力なる兵力を機動兵力として掌握し、好機に投じ所要の方面に為し得る限りの兵力を集中し主として敵大型機の必墜を期す 防空兵力の基準左の如く、該兵力は防空の爲適宜他地域に移動せしむることを得

東部 戦闘四箇戦隊

東海 戦闘四箇戦隊

中部 戦闘四箇戦隊

西部 同 一乃至三箇戦隊

2 敵大型機の単機若くは数機に對しても所要の兵力を以て好機に投ずる攻撃を行ひ之が必墜に努む

二、単独來攻する敵戦闘機部隊に對する邀撃は状況特に有利なるか又は特に之を必要とする場合等の外之を実施せしめざるを本則とす

航空総軍は右大本営陸軍部の指示に基き「制号作戦」を計画し、本土における戦闘機兵力の一元的運用によつて敵機の撃墜を企図した。しかしながら兵力の僅少（出動可能兵力は固定防空戦闘隊二一九機、機動戦闘兵力一五三機）なる上、敵の来襲に際して航空兵力を適宜機動集中することの困難により所期の実効を挙ぐる事が出来なかつた。

これより先、大本営海軍部は敵大型機制圧の手段として、マリアナB29の基地に對し、空挺部隊による斬込作戦を企図した。即ち

海軍特別陸戦隊三〇〇名を中攻三〇機を以て七月下旬の月明時に作戦を敢行すべく三沢基地において準備中、七月十四日敵機動部隊の来襲に遇い事前に潰滅してしまつた。かくて我が防空作戦は愈々多難となり、敵機の跳梁は一段と激化して行つた。

註 戦後の米側記録によると本土に來襲せるB29の損害は喪失四八五機、破損二、七〇七機、搭乗員の死亡三、〇四一名となつてゐる。

5 空襲被害

〔人的被害〕 終戦までの本土の人的被害は次表の如く、実に六九万名に上り、その中京浜、名古屋、阪神三大都市区における被害は死亡二二五、三九六名、負傷一八一、二八三名、罹災者一、四二一、二九〇名を数え、その罹災率は平均四三%に達した。

本土空襲人的被害一覽表

区 分	死 亡	負 傷	行方不明
一般爆撃の被害計 (内は七月末数字)	一六、六二 (一八、三〇)	二七、六七 (三六、九六)	八、〇四 (七、九六)
原爆の被害計	一〇九、三六	六、四八	一五、九七
艦砲射撃の被害計	一、五九	一、五七	三
總 計	一一〇、〇一八	三三、八〇三	二四、〇一〇

備考 本数字は昭和二十四年経済安定本部調製「太平洋戦争に因る我國の被害綜合報告書」及び爆撃調査団の資料に依り算出す

〔都市の焼失〕 無差別爆撃による被害都市の数は九八都市に上り、その中、七二都市は重要な軍事施設を持たない一般都市であつた。およそ都市というべきものは殆ど被爆を免れることが出来なかつた。京都、奈良、熱海市等の著名なる文化、遊覧都市が被害を

免れたのは奇異に属するものであつた。

大都市の焼失率(家屋の焼失率)は京浜地区五六%、名古屋市五二%、阪神地区五七%に達し、焼失家屋の総数は約一四三万に上つた。

中、小都市の焼失率は福井市の九六%が最も酷く、甲府、浜松市の七二%がこれに次ぎ、日立もまた七一%に達した。その他の被爆都市も四〇%以上焦土としたものが大部分であつた。

その上、都市の被害地域はその重要地域が多く実質的な被害率は更に甚大であつた。

この被害の大部分は焼夷爆弾によるものであつた。敵は日本の都市特にその建築の耐火脆弱性に着目し、かねて高性能の焼夷爆弾を製作し、日本式村落を模造して実験していることが情報によつて知られていたが、その威力は想像を超えたものであつた。僅か十数機の攻撃により焼失した都市さえあつた。

〔疎開——市民の疎開実績〕 大都市の市民と工場の疎開は最も困難なる問題であつた。昭和十九年秋以来、政府及び大本營は工場、官衙、学校等の計画的疎開を企図し、昭和二十年夏頃には相当の進歩を見たが、市民の疎開は複雑なる事情に阻まれて進捗しなかつた。大都市に対する爆撃の激化に伴い、市民も疎開に焦慮したが交通の逼迫と疎開施設の不十分等により、立往生となるものが多かつた。

終戦時における市民の疎開実績は京浜地区五四%、名古屋地区五四%、阪神地区六三%内外であつた。

〔交通の逼迫——海上杜絶に瀕す〕 本土の鉄道は未だ本格的攻撃を受けていなかつたため一貫輸送を維持し得ていたが、海上交通は大陸、本土間は無論、本土島嶼間の交通さえ杜絶に瀕する状態に立ち到つた。

海上交通の逼迫は夥しい船舶の損耗と港灣及び海峡の機雷封鎖が

主因となり、更に陸上小運送力や港湾荷役力の不足等がこれを助長した。特に六月以降日本海に進出した敵潜水艦の跳梁と七月中旬から本土を襲った敵機動部隊の攻撃が状況を一層悪化せしめた。

船舶の損害（月末保有噸数に対する開戦時保有と開戦以降の建造及び拿捕の合計噸数との比率）は七月末八三％に達し、保有総噸数は約一八〇万噸に減少し、その中就航可能のものは五〇乃至六〇％に過ぎなかつた。しかも前記の各種悪条件により、その稼働率は著しく低下しこの月の月間輸送実績は七十七万噸に止まり、八月は一挙に約三〇万噸に減少するものと予想せられた。

瀬戸内海の輸送が機雷封鎖により既に窒息状態に陥り、西日本が九州炭の供給を絶たれんとしつつある時、前記機動艦隊の攻撃により青函連絡船等二八隻を一挙に失つたため、東日本もまた北海道炭から切り離される事態となつた。なおこの攻撃により石巻、釜石、輪西、室蘭の製鉄工場又は施設にも艦砲射撃を蒙り相当な被害を受けた。七月十七日の最高戦争指導会議において、軍需大臣がこの被害に関し行つた次の発言はその重大性を物語るものである。

今次の青函連絡船の喪失、釜石、輪西製鉄所等の被害は二、三の中・小都市の焼失と本質を異にし、戦力増強に関する諸般の施策を根本的に崩壊せしむるに至る重大なる結果を招来する虞あり。即ち青函航送石炭一五万噸の喪失は関東信越地区石炭消費量を半減せしむるものにして、特定兵器の生産に深刻なる影響を及ぼすのみならず、爾余の十萬噸余の北海道物資の脱落は軍需生産並に食糧生産確保上特に厳選せる物資にして代替策を他に求め難し。鉄道交通は七月以降南九州地区の昼間運行が漸次困難となり、又青函連絡が切断された以外は、中・小都市爆撃に伴う一時的障害を除きなお本土の一貫運行を維持し得ていた。米空軍が鉄道に対する本格的攻撃を遷延したことは日本のため真に僥倖であつた。尤大な本土決戦兵力と軍需品の展開が出来たのも戦時産業活動と国民の生

活を辛うじて支え得たのも実にそのためであつた。戦後米爆撃調査団は米空軍のこの戦略的過失を鋭く指摘している。しかしながら米空軍の都市爆撃に伴う被害（国有私有両者を合し、輸転材料一五、九一七輛、軌道一、八三八軒）と輸転材料及び施設の老廃等のほか、小運送力の不足等と相俟つてその輸送実績は概ね戦前の二分の一に低下した。七月の輸送総量は一、一三五万四千噸となり、八月は八〇〇万噸に止まるものと予想された。

〔食料及び生活必需品の窮乏〕 主として敵空、海軍の攻撃と封鎖、労力、資材の不足等により、食料並びに生活必需品の窮乏は極度に悪化し人心の焦慮を助長した。

米穀は雑穀、諸類等の代用食一七、八％を含む日量三一二瓦の維持さえ困難となつたため、昭和二十年七月以降、更に一〇％の削減を余儀なくされた。しかも端境期を控えそれさえ危まれ、この年の後半期には局地的飢餓さえ憂慮される状況であつた。昭和十六年と同二十米穀年度の米穀総供給量の比較は次表の通りで、今後の被爆損失と交通杜絶に伴う輸送難によつては二十年度の数量は更に悪化する虞れがあつた。

種別(担)	年度	
	昭和十六年度	昭和二十年度
米	一一、七四八、八四八	九、四一〇、七四九
代替食(麦、雑穀、諸類等)	一、九九〇、〇二四	一、九四〇、〇二四
計	一二、七四八、八四八	一一、四〇〇、七七三

備考 昭和二十年度の数量は次年度の分三二一、七五〇担を繰上げ需給し、防空用備蓄米二〇五、〇八八担を使用するものである。尚この数量には軍需五六三、三三五担を含んでいる。

又副食物、調味品の供給量も、昭和十六年度の供給量に比し、肉

類は約二〇％に、魚類は約三〇％に、調味品は五〇％以下に低下した。しかも配給の不円滑、保存施設の不十分等により実質的には更に悪い状況であつた。食油、砂糖等の供給は殆ど無くなつていた。

その他の生活必需品の供給量を昭和十二年に比較例示すると綿織物は二％、毛織物は一％、地下足袋は一〇％、革靴は零％、石鹼四％、紙類は八％にそれぞれ減少した。このような食糧及び生活必需品の窮乏は勢いインフレーションを昂進し、闇売買の横行を招き、国民の道義と戦争決意を蝕むこととなつた。

〔重要産業の麻痺〕 空襲による生産能力の直接被害のほか、封鎖に伴う資源の枯渇、労力の不足、輸送の逼迫、疎開等各般の間接被害により、その生産実績は急激に低下して行つた。昭和二十年度第一、四半期の実績を戦争間の最高生産期に比較例示すると次の通りである。

一、基礎産業

石炭七一％、鉄鋼（銑鉄、普通鋼、特殊鋼）平均三五％、非鉄金屬（アルミニウム、マグネシウム、ニッケル、鉛、亜鉛）

平均三五％（アルミニウムは一六％）、セメント四六％、化学工業（アムモニア、硝酸、苛性ソーダ、ベンゾール、トルール）平均四八％（昭和十九年同期との比較）、液体燃料約二四％

二、重要工業

飛行機六四％（但し戦闘機等の小型機に重点を置いた為実質的には更に低い）、造船二七％、兵器陸軍五〇％、海軍五五％

このように深刻なる被害の累増悪化は漸く我が戦争遂行能力と組織に深刻重大な脅威をもたらした。